
異なる世界で

のぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異なる世界で

【著者名】

NO585X

【作者名】 のぶ

【あらすじ】

買い物してたらいつの間にか砂漠にいた！

異世界トリップという、いかにも王道な設定です。

やや腹黒い主人公が異なる地で、力強く生きていくお話をご覧あれ。

蒸発（前書き）

作者の趣味全開です。笑
文才はありませんが、ガンバルのでひとつよろしく。
ということで、どうぞ。

『「どうですかーっ、ここは?ー.』

私は混乱していた。だから叫んだって訳ではないんだけど。

叫んだその声は砂に吸収されて、だだつ広そうなこの地には響かなかつた。

そう、今、私は、
…砂漠の真ん中にいる。

真ん中つて表現が合つてるか分からぬけど、四方を見渡す限り、砂、砂、砂！木も、ましてや砂漠定番のサボテンもない。そして八方を見渡しても、人つ子一人、虫一匹たりとも視界には入つてくれなかつた。

事の背景を言おう。簡単に言つちゃえれば、気が付いたら“ここ”にいた。ここつてのはもちろん今立つている、砂漠。

てゆーか暑い。途方もなく。

寒いからと着こんでいた上着を脱ぎ、ロンTになる。それから額と首を流れる汗を拭つた。

何でこんなことになつたのか、とりあえず整理しなくちや。

三日後に大学の入学式を控えた私、榎原 寧 サカキバラ ネイは今日引っ越しを終え、無事一人暮らしを始めようとしていた。

なのに、なのにー一体どんな状況だつての。

こんな砂漠、知らないし。いや、サバクつてむしろ何ですかって話ですよ。しかも買い物袋を二つ下げて、結構間抜けな図。

中の生もの腐つちやいそうだなあ。

『つて、今はそれどじろじやなーい！』

混乱は混乱を呼ぶだけ。だから、落ち着かなきや。

そう分かつてても、混乱しないはず、ない。整理どじろか余計分からなくなつただけだつた。

「わーお、でつかい声だね 」

『ウルサイイッ！今はそれどじろじや…ナ、イ？』

え…今どつかから声が聞こえた気が、したんだけど。氣の所為か。あまりの暑さに頭イカれたのかも。

一人首を傾げる。だって、もつ一度周りを見渡しても、やっぱり誰もいなかつたから。

「どうして疑問形？」

……ん？やつぱり声が聞こえたみたい。そうか、ここは天国なのか。
天国つて花畠じやないの？三途の川だつて渡つてないのに。

いや、川はきっとこの暑さで干上がったんだな。花畠だなんて嘘
言つたの誰だよ。こんな暑苦しい砂の世界じゃ天国じゃないじゃん。

「ああ、何で黙つてゐるの。

…空耳じゃない！確かに声が聞こえた。でも、どこから？

キヨロキヨロと辺りを見渡す。でもやっぱり砂漠には私以外何もなかつた。

「あつ、ひよつとして僕を探してんだけね。状況把握力はなかなか悪くない。

ただし、詰めが甘いね。」

何の詰めだよ。

間延びした喋り方にイライラしてきた。だつていつの間にかこんなとこに立つて、幻聴みたいに誰もいないところで声が聞こえてくるつてのに、何が状況把握力は悪くない、だよ。

「シシ」「ハハ」の万歳過ぎて、そんな気が失せぬつて。

「おーい、大丈夫～？」

大丈夫もクソもあるか！頭の配線おかしくなりそつだつてのに。

「アハハ 混乱しちゃつてるんだネ！」

いちいち頭にくる言い方すんな。いくら寛容な私でも、そろそろキレたい。

「ヒントをあげよーう。」

語尾を伸ばすな！そして最後にちよつとだけ発音するな！

会話なんてしたくない、つて訳ではないんだけど。今は会話できるような人物がこの人しかいない。

ただ、姿の見えないこの声の人物はものすごく面倒臭い人だつて分かるから、ツツ「ミはあえて心の中でしておいた。

「周りにはいない。下は砂だからいるはずもない。あと残るは？」

…まさか。あるはずない、そんなこと。

そう思いながらも、半信半疑の中ゆつくりと上を見上げた。

『……ツ？！』

「アハハ 驚いてるねえ。」

“驚いてる”の域じゃないから一つ一ひとつやつて浮いてるの…？

てゆーか何なの、やのマヌケ過ぎる画はー

その声は見事に上から聞こえていた。

頭イカレんのはこの人だよ。さつきは自分がと思つたんだけど、この目に見えてる状況はどうせやつても真実以外の何物でもない。

…三輪車？

あらうじとか空飛ぶ三輪車に乗つていたまさかのイケメンは、姿形こそギリシャ神話から飛び出して来たような神々しさなのに、見事なほどまでに残念だった。

金の髪、碧い目、纏う白い衣装。彫刻から飛び出してきたみたい。

『…あなたは誰？何で三輪車に乗つてるの？』

おずおず聞いた。声は絞り出されたよしと固く、低い。身体が強張つてゐるのが、自分でも容易く分かつた。

だつて頭おかしい人だつたら怖いんだもん。世の中何かと物騒だしね。用心するのも当たり前。

でも、この状況でできることはこの人の話を聞くことくらいしかない。それに関しては至極残念だ。

「これは三輪車って言つのかい？小さな子供が乗つていて楽しそうだつたから、ちょっと拝借してきたんだよー。この乗り心地はサイ

「一だね。

それにしても、キミは何でそんなに熱烈な視線を向けてくるんだい？あつ、もしかしてこれを狙ってるんだな。そんなに見たってこの三輪車はあげないよ！」

『いらんつ！』

何この人。会話が一向に成立しないんですけど。

私は頭に手をあてて、お手上げのポーズをとるしかなかった。

てゆーか、拝借って言いつつも、子供から盗んできたってことじやん！サラッと言つたけど、れっきとした泥棒だって。マジ、面倒臭い。

『ああ、そーか。これは夢なのか。夢なんだな。もう十分満喫したから早く田を覚ませー。』

買い物袋を片手に持つて、空いた手で頬を抓つて見ると。

…痛かった。

「何を言つてるんだ。現実逃避は恥ずかしいから止めなよ。」

『あなたのそのカツコの方が百万倍も恥ずかしいわっ！』

屈辱的。大人になつて楽しそうに三輪車に乗つてるやつだけには恥ずかしいなんて、言われたくないつての。

ああ、全身の力が抜けてきた。死ぬのかな、私。

もう何でもいいからこの状況から逃げたかった。

「おつと、僕の許可なしに寝ようとするなんて、いい度胸じやないか。」

知らないって。力が入らないんだもん。とりあえず、喉、乾いた。

……水。そうか、水買つたんだった。ガサガサ音を立てながらビニール袋を漁る。

あ、みつけた。

「ほー、無視するあげくに飲み物つて。君、思いやりがないね。」

あんたに言われたくないわ！

じとーっと睨みつけながら、ゴクゴク喉を鳴らして一気に飲んだ。

『ふはーっ。生き返るー。』

上から“おっさんかよ”なんて聞こえたけど、私、ひちひちの18歳ですから。さて、喉も潤つたことですし。

『アナタハダレテスカ？』

質問タイムと行きましょう。

「なんでカタコトなの？まあ、いいか。僕は“神”！」

What? 今何とおっしゃられた?

『か、み…さま?』

「イエス、ザシシリイト」

やつぱり、天国だつたのか…うん、意識が朦朧としてきたし、そ
うなんだよ。

私は完全に体を砂の上に放り出した。

「ちよつと、ちよつと…まだ話は終わつてないぞ。」

『神様、ちよつと、『めん…へりへりしてきたし、目が掠れてよく
見えないんだ。』

実際、もう、太陽の光が眩し過ぎるくらいしか見えない。あとは
輪郭が全部ぼやけてる。

「ああつ、しうがない。人来ちゃつたし、あとでまた会おつ。僕
の名前は“ジュノワール”。

いいか、“ジュノワール”だぞ。』

ほら、繰り返して、と言われて小さく呟く。

なんとも言い難いカタカナだな。とか、失礼な事を考えてみたけ
ど、何だか焦つてるその人は、早口でまくし立てた。

「やつ、OKーやつ口に出して呼びさえすればすぐ行くからね。じ

や
「一

あ、三輪車が去つていく。

ものすごい勢いで漕いでいる。だけど、それよりも遙かに速いスピードで進んでいた。

あれ、浮いてるし、漕ぐ意味無いよね…

力無く砂の上に放り出した身体。右手の方へと三輪車で去つていく白いものは、霞んだ田には、すでにはつきり見えていない。そして、霞んだ視界から物体らしきものが氣えつ去つた。

そして、私の意識も…

目覚め

『んッ…』

「おい、大丈夫か？」

あー、ダルイ。私、何してたんだっけ？

…ああ。神様とか名乗るイケメンが現れたんだっけ。三輪車とか、浮いてるとか、奇妙な事があつた気が…

変な夢だった。目を覚ましたら、きつと！

きつと…？

『いいい、いいい…』

視界に入っていたそこは、白い部屋だった。

病院、とか？いや、ひらひらがいっぱい。お姫様みたいなベッドに横たわっている。

日本人には滅多にないと書く、天板付きのベッド。なんでそんなところに寝てるんだろう？

状況を把握するために、部屋を一望しようと体を起こした。

「ここは『テュード王国の城だ。自分の状況は、理解できているか?』

横からする声。感情の浮き沈みは無く、ただ淡々としている。

でも、少し待つてほしい。理解するには…ちょっとキヤパオーバーかも。容量の少ない私の脳には、かなり厳しい状況だった。

何が、どうなってるんだ?

さっきまで砂漠で三輪車に乗ったウザい神と話した夢を見て、その後は知らないベッドの上で寝てる、と。

…あり得ない。どんな状況だよ。

私が押し黙つていると、小さく“記憶喪失か?”と零す人が一人。

『てゆーか、あなた、誰?』

寝起き特有の掠れた声。相当寝てたみたい。そういうえば、酷く喉が渴く。

「ああ、自己紹介がまだだつたな。『テュード王国の宫廷魔法師及び騎士団一等指揮官、クーン・リックキンデル・シェパードだ。』

…今日はイケメン祭?何、この格好良い人。

さつきのアホみたいな感じで夢に出てきた神様は儂げで、綺麗な感じだつたけど、この人は、亞麻色の髪、意志の強そうなスミレ色の瞳。整つていて綺麗だけど、どこか野性味のある顔はもう、格好良いの一言に尽きる。

てゆーか、外国人？日本語喋ってる？上手すぎやしないか？

「おい、大丈夫か？」

ちつ、近い！

顔に一気に熱が集まってきた。

あれが、外国人特有の、スキンシップってやつか？！

私は今まで関係ないことだったから、実際にされると困惑つて。

そう思つてたのがいけなかつたんだろうね。

『だ、大丈夫だす！』

『……』

“だす”つて、みことにな噛んだ。

余計に恥ずかしくなつて俯くしかできない。

今までにないイケメンに会つたんだよ？そりや、少しくらいは猫を被つて、女の子らしく淑やかにしておきたいものだつたけど。無念、の一言に過ぎる。

「とりあえず、落ち着け。名前は？」

何事もなかつたみたいに流された。けど、有り難いから私も何もなかつた体で答える。

『神原寧。』

「サカキバラ・ネイ?..どっちが名前なんだ?」

……?..どっちも何もないでしょ。何を言つてるんだ、このイケメン。

いや、待てよ。目の前にいるイケメンさんは見るからに外人っぽい顔つき。外国だと反対になるんだっけ?

『ネイ。ネイが私の名前。』

やつとのことでそいつと、クーンは優しげな笑みを零した。

と、思つたらまた眉間にしわ。元の真剣な顔つきはどこか厳しそうだった。

「ネイ、自分の状況が理解できるか?」

至極真剣な趣。私は自分が一筋縄ではいかない状況にいるんだと思つしかなかつた。

とりあえず、目の前の人には信頼できる人間だと思う。勘、だけど。だから正直に話そう。

『…今から言ひこと、信じてくれますか？頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言います。だけど、真実だから。』

鼻がつーんっしてきた。

混乱のせいで、普段はありえないこと、泣くなんて行為に及ぼうとしている。

ダメ、泣くな。

「…とりあえず聞いひ。だから泣くな。」

顔は見えてないはずなのに、優しくかかる声。それは、涙をもつと誘うものだった。

頭の中がぐちゃぐちゃで、どうしてここに居るのか、とか、目の前の人気がどうなのか、とか、もつともつと疑問は頭に浮かぶ。でも、とりあえず、話してみよう。そう思った。

『…これが何処だかは分かりませんが、さつきまで私、砂漠にいたんですね。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。』

そつか。私、助けられたんだ。

あのアホ神（眞実か分からぬけど）が無理矢理話を聞かせようとして、炎天下の中に放りっぱなしにするからこんなことになった

んだよ。

あやづく神様に殺されるところだった。

『でも、その前には日本つて国にいたんです。』

“一ホン？”と首を傾げる。

やつぱり。私は全然知らない土地にいる。だって、さつき言われた國の名前なんて聞いたことないもん。それは自分が無知な所為かもだけど。

それにしても、どうして言葉が通じてるんだりうへ、私、日本語喋ってると思つただけど。さつきも思つたけど、ホントに上手な日本語話してるんだよね。

…とりあえず、話を先に進めよ!。

『私は単なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠について。

あそこでジユ…何とかつていう自称神様に出会ったんですね。』

あー、事実なのに、自分でここまで喋つとして、何言つてるんだこいつって思つてるただけど。ってことはもちろん田の前の彼は…

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな?」

真剣な顔して悩まないでください。私だって訳わかんないんだか

「話をまとめると、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたらあの砂漠にいた、と。」

イエス、ザッジライト。神様の部分は割愛されちゃってるけど。

何度も小刻みに首を縦に振った。

信じてもうえなくとも、事実は事実だもん。嘘はついてない。隣から大きく深いため息が聞こえてきた。

わかるよ。私はどう考へても頭がおかしい厄介者だもんね。

「二ホン」、神様、ねえ。

うん、その汚い顔、期待通りの反応だね。私だって訳分かつてないもん。

『あ、買い物袋がない……』

いまさらそんな心配をしてみた。だけば、その返事はすぐに返される。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。そこに置いてあるぞ。」

あ、ホントだ！私の食材たちー！

日本人だって証拠が欲しくて、早いとこ自分が正常だつて思いた

くて。必死に力が入らない身体を動かそうとした。

けど、無理なことは無理だ。

『 もやつ … 』

「 危ない。 」

ベッドから転がり落ちそうなのでひをクーンに抱きとめられた。

うわっ。筋肉しつかりついてるよ。現代男子には少数派な肉体だ
！って感動してる場合かーい。

『 『 『 めんなさい。 なんか動き難くて。 』

すぐに言い訳をしてみた。けど、すぐに頭の中では、小さな疑問
が浮かぶ。

自分で言つといでなんだけど、服が違つよつた気が？

視線を自分の方へ持つていくと、まさかの白いワンピースのよう
なものを見ていた。

「 ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えたに決まっているだ
れなかつた。

『 あの、これを私に着せたのつて…？ 』

「もちろん俺じゃない。流石に早乙女とまほいつでも女は女だ。そこはきちんと区別しているから気にするな。」

待て待て待て。早乙女？

辞書で引いた早乙女という意味に違いない。でも、それにしても若く見られ過ぎてる気がする。

この人、私を幾つだと思っているんだ？

『…私、何歳だと思われてるんですか？』

「14くらいだろ？？」

ちゅ、中学生？！確かにアジア人は若く見られるって言ひつけど、あと一年で成人ですけど。

『私、18です。』

そう言つと、あからさまに驚かれた。あんな綺麗な顔の表情が変わってくれるのは嬉しいけど、ちょっと複雑。

「…すまない。顔つきや身長から言つて、まだ成人していないかと思つた。」

うん、ストレートに言つてくれてありがと。だけビ、ちょっと傷ついたよ。

けど、笑顔を崩すことなく、気になる情報だけを聞いて行く。

『ここでは何歳で成人ですか?』

「15だ。」

なるほど。私はここではとっくに大人になつてゐるってわけか。

『あなたはいくつですか?』

そう尋ねると、24歳だとすぐに返事が来た。

随分と大人っぽくいらっしゃる。身長も180以上ありそuddish、そんな人から言つたら、160?もない私は子供に見えるんだろうね。なんか、嫌だけど納得。

ぐー。

突然の大音響。その出でこなは私のお腹だ。恥ずかしいにもほどがあるつて。

「食事を運ばせよう。」

「めんなさい。深く反省しておりますとも。けど、腹が減つては戦はできぬ、とも申しますし。

ここはひとつ腹ごしらえと行きませう。

その人にお願いをすると、私はだるい身体をベッドに戻した。

「大丈夫か?」

気だるそうにしていたのが気になつたのか、顔を覗き込んでくる。心配そうな田は子犬をも想像させるほど、キラキラしていた。

…ちよつと可愛いじゃないですか。

なんて思つてると、ドアがノックされた。と、続々とメイドさんたちが入つてくる。すぐに食事の用意がテーブルに用意されると、メイドさんたちが出ていった。

早業つ！板についた仕事つて感じ。

それに感動していると、大きく、少しかさついてる手が差し伸べられた。

「ああ、腹が減つているんだろ？食べよ。」

その言葉に嬉々として頷くと、伸ばされたクーンの手を借りてベッドから降りた。席についてから疑問が一つ。食事のセットが3つ。今ここにいるのは私と彼の一人。

どゆこと？

何て考え込んでいると、その様子で私が何を考えているのか分かつたのか、答えを教えてくれた。

「もう一人、ここにくるヤツがいる。ネイの話を聞きたがつているから、あとで紹介するよ。ほら、待つてなくていいから食べろ。」

促されはしたけど、先に食べるのはどうも気が引ける。私が厄介

になつてるものだつて言つのに、我が物顔で一人先に食べてたら失礼でしょ。

だから、待つことにした。

田 覚め その2

「すみません。遅れました！」

…ピッカラリイケメン祭は現在進行形で続行中らしい。

しばらくしてやつてきたのは綺麗な男の人。銀髪で青の瞳。線が細く色が白いその人は、クーンとは正反対の性質みたい。どこか中性的な感じがした。

「遅い。ネイが腹を空かせてくると皿の上の、ここまで待たせるつもりだ。さつさと席につけ。」

厳しいお言葉ッすね。

なんて勝手に私が待つことにしたくせに。やつてきた人は私に“すみません”ともう一度言つと、席についた。

「ネイ、食べる。腹が減ってるんだろう？」

そう言われて頷くと。

『 いたします。』

手を合わせてさう言つて食べ始めた。

うーん、味薄くないですか？いや、食べさせてもらつとこで言つ

ちやあなんだが、現代っ子は舌が肥えてると聞こますか。

ほぼ味が薄い料理の数々は、正直言つていくらお腹が空いてるからと言つても、食べ続けるには厳しいものがあった。

「ネイ、さつきの挨拶のようなものはなんだ？」

不慣れな手つきでフォークとナイフを使う私をずっと見ていたのか、クーンは手を動かした様子もない。さつきの言葉、つまりは“いただきます”が随分と氣になつてる様子。だから説明した。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そういうもののたちの命を奪つて人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になつて私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの命を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きらるつて感謝するのですよ。

』

そう言つと、クーンはいただきます、と口にしてから食べ始めた。もう一人の人は私を微笑みながら見つめている。視線に気になりつつも、口に運ぶフォークは止めなかつた。

味気ないけど、お腹は空いてるんでね。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のものようですね。」

「さいでつか。てゆーか、誰なんだろう？」

疑問に思いながらも、味の薄さに幻滅していた。これじゃあ、食べたくても食べられないよ。うーん。少し考えてから箸をとめた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だつたじゃないか。」

いや、それはもう恥ずかしいから掘り返さないでください。今からでも穴を掘つて入りたいですか？ てゆーか、せっかく用意してくれたのに残すのは失礼だよなあ。でも味が…

……！思いついた！

私は買い物袋をとつてきて、中を漁る。突然の行動に、一人は固まっていた。

「ネイ？」

不思議そうに見つめてくる。けど、私は構うことなく自分の作業に没頭した。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

訝しげな表情。

そりやそーだ。見たこともないものが並んでるんだから。

私は嬉々として説明を始めた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、

『醤油に味噌です。』

ここに来たのが買い物帰りで良かつた。何にもなかつたから、必要な物をまとめて買ってたんだ。できれば普通に自分の生活の中で使いたかつたけどね。

「それをどうするんだ?」

『私の国の味を食べたくなつて。』

言い訳ですけどね。味が薄いから、なんて正直に言つたら失礼極まりない。

興味深そうに見ている一人に説明しながら、使ってみることにした。

まずは…スープか。

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会つ万能調味料です。』

そう言つて、自分のスープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなつた液体。それを口に運んで、少し嬉しい気分になつた。思わず笑みが零れる。

でもやっぱり一人は不思議そつだつた。

私は構うことなく、サラダにはマヨネーズをかけ、バターで和えたポテトのようなものにケチャップをかける。口に運んでみると、どれもじっくりきた。

『…食べてみます?』

あんまりにも強い視線に耐えられなくなつてそう言つた。すると二人はすぐに頷く。

「うやらイケメン一人は、好奇心旺盛なよつだ…と心のメモに書き込んでから、行動に移す。

私はスプーンでスープを掬うと、中性的な人に差し出した。

少し困ったような表情。

あ、マナー違反? でも差し出しちゃつたし。いまさら引っ込められないって。

差し出したままにしていいと、ゆきくらとスプーンに口を寄せてきて、飲んでくれた。

それを確認すると、今度はもう一人の方にサラダを差し出す。さつき見ていたからか、気にすることなく口に運んでくれたので、腕は疲れずに済んだ。

あれ、反応なし?

一人を交互に見る。すると、少し止まつていた。

あらら、お口に合いませんでしたか? そつ心配していると。

「「おいしい…」」

『そうですか。それは良かった。』

そーでしょーとも。

私は満足げに笑みを零すと、残りの物を胃袋に納めに掛けた。
二人が物珍しそうな顔をしてたから、私は尋ねてから同じように
調味料をかけてあげる。

すると、嬉しそうに食べ始めたから、一足先に食べ終わった私は
その食べっぷりをのんびりと眺めていた。

「「「」」馳走をまでした。」「

食べ始めと同じように私の真似をして挨拶をすると、メイドさん
を呼んでお茶を淹れてもらっていた。お茶くらい私にだつて淹れら
れるのに。

不躾なのだろうがじーっと観察していると、お茶を淹れて空いた
お皿を手に取ると、早々と去つて行つてしまつた。

「ネイ、本題に移らせてもいいや。」

改まつた態度に私もキュッと体を縮こまらせて、一人を見据えた。

…イケメンに視線を向けられるのって、居心地悪い。こっちが見
つめて目の保養にする分にはいくらでもいいのに。

「」「うちは神宮のレークサイド・マカリアスだ。」

一時間近くもずっと一緒にいて、しかも食事を共にしたのにも拘らず、漸く名前を知ることができた。

それにしても、『う、何て言つんだろ?... 神々しい、よね。さつきのあほ神様よりも神様っぽいし。クーンって人と並んでも見劣りしないその姿に、圧倒された。

なんか、私、ふつーだよね。

ちょっと淋しく悲しい気分になつていると、何事もないかのようには進められていた。

「砂漠で倒れていたネイを回収したのは私だが、砂漠にいるのを視たのはレークだ。」

“私”?さつままで俺つて言つてたのに。俺つて言つてた方が、見た目に合つてたからなんか勿体ない。

でもよく分かんないけど偉い立場にいるみたいな雰囲気だし、なんかしきたりとかがあるのかもしねー。

レークつて言つから人に目を向けると、ぱちり視線が合つてしまつた。

「こうこうと笑われると、俯くことしかできない。直視できません!」

「私が盆の前に立つていると、誰もいない砂漠に倒れている貴女が

視えました。知らないと思いますが、あの砂漠は誰も通らないんで
す。」

「… そうだったんだ。誰もいないところに倒れてるなんて、死んで
たつておかしくない。」

『助けていただいて、本当に有難う御座いました。』

頭を深々と下げる。状況が飲み込めなかつたとはいえ、もつと早
くにお礼を言つべきだつた。

失礼極まりないよね。

「ネイさん、とお呼びしても構いませんか？」

そう尋ねてからレークさんは話し始めた。

「本来ならあの盆には滅多に一人の人間だけが映し出されることは
ありません。使えるのが私だけなので周りの人間にはバレていませ
んが、これが知れ渡ると大変なことになります。」

「… なんかよく分からんが、大変な事に巻き込まれた? そんな感じ
は否めない。」

二人の顔を見ても、『冗談だ、とは言つてくれなさそうだった。』

「鏡盆には本来、たくさんの人間が映し出されて、国や世界の状況
を知らせることしかできない。」

眉間にしわを寄せていうクーンさんの表情からして、深刻な事態

なのが良く分かつた。

もし何かあつたら、あのアホ神、何をして詫びてくれよつか。た
だじや済ません。

「この国の言い伝えでは、鏡盆に映った人間は、神からの声を届け
る預言者だと言われている。」

もしや…？

少し俯いた状態から、田線だけを一人に持っていく。

つーやつぱり！

「察しの通り。預言者はつまり貴方ということになります。そうな
つた以上、貴女が映し出された鏡盆は、最初の神の啓示があるまで
使用できません。

砂漠に倒れているところを保護していることにするので、まだ上
の人間には話していません。しかし、知れ渡つてしまつのも時間の
問題でしょうね。」

明るい笑顔で言わないのでください。まじ、厄介すぎるから。イケ
メンだから直視できないとか、もう関係ない。

私なんて、この前まで単なる一女子高生だったんだよ？

それが急にこんな見知らぬ土地にやってきて、おまけに神の声を
伝える預言者だなんて言われて。脳内の考え方する部分の容量不足。
はい、きやぱおーばー。脳みそぐるぐる。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まつた。詳しい話はまた明日にでもしよう。」

「ネイ、疲れているようだから、もう寝る。」

その心遣いに、涙が出てきになつた。

「そんなん！情報がなければ私の研究は進まないのですよ！」

「なんだ表情を浮かべるレークさんに田線だけ向けて諫めると、部屋から追い出した。

「おー、強引だな。」

「なんて他人事みたいに思つていいと、また手を貸してくれ、ベッドに戻してくれた。」

「…眠れそうか？」

「あー、心配してくれる姿も様になつてますねえ。漸く見慣れてきた私は、少しだけ笑顔を浮かべて。」

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

「そう言つた。」

「ネイが混乱しているのは分かつていたのに、一ヵ月の事情で長話に付き合つてしまつた。礼を言つのはじめの方だ。有難う。」

慈愛に満ちた様なその微笑みにどこかを掴まれた気がしたのは無理もない。

イケメン祭はこれにて終了としていただきたいですね。これ以上何かあると、心臓が持ちそうもないもん。

そんなことをぼーっとして考えていると、クーンさんは手を伸ばして頭を撫でてきた。

「……っ！格好良いじゃないですか。微笑みながら、頭撫で撫で、つて反則でしょ。

顔に一気に熱が集まってきた。だから、顔を隠すために俯く。

本当は布団に潜り込みたかったけど、クーンさんの手がまだ私の頭を撫でていたから堪えた。

「うー、絡まっているな。少し待つてる。」

何の事かと思つて、赤くなつた顔を隠しつつ、その行動を横目で追う。近くの化粧台まで言つて櫛を持ってきたクーンさんは、ベッドの上に座り、私の髪を丁寧に梳き始めた。

もうろん私はされるがままになり、身体を強張らせる。

「…綺麗な髪だな。」

髪を梳き終わつたらしく、もつ一度頭を撫でると、お休みと言つて出て行つた。

『～～～…ひー』

声にならない叫びをあげると、今度こそベッドに潜り込み、布団に包まる。心臓は壊れそつたほど強く、早く脈打っていた。

布団

妖精

「おはようございます。」

田を覚ましたら、ベッドの傍らに女の子が立っていた。

『おはよ、了起来ます…?』

その元気のこと。ここにした満面の笑みに圧倒された。

「もう田も上がっています。そろそろ起きても良い頃ですよ。」

指差された窓の向こうには青空が広がっている。差し込む光から、太陽が大分高い位置にあることが分かった。

それにしても、まずは…

『あの…どちら様でしうか?』

生憎昨日の状況は田が覚めるまで、夢だつて思つてた。結局この部屋にいることが分かつたから、ちよつと落胆。で、起きた途端に知らない人。

混乱、混乱。つてなわけで、早速質問しました。

「失礼いたしました。」

きゅっと唇を結び、真剣な表情になる。そんなに畏まらないでほしーんだけどネ。こっちも緊張しちゃつから。

「今日付けでネイ様のお抱えとなりました、お世話役を務めさせていただきます、女官のミコアと申します。」

丁寧に挨拶をされ、思わずつられて頭を下げる。そんな私の行動にびっくりしたのか、ミコアは焦っていた。

必死な言葉に驚きながら、私は頭をあげる。そこにあるミコアの顔は随分と困っていた。

でも仕方ない。

こんなに丁寧に挨拶されたことないもん。そりゃ、同じように返すつてのが、道理でしょう。

それに、聞きました？私がメイドさんを抱えるとか言つてましたよ！？…って誰に話しかけてんだか。なんてノリツツミミみたいなことしてみたり。

「ああ、ネイ様。お着替えいたしましょう。」

『ネイつて呼んでください。私、様付けで呼ばれるような人間じやないですから。』

さつきから歯痒かつた。私、偉い人でも何でもないし。

でも、ミコアは了承してくれなかつた。

「分は弁えなければなりません。」

どうかお許しあれ、と言ったミコアは、今度は頭を下げる立場になつていった。

そんなにこだわることなのかなあ。きっと、この世界には階級制度があるんだろうな。

私はそんなものがある口常にいなかつたから、それがどんなものかなんて分からぬ。でも、ミコアのこの行動にそれが垣間見えた気がした。

『…わかりました。』

「…言ひしかなかつた。

だつて、この所為でミコアが何か言われたら嫌だもん。これからもつと打ち解けられたらいいなあ。

「さ、着替えましょう。」

そこからが地獄だつた。

どれにしますか、と言われて開けられたクローゼットの中にはまさかのドレス。

こんなのは着たことないし！てゆーか、是非パーカとジーパンで！なんてのはムリみたいで。

ミコアの恰好を見ても、足が見えていないくらい長いスカートをはいている。この世界の恰好は厄介そうだ。

「 セーラーの白い肌には何でも似合いますよ。」

えっ？なんか嬉しそう？とか思つた私が馬鹿だった。

ミコアの性格はちょっと厄介。（すみません、でも事実。）純粋に楽しんでいるから、止めてとは言えなかつた。

でも、着せ替え人形みたいになつてゐる間に、いろんなことを話せたからまだマシかな。

ミコアは20歳らしい。大人っぽいのに、行動に幼さが見えるのはそういうことか。それにしたつて胸あるし、色気が半端ない。

世の中つて不公平だ。平たいわけではないのに、ミコアよりも少々淋しい自分の胸元が空しい。…目を逸らす事にしよう。

結局、争つた結果、私の主張に負けたらしく、スカートが膝下くらいいのものを選んだ。

本来は女性が足を出すことはないらしい。でも、あんなの着てたら動けないじやん。私が大人しくしていらっしゃる訳がない。

…血漫げに言つてじやないけど。

白いワンピースを着せられ、今度は化粧をさせられた。ふわふわなスカートはバレエみたいだなあと思つたけど、口に出したら不思議な顔をされてすぐに口を噤む。

「うやうやしくの世界にバレエはないらしい。だから、踊りみたいなもの、と言つてこまかした。

「最後に髪を結いましょう。」

「この国では長い髪を結わないのは礼儀に反するらしい。じゃあ、髪が短い人はどうするんだろう、って思うけど、髪が短い人は基本的にないんだって。変なの。

髪を梳かれながらボーッとしていると、後ろから唸り声が聞こえてきた。

『…どうしたの？』

「いや、この綺麗な髪を結つてしまつのは勿体ないと思いまして。編み込むと跡が付いてしまいますで。」

気にあることでもないのに…ナリコア。

『昨日、クーンさんも言つてた。』

鏡に映つてくるミリアは目を丸くしていた。

なんか変な事言つた?

『どうしたの、ミコア？』

不安になつて声をかける。ミコアは驚いた顔をしたまま口を開いた。

「…クーン魔道師さまはネイ様の髪に触れたのですか？」

『うん、どうして?』

ミコアはやつぱり驚いた顔をしていた。

クーンさんはなんかコウメイジン、みたい?それに、年ごろの女性に男性が触れることは、めったにないと言つ。それって、現代日本じゃ考えられない事だよね。

「クーン魔道師さまは女性に触れるることは滅多にありません。舞踏会では断れない時ののみ、夜会に至つては義務でない限り出席いたしません。

生理的現象の解消の時のみ、女性に触ると有名ですね。女性たちはクーン魔道師さまが誰と結婚するのか気にしています。

人気がありますから、女性たちは競つて気に入られようと/orするものが現状です。」

ほー・・・あの姿じや当たり前だよね。

それにしてもミコア。

『一気に喋つたね。』

当たり前です、と言つて、得意げに続けた。褒めた訳じやなかつたんだけどねえ。

「女中内でも有名なお話ですもの。女人たちはみんな噂話が大好きですから、嫌でも耳に入つてきます。」

やつなんだ。まあ、女人の性つてとこだよね。

それにしても氣になることが一つ。

『“生理的現象の解消”つてナニ?』

理解できなかつたことを尋ねると、リコアは渋い顔をしていた。

なんだあ、その顔は?

もう思つてこると、大きなため息を一つ零した。

「…ネイ様はまだ知らなくてよ」とです。」

そう言われちゃえばもつ何も聞くことはできなくて。髪をひとつ結うかといつ問題にまた論点が向けられた。

『ポニートールにしていい。』

わづ開きと、返事を聞かなくてままでつべん付近で縛つた。

「うーん。」

ちよつと歎ましげ。ダメ、だったのかな。

「それはそれでネイ様の差見の艶やかさを引き出しありますけど、髪は全てきつちつまとめてしまつのが当たり前です。」

そつか。なんかいろいろあるんだね。服装は妥協してもうつたんだもん。ここは従つておくれべきだよね。

そう思つた私はそのままお困子にしてござる。『コトヤサバンで固定するのを手伝つてくれた。

「よくお似合いです。」

…褒められると、どんな反応していいか分からん。

社交辞令だつてのは分かつてゐるんだけど、照れくさかつた。

「失礼します。」

ノックの音と共にドアが開いた。

居候の立場で何だが、ドアは返事の後に開けて欲しい。

もし着替えの最中だつたらジーすんの。私、仮にも一応女の子だよ~とは言えない。

「おはようございます、ネイさん。よく眠れましたか?」

朝から眩しげほどの笑顔。随分とじ機嫌な感じがした。

『おはようござります、レークさん。』

私を見てから頷き、支度は終わつたよつですね、と言つた。

「朝食を運ばせましょ。クーン殿も早朝会議が終わつたらいらっしゃるそです。その後の予定は、私が管理させていただきますね。」

なるべく。せひ言えば、昨日私に聞きたいことがいっぱいあるって言つてた氣がする。自分の研究がどう、とか。

その時間がやつてくることで、レークさんは田に見えて生き生きしてゐみたいだ。どうやら私は貴重な研究材料らしい。

妖精 その2（前書き）

明日提出の課題が終わっていいない
しかしこいつはサクサク進む。笑
では、続きをどうぞ。

「悪い、遅くなつた。」

嫌な思考を遮るかのように、今度はノックもなくドアが開いた。
お前もかーと直つしき ロリはむちろん言えるわけもなく。私はお
はよつゝれこます、と朝の挨拶をするだけだった。

そんな姿を見かねたのか、じこまで口を開かせていたミリアが口
を挟む。

「おー一方とも、女性の部屋を訪れるのはいけないことではあります
んが、ノックと返事を聞いてから扉を開けることを忘れないで下さ
いまし。」

もし着替えの最中だつたりぬくもつですか。」

そういひ、朝食の準備をしてきます、と残して出て行つてしま
つた。

ちよつゝ、ミリアー言い逃げはなによーこの空氣をどうしてくれよ
うか…

紛れもなく気まずい雰囲気が部屋一杯に充満していた。

「…すまなかつた。」

しゅんとして謝罪を述べてきたのはクーンさん。

美形は何しても許せる気がするのは私だけだろうか。いや、確かに例外（アホ神）もいたつけ。ま、どーでもいいことは置いとこう。

『あの、大丈夫ですから。でも…着替てるところは見られたくな
いので、今度からはお願ひします。』

てゆーか、見たくもないもん見せられる方が可哀相だしね。見て減るものじゃないって言つけど、見られて減るものならとっくに悲惨なお腹を晒してやる。

でも、そんなの見た人の方が不愉快でしょ？ってなわけでお願いに至った。

その後にレークさんも謝つてくれ、三人で朝食をとる。私が違うところから来た事を知らない人に話を聞かせることはできないため、クーンさんは人払いをしていた。

もちろんミリアも。ちょっと淋しく思つたけど、味氣ない食事に日本製の調味料を加えるのにはちょうど良かつた。

最早口を開いたのはクーンさん。

「ネイの立場はレークの再従兄妹（はと）だ」と・またいと・（ハ）と書つことになつた。遠い土地からやつて來たので、この国のことはよく知らないといつ設定だ。」

あいあいあ～。立場を『まかす為の嘘つてことですね。了解いたしました、と肯定するために首を縦に振った。

力チャ力チャと音を立てながらナイフとフォークを扱う。確かフランス料理のマナーだといけないことだった気がするけど、生憎こつちは毎日箸を使って食べるという文化に染まってる。

今さらだけど、日常でたとえナイフとフォークを使っていたとしても、ファミレスで、とかで、マナーを習ったことはせっぱりない。ごめんなさい、と内心思つておきながら、口に出すの』と言ひ詰じみてて気が引けた。

「この後のことはマークに頼んである。ネイは心おきなくこいつに迷惑をかけるとい。

僕と夕刻には顔を出す。それまで、この世界について知りたいことを聞き、自分の状況を把握して、俺たちに話してくれ。」

いいが、と聞かれ、大きく頷いた。昨日の私のあり得ない戯言を信じてくれているだけで嬉しい。なのに、それに加えて私を支えようとしてくれてる。

もう、感謝の一言しか出でこない。

だから。

『…有難う御座います。』

深々と頭を下げる。座っている状態だったから、テーブルに頭が

付げざりざりまでだけど。

すぐに頭をあげる、と言う声がかかり顔をあげると、気難しそうな顔をしているクーンさんと、にっこり微笑んでいるレークさんがいた。

「ネイさんは私の再従兄妹なんですから、親類に感謝の言葉など不要です。さあ、朝食を続けましょう。」

優雅に食事を続ける姿を不躾ながらにじーっと見つめてしまい、クーンさんが私のことを見ているなんて気が付かなかつた。

食事が済み、昨日と同じくお茶を飲みながらのんびりとしているヒノックの音が部屋に響く。それは返事を待たないまま開いた。

… | この人たちは礼儀を知らないのか？

なんて思つてゐると、クーンさんに向かつて似たような紺色の制服らしきものを着てゐる男の人が近づいてくる。片膝を立てて傍らに膝間づくと、用件を述べよつと口を開いた。

「宰相殿がお呼びです。」

「用件は？」

「大臣たちが疑問の声を上げています。昨日のドラゴンの使用についてと、城を抜け出した件について。

早急に、とのことで、失礼ながらも朝食の時間に参りました。」

「 そ、うか。」

一人のやり取りを見ながら交互に見てしまった。映画のワンシーンみたいでちょっと格好良い。

ボーッとカップを持ちながら見ていると、足元に何かがトンッと当たった。

『……？』

ああ、そ、うか。あんまり見ていやいけないってことね。

私の座っている椅子を軽く小突いたのは、紛れもなく今も優雅にお茶を飲んでいるレークさんだった。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

“はつ”と返事をすると、男の人は私を一警してから大股で出て行つた。

誰だお前つて目は痛かつたけど、私の方こそ誰だお前つて感じ。招かれざる客かもしれない。私だって不本意に訳も分からず、右も左も何も分からぬ状態でここにいる。

それでも、客の部屋だと言つことを忘れて欲しくなかつた。

…なんて、お世話をなつといふ私、勝手だなあ。

「毎にここへ来るのは難しくなりそうだ。」

ため息と共にカップを置く音。その眉間に皺が寄っていた。難しそうな顔はそれでも画になつてゐる。

けど、そのうち心労で倒れたりしそう。さつきの人の態度とかだと、偉い人みたいだから、板挟みとかにならなきゃいいけど。

立ちあがったクーンさんを見上げると、一瞬だけ表情を緩め、おでこを軽く撫でた。

「その服も髪型もよく似合つてゐる。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見にくる。」

やつとつだけ言つとわつと行つてしまつた。途端に顔が熱くなる。

何その顔、何その台詞…それこそ言い逃げだつて。

『……』

声にもならず悶える。カップのお茶はもう温くなつていた。

「クーン殿があれほどまでに気を許してるのは珍しいですね…とにかく、その反応は何なのですか。」

別段気にすることなどないでしょう、と尋ねてくるレークさんの反応にセビツした、つて思つ…

イケメンは田に入れ過ぎると痛いことがよく分かつた。学習して、次からは直視し過ぎないようにしようと私の心臓が持ちません！

スー、ハー、と深く深呼吸。心を落ちるかせるためにはこれが一番効く。

ようやくそれを止めて田を開くと、レークさんはずつといつちを見ていたみたいで、不思議そうな顔をしていた。

『すみません。落ち着きました。』

謝罪の言葉を述べると、もう一杯飲むために女中さんに頼んで淹れてもうひとつ、一人きりになつた部屋で面白そうな顔をしながら質問してきた。

「随分と混乱していたようですが、どうかなさったんですか？」

「どうもこうもないよ。ってのは説明にならないよね。てゆーか、そこ聞くんですか。

『いやー、男の人につれられたことなんてなかつたものですから、少々混乱してしまいました。』

「（）家族に男性はいらっしゃるでしょうか？」

『はい、いますとも。』

お父さんがいますけど、そんなに関わりないし。

『年齢が近い男性、しかもイケメンなんて、私の周りには未だかつて存在したことなんてありません。』

だからビビリも緊張してしまつて。』

やう言つと、また首を傾げてゐる。ビビリがいる人たちとは価値観が違つみたいだ。

「こけめん、とは何ですか？」

…あ、セニですか。イケてるメンズ、なんだけれど、めりやくひやな日本語は云わらなことか。

つてゆづか、今からだけビビで言葉が伝わつてゐるの？

『クーンさんもレークさんも格好良い、と云ふば云わぬでしょうか。

うーん、顔が随分と整つていらっしゃるから、じーっと見られると、平凡過ぎる私にしたら心臓に悪いんです。

きっと一人はおモテになるでしょうから、そんなことを思つて勝手に緊張している私がいけないんです。慣れてきたらきっと大丈夫ですから、気にしないでください。』

そう一気に言つ終わると、一息つこい、お茶を口に含むつとする。けど、猫舌な私はふーふーと息を吹きかけて冷ます破綻になつていた。

「“おモテになる”？」

あー、伝わらないんだ。今度からおもつとした言葉に直さなくちや。

まだ不思議そうにしているレークさんに、女性に人気で、たくさん言い寄られていそう”な事の意だと伝えると、納得したように頷いていた。

やつぱりモテるんですか。

といふで。

『私、日本語を話しているつもりなんですが、ビリして言葉が伝わつてゐんでしょうか。』

大き過ぎる疑問。さつき、レークさんの口元を見ていたら、明らかに日本語じやない動き方をしていた。

と、言ひひとば。

レークさんたちが喋っているのは日本語じやない。じゃあ、どんな言語を喋っているの？それがどうして私に伝わっているの？疑問は膨らむばかり。

やつとそれはレークさんも一緒に。

妖精 その2（後書き）

今夜は徹夜だ！

闇話（前書き）

クーンチャードのお話です。

レークに言われたことは俄かに信じ難かつた。鏡盆に一人の女の子が映し出されたと言うのだ。

これは単なる神話ではなかつたのか？

そう疑問に思いつつも、鏡盆を除くことができない俺は、指示に従つて動くことしかできない。

誰も通らないはずのシユラスバンド砂漠に黒髪でおかしな格好をした女の子がいるはずだと言われ、俺はすぐさまに國所有のドラゴンを一匹拝借した。

その所為で今審議に巻き込まれてしまつてゐるのだが。

「富廷魔法師及び、騎士の一等指揮官でもある貴方であつと、いかなる理由があつてもドラゴンを自由にできるはずはないと思われるのですが？」

「これは吾輩の判断が間違つてゐるのだろうか。」

… うつ、 狐ジジイめ。

先程からつらつらと告げているものを聞きながら、自分の思考に耽つた。

赴いて行つた砂漠には本当に不可思議な格好をした女の子が倒れていた。と、言つことは、神話が実現してしまつたのだ。

あり得ない。

そう思いながら、倒れている女の子に近寄つて声をかけた。

「大丈夫か？」

女であるにもかかわらずズボンを穿いている。まずここがあり得ない。それに加えて素材が分からぬ袋、明らかに造りがおかしな鞄。

…まさか、本物か？いや、それは少女に聞いてみてからの判断だろ？。まずは取り急ぎ運ばなければ。

「大丈夫か？」

もう一度問うと。

『待ちやがれ、アホ神…』

空耳だと信じたい。

耳を疑うような神を冒涜する言葉と、口調もしかして下級市民か。いや、それにも格好がおかし過ぎる。

『……んつ、暑……』

本人に聞くしかないのか。そう思いドライゴンに乗せると、急いで都へ戻った。

そこからが大変だったのは無理もない。

ドライゴンを返しに行くと、飼育係に泣きつかれた。俺が責任を持つ、と言い残して、少女に目がいかないようになると、なるべく勤め、使われていらない客室に連れていいく。

レークの幼馴染みが女官を務めているのは助かった。世話を頼むと、何食わぬ顔をして常務に戻る。その時はまだドライゴンのことはバレていなかった。

ルイス派が何か嗅ぎつけたのもしれないな。あいつは少々厄介だ。

仕事を終え、真っ直ぐに客室へ向かつ。いつもまして終業が遅くなつたため、もう目を覚ましているだらうと寝室へ向かつじ、その少女は目を閉じたままだつた。

……憐れだな。

見てまずそう思った。

抱きあげた時には羽が生えているかの」とく軽く、感触からして

華奢だと分かった。身長もそつと高くはない。

さつとまだ成長途中なのだらう。

そう思つて不羨にも見つめると、眉間にしわが寄る。

肌は白く透き通つていて、唇は果実を思わすよつて色合にも良い。黒髪は艶やかさが際立つていた。

…触つてみたい。

そんな衝動に駆られてから、いくら少女だからと言つてそんなことをしていいはずがないと自分を叱責した。

それからどれだけ時間が立つたのだろうか。じつと見つめていた少女は顔をしかめる。それから小さく声を漏らした。

『んッ…』

その直後に長いまつげに縁取られた目は、少し眠たそうに開いた。

「おい、大丈夫か？」

もう一度声をかける。しかし、よく眠つていたようだし、まだしつかりと頭は働いていないらしい。

しばりへじて大きな目をむいて大きく開くと。

『うーん、どう?』

そう呟いた。その声は掠れていたが、どこか引き込まれてしまつ
ような甘い声。少女にぴったりだと思った。

「……」
「……」

身体を起こし、それから俺をその瞳に移した。よつやくこの場に
俺がいることを知つたらしい。だが、俺が言ったことに微塵も反応
しない。

もしかして、記憶喪失、とか？砂漠に倒れていたくらいだし、何
かあつたことは明白だが、まさか、盗賊に襲われて捨てられた、と
でも言つうの、だらうか。

『てゆーか、あなた、誰？』

少し舌つ足らずな言葉使い。しかし不思議と不快には思わなかつ
た。

「ああ、自ら紹介がまだだつたな。デュード王国の宫廷魔法師及び
騎士団一等指揮官、クーン・リッキンゲル・ショパードだ。」

せつかぐの述べたのに、反応を示さない。俺の顔をじっと見つめ
ているようだ。

…何か付いているのか？

しかし、その魅力的な瞳に見つめられていると、どうも居心地の
悪さを感じ、口を開いた。

「おい、大丈夫か？」

まさか、どこか具合の悪いといふのが、

ぐつと身体を前のめりにして様子を伺おうとする、顔を赤く染める。

まさか、熱が出たしたのか?と、思ったが。

『だ、大丈夫だす!』

『……』

思い切り噛んだようだ。見ず知らずの男がいるわけだし、いつの間にか知らない場所にいた。混乱している上に、きっと緊張しているんだろう。

「とりあえず、落ち着け。名前は?」

何事もなかつたように会話を続けた。いつも言つことは気にするべきではない。それに、何事もなかつたような顔など、し慣れている。

その様子にホツとしたらしく、今度は間髪開けずに質問に答えてくれた。

『ネイ。サカキバラ・ネイ。』

「サカキバラ・ネイ? どっちが名前なんだ?」

とつそに疑問をこぼしていた。

名前の形式として、どこか不思議な音を持っているそれは、発音

し難い。そして、“サカキバラ”も“ネイ”もどちらかにはありそうなものだが、名前としては違和感を持つ。

少女は不思議そうな顔をしながら、考え抜いた挙げ句に答えた。

『ネイ。ネイが私の名前。』

やつとのことでやつぱり姿は、真っ直ぐに俺を捉えて離さない。その瞳は濶みなく輝いているように見えた。

思わず笑みがこぼれてしまった。そして、いつになく珍しいことをしてしまったと思い、いつもの表情に戻す。それから質問の続きをへと戻った。

「ネイ、自分の状況が理解できるか？」

考えてこる様子から、全く理解できていないことが伺える。いつも時は急かしても無駄だらう。

『…今から言つこと、信じてくれますか？

頭がおかしいヤツだと思われることを、きっと今から言っています。だけど、真実だから。』

考え抜いたのであるのぞの言葉に、疑問を持った。

“信じてもうえない”ことを話す。それはきっと勇気がいるのだらう。瞳には涙が集まっていた。

零れさせまいと我慢している姿は抱きしめてやりたい衝動にから

れた。それを何とか引っ込むと。

「…とりあえず聞こう。だから泣くな。」

そう言った。なるべく、感情を見せないよう。

もつじしばりく耐えるような表情を見せて、それから語り出した。
『「こ」が何処だかは分かりませんが、さつきまで私、砂漠にいたんです。』

「ああ、それはそうだろうな。ネイは砂漠に倒れていたんだ。そこを保護した。単なる熱射病だそうだ。安心していいぞ。」

別段気にすることもない、普通の話だ。それも真実に則っている。

『でも、その前には日本つて国にいたんです。』

“二ホン？”

次に述べたことは、理解できないものだった。二ホン、とはどこにある土地のことだろうか。今まで耳にしたこともない。

『私は单なる学生で、三日後に大学の入学式を控えていたんです。

東京に出てきて一人暮らしを始めるからって、買い物した帰り道、気が付いたらあの砂漠にいて。あそこでジュー何とかっていう自称神様に出会ったんです。』

分からぬ單語だらけだ。それにしても。

「頭をどこかにぶつけた訳じゃないよな？」

「うつ本氣で心配してしまった。もしくは空想癖のある子なのか？
それもあるな、ほんと、管轄外だ。俺の手には負えないのかもしれない。」

「話をまとめる、異国にいたお前は買い物帰りに歩いていたら
の砂漠にいた、と。
二ホンに、神様、ねえ。」

信じがたいことだらけ。それを証明することはできないが、この
少女の戸惑いよつからずつて、嘘をついてるよつとは思えなかつた。

『あ、買い物袋がない……』

小さな弦きこ、頭では別のことを考えながらも答える。

「お前の近くに落ちていたものはすべて回収した。それで置いてあ
るべ。」

すると、すぐさま手を伸ばそうとした。が、まだ力が入らないの

か、ベッドから落ちそうになる。

『きやつ……』

小さな悲鳴があがる。しかし展開が読めていた俺は、迷うことなく手を伸ばした。

「危ない。」

でも。… こんな展開は予想していなかつた。

腕に入れて抱きしめたネイは、ふわりとせっけんの香りがする。それに、抱き心地が… 非常によかつた。

『「レ、ごめんなさい。なんか動き難くて。』

焦ったように言葉を紡ぐその姿は愛らしく、もうしばらへ腕に納めたいと思つてしまつほどだつた。

あり得ない、この俺が。

思考を切り替えようと、話を別へと進める。

「ベッドに寝ていたのだから夜着に着替えたに決まつているだろ？』

この娘が着ていて物は、うちの女中に洗わせることにした。それについても、一人で首を傾げてしまつほど変わった衣服は、着ていては異国の者だと気付かれてしまつ。

それでも、勝手に洗つておいて返さない訳にはいかないため、乾いたら持つてくるように言つてこた。

『あの、これを私に着せたのって…？』

顔はもう真っ赤だ。

俺じゃないかと心配しているのか？

疑われるのは嫌だと言わんばかりにすぐ答える。

「もううん俺じゃない。流石に早乙女とませ言つても女は女だ。やけにかうんと区別しているから氣にするな。」

安心した表情をしてくれるとと思つたが、顔をしかめている。何か気に障ること、言つたか？

その答えはすぐ分かった。

闇話 もの2 (前書き)

クーンサイドが続きます。

閑話 その2

『…私、何歳だと思われてるんですか?』

女性なら本来聞かれたくないことだろう。しかし聞かれては答え
るしかない。

「14くらいだからうつ。」

思つた通りの年齢を述べる。少し強張つた顔。やつぱり失礼な事
を言つたのかも知れない。

『私、18です。』

「…すまない。顔つきや身長から言つて、まだ成人していないかと
思つた。」

返つてきた答えに驚いて、すぐに謝つた。それにしても、若く見
える。

『14では何歳で成人ですか?』

あまりにも真剣な表情。それは普段からも若く見られがちな事を
気にしている風に見えた。

「15だ。」

やつぱり少し考えて、年齢を問われる。24と答えると、上か
ら下までじつと見られて、大きなため息を零した。

と、思つたら。

ぐー。

突然の大音響。彼女はさつきの顔よりももっと赤い顔をしていた。

「食事を運ばせよ。」

ずっと寝ていた所為か、水分も口にしていない。もつと早くに気にするべきだつたな。食事の準備をさせるように女中に言つつけ、ネイに皿を戻す。

「大丈夫か？」

ベッドに身体をもう一度預ける姿があまりに辛うるので声をかけると、苦笑いで頷いている。何とか席に付けたようだが、身体は重そうだった。

それからレークが来ると、話をしながら食事を始める。その時にいつた言葉は初めて聞いた言葉は俺とレークの心に留まつた。

どう意味かを問うと、慈愛に満ちたような表情。それに惹きつけられ、思いがけず不羨にもじつと見つめてしまった。

『私の居た国では、食べる前に“いただきます”って言うんですよ。人間の他にも生き物はたくさんいます。そんなモノの命を奪つて人間は生きる糧にしているんです。

だから、犠牲になつて私たちに力を与えてくれるものたちに感謝の意をこめて、あなたたちの力を“いただきます”って言うんです。

あなたたちのお陰で私は今日も生きられたって感謝するのですよ。

『

なるほど。

当たり前過ぎて気が付かないことも感謝を述べている姿は、心を大きく揺さぶったような気がした。

「感慨深い思想ですね。確かに異文化のものよかったです。」

面白そうな顔をしているレーク。その間も手を止めないネイの食べっぷりに満足していると、急に手が止まる。

嬉しそうにしているレークは気にしている様子もなく、少し上の空で笑顔を浮かべていた。

「もういいのか？随分と腹を減らしている様子だつたじゃないか。」

腹が鳴るほど空いている様子だつた。それを掘り返した所為か、また顔を赤くしている。今日は何回顔を赤くさせたら気が済むのだろうか、と少し微笑ましくなつた。

「ネイ？」

何しゃべらないと思つたら、急に立ちあがり、ネイの物らしい荷物の所へ寄つて行つた。ガサガサと音を立てながら漁つている。

何がしたいのか分からず、見つめることしかできない。

しばらぐすると、何かを抱えて戻ってきた。どん、と音を立てながら並べていく。訳の分からぬ容器に入っているそれらは、変な色をしていた。

「…ネイ。今更何を言われても驚くつもりはないが、それはなんだ？」

さつきまでは戸惑っていたのに、今は随分と嬉しそうだ。楽しげな笑顔をしながら、俺の質問に答えてくれた。

『私の国の調味料です。右からケチャップ、マヨネーズ、ソース、醤油に味噌です。』

調味料？味を整えるために使うヤツ、か。それにしても、どれも聞いたことない。

「それをどうするんだ？」

『私の国の味を食べたくなつて。』

『私の味…ネイの国の中、は随分と氣になつた。』

『これは大豆、という豆から作られたものです。醤油は日本人の心。何にでも会つ万能調味料です。』

そう言つて、スープの中に少しだけ垂らした。ちょっと色が濃くなつた液体。それを口に運んで、思わず笑みを浮かべている。口に運んで、何かに満足したように頷いていた。

『…食べてみます?』

それがどんな味なのか、気にならないと言えばまづやになる。…でも、まだ名前も知らないはずのレークに先に差し出すのは氣に入らない。

しかも自分が使っていた食器を使って、だ。

少々恨めしくなり、横目でにらみ付けるように見回けたあと、自分にも同じようく差し出されて満足する。

あまり、このよつな事に頬着しない性格なのかもしけないな。

差し出されたものを口に入れてみると自然と言葉が零れた。

「「おいしい…」」

変わった味だが、深みがある。今までに食べていたものが、薄く感じられてしまつほどだ。

『そうですか。それは良かつた。』

いつの間にか食べ終わっていたネイは、俺たちが興味深そうに見ていた調味料をかけてくれた。

今まで俺が食べていたものと味が全く違う。格段に美味くなっていた。これ外国の味だと言うのだろうか？

ネイが食べ終わっていた時の挨拶を言うと、女中を呼んでお茶を頼む。その作業を飽きたことなくじっと見つめている姿は微笑ましかつた。

一服しつつ一通りの話をしてみると、段々表情を暗くしていく。

「とりあえず、異国な恰好をしていたために保護するだけに留まつた。詳しい話はまた明日にでもしよう。ネイ、疲れているようだから、もう寝る。」

そう言つと、嬉しそうに笑顔を浮かべている。それに満足した。

…満足？なぜ俺は満足しているんだ？

「そんなつー情報がなければ私の研究は進まないのですよ？」

歪んだ表情を浮かべるレークに目線だけ向けて諫めると、部屋から追い出した。

強引だと分かりつつも、ついつい行動してしまったことに反省するべきだが、俺としてはレークに謝るつもりはない。

…正直、この時間は俺に欲しい。

「…眠れそうか？」

さつきまで長時間寝ていたはずだ。もし眠れないようなら、話相手にでもなる。そう覚悟していたのだが。

『大丈夫です。クーンさん、有難う御座います。』

ネイはそう言った。

…何故がつかりしてゐるのだろうか。

しかし、それをおぐびにも出さずに礼を述べた。褒めて欲しいところだ。

「ネイが混乱しているのは分かつていたの」「ひらの事情で長話を付き合つてもらつてしまつた。礼を言つのはいいからの方だ。有難う。」

…どうして手が出てしまつたのだろう。無意識にネイの頭を撫でていた。思つていていたよりも細い髪はサラサラして、指通りがいい。ん？一か所、髪が絡まつてこるような感触がした。

「ハハ、絡まつているな。少し待つてろ。」

近くの化粧台まで走つて櫛を持つてきて、ベッドの上に座り、髪を丁寧に梳く。

「…綺麗な髪だな。」

ずっと触れていたい衝動にかられたが、鏡であつたばかりの娘にいじまで固執しようとしている自分に驚いた。

…きっと、妹みたいだから、だな。うんうん、と頷いて、自己完結する。

もう一度頭を撫でると、おやすみ、と挨拶をして部屋を出た。

「クーン殿っ！聞いておられますかな。」

「ええ。」

…物思いにふけってしまった。

気が付いたら血圧が上がったような真っ赤な顔が目の前にあった。赤い顔と言つても、ネイとは全然違う。

向こうを可愛らしさと言つならば、こいつは不愉快になる顔とか言いようがない。

そう言えば、今朝の恰好はよく似合っていた。

ショエランがやつて来た時に驚いた様子だったネイには謝るべきだな。あいつも返事の前に扉を開けていたからな。

ネイが俺とショエランの会話をオロオロ見ていたのは知っていた。交互に見上げているのは小動物を連想させ、大きな黒い瞳に魅了されたのはいつまでもない。

「わかった。すぐに行くと伝えてくれ。」

先にわざと行かせる。途中退場になつてしまつたため、言いたいことを真つ直ぐに伝える。その時に、

結われてこる髪を避け、額の辺りを撫でた。

「毎にここへ来るのは難しくなりそうだ。…その服も髪型もよく似合つてこる。まるで妖精のようだ。では、また。時間が開いたら様子を見に行く。」

我ながら、柄にもない、気障つたらしい事を言ってしまったとは思つ。だが、後悔などしていない。

…そもそも、時間が空く可能性があるのだろうか?…とりあえず、ジジイにもつと血圧でも上げてもらつて、普段の仕事に戻ろつ。

「昨日、ドラゴンを使ってレークの再従兄妹を迎えて参りました。その際、賊に絡まれていたらしく、保護を頼まれましたので、若輩者ながら承させていただきました。」

「どうやって賊に襲われているのを知ったのだ?つーまさか。まさか、あの方が本当に現れたのか?!」

あほか。そう言いたいのを何とか抑える。

「大体は約束の時間に来ないことで何かがあつたに違いないと分かつておりました。嫌な予感がするとのことで駆けつけて行きましたところ、襲われそうになつておりました。

その再従兄妹君には見込みがあるらしく、今回は鏡盆を見せるために招いていました。」

淡淡と語る。ここ数年で無表情になることは慣れていた。何気ないことのように語るフリも。

そして言えることは、こんな奴にはネイを合わせたくない。

実際はレークの再従兄妹と言つだけでも危ないが、異国、いや異世界からやって来た娘などと言つては、神話に沿つて崇められてしまつ。

そんなことをしたら、ネイは飾られたものとして神殿に軟禁状態になつてしまふのが田に見えている。

そんなこと、絶対にさせはやらない。

「そんなこと、われわれに黙つて行つてよ」と思つてゐるのか？

「！」

あー、うむむ。こんな時間があつたら、政の一つに時間を費やした方がいいことを知らないのだろうか。

いや、ここにいつてどのような事を考えるよつの能力はなかつた。

呆れたようにため息をつくと、丸投げにもとれる発言をする。後は任せた、と言つ意味を込めて。

「今回のことは宰相殿にも知らせてあつた故。未来の神官候補として受け入れる前に、その素質を確かめるために黙つておりました。まだうら若き乙女なのです。

今後の幸せを考えると、中途半端な力の所為で人生を棒に振ることもないでしょう。そこを見極めのために、黙つていたことは謝罪いたす。

しかしながら、そのように判断の鈍る筋をもつた乙女に搔きぶりをかけようとする輩もいましたから、黙つておりました。」

「これまで言われては誰も何も言えないだらう。少し厄介な事と言えば、何も知らないはずの宰相殿が巻き込まれていることだ。

そして、笑顔を浮かべてことから大層立腹だと分かる。

…とりあえず、避けるとしよう。しかし三日と持つまい。そうなつたら腹をくへりや。

やう決意してその場を離れた。

闇話 その2（後書き）

クーンさん、意外と感覚だけで動いてますよね。
次回はまたネイちゃん視点です。

楽しみの時間

もう思つた次の瞬間、ノックの音が響き渡る。

ほら、キタ。

少し身体を強張らせ、一呼吸置いてから“はい”と返事をすると、扉が開かれた。

「もう風呂は済ませたか？」

それにもはい、と答える。すると、とも当たり前かのように私がいるソファへやってきて、タオルを私の髪へあてた。

これはもう二度も前から始まっている。何で留置づいてしまったのかはよく分からなかつた。

ただ、髪を乾かしてもらうのは気持ちいいから、私は嬉しそうに私の髪を拭うクーンさんに身を任せることじが身についてる。

止めた方がいいと思いながらも、どこか緊張感のあるこの時間が、実は何よりも好きだ。

毎晩は最近ミコトと一緒にいて、この国について学んでいる。初田じゅりーんさんは一日中地球について質問してきたが、あまりに多くの時間は費やせないらしい。

それでも、食事の時は必ずやつてきて、子供がおとぎ話をせびる
よつこ、いりこひと質問していった。

それに比べてクーンさんはほめつたに会えない。たまに食事を一
緒に摂るけど、昼間にあつたことはなかつた。

レーコさん曰く、「忙しいからじ。

じゃ、神官は忙しくないのか、と聞いたら、今は祀り事がないか
ら忙しくないって言つてた。

その代わり、行事の時には寝る間もないほど忙しいんだって。

で、昼間は忙しいクーンさんがやつてくるのは就寝間際になつて
いた。時間と言つても、正確には分からんんだけど。

この国には、いや、この世界には太陽が6ヶ、月が6ヶある。お
そらく一日は24時間で、太陽も月も、一つで一時間を表していた。
朝の6時ほどに太陽が一つ出る。これは朝の6、7時を表す。二
時間たつと、光る太陽が一つ増えることになつているのだ。夜はこ
れが月に変わるだけ。

便利にできているようですが、しっかりと把握できるわけではない。
しかも法則を知らないでいると、私みたいに卒倒する羽目になるだ
け。

そりややーー。あるはずもない太陽が6つもあつたんだから。

で、円が三つ上がるごとにクーンさんはこつもやつてくれる。そしてお喋りをしながら、タオルで私の髪を拭ってくれるのだ。

「よし、じゃなものだらう。」

乾いた髪に櫛を通して、満足げに頷いている。私はいつものことがからお礼を言った。

すると、頭を撫でてくる。

…だつたら最初からひらすでるのやめればいいこのことね。一度手間だつて。

べつに思つても、どこかで止めてしまつて思つてゐる。結局のところ、クーンさんに甘えきつてこむ自分がいた。

手を取られ、寝室まで連れて行かれる。ベッドに横たわると、布団をかけてくれた。まるで小さじ子供に戻ったみたい。

『クーンさん、私、子供じゃないんだから自分で髪を乾かすのも、布団をかけるのもできるよ。』

朝も早くから会議だと言つてこた。それに帰るのはいつも深夜近く。ちゃんと眠れていけるのか心配だった。

「…そんな」と呟つた。

え？

絞り出された声はどこか悲痛そうで。弾かれたように起き上がる
と、ランプの薄明かりの中、しつかりとクーンさんの顔を見ようと
努めた。

「俺はレークやニア程ネイに会える訳じゃないから、夜のこの時
間を楽しみにしてるんだ。一日の楽しみを奪わないでくれ。」

それは思いがけず、懇願だつた。でも、顔色を伺えば、疲れてい
るのは一目瞭然。目の下にはクマがある。

つてことは、現在進行形で疲れてることだよね、うん。

一人で頷いていると、名前を呼ばれ、意識の焦点を横の人間に合わ
せられる。

『本当に楽しみなんですか？』

それを切り口に、思つてることが溢れ出した。それはもう、壇
を切らせたかのようだ。

『クーンさんはいつも仕事を終わらせてからすぐに来ててくれている
みたいですが、それでこの時間と言つことですね?ってことは、
これからお屋敷に戻るともっと遅くなるはずです。』

それなのに、朝は私が起きるよりも早く、城に来ています。そん
なに働いていらっしゃるんですか。

他に無能でも政をこなすための人数はいるんじゃないですか？

てゆーか、早朝から深夜まで働くなんて、労働基準法を丸無視してますよね。』

例えば、朝8時くらいのスタートとすると、夜の10時位まで働いてることになる。つてことは、14時間勤務？！

ありえない！働き過ぎーーー！

どんな世界でも統治するための政治が必要だつて分かつてゐる。議員とか、じいじの場合だと貴族つて類のものの数が多いつてことも。レークさん、言つてた。この世界には貴族階級の人があるんだつて。その階級を持つ家の主が、国の中核である国会に参加して会議をしてるんだつて。

そんな中でも、理由は教えてくれなかつたけど、クーンさんは大変な立場にいるみたいで、休む暇もないらしい。

気にかけてあげて、つて言つてたレークさんの言葉に、私はつい頷いてた。

…思い返してみると、夜にやつてくる時も朝にやつてくる時も、いつも疲れた顔、してた。もっと早く聞くべきだつたのに。

「気にしてくれて有り難いが、いくらネイに言われても俺はこの時間止めるつもりはない。」

…なに、その断言。そして、無意識ですか？その極上の表情は。

最高に格好良く見えるその表情は、私の心臓を驚撃みにした。き

つと顔も赤いに違いない。

ホント、格好良い人は何しても許されるどいつもか、むしろ公害に近いくらいに自分に負担が来る。

要するに、目の保養は行き過ぎると毒になるってこと。俯くしかできない私の意思なんて、端から叶うはずもなかつた。

それでも譲れないことが一つ。残念ながら、私はその方法なんて微塵も分かりはしないから、直接本人に尋ねるしかない。

『…私がクーンさんにしてあげられることはありませんか？』

何でもいいから、何かできることをしてあげたい。だつて、クーンさんは私の命の恩人だもん。あんな砂漠で倒れてる人間を助ける人なんて、いないはずだつたのに。

それなのにクーンさんは国軍のドラゴン？を動かしてくれた。

レークさんにこの国のことはたくさん聞いてる。魔法が在つて、不思議な生き物がたくさん居て、妖精さえもいる世界。

この世界の最高峰であるこの国のために一番働いてるのはクーンさんなんだつて。

クーンさんは私が知つてることを知らないけど、私を助けた時に使つたドラゴンのことでの、たくさんの人たちに責められてるみたい。なのに、私は悠々とここで生活して、尚且つクーンさんの負担になつてゐる。

…それが、どうしても許せないの。

「ネイ、有難う。しかし、そこまで気を使つことはない。」

『でもつ…』

違つんだ、と言つてクーンさんは首を横に振る。それは初めて私の言葉を遮つた。

「ネイは俺たちの世界の人間とはものの考え方が違う。価値観が違うんだ。

それは俺に癒しを与えてくれる。今まで当たり前であつたことを違うと言つネイは、面白い。俺に直接向かって働き過ぎだと言つヤツに初めて出逢つた。』

クシャッとした笑顔は、今まで一番私の心を震わせた。

…ホンモノ、だつて思ったの。

数少ないクーンさんの表情。大部分は無表情。その中で、今の笑顔は、間違いなく本物だった。

『私にできることを教えてください。』

譲れない。何かしてあげたい。義務感とかじやなく、自分の意志でそう思った。

今の笑顔が毎日、無条件で出るよつとしてあげたい。それは、私にできることじやないかもしない。

でも、できる」とかもしれない。

可能性が1%でもあるんなら、私はそれに賭けて、命の恩人にしあげられる事をしたい。

「では、この時間を、出来る限りずっと俺だけの物にしてくれ。望むのはそれだけだ。」

『そんなの、望むことじゃないでしょー。』

あつ、タメ口をこちやつた。

『めんなさい、って呟くと、勢いが殺がれて黙る。すると、大きくて重みのある手が私の頭を撫でていた。

「今、ここから一歩も出してあげられないんだ。それを俺は謝らなければいけない。

それに、今は何とか先延ばしにしているが、これからこの国のことにおもろく巻き込んでしまつ。今ままのネイでいて欲しいの、これから起じるひとはきっとネイの負担になる。」

そう言つたクーンさんは少ししゃんとして見えた。

自分のことを考える暇がないくらい働くの、私のことばっかり心配して！お人好しにもほどがあるよ。

私のことなんかより、もっと自分の事に気を使つべきだ。そこは、

どうしても譲れない。絶対に考えてもうつよつて、しなくちゃ。

『いつか、絶対クーンさんのお願いを聞いて見せますからー・考えて置いてくださいね。』

結局、そんな約束を取り付けることしかできなかつた。これが約束できただけいいのかもしれない。

この時の帰り際に言つていた、一、二日したら会いにくる人がいるかもしれないと言つことが現実のものとなるなんて、この時の私は想像もしていなかつた。

宰相わが、登場（前書き）

お氣に入り登録をして下さった人がいるみたいで。
とてもうれしいです。

これからも頑張りますので、ひとつお気長にお付き合ってください。

では、続きをどうぞ。

宰相さま、登場

「それでは、箱のようなものに映像が映し出されるんですね！」

でもそれは……」

勘のいい方はお氣づきでしょう。私がレーザーさんに説明しているのは、テレビです。

いやーね、もっと上手く説明するはずだったんだけど、箱って言つちやつたわけですよ。

さりには絵心が最悪なもので、言葉を探すしか伝える方法はない。

『田に見えているものとほぼ同じ映像を映し出せるんです。』

その一言で、おお、と驚きの声を上げて、目を丸くしている。ち
ょつとい、面白いかも。

…ああーちよーひじナナメ掛けの鞄の中にケータイ入つてたと思つ…

そう思つて鞄の所へ近寄つて行いつとしたぢ…

「失礼するー」

おひいき…

何事がと思ってドアの方を見る。そこにはオロオロしてこちらアと、厳格そうなおじさんが立っていた。

『どうやら、様でしょいへ。』

明らかに怒っていらっしゃいますよね?つてくらいの雰囲気を纏っている。初対面なのに、私、このおじさんを怒りせぬよ!な事を何かしたんだろ?か。

『お。…記憶にない。』

てゆーか、この部屋から一歩も出でないのに、むしろ迷惑をかけりつて言つ方が難しい気がする。

困つてレークさんを見てみると、苦笑いを浮かべて肩を落としていた。

…その反応、なに?

何が起じぬか分からぬ状況に戸惑つ。そして、ビハクナリともできなくて、といあえず身構えてみた。

「宰相殿、もう少しう御出でで。もちろん、このことはクーン殿は知つておられますよね?」

何この空氣。現代っ子だから、もちろんそこは読んで黙るけど…

一触即発?

でもなさそーだけど、レークさんの笑顔が胡散臭い、いや、ビハク

黒い…でもなくて、張り付けた様なもののなのは確かだ。

「ヤツにめられた。」

お氣の毒に。

何にはめられたかはよく分からぬけど、眉間にしわの深さに、何だか哀れになつた。

さつきまで怒つてゐたみたいな感じだったのに、それでもなかつたのかな。顔つきは元々そんな感じみたいだし、この人もクーンさんと同じく疲れた顔をしている気がした。

「〃コア、あいつを呼んできてくれ。」

かしこまつました、と言つて、当たり前のよひ〃コアは行つてしまつた。

なになに？！今から何が起るって言つの？

それよりも、あいつでだれか伝わつてしまつのがすゝこと思つた。一人、訳も分からず立ちつくす。すると、おじさんの目が私を捕えて離そとしない。

…怖いんですけど。かなり。

苦笑いするしかできなかつた。

「貴女がレークの再従兄妹、かな。」

「うへえ。本気で怖いつす。

けど、ここで委縮する訳にはいかない。クーンさんのマイナスに繋がることだけはしたくない。

『お初にお目にかかります。ネイと申します。』

ゆつくりと丁寧に礼をして見せる。顔を上げた時に部屋にいた四人は驚いていたようだった。

ちよどりへつてきたクーンさんは入口のところに固まっている様子。

どこか変、だつた？

一人オロオロとしていると、おじさんは急に笑いだした。ひとりきり笑つた後、さつきの顔とは違う柔らかなものを浮かべている。それにちょっとだけ安心した。

それにしても、急に笑い出すなんて、ワライタケでも食べたのかな？

「実に肝の据わった娘だ。……氣に入つた。」

ん？ 気に入られた……つて何事？

周りを見渡してみても、どうやら状況が理解できていないのは私だけみたいだ。とりあえずお茶にしましょ、というレークさんの言葉で、この空気は一時保留。

ミコアがお茶を入れて部屋から出していくまで、椅子にくついた
よつこ留まゐしかなかつた。

「さて、この馬鹿が丸投げした話の真実を教えてもらおうか。」

おじさんが顎で指したのはクーンさんだつた。クーンさんが馬鹿
だなんて、そんなこと言つたら私はどうなるんですか？！つて、言
いたくても言えない。

だつて、ここの中では話しが理解できていないのは、私だけみたい
だから。

「ネイ、設定を言つてくれるか？」

急に話を振られた私は、中身を溢さないよつにカップを置き、二
人の顔をしげしげと伺いながら口を開いた。

『私はレークさんの再従兄妹にあたり、一族の中でもレークさんに
次ぐほど力があると言われています。

そのために神官見習いの候補生として王都を訪れようとしたところ、賊に襲われそうになつてしまひ、そこをクーンさんに助けられました。

現在はその休養をとるために、城の一室を借りています。』

早口でそう言つと、大きく息を吸い、同じように大きく吐いた。

間違えてはいなはず。ここ、三日ずっと確かめられてたこと

だから。

そんな私の様子を見て、おじさんは大きくため息をついた。どうやら、聞きたかったのは、そういうことではないらしい。

「設定などではなく、事実を教えてくれ。」

なるほど。それなら、確かにさつきの口は答へにはなっていない。ここで口を開くのは私であるべきなんだらうけど、事情を話し始めたのはクーンさんだった。

「ネイは鏡盆に映し出された。」

それだけ言えば分かるのか、妙な沈黙が息苦しい。おじさんは田を見開いたまま私をその瞳の中に入り込めていた。

「！」の方が…」

何処の方よ？

急な態度の変化。それに、崇めるような暑い視線は、かなり居心地が悪い。私は田を逸らすと、カップを手にとり、息を吹きかけて冷ましにかかった。

「ネイは砂漠に倒れていたんだ。それでここまで運んできた。話を聞いていると、予言通り、とでも言おうか。

この娘は価値観がどうも異なつていて面白い。しかし、政に引き込まれていいような子じやない。純粹な、良い娘なんだ。」

私に注がれているクーンさんの熱い視線には気付かなかつた。それ以外の二人は何かしら悟つたみたいだけど。

「しかし、そもそもいかんだつ。鏡神祭は一月後に迫つている。それまで見鏡盆が使えないことが知れ渡つたら、ただじや済まされない。」

「そうだろう、とレークさんに問いかけるから、私はそちらを向く。目があつたレークさんの表情は少し困つてゐるようだつた。

事実、らしい。確かに、前にもそんな話してた気がするけど。

「その通りですが、私はクーン殿に賛成です。この乙女を政には引き込みたくない。大人の汚い世界に巻き込むなんて言語道断です。ルイス派の人間にとつては格好の獲物となるでしょう。それに、まだ預言者く最後の乙女くと決まつた訳ではありません。」

「私は動物か？獲物になつて狩られるなんて、冗談じやない。

それにしても最後の乙女つてナーニ？

意味のわからない単語に戸惑つてゐる私を置いて、話は進んで行つた。

「一月後まで何とか隠しましょ。国王陛下には鏡神祭の後に報告すると言つこととして、とりあえず乙女がどうかの判断は明日の日没後にいたしませんか?」

私のことなのに私を省いて話が進んでませんか?

ふとした疑問だが、助けてもらつた時点でこの話が始まっているみたいだ。

私は一体何者な訳?ここでは稀有なものとでも言つんだろうか。さつきのこのおじさんの熱い視線の事も気になるし。

もう我慢ならない。分からぬ事を聞くことにした。

『口を挟んで』めんなさい。だけど、分からないんです。私はこの世界にとつてどんな存在なのですか?』

それが分からぬことには私の中で話は進まない。理解できないに等しい。

置いてきぼりをくつた私は何とか追い付こうと努めた。

「話していなかつたな。」

そう言つたクーンさんに目を向けると、少しだけ愁いた目をしてゐる。なにか、大変な事なんだろうか。

「鏡盆には人間が一人だけで映ることはないと言つただろ?」

その問いに大きく頷く。いつか聞いた話だつた気がする。

「それに一人きりで映されるのは、最後の乙女」と相場が決まっている。

「最後の乙女」とは神からのお告げを伝えることができる、預言者のことだ。

そして、最後、と呼ばれるのは、未だかつていなかつた預言者のことをして、最初で最後の乙女の意を示している。」

なんすか、その仰々しい話。私には無関係に思えるんですけど。そんな大それた存在のはずないよ。

今まで日本のビニにもいる女の子の一人だったんだもん。

ワンピースの裾をギュッと握る。その手に柔らかく乗つて来たそれは、クーンさんの物だった。

心配そうな瞳。きっと、相当酷い顔してんだろうなあ。なんてしみじみと思つてみたり。でも、混乱してるから、そこは許してほしい。

「ネイにとつては巻き込まれたくないものだらうが、この国の神話に記述されていることなんだ。

それに、ネイが一度映つてしまつた鏡盆はネイが神殿にいかない限り、使つことはできなくなつて、この国の政治に関わってしまう。

」

うへん。映らないのは困るよね。それにしても、神様を信仰して

るのかあ。それはちょっと厄介だよね。

宰相さま、登場 その2

『質問、しても良いですか?』

私が知りたいことは山ほどある。

理解できないことだけじゃなくて、私自身が気になることも。その問い合わせに頷いてくれた三人を交互に真っ直ぐ見つめる。

真剣な顔をしてるから、私の顔にも力が入った。

『この国の人たちの多くがその神を信仰してるんですか? 信者の敬虔さはどうのくらいですか?』

あんまりにも熱狂的だと、嫌でも最後の乙女^{ハトメ}とか言つもの立場に立たされそう。それに、もし私がそうでなくとも、勝手に理由を付けて祭り上げられそうだもん。

それだけは、何としても確実に避けたい。

「国民のほぼ9割が信仰しておる。中には熱狂的な信者もあるな。」

難しい顔をしたおじさん、いや、宰相様がそう言った。

まじ、勘弁。今さらだけど、何としても避けたいよね。私、そんな面倒な事からは、回避を希望します。

『……私の居た世界にはいくつかの宗教がありました。でも、私は無宗教です。

いや、多神教って言つた方が正しいのかもしません。私の国のお住人はとても自由で、それぞれの宗教に準じた催し事を行つんです。

』

「いつ説明してると、やつぱり日本の文化って面白い。てゆーか、ここまで来ると自由すぎるよね。

「その口ぶりだと、ネイさんは神信じおられないようですね。」

「そうか。神官様から見れば、信じられない人間なのかも、私。

でも、実際問題自分がどう思つかだし、思想はその人の自由だ。思つてる事なんだし、それを隠して本当のこととを述べないでいるかすなんて、おかしい。

私は頭に、不愉快に思つたらすみません、と付けておいてから話しあした。

『私自身は基本的には神様を信じていません。もしかしたらこの世界を創つた神様はいるかもしれません、縛り付ける神様はないと思うんです。

だって縛りついて本当に助けてくれる存在がいれば、治らない病気なんて存在しないと思いますから。』

ここまで言つてなんだが、みんなの視線が痛い。信仰している人から見れば何とも不愉快な話なんだろうけど、単なる小娘の浅はかな考えつてことで、勘弁してほしいとこッすね。

『私のいた世界では自分の信仰している宗教を他人に押し付けて、過去にも現在にも争いが起きています。

聖職者があ金を得るために、神に助けてもらえる紙切れが出回った過去があります。

これは人間の我儘で、私腹を肥やす為にやったことで。でも、その行為は神様に結びついてしまつんです。

神様は自分に似せて人間を創ったと言われています。そう考えると、神様がいると信じると、汚い心を持つている人物を想像せざるを得なくなりますから。

それを崇めることはできません。』

ここまで言つて、完全に冷めてしまったお茶を飲み干した。

…我ながら捻た考えだよね。自覚はしてるんだけど、どうも自分の考え方は真っ直ぐになってくれない。

「神様のことで争いが起きたと言つていましたが、それは本当に自分の信仰する神を信じているからなのではないですか？」

それって自分の神が一番正しい、って考えなのかな。ある特定の人物からしたらそうかもしない。

けど、私が言いたいのはそんなことじやなかつた。

『どの神がそこに在るのかを争つて戦うことは、敬虔な信者の行いかもしません。でも、私の中ではその考え方は違うんです。

その神が真に存在するのであれば、そのことで争い合つて、自分の所為で人間が死ぬことなんてないと思います。

もしいても確認もできない存在。ならばどうしてその人のために多くの命が奪われるのを黙つて見ていられるのでしょうか?』

真っ直ぐレークさんを見つめて言うと、右隣から盛大なため息。宰相様は見た目よりも、本当はもっと若いのかも知れない。私みたいな統制のとれないバカがいるから、心労で髪が白くなつたのかも。

…』苦労様です。

「もしも△最後の乙女△ならば、隨分と変わつた考え方だな。」

あ、ため息ついたのはその所為?自分でも変わつてるのは自負してるけど、そこは個性つてことにしておいて欲しいね、うん。

『まだそうと決まつた訳ではありませんよ。それと、もう一つ申し上げておきますと、私のいた世界では、科学が非常に進んでいます。その結果、人間は猿が進化したものです。

神が造つたと言われる人間が、実は環境に合わせて、時を重ねて優秀になつたつてことです。

この進化論は、神を崇拜している者たちからすれば、信じられな

いものなのでしょうが、事実、証明されています。』

ゆつくりと立ち上がり、お茶をみんなのカップに注いでいく。自分の席に着くと、またお茶を貰ます為に息を吹きかけた。

「ネイさんは大人しくて柔らかい空気を持っているのに、意外と意思がお強いのですね。』

…褒め言葉として受け取つていいのかな？

だんだんレークさんの笑顔が胡散臭く見えてきた。遠まわしに大人しく従つてゐよ、つて言われてる気がする。

『私、性悪なんですよ。だから、猫を被るのも得意ですし、人を言ひ負かすことに何の負い目も感じていませんしね。』

ヒツヒツ笑つてそう言つと、宰相様はまた笑いだした。

「これはネイの勝ちだな。ますます『氣にいつた。』

ますます『氣に入られた？宰相様の判断基準が分かりません。

『私の世界では、一人ひとりの意志が尊重されます。言論の自由だって、思想の自由だってあります。女性に対する差別もありません。

もしかしたら、私のいた今の社会は女性の方が強いのかも。』

おじいちゃんとおばあちゃんを見たつてそつだ。かかあ天下が発生してますもん。おじいちゃんつてば、完全に尻に敷かれてる。

それよりも、ここから変える方法つてあるのかな。これからビックリちやうんでしょう。

ため息を零した直後、ここで急に空気が打つて変わつて、意氣消沈気味にレークさんが話しだした。

「あと一月ほどで鏡神祭なので、興味深いネイさんのお話を聞きた来る」ことができません。」

あら、せっかくの知り合いに会えなくなるの？ そうでなくとも三人しか知ってる人いないし、部屋から出られないのに。あ、今日もう一人増えたんだっけ。

がつかりしていると、不思議そうな顔で見られる。何でもないって答えたけどね。

『テレビの話はもうしばらくお預けですね。次は上手く説明できるようになおきます。』

手をグーにして力む。脱・説明下手人間！

それにしても。

『これから一ヶ月も喋る人がいないのかあ…』

みんながいるのも忘れて独り言ぢる。何か役に立てる?ことないかな?いや、ここから出たらいろいろ大変だろ?し。

でも、バレない形で自由に歩き回れたから…

「…思いついた！」

『クーンさん…』

思い立つたら即行動派の私は、すぐさまクーンさんに飛びつく。もつ、噛み付かんばかりの勢いでまくし立てるように言った。

『女中のお仕事をさせてください…』

そこにいた三人が固まってしまった。とりあえず、どんな返事が来るかワクワクして待つてると、がっくりとしているお人たち。

どうこうひひひや？

一人理解できずに首を捻る。それを分かつてくれたのが、クーンさんは代表になつて話してくれた。

「…最後の二女」かもしれないネイに、そんなことはせせられない。

「

なるべそ…なんてこいつた！

せつかいいい案だと思ったのに、どうやら採用されないらしい。でも、これができるとなると、本当に一人ぼっちで一ヶ月過ごすことになっちゃう。

それに、こんなお姫様みたいな生活、心苦しくて仕方ないんだ。

『そこを何とかなりませんか？働く者食つべからず、とも言いますし、こんなに何もしない生活なんて、あり得ません。』

私の意見が一理あるのか、三人は顔を見合させて困つている。

「もうひと押し、だね。さつき提言したように、私の意志は強いんですから！」

『もし私がく最後の乙女へであつてもなくとも、これから先、元の世界に戻れる保証はありません。

どう転んでも、いざれは独り立ちするべきですし、こう言つ籠の鳥になつたようなお嬢様生活なんて、私の性質には合わないです。』

女中の仕事を覚えれば、自分のことは自分でできるようになる。

それに、住む所を探せるし、もしもお給金も貰えれば何もかもこの暮らしに合わせていけるかもしれない。

だから、曲げる訳にはいかないの。

そう思いじつと三人の顔を見つめる。まず降りたのは宰相様だった。

「ひづてのことだし、何せ誰とも会わずに一月もこの部屋から出ぬな、とは言えんだろう。」

宰相様つたら話が分かるー！

つて、抱きつきたい気分だつたけど、そんな空氣じゃないことは

重々承知。だから、我慢した。

その言葉を聞いてレークさんは。

「仕方ないですね。私が話相手に慣れないのは悔やまれますが。」

そう言った。

すぐさま反応してクーンさんは言葉を遮つたが、一人の重い視線にとまつた陥落。

承知をしてくれた。

宰相さま、登場 その3

「ネイ、条件を付けても良いか?」

そうキタか。どうやら心配症であるらしいクーンさんは、簡単に野放しにはしてくれないみたい。逃げたりしないのに。

でも、条件を飲まずに自由を失つたら嫌だから、顔色を窺いながら小さく頷く。

それにホッとしたような表情を浮かべて話出した。

「宰相殿が俺のじゅらかの専属の女中として働く」ひだ。

「うか。いろいろと知らない事だらけだもんね。

妙に納得しながら、了解したことを告げる。でも、話はそれだけじや終わってはくれなかつた。

「お前の専属でいいじゃないか。ネイ、ここに働き過ぎだと注意する役目を承つてくれんか?」

やつぱり。他の人から見てもクーンさんは働き過ぎつてくらい働いてるんだ…

宰相様はきつとクーンさん这件事を心配してゐるんだね。レークさんだつたらこひはいかない。クーンに言つくるめられちやつだらつから。

『了解いたしました。』

立ちあがつて前で緩く手を重ね、綺麗にお辞儀をして見せた。最初の時みたいに、みんなは驚いた顔。

今日はこんな顔見てばつかだな。

なんて一人暢気にそう思つた。

「ネイ、お前はどうで覚えてきたんだ？先程もどこの令嬢のようだつたし、今もその気品とは完全に消えきつていないが、女帝のよひにお辞儀をして見せた。

不思議でしようがない。」

そんなこと言われても、記憶にないんだけど。でも、強いて言つなら。

『ドラマとか映画の影響かも…』

この弦を理解できる人はいなかつた。三者三様、さまざまな顔をしている。

「それは、なんだ？」

簡単に説明、できない……どうやっても無理だよ。私、説明下手だもん。

…うーん。困つたぞえ。

『先程レークさんは分かってくれましたが、私のいた国では機械がとても発達しているんです。“テレビ”と言つものがありまして、田に見えているような映像を映し出す機会があります。

レークさんは分かってくれましたが、おそらく鏡盆に映つていてるのを見る感じだと思つんです。

そのテレビには、たくさんの物が映し出されます。その中の一つがドラマです。ドラマとは、劇場で見られるものを何回かに分けて楽しむものです。

映画とは、それ専用の映し出す写映機を使い、大きな白い布にそれを映して見ます。例えば、ドラマが1時間を一回の物とすると、10回ほど放送して話が完結することと、映画は1時間ほどで一つのお話が完結することに違いがあります。』

たぶん、あつてると思つんだけど。

大体の感じで伝えてみたから、かなり内容的には不安になる。

どうも英語は伝わらないみたいだから、スクリーンとか使えなくて困ったけど、これが私の限界です！

…直訳して書つてじやないけど、や。

「何となくは理解できた。ネイのいた世界は文化が発展しているようだな。』

優しさに涙が出そづ。

クーンさん、明らかに眉間にしわが寄つて、ちょっとしたがらがつてます、つて顔してるのに。

『はい、ものす』べ。不便な事はありませんし、逆に手が掛からなさ過ぎて人がダメになつている様な気がしますが。』

「まだ便利な事があるんですか？！例えばどんなものがあるので……」「レーク。」

有り難い。

流石に急なテンションの高まりがみられるレークさんはここ数日で、あのアホ神くらい厄介だつて分かったから。

見兼ねて止めに入つてくれたクーンさんにまた感謝した。

「詳しい話を聞くのは、事が無事に過ぎ去つてからだ。とつあえず、あと一月はネイのことを鏡神祭があるから、といまかすことはできるだろうが、問題はその後だ。」

…確かに。ひとまずこの状況から脱することができただけいいけど、肝心の問題を後回しにしただけだつて気付いた。

「明日の朝はゆつくりしろ。ミコアにすべて任せておくから、何食わぬ顔をして俺の執務室へ来い。」

そう念押しをすると、忙しそうに去つて行つた。

ですよね。だって、私のいる客室にくるのはいつも夜遅く。かつとそれも一日中、根詰めて働いてから。

なのに余計な事で時間を取りちやつたから、今日はもつと遅く元へ遅れてしまうから、今度はもうと遅くなるんだろうなあ。倒れなきやいいけど。

「そう書いとならば、あとまお前たちに任せた。とにかく、わかつ一度考える」ともあるだろうから、また訪れる。

あいつの世話をネイに任せた。頼んだが。

やうやうと、宰相様も足早に去つて行つた。

みんな忙しい人たちなんだろうね。私なんかに構わなくてもいいのよ。って、そんな訳にもいかないか。

えらい話になつてしまつてしまつしね。

レークさんもビルかへ行くだろうから、一人でボーッとしてようかなあ。つて思ったのに。レークさんは立上がりるとわざわざ、地球のことを聞いて止まない。

忙しいんじやなかつたの、つて聞いたり、明日から頑張るからいいんだつて。

あんた、それ、職務怠慢つてやつじやないっすか。しつかり働くつよ。…私が言えたことじやないがど。

夕食を一緒に摂り、それが終わってもレークさんは興味があることをひたすらに聞いて行った。

クーンさんが来た時にはぐつたりしてたのは無理もない。

「…疲れたのか？」

それはクーンさんじゃない。顔色だって悪いのに、私の心配してる場合じゃないよ。

『タージ飯は食べましたか？』

少し、と返ってきた答えに不安になる。それに、やつぱり働き過ぎだつて思った。

私は、確実に負担になつてゐる。明日から、しつかり働いて、クーンさんに少しでも楽してもらわなくちゃ。一人でガツツポーズをする。

髪を拭いてくれているクーンさんは見られずに済んだ。

『あんまり、無理しないで下さいね。クーンさんが倒れちゃつたら、心配になつて私が倒れちゃいますから。』

真剣にそう言つたのに、なんだそれ、と咳いて喉の辺りで小さく笑われた。今日はいつもよりも遅い時間に來たから、本当に申し訳ないと思つてる。

だから心配したのに。なんで笑われたんだろう。いや、もしかしたら私が何か言葉を間違えたのかもしれない。

「ネイが倒れたら誰が倒れた俺の世話をするんだ? 明日から俺の専属になるんだろう。」

あ、そっか。主の世話もせずに隣で倒れてるなんて、女中失格じやん。…私、ホント馬鹿。

いや、でも、それくらい心配してるんだって、いい方向にも取れるよ。ね?とか、誰に訳す訳でもなく、話を振つて見たり。

『お願いですから、『血液循环ださー』。』

女中さんっぽく言つてみたけど、やっぱり映画とかドラマとかの真似でしかない。ミリアに聞いて、しっかり勉強しなくちゃ。

一人物思いに耽つていて、クーンさんの表情が硬くなつたのには気付かなかつた。

「ネイ、みんなの前ではそうして入ればいいが、俺の前では普段通りにしていて欲しい。」

でも、と口を開こうとするとい、すぐ口に遮られる。

「そつちの方が俺の気が休まる。」

ずっと人に敬語を使われてたりとかするから嫌なのかな? クーンさんがそう言うなら、そうしよう。

了解を伝えると、髪はもう乾いていた。今度は櫛を通しててくれる。その時にも話は続いた。

『……どこか、借りられた部屋を探すこと。』

「なに？」

「ひょー低い声が耳元でした。

ゾクッとしたような響きは、何とも言えない艶やかさを持つて
いる。なのに、どこか怖かった。

『いや、だから、えっと……』

田力強いから、余計に怖い。

イケメンは流石に迫力ありますね。って、今は顔見えてないけど。
でも、顔も体格も体型も良いんだもん。もちろん声だって、極上だ。
『女中が城の客室にいるのもおかしいですし、どうなるかじり、一
人立ちしなければいけませんから。』

それもわうだな、と歎ましい声。それでも手は止まらなかつた。

「女中の間はここにいるのは、確かにおかしいな。一円はここにいる
ことは難しい……もうか。ならば、俺の家に来い。

そうすれば夜のこの時間もなくならずには済むからな。』

……なぜわうなる？！

急な話の展開についていけなかつた。

確かに行くあてはないけど、どこか仲介とかで紹介してもらひて、
暮らすつて形にならないの?

なんていう間もなく、意氣揚々とクーンさんは帰つて行つてしまつた。

なんてこつた…

専属女中（メイド）、出勤

「ネイ様、おはようございます！」

『おはよー……』

昨日のことが気になつてあんまり眠れなかつた。顔、最悪だと思ひ。

「あら、疲れなかつたんですか？」

やつぱり…

『顔、そんなに酷い？』

そう聞くと。

「ええ。」

なんて、すぐに返事が来て凹んだ。

自分で聞いておいてなんだけど、ちょっと包み隠して欲しかつたぜ。とか強く思いながらも、脱力した。

「早く顔を洗つて来て下さい。さつと皿が覚めますから。」

返事をすると、バスルームに向かつた。水で軽く顔を洗い、顔を拭う。

鏡に映つた顔は…

『お化け…？』

そんな残念過ぎる私は歯を磨いて、ミリアがいるであろう寝室へ向かった。

「あ、田は覚めましたか？お召し物の準備はできていますよ。」

もう言つてベッドの上に座りあつたのは、簡単に言えばメイド服。

『フリフリ…』

まじで勘弁してほしい。

「お城の女中服は可愛らしこですから、きっとネイ様に似合いますよ。」

うん。…嬉しくないなどね。

それに、こんなに長く着つて…ありえないっしょ。

『ミコアの服の方が可愛いこと理窟。』

そんなんちっちゃな話をミコアに向くはなく。わざと着ると田線で催促され、のうのうと着てみた。

「よくお似合いですわー。」

うそだ！キモいだけだつて！！

『//コア、これいじっちゃんダメ？』

眉だけを綺麗に動かして見せるその様は、訝しげな様子をそのまま表していた。換えはありますけど、といつ言葉を聞いて、ハサミを貸してもらう。

生き生きと刃先を鳴らすと、ちょっとだけ引かれた。

「もしかして……」

そのと一ツ！ふふふ。楽しませていただきまつす

息を大きく吸うと、刃を動かした。

『//コア、ペチコートある？』

もう言つと、少し興味が出てきたのか、渡してくれる。それをおかせてもらつて言つた。でも、こっちの女の子はブーツは履かないらしい。勿体ないよね、可愛いのに。

『編上げのブーツ、履いてもいい？』

こっちの世界に来てから、お願いして茶色の編上げのブーツを履かせてもらつて言つた。でも、こっちの女の子はブーツは履かないらしい。勿体ないよね、可愛いのに。

流石に髪はまとめて、化粧をしてもいい。

完成です！

「いい。すうへいですー。」

そう褒められて私の鼻は高くなる。

スカートは足首まであつてウザつたかったから、膝が見えるか隠れるかの所まで切つた。そして編上げブーツ。肌がたくさん見えるのはダメらしいから、ちょっと緩めの靴下をはいて、極力見せないようになした。

ゴスロリに近くなつたけど、足首まであるよつマジ。これで大分動きやすくなつた。

「可愛らじいですけど、せつと上方々が見たらい憤慨なさるわね。」

『別に怒られてもいいよ。自分がいた国とは文化が違つんだって言えばいいんだから。』

あ、でも、そうするとクーンさんに迷惑かけりやつかなあ。』

セニが一番のポイントだよね。

でも、この世界の服は本当にあり得ない。動きやすさなんて贋無。確かに地球の衣服の文化は露出が激し過ぎるかもしねいけど、こはいくらなんでも布が多過ぎだ。

私だけ足を出したがらない女子高生だったけど、流石に膝は出でたもん。ま、このじゅそれを配慮して膝も出でないんだけどね。

これでも譲歩した方だつて。それに、何だつたらパンツ履いて仕事したつていい。いい加減、ジーパン履きたいんだよね…

ズボンは男の人しか履いちゃいけないらしいから、当分はムリだ
うひ。

「あら、こんな時間！ネイ様、クーン魔道師の所へ急ぎましょ。

そう言われて、少し戸惑つた。カスタム女中服のままだつたから。

でも、面倒だからいつか。

なんて、ミリアが忘れてるみたいだから、しめたもんだと黙つて黙つて着いて行つた。

「クーン魔道師様、ネイ様をお連れしました。」

ほー……でかい部屋。

ノックをして開いた先には机が一つ。それしかなかつた。

そこに着いて仕事をしている様子のクーンさんは、切りがいいとここまで行くと顔を上げる。

それからちよつと驚いた顔をした。それに気づいたミリアははつとして私を見る。それからやつちまつたつて顔をしていて面白かつた。

…睨まれたからすぐに止めたけどね。

「随分とこじつたようだな。」

はい、申し訳ありません。とか謝って見たり。でも、実際は口だけで、反省なんてしてないけど。てゆーか、部屋にいた時だってこれくらいの丈だったし、誰にも文句は言われなかつたもん。

気にするほゞじやないと思つただけど…

『これ、そんなに変ですか？』

裾をちゅうと上にあげてそつ聞くと、田のやり場に困るから下ろせ、と言われる始末。今さらだけビ、ijiの文化とは合はない気がする。

「似合つてゐる。まあ、それでもいいだらア。」

助かつた。長い丈だと転んじやうだらアしね。怪我だけは勘弁つてなことで。

「仕事の仕方はミリアに聞けば大抵わかるだらア。それに、俺はあまり世話が掛からないだろうから、そこに困ってくれるだけでいい。」

それだけ言わると、私はミリアに続いて部屋を後にした。

城は迷路みたいになつてゐる。しつかり暗記しないとまずい。道を覚えがてらに、それじゃ私の意味がないんじやない、ってミリアに聞いたら、それだけで十分すぎるんだつて言われた。

「これは私から話せることじやありません。しかしながら、宰相様に少しばは言われたでしょ？」

クーン魔道師はこの城では厄介な立場に晒ます。仕事をし過ぎないようにネイ様が注意して下さるだけで十分ですよ。」

なるほど。みんなクーンさんが働き過ぎだつて思つてる訳ね。

「ワーカホリック?いや、働いてないと落ち着かない訳でもなさそうだし。何か理由があるんだろうねえ。」

話してもうえない限り、私には理解できない。早く話して欲しいなんて思つていると、女中部屋に着いた。

ミコアはここで着替えてくるらしい。ここから、調理場や洗濯場など、城内を案内してもらつた。

それにしても広すぞ…

ミコアはもう慣れたつて言つてたけど、私は当分無理そうだ。たいていの所を案内してもらって部屋に戻ると、第一城人発見。

一瞬、きょととした表情をされて、言わんことがよく分かつた。

あ、やば。

どう考へても視線は私のスカート。早速怒られると思つたら、おばさんは豪快に笑い出した。

「あんた、クーン魔道師様に聞いた通りの子だねえ。」

クーンさん、何か余計な事言つた?—自己紹介でもしますかね。

恐る恐る口を開いた。

『お初にお目にかかります。クーン魔道師様の専属女中となりました、ネイと申します。

以後お見知りおきを。』

昨日のよう手を軽く前で組み、丁寧にお辞儀をしてみると、今度は目を丸くしていた。忙しい人だ。

「奇抜な格好をしてると思つたら、教養があるみたいだねえ。」

あ、そこですか。大概の人に教養があることを驚かれるのはビックリ。やっぱり幼く見えるのかな？

「私は女官長のマーサ・マキンズ。たいていのことは私が管理している。それにしてもその格好は？」

早速キタ。やつぱり言わなくちゃダメだよねー。

『私のいた国では、足首までスカートがあることは滅多にありません。それに、あれだけ長い丈だと、転んでしまってうだつたので。』

すみません、と頭を下げるが、また笑い声が聞こえた。

「あんまり気にすることはないさ。でも、こここの連中にはそれをあまり良くないと思うものもいるだろ。それでなくても、『あの』クーン魔道師の専属なんだから、目をつけられるかもしれない。

怪我をしなこうつに気をつけな。」

そろそろきな臭くなってきた。そんなにクーンさんは大変な人なのかな。

「まあ、その格好をしていると逆にクーン魔道師の専属だと分かって、そこのお偉いさんに小間使いにされずに済むだろ。」

豪快なおばんと、いや、マーサ女官長と握手をすると、ミコアと一緒に厨房へ向かった。

専属女中（メイド）、出勤 その2

「……」お茶の準備をします。何度もお茶を淹れてるのは見ましたが、正しい入れ方をお教えしますね。」

残念な事に、私は言われてすぐに覚えられるたちじゃない。だからエプロンのポケットからメモ帳とボールペンを出す。

その一つに不思議そうな眼を向けてきたけど、質問されなかつたからあえて答えなかつた。

「おひ、新人さんかい？」

陽気な声。明るくおはよひ、と声をかけられ、私はせつせつと同様に丁寧に挨拶をした。

「ははは。俺にそんなに畏まることはない。お、お譲りちゃん、随分と軽そうな格好じゃねーか。」

はい、キター。本日一回田の服装チェック。

『本日よりクーン魔道師様にお仕えいたします、ネイと申します。

』の格好は動きやすさを重視いたしました。私は人よりどんなぐさいらしく、長いスカートだと、上手く動けないので。これは転ばないための配慮ですので、どうかご勘弁を。』

「……」リア、この方ははどうぞそのお譲さんかい？』

おつと。何か間違えた?

不安になつてミコアを見ると、しおうがない、と言つた様子でため息をついた。呆れられたみたいでちょっと悲しい。

「いえ、新人さんですから、きっと緊張してるんです。」

あ、なるほど。わかつたぞ! さつきのお偉いさん方に使う言葉。ここでは少しだけ丁寧に喋ればいいってわけね。

「そーか、そーか。そんなに緊張することはない。

ここは気取つてる調理場のヤツらじゃないから、安心して何でも聞けばいいさ。

俺はミハエル・コース。みんなにはエルって呼ばれてんだ。ここでコックをしてるから、皿食なんかは注文してくれていいぞ。」

あら、良い人そうで安心。気取つた人だつたらどうしようかと思つた。

さつきのマーサ女官長といい、エルさんといい、優しい人が多そう。なんか、こういうのつてたいていは新人が虐められたりハブられたりするのがオオドウじやない?

あ、ドラマとか本の読み過ぎか。

私はよろしくお願ひします、と書つて、ミコアに連れられてクーンさんのお部屋に戻つた。

ら。大変な事になつてましたよ。

クーンさんが夜中まで仕事してゐる理由が分かつた。

部屋見廻つてみたら、書類の山、山、山…

さつとまで平穏だつたのに、びっくりするくらい人が出入りして
る。

部屋が広い理由はここにアリつてか。

「驚くのはまだ早いです。こんなのはまだマシな方なんですよ。」

ウソつ。いろんなの、仕事つて量じやない。もはや、うーん、そう
！簡単に言つちゃえれば戦争に近い。

クーンさん、必死に書類の山と戦つてるから。

『クーンさんつてド…?』

「なんです、それ？」

『マゾつてこと。苦痛を喜びに感じる人のこと。』

一人で部屋の隅に立ちながら立ち話。

クーンさんが働いてる時に何やつてんだつてお叱りの言葉を得る
かもしれないけど、生憎人がせわしなく動いてるせいで、ミリアは

もつじぱりへ仕事に行けそうになかった。

「もしそうなら、気持ち悪いですね。でも、仕事に関してはさう言えるかもしません。

日常はどうやらかと云いつて違うんですけど……鬪い方で言えば、守るよりも攻めるほうが得意だとお聞きしました。」

『うつてことか…』

今度は不思議そつにひの意味を聞かれて、私は丁寧に説明した。

「ネイ様のお国は不思議な事や物、文化がありますね。ここまで知らない事だけだと、むしろ面白っこです。」

「そう、なのかな。まあ、確かにほこの文化は驚くことが多い。それに不便なことだけだし。」

今のところ、電気がないのが一番痛いことだよね。エジソンは偉い人だよ、ホント。

「では、私は仕事に戻ります。お毎時になりましたらお迎えに上がりますね。」

丁寧に礼をして、出て行つてしまつた。一段落した部屋は静かで、書類を捲く音と、ペンの音だけが響く。

「いや、話しかけられない。」

「ネイ。」

「つおー。クーンさんの方から話しかけてきた。

何でしちう、と言いつて、手は休まず、顔を上げないまま言葉を続ける。

「同じ職場の人間にはもう会ったか?」

こんな時まで私のことなんか気にしない。ものすごい仕事の量なのに…

『はい、マーサ女官長とヒルさんは会話を交わしました。お一人ともとてもいい人です。』

「そうか。あの二人に気に入られたのなら大丈夫だな。」

そうなのか?いや、クーンさんが言つならそうなんだろう。あの二人はどう見てもリーダー気質だったし。

『あの、クーンさん。余計なことかもしぬせんが、これ、手伝えませんか?』

國家の機密書類だとたまといと思つけど、そうでなければ何か手があるかもしれない。

『さつき行き来している人たちの話が聞こえていたんですが、ここには省がたくさんあるみたいなのに、書類は皆さんバラバラに置いて行かれました。』

それを分類する「へりこなひ手伝ふ」と思つたです。』

やがて、さつき実はちよつとイラッとした。だつて、どこの省の誰かは名乗るのに、どうしてそのまま書類を重ねてくんだつて。誰がどいつ考へても、効率的じやない。

「…ネイがやることじやない。」

その突き放された冷たい口調。こんな重苦しき空氣を纏っているクーンさん、初めて見た。怖い。

けど、私の心配ばかりしてゐる人には言われたくない。

『私はクーンさんが私を心配してくれるよつて、クーンさんのことを心配してゐるんです。どつか、ほんのちょっとしか手伝えませんが、やらせて下さい。』

お願いします、と付け加えて頭を下げる。必死の懇願だつた。

「ネイ、その“お願い”はやるこ。」

苦虫をかみつぶしたよつた顔。どこかざるかつたらしい。よく分かんないけど。

『じゃあ、手伝わせてくれるんですね?』

せうふつと、小さく泣々と嘆いた感じだけど、了解の返事が戻つてきた。

やつたー、と喜んで置いてから疑問が一つ。

私、こつちの字読めるのかな?って、かなり根本的な事を今さら
!アホ過ぎる…

恐る恐るゆづくり書類を手にしてみると。

『あれ?』

私の眩さにびりした、と心配そうな声がした。

『読める…』

書いてある字は明らかに日本語じゃないのに、普通に読めた。疑
問だらけ。言葉も分かるし、字も読める。違う世界に居るはずなの
に、じんなのってアリ?

「大丈夫か?」

そう聞かれて現在に帰ってきた。

呆けてる場合じゃない!少しでもクーンさんの仕事の負担がなく
なるように手伝わなくちゃ。

うしー両親を叩いて気合を入れる。

それから女中部屋に戻った。

ちなみに、廊下は一切走ってません。このスカートの丈でさえ怪

しげな顔されるのに、走つて置いてお転婆だと思われたらなお悪い印象しか与えかねないもん。

でも、最後の方は早足になつて、女中部屋に飛び込んだ。

お田端の人がいて安心。すぐに声をかけた。

『マーサ女官長様。』

「マーサでいいよ、ネイ。どうしたんだい?』

飛び込んできた私に驚きながらも、普通に対応してくれた。流石、大人!

『少し大きめの机をお借りしたいのですが、どこかに宛はありますか?』

クーンさんの机に積み重ねてある書類を整理するためだと話すと、着いて来るよつに言われ、また城の中を歩く羽目になつた。

やつぱり覚えられそうもない…

専属女中（メイド）、出動 その3

「久しいね、リュクス。」

着いたのはお城のすぐ近いところにあるスポーツの練習場みたいなどこ。でも、そこで繰り広げられていたのはもちろん陸上競技なんかじゃなくて、見るも見事な剣技だった。

「あれ、マーサさんじゃないですか。どうしたんです？」

どうやら一人は知り合いらしい。赤毛の青年はそばかすのある頬を上げ、無邪気に笑っていた。

随分と爽やかそうな人。私はじつと見つめてしまった。

「あれ、後ろの人は…初めて見る顔だね。」

私の視線が熱過ぎたのか、話題に上がってしまった。早いところいたいのにい。

「この娘は今日からクーン魔道師の専属の女中になつたんだ。ネイだよ。ネイ、こつちは騎士団第一軍長官のリュクス。クーン魔道師の部下さ。」

ほー。若いのに立場的には高い所にいる人なんだ。さすが、こう

いう仕事だと実力主義なんだね。

『初めまして。』

そう言つとこやかな挨拶の返答。それからお約束になつた私の格好の説明を終えて、机の件に話は移つた。

「と言う訳で、クーン魔道師の部屋に運んで欲しいんだよ。

お願ひできるかい?」

マーサさんの話を聞いたリュクスさんは、嫌がるどころか目をものすごい勢いで輝かせた。

…犬?

耳と盛大に振られてる尻尾が見えた気がして目を擦つてみると、そこにそれは存在してなかつた。

でも、なんかリュクスさんって犬っぽいなあ。

「お任せ下さい! そんなお願ひならいつでも聞きますよ。」

誰かの名前を呼ぶと、リュクスさんはその人に事を説明する。その人もやっぱり嬉しそうにしていた。

クーンさん、みんなに人気なのかな。イケメンは男女問わず人気が高い、って心のノートにメモつておいた。

場面は変わりまして、現在は私はお城の廊下を、机を運んでくれている騎士団の方と歩いております。一人は人懐っこいらしく、奇抜な私も簡単に打ち解けていた。

クーンさんは騎士団の長官だって聞いてたのに、言われるまで記憶の奥底に仕舞つてあつたみたい。完全に忘れてた。

「クーン魔道師は俺たちの中じゃ人気が高いんだよ。年寄りのお偉い方には嫌われているが、貴族の娘たちの間でも人気が高いな。」

ああ、それは言われなくとも分かる。

『あの容姿ですから、若い娘たちは放つておかないでしょうね。』

きつとアイドル状態。顔、スタイル、完璧。てゆーか、何頭身ですか？足、長いよねえ。

私は…うん、見なかつたことにじょーかな。

残念過ぎる私の容姿の説明はバスと行きますよ。

「おや、ネイは興味ないのかい？」

からかいを含んでるその瞳には、わざと空氣を読まずに一刀両断。

私はやつぱりこれは関係しないで、傍聴で話を聞いてる役が性に呪つてゐる。

『私は、クーン魔道師さまに命を助けていただいたんです。ですか
ら、その恩を返すために誠心誠意お世話をせて頂くまでですよ。』

笑顔でやつぱり、やつぱり意味じやないんだけどなあ、なんて
咳きが聞こえた。

わざとですよ、わざと。からかいに対することを言わなかつただ
けで、わざきの私は私の本心だしね。

それ以外は何も口を開きません！

「それにしても、クーン魔道師にお手にかかるのはいつも振りかな
」

名前を聞き逃した騎士さんは熱っぽくやつぱり言った。本当にクーン
さんことを慕つてるんだって感じる。

それにしても、会うの久しぶりなんだ。あんだけテスクワーグし
てれば当たり前つちや、当たり前か。

「今の地位に就いてからは練習場にいらしてないんだ。ネイは見た
ことないかも知れないけど、魔術だけでなく、あのお方の剣は迫力
があるんだよ。」

ほー。それは一度お手にかかりたい。

現代の地球じゃ本物の剣なんて闘う道具じやないだらうし、日本

で持つてたら銃刀法違反で即逮捕だもんね。

『一度でいいから見てみたいですね。』

さつきとあの格好良さが引き立つちゃうんだろーなあ。田の保養を通り越して、毒になるはず。その時には卒倒しないように『気をつけなきや。』

「俺は一度もあの人に勝つことがないから、久しぶりに是非手合わせ願いたいなあ。」

リュクスさんの田は、さつきとは違つ輝きを持っていた。何て言うか、ギラギラしてる。

勝ちたまつて思つてるのか、闘いに飢えているのか。どっちにしろ、今の私にはまだ非現実的な話だ。

…およよ？また人が出入りしてゐみたい。

朝ほどではないけど、何人もの人が書類を抱えてクーンさんのお部屋に入つて行く。出でくる人はみんな何も持つていなかつた。

つてことは、全部あの部屋に収まつてゐるのか。

…量、多過ぎませんか？いくらなんでも仕事量がありすぎ。あんなことずっとやつてたら、クーンさんそろそろ倒れるよ。

「中に運び入れるのか？」

縦にゅつくり頷く。すると、ちょっとどじてゐる、と言われ、机を

そこに置いた。

「サイモン、中の調度いい所に」の魔法陣を置いてくれ。」

サイモンさんって言つんだね。

「ここで名前をよつやく知ることができた人、サイモンさんは、リュクスさんが持っていた紙を持って中へ入つて行つた。

詳しいことは後でクーンさんに聞こいつ。魔法なんて空想上の物が実在してゐるだけで興味津々。だけど、ここでは当たり前らしいから、変な反応を見せたら疑問に思われる可能性大。

置いて来ました、と帰つて来たサイモンさんが言つと、お礼を述べてからリュクスさんは右手を構えた。

どんな方法を使うのかと思つと。

「 転送 」

そう言つたと同時に指を鳴らした。

案外シンプル。なんやらかんやら、呪文みたいなものは掛けないみたい。少しだけ夢が削がれた気がした。

ほら、杖を使つ、とか。長い呪文を唱える、とか。

某ファンタジー映画、みたいなのをイメージしてたから、ちょっと残念だった。

でも、やつぱり驚く。田の前に立つたはずの机とその上に乗せられた魔法陣の紙は、あつたはずの私の目の前から「く自然に風景に馴染んで消えていくかのようにスッと見えなくなつたから。

『リュクス様も魔道師だったのですね。』

本当、ありえない世界だよ。とんだファンタジーだけの所に来ちゃつてたみたい。

「様付けなんてするなよ。柄に合わない。」

あらら、照れてる?

リュクスさんの顔はその髪ほどではないけど、赤くなつていた。照れてるかどうかを尋ねると、照れてない、何て頑固な返事。そんなの肯定してるもんだよ。

面白い人はつけーん!

私から逃げるかのようにクーンさんに挨拶に行くと告げると足早に部屋に入り込んで行つた。慌ててその後を追つ。

私とリュクスさんが廊下で立ち話をしている間に一段落ついたのか、人通りはまた途絶えていた。

中に入るとサイモンさんがもうクーンさんと話している。本当に久々だつたみたいで、少し分かりにくいけど、クーンさんは喜んでるみたいだつた。

「クーンさん!」

あ、犬が飛びついて行った。やっぱり全力で振られる尻尾が見える。

ホント、懷いて…いや、慕ってるんだねえ。

「ネイ、机を運んできたのか？」

はい、と返事をして、お茶のワゴンに近づく。手を動かす前に謝罪を入れた。

『勝手な事だとは思いましたが、このままではうちらが書類で溢れてしまうと思いましたので。

しかし、これからはクーン魔道師さまにお伺いを立ててからいたします。』

丁寧に礼。それからお茶を淹れはじめた。

さつきの手順を思い出す。ミリアに言われた通りに、ミリアに言われた通りに… 心の中で何度もそう呴いて、お湯を注ぎ、蒸らし時間を計るために砂時計をひっくり返した。

本当に女中だったんだ、なんて呴いてリュクスさんの言葉は聞こえなかつたフリをしどきましたよ。

温めたカップを三つ用意して、砂時計の中の砂が完全に落ち切ったタイミングを見計らってお茶を注ぐ。それが終わるとトレーにそれを乗せて、丁寧に三人の所まで持つていった。

うん、置くところがない。

当たり前だけど、クーンさんの机の上は書類だらけ。

「とにかくすぐに役立つとは、ね。

私は運んで来たばかりの机の上にカツプを二つ並べた。有難う、と言われると嬉しくて笑顔が零れる。

『初めて淹れたので、味の保証はできませんが、どうぞお飲み下さいませ。』

「ネイも一緒に飲もう。」

味の感想を待っていると、クーンさんは唐突にそう言った。

いや、それはいかんでしょうが！

『私はクーン魔道師さまの女中なのですから、それは困ります。』

初仕事のウキウキほっぺやう。

リュクスさんたちの机の前でなんつーことを抜かしてんのー

うひたえる私、主張を搖るがさないクーンさん。一人のやり取りを二人は目を丸くして見ていた。のにも拘らず。

「“魔道師さま”なんて呼び方は外だけでいい。少なくとも俺に直接そういうのはやめてくれ。」

もー！！！無理難題ばっか、押し付けないでよ。ってか、その二人、助けてー。

なんて手を伸ばそうとしたら、クーンさんの妨げによつてそれは達成されなかつた。

専属女中（メイド）、出勤 やの4

「クーンさんとネイはそういう関係なのか？」

「コクスをぐつ、訳の分からん事情つなーでゆーか、クーンさんは留定くらこして！」

「ネイは賊に襲われていたところを俺が助けたからと、身の回りの世話をすると云つて聞かないんだ。」

何それ〜。半分以上嘘じやないですか！

とは言えず。私はぐつと押し黙つた。

「確かに身のこなしは貴族令嬢のそれですね。もしかして、そうなのですか？」

サイモンさん、話を膨らませないで。そして、そりが私に弁解の余地を！

「それは…」

クーンさんはここで黙つて私を見る。その所為で視線は私に集まつた。ひじょーに居心地が悪い。

「ネイ、そりなのか？」

リュクスさん、そんなの知ったこっちゃないですよ。大体から言つて全部初耳だし。

言葉に困つて黙つたままの私。こんな微妙な空氣の中、口を開く勇気なんて無い、って思ったのは四人中三人。

空氣なんでお構いなしに口を開いたのは、さつきまで見えてた尻尾（比喩）を下しているリュクスさんだった。

「まさか、賊に襲われたのが原因で記憶を失つたのか……？」

急な展開に耳を疑う。眉を顰めて。

『…はい？』

なんていつた所為で勘違いはさらに続いてしまつた。

私のおバカー！

「悪かつたな。思い出せないのに無理に聞き出そうとして。」

泣いた！なんてこつた。大の男が泣いてますよ。

『あの…「いいんだ！」

はひ？今ので伝わったはず…

「何も言わなくていいんだよ。」

…ないよね」。

『リュクスさん、何か勘違いしてるんじや…』

ガシッと肩を掴まれて言葉を遮られる。思わず飛び上がったのは無理もなかつた。

「辛いことが分からぬ状況下にいるんだな。クーンさん、俺、ネイみたいな娘を増やさないためにも鍛錬を行い、見回りをしてきますっ！」

…

行つちやつたよ。

私の手と口はリュクスさんを止めようとしたところで固まつていた。

「ネイ、何があればいつでも相談に乗る。では、私もこれで失礼します。」

サイモンさんは礼儀正しく挨拶すると、やっぱり勘違いしたまま行つてしまつた。

伸ばしていた手を空中から力無く下ろす。

それから、さつきから聞こえてくる、聞き慣れたクーンさんの喉

の奥で笑う小さな声がする方を睨みつけた。

『…クーンさん、遊びましたね?』

笑つたところでそれは確定してた。大体、意味深に黙りこくれた時点で可笑しいとは思つてたんだよね。

「…すまない。あいつらと会うのは久しぶりだから、つい懐かしくなつてな。」

貴方はいつもそんなことして部下をからかつてたんですか! 私なんていい餌にされちゃいましたよ。

「リュクスの勘違い癖は治らないみたいだな。」

そう言つてまた笑つた。

『リュクスさん、いつもあんな感じなんですね…』

こんなこと言つたらダメだろ? けど、会つ度に疲れそう。それにしても、この世界に来てから、必ずつて言つていいほど最初は話を聞いてくれない人が多い。

「驚いただろ? 少し前までは毎日会つていたから何とも思わなかつたが、久しぶりに見ると面白かったよ。」

明るい微笑みを浮かべたかと思ひきや、いきなり陰つた。それが何だか自嘲気味な笑顔に見える。

『クーンさん?』

顔を覗き込むと、また笑顔を作りつつしてゐる。私は咄嗟にそんなの嫌だつて思つて、やめてください、と口にした。

『無理に笑わないで。そつちの方が見てて不安だよ。

私、クーンさんの手伝い頑張るからー協力し合えばきっとリュクスさんたちと会う時間ができるよ。』

ぐつとスカートの裾を握つていた。皺ができるだらうから、きっと後でミリアに怒られるだらうなあ。

なんて、今はそんなこと気にしてゐる場合じやなかつた。

「普段の口調はそつちなのか？」

はつー勢い余つてタメ口にてー

『じめんなさい。』

田上の人には敬わなくちゃ。日本人として、これ、常識なり。

「いや、気にしていない。むしろ、いつもその口調であつて欲しいくらいだ。」

それはできませぬ故。一重に辞退を申し出た。

『リュクスさん、言つてました。クーンさんと手合わせしたいって。クーンさんもその顔だとひとつとやつと思つてますよね?』

ぐつと押し黙つた。つてことは凶星なんだね。勝手にそつ解釈して話を進めた。

『クーンさんは騎士団の方々から人気があるみたいですし、貴族の娘さんたちからも人気があるつて聞きました。そんな人が部屋に籠つてるなんて、勿体ないですよ。』

「リュクスのやつ、余計な事を。」

ありや、情報源がばれてる。聞いたやいけなかつたみたいだから、リュクスさんは後で怒られてください。

『私もクーンさんがリュクスさんと手合わせしてるとこ、見てみたないです。』

そう言ひつと一瞬動きが止まる。不思議に思つていると、手が伸びて来て…

「失礼します！」

「な、なんだ！」

さやーーし、心臓ひっくり返る！

その手が私に触れる寸前にドアが開かれた。

「書類のお届に上がつただけなのですが…」

私は急いでカップを下げる。クーンさんも何もなかつたかのようにな、受け答えをしていた。

顔、あつつい。

クーンさんの目があんまりにも真剣だったから。目、逸らせなかつた。

あーっ、もう一考えるとまた顔が赤くなるでしょーが。

自分を叱責して、ワゴンを端に寄せだから、クーンさんのところへ向かつた。

『クーンさんって、この書類をチェックするだけが仕事じゃないですかね?』

「ああ。法律改定の嘆願書や、城下の制度についての様々な書類がありますよ。」

各省」といふ内容は異なるが、認可して議会へ行くものは宰相のところ、不可の場合はその省へと逆戻り。

その場合、添削をして戻している。必要があればそこまで行って、説明を行っている。」

「ノーッ、全部?うひゃー、クーンさんすい。私なら一日も持たないと思う。しかも全部一人でやってるみたいだし、天才、いや秀才さんなんだねえ。

これ、私なんかが手伝えるのかな?

つて、ダメダメー やるつて決めたんだから、やる前から呑込みし

てちやいかんでしょう。

『机の上にある書類はどう』の省のものかはバラバラなんですね?』

聞くところによると、説明をしてくる人がいてそれを聞いてる間に置いてくる人が多いんだって。分類する暇もないらしい。

そもそもつて夜遅くまで仕事してたら、きっと対策を用意する暇も労力もないはず。

女中さんとか従者さんを付ければいいのに、ミリア曰く、クーンさんは周りに人を置くのは監視されてるみたいで嫌らしい。

『まだ手を付けていない書類を分類します。ほとんどは手を付けてないですよね?』

そう尋ねてから、着々と分けていく。省の名前は日本のものと何ら変わりなくて、ちょっと面白かった。

「…ネイは働いていたことがあるのか?」

なかなかの手捌きだったのが意外だったのか、その声はちょっと驚いている。

心外だなあ。

『仕事じゃなくて生徒会の役員をやっていたんですよ。』

分からぬだらうと、生徒会の説明をした。

『…と、まあ、社会に出た時のための訓練ですね。社会の人間関係を教え込むには、学校を一つの組織のよつて見立てて運営するのが、口頭で教えるよりも簡単ですから。

…よし、終了!』

サクサクと仕分け完了。

「早いな。」

お褒めいただき光榮です。はい、次行きましょ、次。他にやることは…

ゴーン、ゴーン、ゴーン…

低い鐘の音。私のやる気になっていた脳は、完全に思考を遮られたり。せっかくやる気になつてたのに。

『これ、なんの鐘なんですか?』

「毎時になつたら鳴るんだ。』

なるほど、お昼休みか。そつ言えば小腹が空いた気がする。

いつもはあの部屋から出られなかつたから、ミリアが運んできてくれてレークさんと一緒に撮つてた。

でも、今日は勝手にしてもいいよね。よく分からないうから、ミリ

アがいぬと想われる女中部屋にいったん戻り。『

『クーンセトはお皿いり飯ばどいかで振るんですか?』

「…いつも食べない。」

はい?今、何とおっしゃった?

私は耳を疑つた。

信じられない言葉が聞こえてきた気がしたけど、気の所為だよね、うん。

なんて思つてもつ一度聞いてみたら、その“まさか”的答えが返ってきた。

『食べない?…いつも?…』

念を押すように聞くと、やつぱり肯定された。

し、信じられない!私なんて美味しい飯のために頑張つてるので。

「そんな時間はないんだ。終わらせるのが遅くなると、胃にも迷惑になる。少しの間も勿体ない。」

なんちゅー男じゃー食べ盛りの20代、それでいいんだろーか。

『…食べる時間がないだけで、食べる気がないわけじゃないんですね?』

「ああ。」

なるほど。これは専属女中の出番ですねー。』主人様のためにも
肌も、一肌も脱ぐ覚悟でござります。

「ネイ、だから俺の」とは気にして食べに行け。』

でも、つい食い下がったのに、クーンさんの意志は固かった。

将来は頑固親父になること間違いないし。『その事、ここに面座
つてやうつかと思つたけど、腹が減つては戦はできぬとも言つま
すし。

闘うことなんてないんだナビ、一時退散と行きましょう。』

『すぐに戻つてきますからー。』

そう直撃して駆けだした。

自分の格好に奇異の目を向けられてるとか、廊下は走っちゃいけないとか関係ない！（いや、関係あるだらう。）

私は我が主のために頑張ります！

『たのもーつ！』

バンッ、と思い切り扉を開けた。そこにはたくさんの女中さんたちが、当たり前だけじこらっしゃいまして。すごい数の視線を集めてしまつた。

やっしちまつたぜ！

知つた顔の方に目を向けると、一人とも頭を押さえていた。

「…ほら、あんたたち…さつあとどい飯食べないと午後の仕事に間に合わないよ。」

その度胸に感服。マーサさんの粋な計らいで何とかそこにいた女中さんたちは私を気にして酷く後ろ髪を引かれてるような感じだったけど、女中部屋から出て行つた。

「もつー…急に飛び込んで来てはダメでしょーっ。

「そうでもない。ネイ様は目立つのか？」

はい、怒られます。

反省？御覧の通り、もちろんしますよ。ほら、ちゃんと正座。

「ユーハ、ミリヤって怒ると怖いんだね。今度からは怒られないよ」と呟をつけなくちゃ。

『アーネンナセイ』

「まあ、いいじゃないか。それにしても数うまい勢いで入つて来たね。

何か用事があつたんじゃないのかい？」

はつ！ そうだつた！

『クーンせさんがこつもお顔を描つてないって叫びじゃないですか！』

せつを思つたんだナゾ、お面はおの詫びに運べば二二。それへり
一の件ばかりの減二一の費用人のがねうつ音がぜあがわうがひき。

「うーん。それを私の口から言つるのはお門違いってヤツだ。

まあ、見たつてことになれば誰の責任にもならないかもね。」「

少し考えるよりは間をとつてから、マーサさんは視線をリリアに向けた。

「ミニア、一緒に行きな。紅茶のワゴンを持ちにクーン魔道師の部屋に、ね。」

マーサさん、好き！

ぱつちりとウインク付きで言われた言葉に感動した。

いつ、ドーンと胸を張つて言われるから、何となく安心できる。「でも！クーン魔道師さんはネイ様に一番知られたくないと思つているのではないですか？」

「でも、も何もないよ。あの子は人に頼らな過ぎるんだ。味方はこんなにもいるのにね。」

大きなため息。Iの時のマーサさんは、まるで母親みたいに見えた。

どうしようもない息子を心配してゐる母親。

…きっと、クーンさんのこと、大切に思つてるんだね。

「私はネイに感謝してるんだ。あの子が自分の傍に人を置くようになつたことだけでも大きな進歩じゃないか。」

なんだか複雑、みたい。ややこしいなあ。知りたいことは教えてもらえないし。変な改定願いなんて山ほどあったし。

Iの政治は大丈夫なのかねえ。

実はさつき、仕分けしながら、いけないとは思つたんだけど、内

容をひりつといね。

ほり、ダメだって思ひことほど反抗的こやつてみたくなるつて言うか。立ち入り禁止つて書いてある所ほど立ち入つてみたくなつちやうつて言つた。

国的重要書類とは分かりつつも、つにつけ見てしまつたわけで。

私、天邪鬼なのがも知れない。

「…わかりました。ネイ様、行きましょう。」

お、ミリアが折れた。流石お母さん的存在のマーサさん。

それにしても。

『同じ仕事してゐるんだし、“様”付けするの止めよー。』

ずっと気になつてたんだよね。

言つタイミング逃してたから今まで言わなかつたけど、私は單なる女中だし、ミリアは女官だよ?立場が上の人に様呼びされちゃう。周りにいる人だつて変に思つよ、きっと。

「それだけはなりません!」

ちえー。

結局言つ合ひになつて、マーサさんから私たちに雷と云つ鐵槌が下されました。

つて」と、話は一時保留。

私とミコトはそのままクーンさんの部屋に向かった。

それはドアを開ける寸前に、聞こえてきた話。冷静なんて言葉を頭からふり飛ばすべしのものだった。

「ほひ、尊の専属とやらはおらんのか。見物に来たと言つて、時間の無駄になってしまったではないか。」

ゆつたり、いや、ねつとつとした纏わり付くような話し方。虫唾が走る。

「申し訳ありません。昼食を摑りに行かせました。」

クーンさんが謝ることないのにーてゆーか、そんな見物する時間があるんだつたら仕事しろよ。

「ほひ。主人を差し置いて昼食に行くとは生意気。とんだ忠誠心だな。」

余計なお世話だ、コノヤロウー

口が悪いかも知んないけど、腹が立つもんは腹が立つ。いや、段々腸が煮え繰り返ってきた気がしてきた。

私は何とか握り拳を作つて耐える。しきりミコトが心配そうな

視線を送つて來た。

「…クーン魔道師さまにひとつでは日常茶飯事のことなのです。ですから、頭にくるとは思いますが、辛抱なさつてください。」

その小声が耳に入つて來た時、思わず手を握り締めるのを忘れていた。

日常茶飯事つて、こんなねちねぢ言われるのが日課になつてゐること? ありえない。

「戯れ事、戯言だと思つて気にしないのが得策です。

あんな肩書きだけで生きている、無能な税金ドロボウ貴族の狸ジジイの言つことなど、気にしなければいいのですよ。

さてと、お耳汚しはいいら辺で終わりにしていただきましょ。」

ただ呆然として部屋の扉の前で立ち尽くしていた。

…ミリアつて毒舌なんだ。

ちょっとのショックとかなりのダメージを受けながら、私はミリアの後に続く。何事も聞いてなかつたみたいに入つてく姿に、もう完敗だ。

「失礼いたします。」

堂々と歩く姿は格好よくて。どうまでも姉さんについて行きます、つて心の中で誓つた。

「宰相様からの伝言でござります。『騎士団員育成法の改正案はまだか』、との催促です。」

はつみみー。二つの間に宰相様と会ったのかなあ。

てゆーか、私、ちょっとあの苦手なんだよね。昨日会った時、若干怖かったし。しかも急に笑い出すから、心臓が何度もびっくりしちゃったんだよね。

「了解した。午後一番に届けるとを伝えてくれ。

お前は今後、午後の仕事に支障が出ないよう、ひるやすみをじごとに当たなくともよい。宰相殿にももう伝え、すぐて休憩をとってくれ。

畏まりました、と言つて、ニアは出て行つてしまつた。

「他人の心配をしている暇などお前にはないはずだが。

それにしても、この女中が尊のお前の専属か？足を曝して、品位が疑われる上に、お前の母親を連想させる。

少し幼い気はするが、顔と身体は中々よいな。もしや愛玩用か？

愛玩用？それは一体何ですか？

訳の分からないことを言つオッサンを睨みつけながら、睨まれてることは確かだと雰囲気から察した。

「…聞き捨てならない事をおっしゃる。それはあなたには関係ない事だ。

それに、その娘は愛玩用などではない。：人を計りかねると、その「ひづ」の身を滅ぼしますよ。」

最後の一言は、私の背筋にも何か寒いものがぞつと来た。つてことは、このオッサンはクーンさんのその迫力を一身に受け取るはずだから、なおさらだらう。

案の定、狸ジジイは顔を真つ青にして、部屋からそれを出で行つた。

「…すまない。」

オッサンが出て行つてからほしゃばらへ、どちらとも口を開けようとしなかつた。

私は詳しい事を聞いていいものか悩んでいたし、クーンさんはきっと私に話そうかどうか迷つてたんだと思つ。

『どうして謝るんですか？』

クーンさんは悪い」と、一つもしていないのに。むしり、謝つて欲しいのは訳の分からない御託を並べて、明らかに私の事を見降ろしてきたあのオッサンだよ。

喋り方がねちつこかつたその人は、イメージ通りの体型だった。

良く言つて恰幅がいい、悪く言つてメタボつてゐる。撫でつけられ

た茶色の髪は、見事なまでの七二三分けで油ギッシュだった。

なんか、失礼だとは思つんだけど。…巨大な豚さんが質のいい服着て歩いてます、って感じ。

『クーンさんは何も悪くない。』

大体から言つて、あのおじさんが訳わからんことばつかつたり言つのが悪い。そんな中途半端だと却つて氣になるつてくらいのややかな情報。

あー、ホント気になるつてのー！

…まあ、聞かないけどねー。あんな顔してちや、聞けない。

せーと。私は『』飯でも食べに行こうかね。

『クーンさん、私は『』飯食べに行つてきます。』

一礼して、お茶のワゴンを押しながら部屋を後退した。ミリアがきつと待つてくれるのはまだから、急がなくちや。

私は走らないうまに急いで、女中部屋に滑り込んだ。

「お帰りなさいませ。」

涼しい顔をして礼をしてくれるミリア。しかし、その裏側はいかに、つて感じ。

せつあぢよつぴり怖かったしねえ。

「どうしてそんな目で見なのですか？」

私の顔に何か付いてますか、なんてベタなこと、聞かないでください。心苦しいですから。

『んーん、何でもない。お腹空いたー! 食いつぱぐれる前に』

『飯行こー。』

腕を引っ掴んで何とか回避。私はそのまま使用人たちの食堂へ連れて行つもらつた。

辛口!!ココアとキャンディーチ ハロウ

ほー、広いねえ。

流石はお城、高校の学食とは一味も一味も違つた。

ずらつと並べてある長机とベンチには人が集まつて座つてゐる。それでも、もう昼休みが終りに近い所為か、人は疎らになりつつあった。

要するに、ちょっと雰囲気がヨーロッパ的な食堂つてところかな。

トレーに自分の分を乗せるみたいだし、多分システムは学食とかと同じだと思つ。

あ、見知った人たちはつけーん！

『マーサさん、リュクスさん、サイモンさんにエルさん…』

声をかけるとすぐに振り向いてくれたみんなは、明るい笑顔を向けてくれる。さつきまでの黒い気持ちはどこかへ行つて、安心感が胸一杯に膨らんだ。

「おう、ネイ。今しがたりリュクスに聞いた。お前、記憶がないんだってな。」

なにー？！

いきなりテンションが低くなるエルさん。それぞれの顔色を覗つてみると、みんな暗い顔をしてる。ってことはそう信じてる訳で。りゅ、リュクスさんのおバカー！何でさつまの今でもう話してんのよ。

まあ、忠犬だらうから、悪気はないんだらうけどさあ。

『いや、あの…それは、ですね…「いいんだ！」

またこのパターンか！いい加減飽きてきたぞ。

「俺、何でもするからな。ネイがやりたいことはなるべく叶えてやる！だから、記憶が戻るまで、何も心配する」とはねえ。安心しそきな。」

はい、また弁解できないままでよ。

エルさんは涙を拭いながら厨房の方へと駆けて戻つて行つてしまつた。

「何がどうなつてゐるのかは分かりませんが、とりあえずお皿を擱つてしまいましょう。」

ミコアの言葉は有り難かつた。何とも勘違いが激しい人たちだ。私にはこのまま止めることはできないんだろうなあ。これからじゅリアに任せよつ。

私は無視を決め込むことを決意した。

「ネイには複雑な事情があるらしいことは聞いてたけど、それがいつに
とだつたんだね。」

『つーつー、マーサさん、首、絞まつてます！』

何せらマーサさんまで勘違いしちゃつたらしく、私は首元を縛め
上げるかのように抱き締められていた。

「マーサさん、ネイ様を放してあげて下さい。そのままでは花畠を
見るこになつてしまふますよ。」

冷静に、しかも食べるのを止めないままミリアは言つた。

助かつたけど、やつぱりミリアは裏が存在するのね。誰にだつて
裏側はあるのかもしれないけど、ミリアの場合普段が明るくていい子だからか、ちょっと、いや大分怖い。

ミリアだけは敵に回さなこつてみじみわ。これもまた心のノート
にメモつておいた。

解放された私は、食事に手を付ける。

『つー、素材そのものだ。』

頷きながら食べる。ミリアはもう慣れていたようだけど、マーサ
さんはそれが不思議だつたみたいで尋ねてきた。

『私の食べ慣れていたものとは味付けが違うのです。』

「そうか、記憶をなくしても身体は覚えてるってやつだね。」

勘違いは続行中で、私はもうそれでいいと思つて、記憶喪失なんかじゃないと言つのは止めておいた。

ミリアに続いて食べ終わると、お茶を飲みながらため息をひとつ。午前中の間にいろいろありすぎて、ちょっと疲れちゃつた。

人と接するのが苦手って訳じゃなかつたはずなのに、この短時間で会つた人たちみんな個性的過ぎて。その強烈なキャラにクタクタだつた。

もしかしたら、しばらく決まつた人以外と会話を交わしてなかつたから、急に人がたくさんいるとこに出て来て、人酔いしちやつたのかなあ。

「大丈夫ですか？」

マーサさんは仕事に向かつたらしく、目の前には心配をかけてくれる人が一人だけいた。

大丈夫、と小さく零すと、お茶を一気飲み。それをトレーに置くと、ミリアが片づけに行つてくれた。

さてと。これからどうしようかな。

とりあえず、私の中でクーンさんの仕事時間短縮計画を進めるために必要な事を考えなくちゃ。

「どうしました？そんな怖い顔して。」

急に声がかかる。聞いたことがある声。

『レークさん！』

声がした方を向くと、ここ数日一番一緒に居た人がいた。

「服を大胆にいじられましたね。“二ホン”では手足を出すのが批判的には捉えられないため、当たり前なんですね？」

ひたすら話してたから、クーンさんは地球についての知識を、今じゃかなり持ってる。一口一口しながら話す姿に、はい、と答えると、その瞳はキラキラしていた。

「よくお似合いですよ。人形のよつに愛らしいですね。」

うーん、嬉しくない。人形って…子供じゃないんだから、違う褒め言葉にして欲しかった。

ん？てゆーか、褒め言葉だつたのかな？

レークさん、異世界の研究が進まないからお昼にでも話をしようつて昨日言つてたけど、それを本当に実行するとは。確かお祭りの準備で忙しいはずなのに、大丈夫なのかなあ。

「あー！神官様発見！！」

“げ、見つかった”、そう呟きましたね、今？逃げ出してきたんかい！

あれよあれよと言つ聞いて、レークさんは白い服を着ている人たちに引きずられて行つてしまつた。

何だつたんだろうか？

呆然と立ち死んでゐると、ミコアが歸つてきて言つた。

「私は仕事に戻りますが、ネイ様はどういたしますか？」

おやじへ一部始終を見てたはずなのに。全く動じてないし…

『うーん、とりあえずクーンさんの仕事時間を短縮させる方法を考える。つと、その前にご飯持つてこうかな。』

私も気にするのを止めて、意識を別のことを持つていいく。

「厨房の方に行けば、エルさんがいますから、相談すれば何とかなると思いますよ。

それと、クーン魔道師さまの仕事時間を短縮する方法は、私も考えてみます。』

ミコア万歳！

私は嬉しくなつて飛びついた。

『ありがと、ミコアー。』

〃コアは固まつたままだつた。

さよつとくらう反応して欲しいんだけど…無反応だと対応できない。

「…ネイさまは感情の表現が豊かですね。」

遠慮がちに言われたけど、そつは思わない。感情表現が一番なのは、多分リュクスさんあたりだ。

『「めん、五月蠅かつた?』

「いえ、やつこいつ」とではあつません。」

少し言葉を濁す。そんな事されりゃあ、余計に気になるつてのが、人間の性。

でも、ま、時間も無いし、そんなことしてゐ場合でもないんだけどね。

「とにかく、何でも協力しますから。ネイさまはそのままドクーン魔道師さまに接してあげて下さこな。」

了解、と残すとエルさんに会つために厨房まで行つてみた。

すゞいお皿の量。まず最初にそづ思った。

洗い甲斐があると言つか、何と言つか。それはそれは半端ない数の、使用済みの皿が山積みになっていた。

「お、ネイじやねーか。どうした?」

困ったことでもあるのかい、と聞かれ、その表現にやつさの「こと」を思い出す。

結局私は記憶喪失つてことになつたままなんだよね。つて言つても、もう弁解する気は更々ない。

人間つてのは学習するモノですからね。いい加減、何を言つても私が氣を使つてるつてこつ風にしか捉えてくれないつて分かつてるもん。

それに、やつきました。このくんテンコな設定は使える。だつて、さつきの「ご飯もよく分からぬ野菜がいっぱいあつた。

つて、ことは、だ。

記憶喪失全ての記憶が無ければ、きっと知らないことだらけでも変には思われないはず。

そう納得して、本題に入った。

『クーン魔道師さまが時間が無いつておっしゃるから、何か軽いも

のでも作って行ひつかと思つて。協力、してくれませんか?』

ゆうべつ、見上げて懇願するよつこ言つた。

策士ともども何とでもお言へ。私、腹黒いですからね!

「あ、ああ、もちろんさ。」

イエス! 作戦成功つてことだ、目的の実行はサクサク行きましょ。

「何を作る気なんだ？」

そう、問題はそれなんだよねえ。一応記憶が無くなつてことになつてゐるから、テキパキ作るのはきつとまづいてゆーか、バレる。

そこまで記憶の所為にできるかが問題。エルさんが気にしない人だつたらいいんだけど。

純粹に、私が記憶喪失だけど、体が覚えているから作れる、とか、純粹に信じてくれたら尚いい。

… みじ、リーリーは気にしないで進める」といひよつ。

エルさんにお願いして、パンと卵と野菜と油と酢を用意してもらつことにした。

「野菜は何がいるんだ？あと、たまごは何のたまごを使つる気だ？」

ずらりと並べられたものに驚いた。すごい数。で、気が付いたことが一つ。

リリは城内の厨房、つまりたくさんの食材が詰まつてゐるといふ。

そりやあ、種類を尋ねられるほど有り余つてますみね。

自分で選べって言われたらまずい。つてことで、先手を打ちましょ。

『レタスとトマトとキャベツ。あ、あとニンニクもあつたら。それとハムとベーコンとチーズもあれば嬉しいですね。』

エルさんつて本当にいい人だよ。言つたものを全て聞きもりすずに、すぐさま用意してくれましたから。

それに、拳動不審な私を疑いもせずに……心が少し痛みます。

でも、それにしたつて……用意した量が多すぎると思います。

トマトは一籠、ベーコンとハムとチーズは塊。油に至つては、瓶が一ダース。何人前よ？

それにしても、見かけないものだらけ。恐る恐る手にとつて、黄色い葉っぱをかじるとレタスの味！白いのはキャベツ。

この液体、まさか……ほんのりピンクがかつた液体は酢だった。

全部味は同じでも、色や形が違つ。これから、食べる度に違う色のものを口にするのね。複雑。

「ネイ、だから卵はどれにする？」

そう言つて見せられたのは、さつきの量の多い卵。よく見ると、30種類以上あるみたいで、色や形が違つた。手前にあつたのを手にとつて、とりあえず器に割り入れた。

『これ、黄身が緑！』

驚愕の事実！てゆーか、食べる氣すらしない色だった。

「それは黄身じゃなくて緑身だ。」

「つっそー、まつじー？ジョーダンやめてよつ！…いや、至極眞面目だ。」

エルさんは不思議な眼の色を隠しもしないで、私を見つめている。それからハツとして、愁いを帯びた目に変わった。

「ネイ、やっぱり記憶が薄れてるんだな。これからは何でも言え！おじさんが何でも相談に乗つてやるからな…！」

ハイ、つて言いつつ、後ろめたくなつて心の中で謝つた。いくら腹黒い私にも、流石に良心は存在する。本気で心配してくれているエルさんに、全てにおいて嘘をついてるのが心苦しかつた。

そんなこんなで一段落ついて。

「ネイは黄身の卵が欲しいんだな？」

論点は元に戻つた。

説明されたことによると、鳥の種類によつて卵の中身の色が違うらしい。

黄身のものは原種に近くてあまり好まれないらしい。黄身が緑とかピンクとか黒とか、ましてや青とかより個人的には断然黄色がい

「 いと思ひナビね！」

ま、それは個人の自由だから一端置いといで。

『 まずはこれを茹でます。』

それから、それから。やつぱりやることがあるのは嬉しくて。向こうに居た時よりも手早く料理を始めた。

卵の黄身と酢と油を使ってマヨを作る。

これにはやつぱりサンディッシュには必需品だよね~。

やう思つて搔き混ぜていくと、初めてこれを見た時のクーンさんたちと同じよ~う、エルさんは不思議そうな顔をしていた。

『 ちよつと舐めてみます?』

それに頷いて小指にちよつとだけ付けて舐めた。すると、みるとる表情が変わる。

「 へ、つまこー。こんなに美味しいもの、今まで味わったことがない!」

ネイ、じつやつて作ったのか、もう一度説明しながらやつてくれないか?』

その興奮とキラキラした皿に倒されつつ、ちよつと面白かったから、企業秘密にしてことじとした。

今は時間がないし、また次回にね!期待!早くクーンさんに食

べてほしいから。

それからの作業はもっと早く進んだ。エルさんが手伝ってくれたしね。

ベーコンをカリカリに焼いて、ハムとチーズをスライスしてくれてる間に、私はパンにバターとニンニクを混ぜたものを塗つて、フライパンで焼いた。

卵は漬してマヨネーズを加える。キャベツの千切りにもマヨネーズ。

本当はマスタードも入れて和えたかったんだけど、その、色が、ね。まさかの青だったからやめた。

青つて！食べるものに青つて！－－食べる気失せないの？！

…とにかく、見事過ぎるお色でした。

ここまで用意したらサンデするのみ。私は三種類を考えてる。B LTサンド、たまごサンド、もう一つはハムチーズサンドのキャベツ入りだ。

あんまりにも熱い視線を送つてくるエルさんに、一種類ずつおそ分けした。

さすが料理人。初めて見る食べ物に興味津々だ。手伝ってくれたお礼くらいにはなるよね。

そして、毒味係もある。

酷いとか言つ言葉は受け付けません。興味がありそうだし、私が作つたんだから毒の心配もない。

ま、食材が初なもの（見た目）だつたつてことで。

じーつとHルさんが咀嚼する音に耳を傾けて、感想を待つた。

「う、うまい！今まで味わつたことのない味だ！ネイ、料理の才能があるんじゃないか？」

ありがとうと言ひ、後片付けを簡単に済ますと、新しくお茶の用意をしてクーンさんの仕事部屋へと向かつ。

その間もクーンさんの仕事時間の短縮方法を考えた。

でも、そんなに調理場から遠くなくて、そこにはすぐに着いてしまつた。

朝とは違つて人通りはない。ゆっくりと息を吸いこんでから、ノックして部屋に入つた。

「ネイさん！元気にしていますか？」

開けた瞬間に満面の笑みが迎えてくれた。

『レークさん！』

なんでここにいるの？てゆーか、さつきのことを思ひ出すと、逃げてきましたね？憲りない人だなあ。

なんてちょっと呆れちゃう。どうせまた引っ張り戻されるか、怒られるかのどっちかだと思うんだけど。

「実は頼みたいことがあるんです。」

さつきの笑みは未だ絶やしていない。ずっと思つてたんだけど、レークさんとクーンさんってホント対照的だよね。

って、今はそんなこと考へてる場合じゃなくて、お願ひ、だつけて、あんまり好ましくなさそうだけど、レークさんのお願いとあつちやあねえ。聞くしかないでしょ。

同時進行でお茶を淹れることに許可をもらつて、手を動かしながら耳を傾けた。

「私が神の声を聞くには、一度ネイさんに鏡盆に触れていただく必要があります。そうしないと、私は存在を感じられないのです。

式典の準備が進むにつれ、誤魔化すことが難しくなつてきました。このままでは事実が発覚し、『最後の乙女』の存在が疑われてしまうでしょ。」

そんな事態になつていたのね。無意識に難しい顔になつてしまつ。

その人物を一人の男性が眺めていることは、当の本人も気づいていない。

『……それは、私の存在を隠すために必要なんですね?』

嫌だ、そう思う。

私はこの国の人的心を助ける存在かもしれないのに。でも、やっぱり私には何の力もないと思うから。

だから、その人たちの象徴として崇められるなんて、絶対に嫌だ。
無責任な事、したくないし言いたくない。それを回避するためなら、協力は惜しまない。

心の中でそう決心し、レークさんたちに向き合つた。

『…わかりました。ご協力をさせて頂きます。』

身体を綺麗に曲げて頭を下げる。これは女中としての礼じやない。
私自身の決心。

辛口//ココロとカラシでイッキ もの4

『それより、今時間ありますか？クーンさんにサンドイッチを作つて来たんですけど、たくさんあるのでレークさんもいかがですか？』

二人は初めて調味料を見た時のような顔をした。それのお陰で、説明が必要なんだと分かる。

『私の世界の食べ物です。いや、挟んだだけだし、料理つて言つほどのものではありませんけど。

クーンさんが食べる時間もないとおっしゃるので、手で掴んで食べられるものを用意しました。』

そこまで説明すると、『うわ、と一人に促した。

本当はお米食べたいよね。でも、ここではパンしか見かけないし。

私みたいな東洋系の人がいるみたいだし、エルさんに聞いてあるか確かめてみよう。

今となつては本当に恋しいよ、焼き魚と米とみそ汁。日本人には必要不可欠な味だよね。

『お口に合つか分かりませんが、そんなに食べれないものではないと…

「つまー！」

「おこしこー」

一人の声はほぼ同時に、見たことないものを食べるのを訝しがつてゐるのかと思こやや、もう口に運んでいたようだつた。

一人と勢によく食べてる。そんなにお腹空いてたのかな？

一人の食べっぷりに満足しながら、お代りの紅茶をカップに注いだ。

お皿はあつとこゝ間で空っぽ。清々しいほどどの食べっぷりにまた満足した。

「うれしかったです。」

例に習つて、こつもの挨拶。日本の挨拶、定着してゐる？

じつやら食に関する深い考えを、一言の言葉で言い表していくことに一人は感心したらしく。

私にとつてはもう当たり前のことだったけど、文化も宗教も違うし、珍しい考え方なのかもね。

手を合わせて挨拶している一人を、不躾にもじつと見てしまつた。

…いかん、いかん。ここ数日でいい男を見慣れてしまつた。

これじゃ田が肥えちやうつひで。

「さて、私はそろそろ戻るところです。今頃部下たちが血眼になつて私を探してゐる事でしょうから。」

分かつてゐるなら、もつと早く帰つてあげて下さい。

さつきから聞こえないふりしてたけど……レークさんを呼んでる声
がずっとしてる。

半分泣きそうな声色からしても、ずっと探してたんだね、つてち
ょっと可哀相に思えた。

「では、日時は改めて。また明日もう一回の時間に参りますので。」

『レーキさんの部下さんたち、可哀相ですね…』

思わず独り言葉。それに一言、気にするな、と言つて葉が返つてきて、何事もなかつたかのよつて、レークさんを呼ぶ部下さんの声は途絶えた。

心の中で部下やたむかにホールを送るじ、皿の前の紙の束に意識を向ける。

「うわもう、ちで大変なのだ。…主にクーンさんが。

手伝えることがないか考えなくちゃね。

一度食器を下げる、その途中で気が付いたことがあり、ミリアに紙と書くものを受け取つて、足早にクーンさんの元へと戻つた。

「…何を始めるんだ？」

忙しいはずなのに、私を気にしてくれるクーンちゃん。それじゃ意味無いって。

だって、仕事を効率よく回す為に私がいるんだよ?なのに、私のことをいちいち気にしたら、タイムロスでしょ。

ま、それは言つても、いきなり何か始めたら気になるつてもんだよね。つてことで、説明しながら手を動かすことにしてた。

『この部屋を訪れる方々は、書類を自由に置いて行かれるようなので、あとで分けるのが面倒にならないように、あらかじめ置いて行く場所を指定するようにしようと思つたんです。

『ハヤシテ紙に省略を書いておけば一目で分かるでしょ!』

私は書類とこらめっこしながら、お手本どおりに名前を書いてみる。けど、どうも上手くいかない。

…つわづわ、曲がった!

「…そりゃ。」

あ、今私の書いた字、ちりつと見ましたねー…そしてあたかも見なかつたフリするの、止めてください。余計に傷つく。

下手なら下手って言つてくれた方がまだマシだつて。てゆーか、問題はペンと紙にある、と思つ。

羊皮紙は凹凸激しいし、羽ペンはペン先がさけたるから自由に動いちやう。

それに加えて、なんで読めるのか分からないこの国の文字はくにやくにやしてゐるし。きっとこの国の國の識字率は悪いと思ひやうほど、へんて「な」字だ。

格闘することおやぢく30分。私はよつやく全ての省の名前を書いて、札のようにすることができた。

午前中に仕分けした分をそこに並べていく。

次は厚手の大きめの封筒に、これまた30分ほどかけて名前を入れていく。次はさつきよりもつまくかけた気がする。

「それは？」

伸びをしている私に、見計らつたように声をかけてくる。

『これはチェックが終わつたものを入れる封筒です。』

チェック?と聞き返され、英語は云わらない事を思い出した私は、確認の事だと伝えた。不便だと思う。

だつて、日本語英語つて結構普及してたから、日本語に直すのって結構難しいんだよね。

『もし私が省への道のりを覚えたら、私が届けに行く事も可能になりますし、その方が回転率が上がると思ったんですけど……』

最後の言葉を濁したのは、途中で自信がなくなつたから。逆に迷惑かけるようなら止めた方がいいかも、って思えてきやつて。

それに、クーンさんの無機質な田線の意味が気になつた。

なんか、嫌だつた？一度うろたえ、それからクーンさんを見る。視線があつて、一瞬で逸らした。

…田力強いですね。切れ長の田は、私を捉えて離さないようだつた。

『あの…』

無言の空間がきつくて、自分から声をかける。でも、やっぱり視線を真っ直ぐ交わすことは難しかつた。

「ああ、悪い。ネイが他のヤツに知られると思つて、少しイライラしてな。そうでなくともこの城内でネイはもつ有名人になつていてると言つの?」

驚いて視線を上にあげると、その瞳に捉えられる。わざと同じくじに逸らすことまできなかつた。

『お、おお、お茶の用意をしてきますーー。』

何とかやつ口にするとい、そこから飛び出した。

「何これ！心臓が、痛い。活発に働き過ぎー！」

胸の辺りを押さえるように、眞休みの比にならないほどのスピードで廊下を駆け抜けて、侍女部屋に飛び込んだ。

「ネイさまーあれほど飛び込んではいけないと……ネイさま？」

その場にへたり込んで心臓を押さえる。

冷静に慣れ、自分！

「お顔が真っ赤です。熱でもあるのでしょうか？」

心配してくれるミリアを余所に、私は自分のことで精一杯。おでこに手を当てて熱を計ろうとしてくれてるけど、原因は分かってる。

何だか知らないけど、クーンさんの言葉にジギギしてるのであるからだ。

『ねえつ、ミリアー！クーンさんって天然タラシ？』

「は？」

例によつて、私はミリアに詳しく話す破目になつた。

天然タラシ

現在、午後のお茶の準備をしております。

侍女部屋に飛び込んだ時、**やう言つ駄ぐちよひどい**リリアは私を呼びに行こうとしていたらしい。

「で、何があつたんですか？」

テキパキと手を動かして聞いてくれるリリアとは違つて、私は動揺を隠せない。

いきなり核心を突いてくるのがミリアらしいと言いますか、うん。遠回りする時間はないって分かつてるんだけど。

『あの、ですね…』

そう切り出した。何で敬語なのか聞かれたけど、それはなんか雰囲気だよ。

『クーンさんのお仕事を手伝おうとして、書類を私が配達してはどうかと提案してみたんだけど… そう言つたらクーンさん、私を他の人に知られるとイライラするって。』

あの時の目があんまりにも真剣だったから、他意はないんだつて分かってるけど、ドキドキしてしょうがない。

自分一人の動搖はそのせいだ。

「ま、仲がよろしくんですね。の方にしては、分かりやすい行動に出るには随分と早い展開です。」

納得したように頷いてますけど、ミコア、私良く分かんない。置いてかないでよ。

どう言つてとか話してくれるように懇願すると、言葉を選ぶよりにして話し始めた。

「そのままの意味です。ネイさまはそのまま受け取ればよいと思いますわ。」

『それって、私の存在が迷惑で知られたくないってこと?』

ま、まさか、そんな風に思われてるとは! ああ、でも確かに、私はここに来てから迷惑しかかけてないし:

てゆーか、突然ボツと湧いて出た私に親切にしてくれ過ぎてるし、いい加減そう言つ扱いしてくる事に気づけよ、つて話?

「何でそうなるのですか!」

さつきまで平静だったミリアは、いきなり声を大にして言った。

でも、もう言つ結論こ、なるでしょ?

『だつて、私はこの城内じや有名だつて言われたよ? この奇抜な格

好の所為でしょ？それに、——ここに来てから迷惑かけてばっかりだし……』

私の今の気分はどん底だ。迷惑かけなによつてするにはどうやらべきか、悩みどり。

「その意味、私分かりますわ。」

ため息をついて、手を休めて私に向かつて言つた。

「ネイさま、」自分の容姿についてどう思われていますか？

自分の容姿？今そんな話だつたつけ？

不思議に思いながらも、ミコアの質問に答えた。

『指して特徴もなく、平凡な感じ？あと、残念な足の短さしているよね。』

この国の人たち、みんな背が高くて足が長い。しかも、女人たちなんかボン、キュツ、ボン、な体形してるから、私が最初早乙女つて言われたのにも、今さらだけど頷ける気がする。

私の答えにやつぱり、と独りじけりと、ミコアは口を開き始めた。

「ネイさまが1日で有名になられたのかは、たくさん理由がありますが、原因はその容姿ですわ。」

なに？！そんなに見るに堪えぬほど酷い？一ホンに居た時はそん

な事もなかつたはずなんだけど…

「的外れな事をお考えになつているといふ失礼しますが、ネイさまはい」自分の姿に自信を持つた方がよろしいですわ。

大きく神秘的な黒い瞳はぱっちりしておられますし、艶やかな黒髪は印象的なほど美しいです。それに加えて透き通る白いお肌。身長は平均よりも低いかもしませんが、華奢な身体に細い手足。それなのにお胸はしつかりおありになつて、総合的に見ても人の目をとても惹く、愛らしい存在です。

最初にクーン魔道師さまがおしゃられたように、物語の森の妖精のようになつてゐるのですもの。

クーン魔道師さまはきっと誰かにネイを取られるよつた気分になつて、嫌なんだと思います。」

は、早口一一体で息継ぎしてたの、つてへうこ早口だつた。

「お分かりになりました？」

そう言われれば、頷くしかなかつた。

「それで、『天然タラシ』とはどういふことですか？」

どうもこうも、そのままの意味。日本人にはかゆい台詞を真顔で言つてくるんだもん。

『妖精だと、私の髪を梳くのが楽しみの時間だからそれを奪つた、だとか。

なんか、この、この辺がかゆくなる言葉をたくさん言われてるよつな気がしております、ですね…』

そう言って、私は自分の胸の辺りに手を置いた。

「まあ、クーン魔道師さまはそんなことをおっしゃられてるのですね。意外ですわ。」

え？ そうなの？ 私の記憶によりますと、ショットナッシュそんな事言つてる気がするんだけど。

もしかしたら、ここの人たちにとっては普通のことなのかもしない。ほら、外国人ぽい感じだし、お世辞を言うのが当たり前とか。

私がいちいち気にし過ぎてるだけなのかも… そう納得。

『そか、うだよねーお世辞なんだからこちこちにアタマにしてちゃダメだつてー!』

わはははは、と大声で笑っている隣。

ミリアが頭に手をやつて、惱ましげにため息をついたのはいつまでもない。そして。

「お気の毒に。」

そう呟いたのを、大声で笑っているネイが聞きとれるはずもなか
つた。

靈詫？（前書き）

クーンズカーネギー、弔ひです。

はあ、と一つため息。

先程飛び出して行つた少女に声をかける事も出来ないまま、開け放された扉を閉めた。

せつゝ自分の口から出た言葉は、らしくないもの。

何を言つてるんだ、俺は。まるでおもちゃを取られて駄々をこねる子供みたいだな。

自分を省みるとほんのことが、と妙に腑に落ちて、椅子に座り直す。目の前の膨大な仕事を横目に、どうしても思考が別の方へ行ってしまう事実がそこにはあった。

ネイと出会いつてから、大分日が経つ。夜の時間はお互いのことを知るのには最適な環境だった。

それに、ネイのあの艶やかな髪にも触れられる。見た目だけではなく、細くてサラサラと手からこぼれる髪は、本当に触り心地がよく、いつまでもな出でいたい気分にさせるものだ。

ネイに楽しみを奪うなど言つてしまつほど、気に入つた時間。今日からそれがどうなる事やら、いつもよりも進まない仕事に対しでため息をついた。

とりあえず進めないと。今日からネイが屋敷に住むことになるんだ。夜遅くまでなど待たせてはおけんな。

気合を入れると、目の前のものに向き合つた。

ハンコだけのものをすごい勢いで終わらせ、椅子の背もたれに寄りかかる。今日一日で大分疲れた様な気がしていた。

ノック音。それからドアが開いた。

「失礼いたします。お茶の用意をしてまいりました。一休みしてはいかがでしょうか？」

期待していた人物とは違い、もう一度背もたれに寄りかかる。普段ならば誰かに見せる姿ではないはずなのに、どうも力が入らない。どうかしたんだろうか？ 普段の俺ならばこんな醜態を見せたりしないのにな。

半ば自嘲氣味に笑いを溢すと、調度いいタイミングでおかれただ茶に手を伸ばした。

「うまいな。

「恐れ入ります。」

「…ネイはどうした？」

そう聞くと、さっそくですか、などと言われた。何か間違った事

を聞いたのだろうか？

「私が入室した際も、あからさまに残念な顔をしておつまましたわ。」

そう…だったのか？意識していたわけではないのだが。

それよりも、元々は顔に出でること言っていたはずなのに、ネイが関わるとそもそもいかなくなるのだな。

そう思い、自分に呆れる羽田になつた。

「ネイさまは現在精神統一をすると書いて、固まつていらっしゃいます。」

何かあつたのか？

そう思つただけのつもりだったが、口にしていたらしく。

ミコアの呆れた顔。いつもなら俺に向かつてそのような表情はないはずの完璧な女官だ。

そんなに変だつたのだろうか？

「ネイさまはクーン魔道師さまのお言葉で心を乱しておこです。

それにしてもクーン様、ネイさまをあまりお苛めしならないで下
れこまし。」

頼まれたよつていつまでも、身に覚えはない。

俺の言葉で心を乱す？何か変な事でも言つたか？思い返してみて
も、見に覚えがない。

分かることは、普段よりも格段に自分に正直になつて、真っ直ぐ
思つた事を伝えていた、ところひとつだけだ。

何がいけなかつたのだろう？

「でも、私は応援いたしますわ。よつやく心をお碎きになれる方に
出会えたのですね。

しかし、私からの忠告をお許しくださいませ。」

…なぜ、いふこらばれている？

疑問に思つゝとばかりだ。俺は顔に出でてことみんながら言われ
ていたはずだ。

と、言ひひとは。…ネイか？

「お察しの通りですわ。」

何故表情を読まれている？！半ば混乱に近い。

「ネイさまのことになると、本当に分かつやすくてお顔に出でお
ります。

といふので、ネイさまのことですが、色恋に大分疎い方のようですね。

クーンちゃんのお言葉で、この辺りがかゆいとおっしゃられておりました。その時にすべてお話をなって行きましたわ。

クーンちゃんの事も、『自分の事も。』

やはり、ネイだったか。あれほど分かりやすく、素直な娘はいな
いからな。

「…それで？」

先を促す。それはネイが自分の事も話したと言つかひ。

「私が言へる」とはいませう。

その思ひはミコトにせ知られていたようだ。すぐ口を開んでしまった。

「それでも、私は応援している事をお伝えしておいた。何かあれば全て伺います。

ネイさまの内面を話すこと以外でしたら、何でも承りますわ。」

ミコアは一寧に礼をすると、一度微笑んでから出で行こうとしてドアに手をかける。その途中でその動作を止め、俺に再び向き合つた。

「ネイさまのはじめ自分の容姿に自信が無っていました。頼着がないとも言えますね。ですから、男性に言つて寄りあつてもきっとお詫びされなれないこと思います。

クーン魔道師さまのお仕事を手伝いたいといつ熱意は、是非ともお受け下せご。

あと、コクスさまが言つておられましたが、ネイさまは一度クーン魔道師さまの剣わざを見てみたいそうですね。」

「……？」

早口なミコアに驚く。

それよりも、ネイは自分の姿に自信がない？

ありえない。あれほどまでに可憐であるのに。

気に入っている黒髪はもとより、あの黒い瞳は神秘的で惹かれる。吸い込まれそうになるほど透き通りた純粋な色実を見せるそれは、とても大きくて愛らしい。

唇は果実のように艶やかで、赤い。

白い肌は触れると消えてしまつと細つほど薄く纖細で、華奢な身体は守りたいとつこ思つてしまつ。

身長が低く細いために最初は未成年かと思ったが、もう成人年齢は当に超してゐる。

初めて砂漠でネイを抱き上げた時、これほどまでに嬌い少女がいるのかと思つてしまつほだつた。

男なら放つておかないであろうに、本人は自信が無いらしい。しかし、それは逆に役に立つ。

邪な思いは、そのまま顔に表れていた。当の本人は気付いていないが。

明るい性格、突っ走る癖。これは男から迫られても、天然攻防が期待できる。それに加えて色恋に疎いのであれば尚更だ。

そう嬉しく思いながらも、自分もその中に含まれてこることに少し気を落としてしまった。

さて、どうしたものかと気にしつつも、田の前の仕事が終わらなければネイの髪に触れられる時間もやつて来ない事を意味している。

…早いところ片付けよう。

そう思い、またネイのことで走らせたペンを止めた。彼女は成人している。あれだけ愛らしければ、元の世界に恋人がいたのではないか?

…これは盲点だ。

そう気付き、もう一つ気になることができた。レークに二ホンのこと話をしているが、一向に寂しがるところを見ていらない。

普通ならば、帰りたいと思つのでは?自分の故郷を思つひとは当たり前だ。

その行動を一度も見せないとほ、一体どうこういふなのだろう?

何か事情があるのかもしれない。

今夜はこれを聞くことにして、そのためにも田の前の仕事を終わらせようと躍起になつた。

おかげで渉ったのは無理もない。

閑話？（後書き）

彼が一番純粋でいい奴なのかもしません。

温かい家（前書き）

お気に入り登録が100件をこえました！
ありがとうございます！！

「よし、終わった。」

クーンさんの一言にホッとする。

今日は私が初めて働く日だから、大分迷惑かけちゃってたから。終わらなかつたらどうしようかと思つたよ。

『いつもより早く終わりになつたみたいですね。』

ぬまぐるしきほどのスピードだつた。

私はと言えば、ミリアにお願いして各省までの道のりを教わつて、書類を届けたり、お茶を入れたり、そんなことで一日が終わつてしまつた。

もつと、役に立つことない。やつ意気込んで、やる気を明日へ持ち越すこととした。

「ネイがいたからな。よし、帰るとするか。」

せつと立ち上がると、Hスコートをするかのように手を差し出してきた。

と、HJDは感づ。いや、日本人としては感つて当たり前だと思つ。

それに、私はクーンさん専属の女中だし… そのままフローズしていると、ノック音、それからドアが開いた。

「ネイさまのお荷物をお持ちいたしました… 何をなさつてこるのであります？」

明らかに呆れたよつたミリアは、半眼で見てきた。そんな事言われても、と心の中で呟いてみたものの、それはむちゅん頑べることはない。

一時停止したかのよつて立ち止まつていた私とクーンさんは、じじでわざの動作を止め、再生された。

「外に馬車のじり用意はできておつます。ネイさま、また明日お会いしましょ。」

やつぱり、やつやと踵を返す。

ミニアラしげいけど、こくらなんでも煙草しか述べなやうじやないですか？！って、混乱してるのは、やわらの微妙な空気の所為なんだだけだね。

氣を取り直して、何事もなかつたかのよつて振る舞う。それはクーンさんも一緒。私は促されるまま馬車に乗り込み、お世話になるクーンさんの家へと向かった。

馬車は10分足らずで止まつ、到着した事を伝える。

クーンさんに続いて降りよつとするが、慣れないものの所為か、バランスを崩してしまつた。やつと同じよつに手を差し伸べられ

たけど、今度は素直にその手を取ることができた。

ほわー、いかにも、なお屋敷ですなあ。

古く、しかしどこか風情があつて、造りがしつかりしているお屋敷を、私は馬鹿みたいに感心して眺める。

ほら、都会に初めて来た人が、街並みとか電車に驚く、あれと一緒。今までの生活からしてみれば、あり得ない家の造り。

本気で、中世ヨーロッパに送り込まれたんじゃないかつて思つちやうほど。

「ネイ？」

馬車から下りてからこつまでも突つ立つていた私に、ビラしたんだ、と声がかかる。

どうしたもんじるしたも、圧倒されてるんデスヨ。とか、言える暇もなく、私は促されて中に足を踏み入れた。

広い玄関、吹き抜け、正面の螺旋階段。：映画のセットみたい。

どうも現実味がない。緋現実的過ぎるのかもしれない。

本当に、ここで生活してるの？

見慣れた無機質な部屋の造りが面影もないそこは、壮大過ぎる作り物のように感じた。

クーンさんのお屋敷の中は、城よりも生活館が漂っている。豪華だけど豪勢とは言えないそこにある調度品の数々は高そうだ。使いこんであつて、逆に好感を持つ。

それに触れてみたい好奇心に駆られつつ、目の前の人物たちによつてそれは阻まれた。

「お帰りなさいませ。」

うわ、リアルメイド！城にもいたけど、いつもの方が本当に『主人さまに仕えます、的な感じ。私もこれからのために見習わないと…』

「クーンさま、こちらのお譲さまは？」

不羨にもじーっと見つめていると、視線を交わすことなくクーンさんに疑問をぶつけている。

私、そんなに不審者っぽいのかな？

何だかいたたまれなくなつて、視線を下へ向ける。いつも言つ時は大人しくして、クーンさんに任せておくのが一番だ。

「今日からここに泊ることになつたネイだ。俺の部屋の隣が空いていたな？そこをネイに充てて、取り急ぎ湯あみの用意をさせてくれ。」

「疲れているだらうから、と付け足された言葉に突つ込みたくないなった。

それはクーンさんの方でしょ、って。あれだけ働いといて、私の心配つて。自分の休息も考えて欲しい。

「まあ、それならば先に申しつけておいてくださいれば、お部屋をネイさまに合わせた可愛らしい飾り付けにできましたの!」

シコリキスさまはそんなことをおしゃられませんでしたが、この事はお知りで?」

「…私は知つている。」

…宰相さま?…ビリヒー!ここに居るんだろ?!

一人訳が分からぬ私に、クーンさんは後で話すと耳打ちした。

「ネイ、よく来たな。自分の家だと思つて寛ぐとい。また後日ゆっくり話すとしよう。

私もネイの料理を食してみたい。その時はぜひ私も預かりはかりたいものだな。」

そう残すと、さつやとビリーかへ行ってしまった。

…!Jの世界の人たちはいつも急に現れて、いつもすぐに消える。心臓、びっくりしちゃうから。

でも、帰り方が見つからない今、Jの生活を考えるべきだから、慣れなきやいけないと思う。

…なんか、ビットと疲れた。

それを顔に出さないよつこじるとい、わが家のメイドさんは私を部屋に案内してくれた。

『うわー……』

お屋敷についた時にも呆けちゃったけど、今もまた呆ける。だって、広過ぎ…今までの価値観が崩壊しちゃう。ぐるぐる部屋を見回す。ここがでぐると現実なんだって思つしない。

「お気になつましたか?」

私を面白そうに眺めて、そう尋ねてきた。一瞬ハツとして、一人じやなかつた事に気づいて急に恥ずかしくなる。私は動きを止めて、メイドさんに向き直つた。

『あの…こんなに広い部屋を使わせてもらつてもいいんでしようか?』

「お嬢さまはとても謙虚な方のですね。」

わづきの笑顔と違つて、優しい微笑み。私はおばあちゃんを思い出しちしました。今、思い出したくなかったのに。

私は俯く。そつするしか対処法がなかつたから。

いつも見たくないものから田を背ける癖は健在らしい。少しづつ私はいつも逃げている。何かを察してくれたのか、声色に少しだけ変化があった。

「もう少ししたら湯あみの用意が終わります。これからしばらく滞在するようなので、このお部屋も少し飾らせて頂きますね。」

『あっ、いえ、私なんかのためにそのような事をしていただくなにはいきません。』

語尾が小さくなる。メイドさんの田力に負けたから、田をさらしてしまった。

『いいに聞かせてもらえるだけで、十分なんです。』

私は多くを望んじゃいけない。他人の迷惑になるべくならないよう、他人の役に立つようにしなくちゃいけない。

「まあ、本当に謙虚な方ですね。しかし、クーンさまの命ですもの。おもてなしをさせてくださいな。」

でも、とこづ私を止め、さらに話しあす。

「謙虚な事はお嬢さまの美德だと思います。しかし、他人の家に世話になる事を考えてみてください。」

おもてなしとはされるもの。それを受けなくては失礼にあたると言ひ事を覚えて下さいました。』

『…はい。』

私にとつてその言葉は重くのしかかった。言われた事は的を射ている。私は、失礼なことをしてゐるんだってこと、考えてもいなかつた。

それにしてはあの場所とは違つ。きっと、考え方だつて違うはず。

「そんな顔はなさらないでください。女中どもはお嬢さまがいらっしゃったこと、実に喜んでおります。

」の家のお讓さまは早くに嫁がれてしまつたので、物寂しく感じたいたのです。」

「こり笑顔はやつぱりおばあちゃんを彷彿とさせた。

「男だらけではむやくんじいか？」

ひー急に声が?!

と、思つたら、クーンさんが入口に立つていた。

こつ之間に来たんだろう?

着替えたらしく、公務の時よりもラフな格好。それでも現代的なものとはだいぶ違つっていた。

「いいえ、そのような事は申しておつけません。ただ、楽しみが増えた、と。」

一触即発？

主従関係が成り立つているはずなのに、どうも火花が散つてゐるよう見えた。

腕を組んでいるクーンさんは、若干威圧的。一方、女中さんは相変わらず微笑みを浮かべたままだ。お互いに纏つている空氣に温度差がある。

どうしたものか、仲裁に入るべきか、と考えていると、一言声をかけて女中さんは出て行つてしまつた。

もちろん残されたのは一人。クーンさんはお風呂に入るよつて言うと、一時間ほどしたらくると残して出て行つた。

部屋に、今度は一人ぼっちで残る。

とりあえず荷物を抱えてソファーに座つてみると、奥の扉から女中さんが数人出てくる。どの人も30代ほどで、やわらかい笑顔を浮かべているから好印象だつた。

「湯あみの」用意ができました。」

私ははい、と立ち上がる。そこへ向かうとその人たちとは笑顔を浮かべたまま、その場を動かない。

どいてもらわないと入れないんだけど……？

え？と思つてみると、一瞬で服を剥ぎ取られた。

『えつ、ちゅつ、まつ……！』

止めようとした声を遮られ、お手伝いしますの一言。ひ、一人で入れますー！

温かい家（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

ネイの心、クーンの想い

：疲れた。お風呂に入ったはずなのに、疲れた。

一人では入れるのに、花の浮かんだお風呂に入れられ、隅々まで洗われた。良い匂いがするから、その点に関しては嬉しいけど、死ぬほど恥ずかしかった記憶しかない。

髪にもなんか塗り込もうとしてたけど、クーンさんがいつも乾かしてくれる事を述べたら、違和感の残る笑顔をして早々に切り上げて行った。

全て済んだことの安心感から、白いキャミソルのよしなものを着せられてるけど、そんな事を気にすむこと無くソファーにだれる。身体がぽかぽかする所為か、つとつとじってきた。でも、クーンさんが後で来るって言ってたから、まだ寝なければならない。

そう思つてはみたものの、つじつじとする。夢半ばになつたとき、ノック音が聞こえ、いけないと思つて姿勢を正して返事をした。

「悪い。起こしたか？」

「え、と一応。顔から半分寝てたことなんてばれてるんだらうなづく、それでもやつぱり一応。

当たり前のように私の所へやつてきて、こつものよつて髪を拭つ

てくれる。これにはホッとした。

さつきまで、3、4人に囲まれてお風呂に入つてた。恥ずかしいつたら無い。

でも、クーンさんに髪を乾かしてもらうのは、最初は恥ずかしかつたけど、今は心地いい。眠りを誘う心地よさを押さえながら、今田も話をした。

「ネイ、聞きたいことがあるんだ。」

神妙な面持ちであることが、雰囲気からして分かる。私は何を聞かれるのかと身構えた。

「ネイは…どうして元の世界に帰りたいと言わないんだ？」

その言葉はずつしりと胸の奥に圧し掛かった。

それは今まで黙つてきたこと。…触れられたくなかつたこと。

俯いて、何も言えない。それは私の黒い部分だから。

『聞いたらきっと、私のこと嫌いになります。』

だから、聞かないで欲しいと願う。ここに来てからの私を、今の私を知つてくれる人だから。私を嫌つて欲しくない。

嫌われたら、今度こそ立ち直れない。

「何を聞いても、俺がネイを嫌いになることなど有り得ない。ネイ

「いや、俺の話を聞くと、せつと俺を嫌いになるや。」

話したくなれば話さなくていい、と言われ、迷つ。

私を嫌わない？

…でも、それは“絶対”じゃない。

だけど、私もクーンさんの事情、気になつてた。昼間のおドブさんが言つてた事もあるし。

『私が私のこと話したら、クーンさんもクーンさんのこと教えてくれますか？』

それにOKを貰えたから、私は正直に話すこととした。

『私…いらない子なんです。』

つい最近までのことだったんだけど、何とかその輪から脱した。それでも、関係性は切れないから、この世界に来れたこと、実は心から嬉しく思つてる。

『私の両親、離婚してるんです。その時、どっちが私を引き取るのか言い争つたの。

…一人とも、私のこといらないから。お互に押し付け合つて、別れてからもずっと喧嘩し続けてました。

結局、父方の祖父母に引き取られました。』

そこまでは辛かつたけど、捻てた訳じゃない。おじいちゃんもおばあちゃんも優しくて、私は両親のどちらかに引き取られなくて良かったって思ったし、今まで生きてた中で幸せだった。

でも、問題はその後のこと。

『祖父母が事故で亡くなつて…私はまた行き場を失いました。結局父に引き取られたんですけど、それは世間体があつたからで。

本当は新しい家族がいたから、私は邪魔者だったの。』

『…今までくると、自嘲気味に笑うしかない。泣かないうつをするためには、やつあることや紛らすのが一番だから。』

『高校生になつて、家に居辛くなつてバイトばかりして。早く家を出たくて、遠くにある大学に合格を貰つて、家を出たんです。』

いつの間にか髪を拭っていた手は止まり、頭をなでる動作に変わつている。

クーンさんは何も言わずに、ただそつしてるだけだつた。それに身を任せるように、私はクーンさんの胸に背を預ける。体温が、少しだけ私の心をほぐしてくれる気がした。

『非常に走らなかつたのは、多分心のどこかで期待してたから。でも、やっぱり私はいる子に変わりなかつた。』

昔から、何をするのも苦にならない性質だつたんです。勉強も、運動も、努力とかしなくても簡単にできちゃうから、不器用な妹と

比べる対象に必然的になる私は邪魔者。

妹は慕つてくれたけど、あの人たちは自分の娘より何でもできる私が嫌いだつたみたい。』

あの時の目。私が何をしても褒めてくれなかつた。だから、途中で諦めたの。半分血はつながつてゐるけど、赤の他人。

腹違ひの妹だけど、年の離れた知り合いの女の子。

ただそれだけの関係で、私は单なる居候。そう考えるようになつてた。

『そんな人たちと縁を切りたくて、遠くの学校に入ることを決めました。離れたいと思つて遠くへ逃げたけど、知らない世界に来たんだつたら、もう会う事もないから。だから、帰りたい、つて言わないし、思いもしてないんです。』

ここまで言つて、やつぱり根っ子の部分はいつまで経つても変わらないな、と思つた。

クーンさんは何も言わない。逆に言われなくて良かつたつて思う。それに、何を言つにしても困る内容だつて分かつてる。

次は俺の番だ、というクーンさん。だから、俯いてた顔を上げて、クーンさんを見た。

「宰相殿がここに居たことに驚いていただろ?」

その問いかに、正直に頷く。クーンさんは、私の頭をなでる手を休

ませる」と無く、口を開けだした。

「俺は……宰相殿の養子だ。」

随分気心が知れた仲だと思つてたけど、そつてことだったのか、と思つた。思つただけで、口は挟まない。

「俺の元々の名はクーン・リッキンデル・デューク。現国王陛下は俺の腹違いの兄にあたる。」「

?!

つてことは、だ。

…クーンさんって、ひょっとしなくても王族の血が流れているってこと?

うん、なんか分かる気がする。纏つてゐる空氣とか、品の良さが滲みだしてゐるから。

「母上は身分が低かつた。先王は単なる遊びだつたみたいだが、母上に手を出した。そんな関係だつたために、先王は俺の認知を拒んだ。」

私と、少しだけ似てる。親に拒まれた時、クーンさんは何を思つたんだろ??

「母が亡くなつてから、俺を引き取つたのが王家の親せきにあたる宰相殿だ。幸い兄上との仲は悪くなく、俺は兄上の役に立ちたいと

思つて今の役職にこゝに付けた。

実際は余計な仕事や貴族たちの小言で精一杯だが、これから努力して、兄上の片腕くらいにはなつてやるつもりだ。」

「すうじい。私は捻てるつていつのに、クーンさんは田標すら持つてゐる。

さつきクーンさんが私の話に触れなかつたのと同じようじに、私もクーンさんの話には何も触れなかつた。

それから他愛もないことを話してたら、いつの間にか寝ちゃつてたみたい。朝日が覚めたら、ベッドに横たわつて布団がしつかりかかっていた。

きつとクーンさんが運んでくれたんだよね。お礼、後で言わなくちや。

さて、どうしたものか…

今日も一日頑張るぞ、と意気込んだはずなのに、その途端から力が抜けた。私は昨日初めてここに来たわけで。何がどこにあるか、とか、昨日来てたカスタムメイド服がどこにあるのか、とか。諸々知らない。

つまり、どうしていいのか分からなってことひつながらる訳だ。
と、タイミング良く昨日のメイドさんがやって来た。

「よくお眠りになられたようですね。本当ならばもつ少しお休みしていただきたいところですが、クーンさまと共に城へ行くようですから、失礼ながら起こしに参りました。」

私なんかに敬語使わなくとも、つて思ひ乍ら、おもてなしは受けるもの、だから。私はありがとうございます、と礼を取った。

顔を洗つて着替える。やつぱりカスタムメイド服は田立つりじくへ、気にしていた女中さんごどう作つてあるのか教えて欲しいと頼まれ、それには承した。

そのまま誘導されて大広間へ。

朝ごはん、らしいです。

でも…やつぱり広すぎー…

みんなでご飯を食べるには、少々（大分）広い部屋。パーティーを催す際に、この位の広さがなきゃダメなんだつてさ。貴族つて大変なんだね。

お誕生日席に宰相さま、その向かいにクーンさん、右手に奥さまがいる。私は失礼ながら、空いてる席に腰を下ろした。

「ネイ、よく眠れたか？」

おはようひじやこめす、と軽ひから質問に答へる。挨拶、大事だからね。最優先。

『はい、とても。』

宰相さまは満足げに領き、奥さまを紹介してくれた。

奥さまは、まさに貴婦人、そのもの。微笑みも言葉遣いも、所作も。全てが柔らかくて優雅。

「クーンが女性を連れてきたと聞いて、とても驚きましたけど、とても愛らしい方で嬉しく思いますわ。」

クーンさん、モテそうなのに、女人連れて来たこと無いんだ。

あ、でも、生活してて中世ヨーロッパ的な雰囲気（映画情報）だつたから、私のいた現代とは違つて、簡単に交際するつてわけにはいかないのかもね。

「これからも、クーンをよろしくお願ひしますね。」

頭を下げられて私もつられる。

『私、クーンさんにお世話になりっぱなしなので、少しでも力になれるように頑張ります。』

頭を上げるように声をかけられる。だから、ゆっくりと上げると、微笑み続いている奥さまがそこにはいた。

「母上、公務の時間が迫っています。ネイを苛めるのはそのくらい

「してあげて下せ。」

いつの間にか宰相さまとクーンさんは「」飯を食べている。いつもクーンさんが私の所へ来てくれていた時間を考へると、確かに時間ないかも。

私は慌てて手を合わせてから食べ始めた。

「まあ、私は苛めてないわ。心外ね。情けない息子のことをお願いして何が悪いのです？」

あら？ 意外とおつとりしてないかも。

ズバズバ言つ奥さまに、クーンさんはたじたじだ。面白いもの見れた気がする。

奥さまに口撃されてくるクーンさんを見て、私と宰相さまは田を含わせて笑った。

「うやうやしつつの事らし。」

一方的な口論になつていて、その横で、私はのんびり宰相さまとお喋りしながら朝食を取ることができた。

『奥さま、意外と毒舌なんですね。』

馬車に揺られながら、ぐつたりしてるグーンちゃんに話しかける。
朝から随分とお疲れなようだ。

『疲れてるみたいなので、後で甘い物でも用意しますね。あ、それ
と、今日のお匂いさんも用意しますか?』

「甘いものはあまり好きではないのだが……」

甘いものが好きじゃない?!ダメダメ!疲てるんだから、少し
でも糖分とりなくちゃ。

「匂は任せせる。ネイの作るものは面白いし、美味しいからな。」

そう言られて嬉しくなって、いっぱいの笑顔でハイと答えた。

昨日、あんなこと話したのに、変わらない態度。嫌われてない気
がして嬉しかった。

城に到着してまず出迎えてくれたのはミリア。ミリアに連れられ
て昨日の女中部屋へ。そこに居たマーサさんは笑顔で迎えてくれた。

「昨日はよく眠れたかい?」

『はい。』

それはよかつた、と言い、クーンさんに早速お茶を持つていくよう言われた。

力チャ力チャを立てながら用意していると、今日も陽気なエルさんが鼻歌交じりで登場。朝の挨拶を交わしたのに、まだそこに留まつて私を気にしている。不思議に思つていると、今日もクーンさんの昼食を作るのか尋ねられた。

「ネイの料理は興味深いし勉強になる。是非作るところを見せてくれ。」

なるほど。マヨの「こと」まかしちゃつてたから、そりや得体のしれないもの作る人が気になるのも仕方ないよねえ。

『了解しました。また後ほど「こ」に参ります。』

カラカラとワゴンを押して向かう途中、やつぱりカスタムメイドは目立つみたいで、じろじろ見られたけど、たじろぐことなく丁寧に礼をとつてから進む。

世の中気になくていいものは気にしない。人の視線なんて一番気になるけど、文化が違うことに居るんだもん。気にしたら負け。

視線なんて素知らぬふり、を通してクーンさんの執務室に着くと、お茶を丁寧に淹れる。

仕事前だもんね。

美味しいお茶で心を落ち着けてからの方がいいはず。

湯気の上がる紅茶を持っていき、優雅に呑むクーンさんを眺める。

ほんと、いい男。恋人の一人や一人、いてもおかしくないだろーに。

クーンさんがお茶を飲み干そうとしたその時、ノック音が広い部屋に響き渡る。どうやら仕事の時間みたい。

私は急いでカップを下げる。扉は返事を待たずに関いた。せっかく慌てて昨日用意した机に着く。説明を任せてもうつことになつてたから、ぐつと身構えた。

『おはよひびわこます。』

丁寧にまずお辞儀。次に頭を上げて、笑顔を浮かべる。

『各省の名が書いてあるカードの所に書類を置いていただきたく思います。クーン魔道師さんに説明が必要な方は、そちらへお並びください。』

何ら訝しげな顔をされる。

うん、そんな気はしてたから、覚悟はできてる。だから、私は笑顔を絶やすことなくそうするように促す。それでも反発する人は必ずと言つていいくほどいるわけで。

早速その声が上がった。

「なぜ我々がそのような事をしなければならない。」

おおつと。

一際高そうな生地で作られた服を見に纏っているおじさんに、お小言ちようだいしましたー。

あの人はきっと、身分が高い人。

近づいてきて私の前に立ち、じろじろと頭のてっぺんからつま先まで見る。

…省の名前、見えた。だからこそ、この人がなんでこんな態度を取るのか、ここで納得した。

曲がりなりにも、クーンさんは省をまとめる筆頭ぐらいの地位に居るはず。若いからと置いて、失礼な態度を取つていいはずがない。

昨日、ミコアにいろいろ聞いといて正解だった。

「Jの省の人は元々議会に居た人が多く、王族に反発気味。今の王に代替わりした時に、失脚させられたのを根に持つてゐんだって。

…自分が悪いことしたくせに。

いかん、いかん。

自分の黒い感情を心の引き出しに收めつつ、笑顔を引きつらせないように氣を引き締めた。

『失礼ながら申し上げさせていただきてもよろしいでしょうか?』

そう言つてから、さらに続ける。言つたのは建前。返事を待たないまま自分の思つた事を述べていく。

反論させない勢いで。

『クーン魔道師さまが毎日膨大なお仕事をなさつてゐる事はご存知ですよね。』

あのお方は大変勤勉な方で、自分の持てる力、全てを使ってこなそうとするお方でいらっしゃいます。

それ故に昼食を取る時間も惜しんで働いておられます。』

「だが…」

喋らせませんけど、何か?腹黒万歳ですよ。

こんなことで自分の性格の悪さが役に立つんなら、露見するのだつて恥ずかしくない。だいたい、私が言つてるのは正論だもん。それを盾にするくらいの事はできるはず。

『立場的にそういう方なのは存じ上げております。』

しかし、どんなに努力を惜しまず、働き者である方も、人間は人間なのです。

体力的にも精神的にも、必ず限界があるのです。それに、クーン

さまは書類調整のお仕事に留まるだけでなく、騎士団長としても働かなければなりません。それにも関わらず、現在はそのお時間がございません。

夜中までかかって机に…り付き、翌朝には誰よりも早く登城して執務室に届らつしゃられる。食事もままならず、睡眠もままならない。

それでもこのお方が倒れないとでもお思いでじょつか?『

ぐつと押し黙る顔を満足して見つめる。その間も笑顔を絶やさない。

後ろの人、引かないでー。私は事實を述べてるだけだからー。

「…それでも、それが仕事といつものだりつ。」

まだ言つか。まだ言いくるめられなくひや氣が済まないのか?そーか、それなら受けて勝つのみ。

またにしつり笑つて続けた。

『先程も述べましたように、クーンさまの仕事は机上のみではないのです。

机に縛り付けられている時間を短縮できれば、クーンさまの身体を労わる時間が出来ますし、さらなる騎士団の強化にも希望が望めます。

それに、夜中に届く書類はそちらひとつでも好ましくないので

ないでしょ「うか?』

訳が分からん、つて顔すんな。いや、あんたは帰るんだろうけどさ。他の人たちは納得してくれるみたいだから、夜遅くならぬ方がいいと思つてるんだって。

『ちょっとしたことで時間を取られない方がいいのです。何事も効率が大切ですから、今私とこうして言い争つている時間も勿体ないとは思いませんか?』

『そう言つた瞬間に、人々は並んで書類を置いて行ってくれる。一方、私の口撃を受けたおじさんは顔を真つ赤にしている。けど、私は素知らぬふり。』

そして腹黒いですから、追い討ち掛けますよ、純粋つぼく、天然つぼく。

『書類、お預かりいたします。それと…出過ぎたことを申しました。どうかお許しください。』

書類を受け取つて頭を下げる。おじさんはさらに顔を真つ赤にさせて、出て行つてしまつた。

あら、もつと怒らせちゃつた?…ま、いいか。

そのことで周りの人はより一層機敏に動き始め、書類を重ねていつた。

書類が積まれていく机を見ながら、クーンさんが説明を受けたも

のを封筒に入れる。後で分かりやすくするために。

「いつもよりも一時間も早く列が片付いたとクーンさんが言った時、ちょっとだけ嬉しくなった。

「その封筒は？」

ああ、これが。

『届ける書類用に作ってみました。一定量が済んだら、説明が必要なもの以外は私が配達しますね。』

「」まで用意して、やる気満々なのは、よかったですけど、もう書類の分類が済んでるから、やることなんて無くて。

『…ヒマ。』

思わず独り言づ。横田でペンを走らせているクーンさんを見て、嘆息した。

『クーンさん、何かお仕事ください。』

邪魔して悪いけど、暇すぎた。

昔から生徒会、バイト、勉強と忙しい事に慣れてたから、やることがないことどうも落ち着かない。

「昨日まではレーキさんと話してたから、一応はやる」とがあった

た。でも、今はこの部屋にはクーンさんと私しかいない。

それに、集中して仕事しているのに、雑談なんかしていひむかへするわけにはいかない。

『やることがないと落ち着かないんですね。』

良く言えば動き者、悪く言えば落ち着きがない。

足をじたばたしてみる。わっせ、クーンさんに椅子に腰掛けてろつて言われた。本當は女中だからつて断つたんだけど、許されなくて座らさせられたんだよね。

…思つたけど、クーンさんつて過保護？つてな訳で、手足がフリーな私は、とりあえず軽く暴れてみるとこにしたんだけど…

そんな事は敢え無くスルーされた。

「俺としては、届けに行かせるのも好ましくないんだが…」

え！これ以上やること奪うんですか？…やつてられないよね、私。てゆーか、迷惑だったのかな。

そう思つて質問してみても、そつぱつひとじやないと言わされて終わりだつた。なのに、渋い表情が田に焼きつぐ。

どう意味なんでしょう…？

結局やることがなくてクーンさんの執務室を後にした。

とりあえず、女中部屋に向かつ。もしかしたら何かやることあるかもしね。と、思ったのに。

「ネイさまにやらせるなんて、いくらなんでもそれだけは聞き入れられません!」

頼みの綱だつたミリアに、一蹴された。どれだけ懇願してみようとも、頑ななミリアは折れてくれない。

最終的に、は私は客人だからと断られる羽目になった。

「今日もクーンさまの昼食を作るおつもりなら、早々に厨房へ向かわれたいかがでしようか?」

ミリアのアドバイスは私を閃かせたけど、どうもこじり疑惑問。

『私が行つたら邪魔にならないかな?』

そうでなくとも城内中の人の食事をあそこで用意してゐるらしいんだもん。流石に私的欲求を満たす為に使つちゃダメでしょ。

とか何とか言いつつ、昨日は使つちゃつてゐただけどね。

「いつも紅茶を用意している場所なら、使用は可能ですよ。器具と

材料をえエルさんに用意してもらえば、何とかなるはずです。」

…エルさん、何者？てゆーか、厨房で仕事しなくてもいいの？

不思議に思つて訊ねると、続けざまに意外過ぎる答えが返つてきた。

「エルさんは料理長です。」

なに？！そんな偉い人だつたの？！

『『どうしよう！私、すごい気軽に接しちやつてた。失礼過ぎだよね？』』

「大丈夫です。」

焦る私とは裏腹に、ミコアは至つて冷静。

「エルさんは決して私たちを見下したりいたしません。“様呼びはやめてくれ”とおっしゃられて、今ではみんな気兼ねなく話すことができる、とてもよいお方です。」

そう、なんだ。うん、そつか。なんかそんな感じだよね。見ず知らずの私にまで気さくに話しかけてくれたような人だつたし。

でも。

『…料理長パシらせちゃつた…』

一番のじじつけられ。

昨日全てを用意してくれた事を思い出す。あれは流石にひどかったよね。

“パシらせ…？”と呟くミニアに、しき使つ事だと教え、うなだれる。確かに知ら言こものだつたり、場所だつたりしたし、無理もないんだろうけど…

「エルさんはネイセーの料理の興味がおありですし、むじる手伝わせてほしこと申しますです。」

やう言われて、厨房まで押しかられる。エルさんを呼んでおいて、ミコアは楽しそうに去つて行つた。

「今日は早かつたな。で、何を作るんだ？用意するものね？」

キラキラした瞳にやつきの話を重ね合わせてみても、じつも料理長には見えない。

そんな失礼極まりない事を考えながらも、やるいとはやうつと黙つて、腕まくりをした。

『うーん、何作る…』

全く持つて何も考えてなかつた。でも、今日は昨日よつも時間でやせうだし。がつづり食べる時間くらいあるでしょ。

なんて、無責任なこと考えたりして。それだけじゃなく、ひやん

とお腹いっぱい食べて欲しいって意味もあるんだけれどねえ。

それに、セツセツアリアからの言葉で、お皿はレークさんも一緒に言ってたし。

うん、軽食じゃなくて、普通のご飯にしよう。

『エルさん、マヨネーズの作り方、知りたいですか？』

次の瞬間のエルさんは、まるで小さい子供みたいに大きく頷いていた。

そんなに首振つたら、もげるよ？と思いつながら、昨日とほぼ同じものを用意してもらって、順を追つて説明をしていると、やつぱり素人の私と違うエルさんは、料理人の手つきを披露してくれた。

『これ、生野菜にも温野菜にも合いますよ。あとは炒め物、肉でも魚介類でもどんと来い、です。』

ほひ、と田を細めて考え込んでくる。私は構わずに先に進むことにした。

鍋で骨付きチキンを炒め、水と野菜とハーブを加えて煮込む。だけど、大雑把な料理に見えたのか、意識をこちらに戻してきたエルさんは心配そうにしていた。

「ネイ、本当にそれは大丈夫なのか？」

それ＝骨。こんな料理方法は未だかつて見たことがないらしい。

『「じーじから良い“ダシ”が出るんですー。』

「だし?」

もう!なんでこんなに料理基準が高くないの?!

『ダシは料理の基礎を支えるものです。これが美味しいなくつちや、味に深みが出ませんから。』

とか何とか言いつつ、最近見た某テレビ番組の何とかタロウさん の作り方を思い出していた。

ホント、テレビって便利だよねえ。

野菜やミニンチ状の肉を練つていく。つまりはハンバーグなんだけど。

「うちでは、肉は単にステーキとしてしか出されないらしい。勿体ないよね。いろいろと食べ方があるのに。」

今度、鶏団子が入ったお鍋でも作ったら、エルさんは驚いてくれそうだな、なんて、不敵にほくそ笑みながら企んだ。

今日は残念ながらソースもケチャップも置いて来ちゃったから、塩コショウのみ、って思つてたんだけど。

エルさんが、サルーテとかいう、うちの調味料をかけたらいと教えてくれた。

味見してみたら、美味しい。

「こんなのがあるんなら最初から使えばいいのに、って思ったけど、どこの民族のものだから、お貴族さまたちは好まないんだってさ。

食べ物にまで上流とかそんなモノ押し付けなくてもいいのにね。美味しいものは美味しいって言えばいいじゃん。

じつにはチーズもあるつて分かつたんだけど、これもまた民族のもの：後は省略。ハンバーグにはチーズが合つ。高カロリー一万歳な感じだけど、美味しいものに目がない私には、関係ないよね。

お皿にはまだ早いから、それはひとまず置いといて、今度は甘味に移る。食材は何となく揃つてそうだけど、食感が珍しいだろうと思つてプリンを作ることに決めた。

とか思つてたまご割つたら失敗。赤いの開けちゃつたから。赤い卵は、何ともグロかつたけど、温めたミルクを入れた時点で、ピックになつて安心した。

普通のには、カラメルを下に入れた。これなら、甘いのが苦手だつて言つてたクーンさんにも食べられると思って。もう一つは、昨日迷惑をかけた人たちに渡す分。これは、上に砂糖をかけて、ブリュレまがいのものにしよう。

言葉が悪いのは、私の表現力のせい。まずいものは作つてない、はずだから、安心して欲しいところだ。

蒸し焼きにするようにオープンに入れ、今度はスープへと意識を向ける。

灰汁を取つて、ハーブやら野菜やらを取り除く。新しく切った野菜を入れ、塩コショウで味を調えた。

うん、コンソメスープの素を使わないで初めて作ったけど、なかなかのできだ。野菜が柔らかくなるには、いい匂いが辺りに立ち込めていた。

「…良い香りだ。」

覗き込んで、興味津々な様子を隠しもしていない。

『味見、しますよね?』

いいのか、って聞いてきたけど、どう見てもそうしてみたいって顔に書いてあるし。それに、私も味見くらいしなくちゃ、今回は保証できないしね。

小皿に少し掬うと、私とエルさんは同時に味を見る。…少し薄いかな、と思って塩を足し、もう一度味見をしてみると、今度はちょうど良かつた。

「…ネイ、こんな上手いもの、初めて食べた。」

呆然としているエルさんに、この国の料理の発展がどれほどなかつたのか、確信を得た。

思つたけど、（この世界の人つて言つてもまだ数人にしか会つたことないけど）ここの人人は新しい事に挑戦することをしない。それは、私にとつては一つの怠惰に思えた。

『何事も挑戦することが大切ですよ。未知の発見ほど面白い事はありません。

…私のいた世界では、宇宙や過去に對して以外はたくさんの事が解説されて、子供たちはそれを学んでいました。それじゃ、つまんない。分からないことが分かるようになるのが、楽しい事なの!』

「ネイ?…思い出したのか?」

はー! そうだった。私、記憶喪失(設定)だった!

今さら難しいだらうと思つたけど、何とか濁す。

『…私、今なんて言いました?』

『…言ひ訳、きつかつたよね。どうしよう、なんて考えていると、タ　　イマーが鳴つた。

…助かつた。私は急いでオープンを開けると、天板を取り出していく。固まり具合を確認。そして、満足。後は冷やすだけだ。

けど。

『エルさん、これって冷やせますか?』

「ああ、厨房の方に、少しだけだが、魔道を使えるものがいる。冷却の魔道をかけても、うえば、すぐにでも冷えるわ。で、それは食べられるのか?」

プルプルしてくるその動きを訝しげに見ていく。それでもその動

きが不思議なのか、面白かつて見える。

てゆーか、食べ物で遊ばないでよ。

『 そうですよ。デザート、いや、おやつですね。クーンさんが随分とお疲れになつているようだつたので、糖分を取つていただこうと思つて。』

あれだけ働いてるのに、私の面倒まで見て。尙且つやんとした食事を取らなくちゃ、いつか、いや、近いうちに絶対に倒れる。それを回避することが唯一私にできるひと。

やつ使命感を勝手に持つた。

「 … ネイ？」

一人の世界から呼び戻されると、そこには知らないおじさんがもう一人。いつの間に来たんだろう。

「 で、どのくらい冷やすんだ？」

訊ねられて、困つてしまつ。基準って言つても、この温度の単位なんて分かんないし。 なんて伝わんないよね。

しばりへ答えて、それから。

『 抽象的な言い方になつちやうんですけど、山に流れる川の水、くらいですかね。

室温よりも全然冷たくて、食べる時にひんやりするくらいがいい

んですけど…伝わりましたか?』

おじさんにおずおずと言った。自分の表現力の無さに嫌気がさしたのは、言つまでもない。あんまりにも言葉があいまい過ぎたから、心配だった。

「大丈夫ですよ。」

そう言つて、こいやかな表情を浮かべたまま、冷却の魔法をかけてくれた。

魔法つて便利!見た目は変わつてないけど、器に触れると冷やつとしていた。

異文化 その2

『あのー……』

調子に乗った私は、ピンクのプリンの表面に乗せた砂糖を焦がして貰った。本当に便利だ。

つて、貴重な力をこんなことに使うなんて、やっちゃんいけないんだろうけどね。

反省してゐるのかしていないのかはさて置いて、私は感謝を行動で表した。

『おー一方とも、これ、たくさん作り過ぎちゃったんで、ようしければお一つどうぞ。』

手伝ってくれたお礼。これがお礼って言うのも、料理人の二人には失礼な話かもしれないけど、今の私にできる事はこれだけだから。

「いいのか? 実はさつきから、どんな味がするのか気になっていたんだ。」

昨日のサンディッチ、今日のスープの如く、エルさんは目を輝かせている。それを見て横に居るおじさんは、もっと優しく微笑んでいた。

「色が違うが、味はどう違うんだ?」

そつか。赤い卵なんて、使うの初めてだつたから、味のこと考へるの忘れてた。赤いからつて、辛い訳ないよね？

恐る恐る聞いてみたら、「たまご」の味 자체はあまり変わらないけど、赤いほうが濃厚なんだとか…色は私的には受け付けられないけど、どうやら味の保証はされてるみたいだ。

『黄色い方は、下にほろ苦いカラメル、といつものを入れています。クーンちゃんがあまり甘いものを好まないと言つ事で、食べやすいよう甘さを控えてあります。

もう一つは、表面の飴を割つて食べていただく形になります。こちらは下にカラメルが入っていないため、少しばかり甘くなっています。』

私の説明を、エルさんはふんふんと腕組みをして聞いている。おじさんも興味を持ったのか、二つを見比べて、私の見慣れた方を手に取つた。

「…ネイ、両方食してみたいのだが。」

迷いに迷つたのか、言い辛そうにそう言つてきた。

「相変わらず、料理長は食い意地が張つておられる。」

おじさんはやつぱり笑顔。しかし、言葉には確實にからかいが含まれていた。年の功つてやつかな。

「ち、ちがう！両方の食感を確認してみたいだけだ！」

焦つてゐるのか、噛んでるし。顔も赤い。おじさんがエルさんをからかうの、なんか分かるなあ。反応が面白い。

ほほえましく思いながら、私は両方勧めた。

『どうぞ。食べてみてください。私も感想が聞きたいですから。今お茶を入れるので……あ、時間大丈夫ですか？』

勝手に話を進めようとしてたけど、一人とも厨房に戻らなきやいけないはず。でも、5分や10分は大丈夫だから、と近くの椅子を引っ張ってきて腰掛けていた。

それを見て安心。今までで一番手際よくお茶を淹れ、二人の前に出す。スプーンを渡すと、二人は早速食べ始めた。

「ほひ……これは。」

さつきまでは目が笑つていて細かつたのに、今は真ん丸く見開かれていた。

「ネイ、流石だ。美味しいよ。このプルプルとした食感。ほろ苦いカラメル。冷たさもちよつといい。」

さつきまでの焦つたような姿はどこにもなく、しっかりと味を確かめるようにしていいる。料理をしている人のそれだった。

プロに批評されるのって、ちょっと不安。

次の言葉を待つていると、もう一方のプリンに手を付ける。上を

割っている姿は、何とも楽しそうだ。それから、一口含み、味わう様子を見せた。

「食べる前も楽しく、食べてからもう一つの食感が楽しめるとは面白い。」

お気に召してくれたようですね。

その表情に私は安堵した。

「ネイ、悪いんだが、これを二つほど分けてくれないか？是非とも食していただきたい方がいるんだが。」

それは全然構わないんだけど、気になることが一つ。

さつきまでの砕けていた口調が、“食していただきたい”と丁寧になつた事だ。身分の高い人に食べてもらうのかなつて、不安になる。不安に思つたことは、見事に顔に表れていたらしい。

「量が減つてしまつたのを心配しているのか？」

返事に困つている私は、そう思われていつたのか、と弁解するためには口を開いた。

『量は構わないんですけど、もしも高貴な方が口にするのなら、お口に合わないんじゃないかなと思って。

クーンさんヒラークさんと私、あとリコアとマーサさんと宰相さまにも上げたいから…最低六個残つていれば構いません。けど、新鮮なものを提供したいのであれば、もう一度作りますけど。』

「そ、うか！ それならば、クエーカーの方で、下にあの苦いカラ… 何んとかってのを入れてくれ！」

“カラメル”が言えなかつたね。てゆーか、私は私で聞き取れない単語に戸惑うばかりだ。

“くえつ…？”と、何かのない声みたいになつちやつたけど、私がからしたら発音しにくいつたらありやしない単語だつたから仕方ない。

「クエーカー。赤い方の卵だよ。」

ああ、またあの血みたいな卵を見ることになるのね。少し凹みつつも、食後のデザートだつて事なので、すぐに取り掛かつた。

付け合わせと、ハンバーグも同時進行でし上げつつ、赤い卵は目を逸らしながらかき混ぜる。

うん、いつか…要は“いつか”慣れる」と目標に頑張ればいいよね。

クーンさんたちのお昼ごはんを仕上げ終わると、ちょうど良く昼時のチャイムが鳴り響いた。その時、いつの間にかエルさんもおじさんもいなくなつている事に気付き、驚く。集中して、いつになくなつたのかも分からなかつた。

そう思いつつも、クーンさんもエルさんも待つてゐると思い、食事をワゴンへと乗せる。

温かいうちに持つてこきたいから、懶がなくひや。

けど、そこでエルさんに声をかけなくひやと氣付く、厨房に顔を出すと、とんでもない状況が広がっていた。

「おー、早くこれ片付けるー！」

「パンが出ていないぞー！」

「うへへ…まさに戦場。

私はここじゃ働けないな、と思つた。

「ネイー…どうしたんだ？」

あまりの圧巻に、呆然としていた私に声をかけ、エルさんはさつきの女中専用の台所へと来てくれた。

『プリン、できました。後は冷やすだけになりますから。』

「わかった。わざわざすまんな。後でまた話そう。今は落ち着かな
いからな。』

それは見たから知つてます。みんな忙しそうだったし、今はエルさんがないからもつと大変だろう。

私は了解し、エルさんを厨房へと追い返した。それからワゴンを

カラカラ押して執務室に入ると、レークさんが出に入る。

「来てたんだ…今って忙しいって言ってなかつたっけ?あ、そ
う言えば、さつきレークさんを探してる声が聞こえたかも。」

『レークさん、また逃げて来たんですか?』

書類をどけ、皿を並べる。ついでにお茶も淹れて、とやる事を行
キパキとする。まだ一皿だけ、私って案外順応性高いのかも。

「せつしていると、本当に女中さんのようですねえ。それよりも
また”とは聞き捨てならないです。

あの人たちは昼食の時間でさえ、私を神殿に閉じ込めようとする
んですよ?」

必死な訴えに、それほどいたいへんなのかと感心しつつ、用意が終
わったので顔をかけた。

『お仕事お疲れ様です。そのお話はひとまず置いておいて、食事に
いたしましょう。せつかくですから、温かごつちに食べていただき
たいのです。』

そういひと、椅子にもたれかかっていたレークさんは姿勢を正す。
一方のクーンさんは書類からまだ手を話していくなった。

『放つておきましょ。一段落するまではきっと動きませんよ。そ
れより、今日は何を作つてくださいましたんですか?』

『今日はハンバーグとカラダとスープです。昨日よりも時間があり

そうだったので、普通の食事の様式にしてみました。』

レークさんにハンバーグの説明をしていると、クーンさんがようやくこちらにやって来た。今日は昨日ほど疲れていないみたい。顔色がだいぶ良く見えた。

『私も』一緒にいいですか?』

とか何とか言いつつも、実はちゃんと自分の分も用意してきていた。ってなわけで、早速了承を貰って席に着く。と

「『『『』』』いただきます。』』』

三人で手を合わせてそう言った。合わせた訳じゃないのに、タイミングがぴったりで吃驚。けど、私に合わせてくれるみたいだから、ちょっと嬉しかった。

『そう言えばミコアから伝言を聞きました。レークさん、私に何の話があるんですか?』

食事をしながらいつものように談話する。私はこの時間が大好きだ。

私の事、事情を分かってくれている人たちだから、なおさら安心するんだよね。

「ああ、ちゃんと伝わってこるようでは安心しました。」

一人、クーンさんだけが蚊帳の外で、眉間のしわを一層深くしている。そのうち、跡が付いちやいそう。

「祭が近づいてきているので、そろそろ鏡盆に触れていただこうと思いまして。クーン殿、時期的にも良い頃合いだとは思いませんか？」

「…そうだな。人に紛れ、人知れず行つのが無難だろうな。夕方から夜に掛けてがいい。」

夜、人がいない時間。そんな時間のお城つて怖そつだなあ。なんて、自分の事なのに、他の事を考える。

てゆーか、鏡盆とやらに触れた時に何か起こらなきやいいけど。宗教上のものつて、なんかいわく付きで怖そつだよねえ。

箸を進めながらも、心は「」あらず。脳内に留まって、自分だけ物思いに耽つていた。

触ると、元の世界に戻つちゃう、とかだつたらどうじよつ？…それだけは、マジ勘弁。

「ネイ？…どうした？」

せつときよりも柔らかい表情のクーンさんを田の前にして、私はにへらと笑つしかなかつた。

『何ともないです。や、食べちゃいましょう。』

そう促す。だって、レークさんがいる前では話せない。何だか知らないけど、勢いでクーンさんに喋つちゃつた、私の黒い内面の事

だから。

それに、これ以上私の暗いとこを見せたら、今度は嫌われやうかもしれない。そうしたら、私はこの世界でも生きていけない。

「…本当に…」

『…あ、いこじやないですか!』

明るく振る舞う。暗いと、本当に配心されやうからねー。それ、いつのまにか隠すのが、昔から得意だ。

悪魔の笑み

『今日は甘味も用意しましたよ。クーンさんも食べてくれますよね？』

やうりん念押し。“ね”は強調して言つた。甘いものだけど、有無を言わざずに食べもらいますよ、つてね。

まるで何も聞いていなかつたかのように箸を進めるクーンさんを、レークさんと一人で見合つて笑つた。

お皿が綺麗に片付いたころ、私はプリンを出した。でも、生憎室温くらいになつちゃつて。がつかりした。

せつかく冷やして貰つたのに。

『すみません。これ、さつきまでは冷たかっただんですけど。』

「冷やして食べるものののですね。」

レークさんは面白がりに観察している。まだ、異世界の研究は諦めていないんだつても。

『プリン、ところが前のお菓子です。黄色い方は少し甘さを控えてありますから、クーンさんにも食べられると思います。』

笑顔で田の前に置く。やつぱり一人には珍しく映つたようで、不思議な眼差しを向けていた。

「冷やそつか？」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。だけど、クーンさんが魔道師だつた事を思い出す。だから、お願いして冷やして貰つた。

やっぱり魔法つて便利！

一人に食べるよう促して、私はお茶のお代わりを注ぎ入れる。でも、言われた訳でもなく、一人はすでに手を付けていた。

「これは…おいしいですね。」

ここにこ食べてくれるレークさんは、ちょっと子供みたいだ。お代わりを要求され、もう一つ追加。それも美味しそうに食べててくれている。

『クーンさん、どうですか？』

さつきから無言だし、やっぱり甘過ぎてダメだつたのかも。そう心配になる。でも、そういうなかつたみたい。

「トに入つてするのがほろ苦くて、食べやすい。ですが、異世界の菓子は作り方も違つんだな。」

感心しているみたいな悪いんだけど、反応が今一理解できない。あれほどお菓子を嫌がつていたのに、パクパク食べ進めている姿はどうも不自然だ。

JRのお菓子つて、一体どんな感じなのかな。

「甘さ控えめのがいいですね。これならクーンさんにも食べられて調度良いでしょ。」

やつぱり、全然違うんだ。だからエルさんが興奮してたのか！

てゆーか、エルさん、そつぱいことなりひゃんと教えとこでよー。

『まできたら、気にならないはずがない。

』『お菓子って、どんな感じのものなんですか？』

「何と言いますか、甘い、ですね。」

話をクーンさんに振った。でも、反応は一人とも同じものだった。

「甘い、な。」

なんすか、その一言で終わらせちやう感じ。悪いけど、私には全然伝わって来なかつた。

『もう少し詳しく教えてくれませんか？よければ料理の参考にしたいんですよ。』

『お菓子、ですか…』

一人は顔を合わせて嫌そうな顔をしている。それから、遠くを眺めるように、視線が散つた。

「俺はとにかく見たくない。よく貴族の娘たちはあんなものを食

べられると困りますな。」

脛間のしわせ、今まで一番深かった。それほど嫌いなのがよく分かる。でも、そんなに、って思えるくらいこの反応だった。

「私はクーン殿ほどではありませんが、1、2年に一度食べたいと思つか、思わないかとこいつほどですね。たいてい食べてから後悔しますけど。」

それって、どういった意味？ 美味しいの？ 味悪いの？

訳が分からなくて、尋ねると、一人は声を合せて言った。

「「甘いんだ（です）」。」「

『甘い…？お菓子なんだから、当たり前ですかね？』

甘いお菓子なんていつぱいあるはず。文化が違うんだから、ポテチみたいなしそうぱいお菓子があるとも思えないし。

「いや、甘過ぎるんだよ。」

「やうなんです。何事もほどほどが大切だと、あれを食べると悪いかも思います。」

その反省は、どうなの？ 甘いって、甘いだけでしょ。そこまでつっぱねる理由でもあるのかなあ。

「いの言われても、分からないのが当たり前ですよね。では、食べてぜひ一度苦痛を味わってください。」

…それは、笑顔で言ひやリフじやないと思ひ。てゆーか、敬語で言わると余計怖いって。

そう考えていたけど、笑顔だけみてると、レークさんはひとつも優しそうに見えるから、正直本心が読めない。

結構長い間一緒に居たけど、掴めない人だけはことだけはよく分かつていた。

自分の興味があることは、とにかく追求する人だ。でも、そういうことには淡白だとも言える。

同族のにおいがしないでもないけど、レークさんが大人だから、長い歳月をかけての底知れない深さがあの笑顔に垣間見えてるような気がした。

きっと、笑顔の分だけ、あっちの方が厄介なんだろうな、なんて思つ。

「そんなに見つめてくれると、嬉しい事ですね。」

心から思つてもいよいよ歯痒い台詞をありがとう。私も笑顔で応戦して見たけど、やっぱり叶わないほど完璧な笑顔が板についていた。

「苦痛を味わつてみるには、そのお菓子が必要ですよね。」

笑顔で言つて席を立つと、廊下に出て女中の一人に声をかけてきたようだった。ここにそのお菓子を持ってくるように、つて。

そこまでして、一人が言つ苦痛を味合わなくともいいんだけどなあ、とは思ったけど、好奇心には勝てない。

それに、レークさんのお遊びにつきあつてみても面白いんじやないかなって思つた。でも、私はMじゃない。日頃のお礼つてだけ。置かれた。のは良いんだけど。

『なに、これ?』

そう思わず呟きが零れていた。

「ティレ・ターラ、という一般的なお菓子です。」

皿を背けるクーンちゃん、笑顔のレークちゃん。そして私は皿が点になつてゐるに違いない。

三者三様の反応がある部屋の中、一番注目を注がれているそのお菓子は、見事なまでのお色だつた。

今までだつた、食材とかで変な色は見慣れてた。だけど、これは流石に驚愕の域だ。

ピンク、黄色、水色、黄緑。見事なまでの螢光色の塊が、お皿に並べられていた。

一口サイズの丸いそれは、食べるにはどうも抵抗がある色をしてゐる。アメリカとかのお菓子みたいな色だ。

『これが…お菓子?』

無意識に出た咳きは、クーンさんが拾つて、そうだと教えてくれた。でも、心は放心状態だ。

「 も、どうも。」

…悪魔の笑みだ。

神殿につかえている、力のある神官だと云つその人の笑みは、一見すれば天使の笑みかもしれない。

…だけど、今の私には悪魔の笑みにしか見えない。

これなら、常に無表情か、怖そうに眉を顰めているクーンさんの表情の方が、優しげに見えるよ、私。

「遠慮なさいづ。」

してませんよ、遠慮なんて、いつも簡単に分かること。声にならない叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入る

『？？ …・・・つ…』

それが失敗だったなんて、いとも簡単に分かること。声にならない叫びを上げて、お茶を飲もうとしたけど、カップの中にお茶は入

つていなかつた。

さつき飲んじやつたんだつた！

仕方がない方、必死に目で訴えてクーンさんのお茶を横取りする。私がそれを飲み下した時のクーンさんの表情は、憐れんでいよいよに見えた。

「大丈夫か？」

そんな訳もなく。私はワゴンまで行くと、新しいお茶を渋くなるくらいにして、カップに注いだ。

「人のお茶を盗つて飲むなんて、ネイさんはお茶目さんなんですね。」

お茶目とか、そんな事言つてられるレベルじゃない。果たして、これをお菓子と呼べるんだろうか。

私は未確認物体をじとーっと半眼で睨みつけた。

「どうでした？」

相も変わらず「一〇一〇」としているレークさんは、腹黒さが全開だ。儂い感じの男の美人さんなのに、残念過ぎる。一本の凶太い神経が見える気がした。

お茶用意した方がいいって、教えてくれてもよかつたんじゃないの？

さつおのお菓子と同じよつて、今度はレークさんを睨みつけた。でも表情は変わらない。私は諦念の感を抱いて、深く嘆息した。

『砂糖の塊よりも甘くて、衝撃的でした。てゆーか、まだ歯が痒い気がします…』

わう言つて自己確認をしちゃつた所為か、歯を磨きたくなつた。「歯が痒いとは、あまりにも適切な表現ですね。で、これで分かりましたか? ネイさんのお菓子とこひらのお菓子はかなり違うのですよ。

ネイさんのものなら、毎日でも食べられますよね、クーン殿?」

クーンさんは小さく頷いた。でも。

…嘘だね、絶対。

いつか、クーンさんが気に入ってくれるようなお菓子を作れたらいいなって、今は純粋にそう思える。

それに、そんな行動一つにもクーンさんの優しさが見えた。そして、それが倍増して見えるのは、隣に座るレークさんの所為だと言いうことは、絶対否定できないだろう。

てゆーか、まだしてるんだけど。レークさんを遠くからの中。

昼休みはもう終わつてゐるんだがつて、声が悲痛そつて聞こえるのは、私の彼らに対する憐れみだけじゃないと思つ。

でも、今日は昨日と違つたことが起つた。

「わへ、私はお暇いたしましょ。」

優雅に立つて、綺麗な笑顔を浮かべて礼をとる。そして、片膝で立つと、私の手の甲にキスをした。

「また後ほど会いましょう。是非夕餉もネイさんの手で作っていただけると嬉しいですね。では、失礼。」

また、貴公子のほうに向つて行つた。

口撃、再び

なんだ、あれ。

見慣れないその姿に呆然としていると、クーンさんが来て私の手を拭つた。

『どうしたんですか?』

「…いや。」

会話は続くことなく、クーンさんは定位置について仕事を始めている。

… そうか。今夜は神殿に行かなくちゃいけないからね。早く仕事を終わらせなくちゃいけないんだ。

私はワゴンを片付けて、昨日のうつむきミリアに教えてもらつていた道のりを思い出しながら書類を届けた。

やつぱり格好とかにギョッとされたりもしたけど、若い人たちはみんな親切みたいだ。年老いた力のある人に逆らえないだけなのかもしれないけど、私みたいなにも親切してくれるのは正直言って嬉しい。

それに、そう言つ入たちはあまりクーンさんに反発を持つていな
いみたいだった。

「いついう場所でも、やっぱり女のこの情報力はすごい。昨日のうちにミリアにいろんな事を聞いておいてよかつたと安堵した。

ここにはルイス派とシェパード派といつ二つの派閥が合つて、二分される。ルイスは過激、シェパードは温厚。温厚派の筆頭はその名の通り、宰相さまが筆頭だつたりする。

王もどちらかと言えば温厚派寄りで、過激派の議会を追放したり、一斉排除に掛かつたりと、結構手を妬いでいるみたい。そんな過激の一派は、こここの神様を強く崇拜しておられるんだそうな。

その厄介者に私は見つかつたら大変なんだうな、とか、頭の片隅に思いつつ、注意されたように、赤い羽根の小さな飾りを胸に付けている人たちを避けて通つていた。

それが過激派のマークらしい。こつちで赤い羽根と言えば、いい事の象徴だつたりするのにね。こつちではルイス派の象徴で、一致団結している様を誇示する象徴なんだつて。

道が分からなければ、その赤い羽根の人じやない人に聞くのが得策だつて言われてたから、その通りにするとみんな親切に教えてくれたし、書類も笑顔で受け取つてくれた。

でも、これから向かうところはそもそもいかない。

『失礼いたします。書類を届けに参りました。』

ノックをしてからドアを開ける。でも、開けなきゃよかつた、つてすぐに後悔する羽目になつた。

「ここはかの有名な議会部署だつたから。

視線が一気に私に注がれる。それは、何か汚いものを見るような目で。

私はこんな視線を知つてゐる。向こうでも、毎日のようすに特定の人から向けられていたから。

議会部署は融通が利かない。しかし、宗教上の敬虔な信者だから、神の御子の血縁だとされる王家には逆らわないらしい。

それなら、なんでクーンさんを目の敵にするんだって話だけど、御子は御子でも卑しい血との混血だから許されないとされてるんだつて。

王は純血。クーンさんは混血。そこには雲泥の差があるらしい。だから、いくら王位継承権を放棄した元王族であるクーンさんが、いつか反旗を翻して王にならうとするんじやないかって疑つてるらしい。（ミコア情報）

あれだけお兄さんの事慕つてゐるつて語つてくれたもん。そんなはずないのに、勝手な憶測だけで流言するの、やめてほしいよね。

で、だ。ここからが問題。

ノックして声までかけた。なのに、誰も受け取りに来ない。

無視ですかー？いい大人がガキみたいな真似を。いい加減イライラするんですけど。何度も声をかけても無視つていい度胸ね。

カルシウムが足りてないのか、イライラが最高潮に達した。

ふふふ、そろそろキレるぞー。

『すみませんが、どなたか書類を受け取っていただけませんか？』

これが最終警告。これで無視なら、自分の身分も何も関係ない。てゆーか、こっちには元々身分なんてもん関係ないんだから。クーンさんや宰相さまに迷惑をかけると思って我慢してるだけだもん。

「……」

つてな訳で、堪忍袋の緒がブチ切れた。ネイ、行つきまーす。

『いい加減にして下さい。そこに付いている耳は飾りですか？いい大人が言葉も理解できないとは、残念なことですね。』

もちろん挑発的に言った訳で。もちろん反応する人が出てくるわけよ。

「女中のくせにそんな口を聞いて、平氣だと思つているのか。」

わざとやったことにこいつも思い通りに乗つてくれるとは、アホ過ぎて怒る気も失せる。でも、言わせてもらひ。言つても無駄だし、私を城から追い出そうとするとは思うけど、そんなの関係ない。

『私は当たり前の事を言つて いるまでです。仕事は仕事。書類を受け取ることすらできないとは、議会が聞いて呆れます。』

おじさんたちの困惑の表情は、面白い。こんな若い女に言われる ようなことじやないと思つたんだらうげど、こうなつたらとことん 言わせてもらひますよ。

「これが卑しい混血の専属か。主人が主人だからか、教育が成つていはないな。」

そう言つて、近くに居る人が近づいてきた。書類を受け取つても らえるのか、と思ひきや、伸ばされた手は、私の頬を思い切り弾いていた。

私の身体は揺れたけど、そこから一歩も動かない。口の中か端が 切れたのか血の味がしたけど、私は泣く事もなくニヤツと笑つてやつた。

『頭に血が上れば、女などお構い無しに手を出すんですね。』

悪いけど、こちとらこいついう状況には慣れてる。殴られたくらいで取り乱したりなんかしてやらない。そして、そんな姿を何とも言えない視線で見てくるその表情も、もう何年来にも渡つて見てきたものだ。

『大人はそつやつて、子供に正しい事を注意されると怒りだす。』

白嘲氣味にそつ言つてやると、目の前の男は顔をもつと真つ赤にさせた。

「Jの人は、クーンさんを侮辱した。これで私が怒らない訳がない。軽く言こぐるめてやがりと思つたのに、そりはいかないほど冷静さを失つていた。

『身分など関係ありません。皆生活するために働いています。その頑張りに上も下もありますから。同じように必死なのですから。』

『動搖することなく、さつきと同じように手を前で小さく組んで、女中のそれらしく言つてやる。懇切丁寧に言つてやるのは、屈辱感を煽るため。そうでなければ、こんな丁寧な言ひ回しなんてしない。』

『働くがざる者食づべからず。ただ書類を受け取ると言つ仕事にも満たない動作をすることありできないのなり、タダ飯を食べているのと同じこと。給料をもらひ資格すらないと言つことになります。』

田の前の男はぐつと歯を噛んでいる。それが自分の非を認めてい る事をよく表していた。

『書類を受け取つていただけますね?』

笑顔で再びやう言つと、今度こそ受け取つてもらえた。その時 の議会の執務室は驚くほど静かで、私の姿に視線を、声に耳を傾けて いることが一目瞭然だ。

丁寧に礼をして。

『失礼いたしました。どうか無礼な言動をお許しくださいませ。』

なんて、ちやっかり自分の言動についてまで謝つてから、そこを

後にして。

廊下を進みながら頬に手をやる。

あーあ、思いつきり殴つてくれかけって。一心ついでに女だぞ！顔に傷でも残つてくれたからどうしてくれよ。

そう考えたら、またイライラしてきた。

これ、腫れちゅうかなあ。とつあえず、冷やした方がいいよねえ。だから、クーンさんの執務室じゃなく、女中部屋に戻ることにした。のは、いいんだけど。

「ネイセモー、そのお顔はどうしたんですねー。」

悲鳴とも近いコアの声がその部屋に響き渡つたのも無理はなかつた。

「こつや腫れてるねえ。コア、落ち着いて、冷やすものを持ってみな。」

あたふたするコアに、その場にたまたま居たマーサさんが指示を出す。それからここコアは驚いていたらしい。

「じゅじゅ田立つ。食堂で行け。今の時間なりまあいい。誰もいないからね。」

手を引かれて連れて行かれる。私は怒られる子供のよう、黙つ

て着いて行つた。

一番入口に近い端の席に座り、ミリアが濡らしてきてくれた布を、頬に当てる。ひんやりして気持ち良かつたけど、ちょっとだけ沁みた。

心配そうな視線を向けて、違う布で唇の血を拭ってくれる。切れていたのか、それから消毒もしてくれた。

「何があったんだ、と聞いてもいいかい？」

私は怒られる覚悟で領き、一言一句漏らさないよう、丁寧にさつきの議会の執務室での出来事を話した。

けど、私が思っていた反応とは違つて、マーサさんは大声で笑い出しちゃつた。

「マーサさん！笑いい」とでは済まないわ！」

一方のミリアは顔が真っ青。やつぱり、普通ならあり得ないような事、じでかしちゃつたみたいだね。

「いや、あんた変わつてるよ。」

私の一連の出来事を笑い飛ばしてくるマーサさんに言われたくなけど、こここの価値観と私が持っている価値観の違いを大きく知るきっかけになつたには違いない。

『正論を言つたつもりだったんですけど、何か変なところありました？』

「無いから面白いんだよ。

とは言え、乙女のやわ肌に傷を作るなんぞ、男の風上にも置けないねえ。ネイの白い肌に傷が付くなんて、可哀相じやないか。」

マーサさんが突いてきたそこは、時間が経つてさつきよりも赤く腫れていた。こりゃ、田立つな。ミリアが持つてきてくれた小さな鏡に映る頬を眺めて、諦めたようにため息を溢した。

『いえ、私もちょっと挑発してやるひつて思つてたのに、イライラが最高潮に達してしまつて。

もう少し考えれば顔に傷を付けないよつて言つておきながらきたのに、これは私のミスですね。』

淡々とやう語つて、自分の中で反省した。

いつまでも相手がぐだぐだと言つてたからつて、私が先にキレたのには変わりない。今度からは氣をつけよつ。

口撃、再び その2

「そう言って見せるところが驚きだよ。普通なら黙まって言えないし、叩かれた時点で泣くだらうからね。」

『私はちょっと変わったらしくですから。叩かれた時には一步も動かずに、叩かれた後には笑ってやりましたよ。』

それより、私、城から追い出されますかね?』

またマーサさんは笑いだした。自分の頬が腫れている事を、そんなこと呼ばわりしたのが面白かったらしい。

マーサさんは、笑い上戸なのかもしれない。さつきから笑いすぎだよ。

でも、私にとつてはそんなことだった。クーンさんの下で働けなくなる方が、よっぽど心配だつたから。

「うーん、五分五分だね。あいつらにも矜持つてもんがある。正論に対して力でねじ伏せようとした事すら、正論で黙らせたんだ。また力でねじ伏せようとしたら、自分たちの非を認めていくようにも思えるからね。そう考えたら、大丈夫かもしれない。」

その言葉に安堵した。

きっと、このことはいろんな人の耳には入らない。それも矜持。

クーンさんの下に面る若い女中に言いくるめられたなんて、絶対に言えない事だらう。それも言わずにただ気にくわないという理由で辞められたなら、不当解雇に違ひない。

「ネイさま、あと一刻ほどでお茶のお時間ですかど、その顔でクーン魔道師さまのところへ行つたら、心配されるのではないですか？」

それを聞いた瞬間に固まってしまった。

『ひじよひ…

『怒りれる？…』

いきなり興奮した私を、一人はびひびと落ち着かせようとしてくれたけど、そう上手くこぐ訳もなかつた。

だって、クーンさんの下に面るのに、クーンさんにとつて分が悪いことしちゃったんだもん。とんでもないことしかしたな、って見捨てられても仕方ないことしちゃつたよ！

私、この世界に知り合になんていないのに、追いつかれたひじよひ…

「議会に対しても怖じもしないのに、やつぱり変わった子だねえ。」

落ち着いてる場合ひじよひ…ひじよひ…

混乱している私の許にヒルさんがやってきて、またひと騒動あつた事は当たり前だらう。

それでも何とか落ち着いた私は女中のキッチンへと行き、ミコアとマーサさんにプリンを「」馳走した。

二人とも美味しいと言つて食べてくれ、エルさんも食べさせたかつた人から好評だったらしく褒めてくれたけど、私の心は落ち着かない。

料理をしてみればいいんじゃないかと言われ、それが単なるエルさんの好奇心だと分かったのは、調理も半ばになつたころだった。

「ネイ、オープンはもうよむつだ。入れるか？」

それに頷き、生地を並べた天板をいれ、私は小鍋の方を搔き混ぜていた。

「いい香りがしてきたな。」

私が料理をしている最中、エルさんはひたすらちょろまかしていた。最初の方は注意してくれていた一人も、いつの間に仕事に戻つてここにはいない。

それくらい、私の心は乱れていた。

そして、どうやって説明して、どう謝るつかも考えていた。

「ジャムはいい頃合いだ。もうやるそろ火から下ろしてもいいんじゃないのか？」

そう言われて、搔き混ぜていた手を止める。よく見れば、煮詰り過ぎておくれいだった。

料理中に考え方なんて。失敗します、って言つてはよつたもんだよ。

なんて、また小さく落ち込んだ。

一刻一刻と私の胸には重しが圧し掛かっているようだ感じられる。それも、どんどん重たくなつていった。

火から鍋を下ろしていると、タイマーの音が鳴り響く、それに反応したのもエルさんの方が早かつた。

「こんな風に焼き上がったのか。パン……のよつだが、それとは違つのか？」

『あ、はい、違いますよ。パンはイースト菌を使つてますが、これはベーキングパウダーで膨らませています。』

私が無意識のうちに作り始めていたのは、スコーンだ。初めて私が作ったお菓子。そして、おばあちゃんが好きだと黙つて食べててくれたお菓子。

「同じみづみ寝かせてたじやないか。」

『いえ、こっちの生地は、混ぜ合わせた材料が馴染むように寝かせただけです。パンのようにイースト菌の作用で膨らんだけはしてい

なかつたでしょう?』

さくさくと第一弾を天板に並べて、オーブンに入れ。それを気にする事もなく、エルさんは焼き上がったスコーンを不思議そうに見ていた。

『温かくても美味しいですが、冷めている方が私は好きですね。それにさつき作つたジャムを付けて食べるんですよ。』

興味津々な様子のエルさんに、実践して見せる。スコーンを一つに割つて、ジャムを付けて食べる様子を見て、真似をしている姿は見ていて面白かった。

何事も初めてのものって警戒するものだけど、エルさんは見事に恐る恐る口に運んでいる。期待を裏切らない反応つて、人が違うだけでこうも微笑ましく思えるのはなんだろう。

さつきのおじさんたちに關しては、呆れてしまつたけど、エルさんはその反応をしてくれること自体が嬉しく感じた。

「う、美味いっ！」

毎度毎度、美味しいと言つてくれる姿に、笑顔が全開になるのは無理もない。私は満足げに頷きながら、残りのスコーンも口に放り込むと、お茶のセットを用意し始めた。

小さな器に三種類のジャムを入れ、大きいお皿に並べる。そのお皿の空いているスペースには、バター、チーズ、そして焼きたてのスコーンを並べた。

「おお、見た目にも綺麗だな。」

また感心してくれている様子は、大きな子供みたいだ。

『またたくさん作りましたから、お好きなだけ召し上がってください。』

エルさんが料理に関わっている事で、最初から多めに作ることを決めていた。初めてのものを食べたがる癖がある事を、たった一日だけ十分に承知している。

「有り難いな。それで、もう一つお願ひして悪いんだが、さつきのと同じように皿に盛り付けてくれないか?」

その申し出に了承をすると少し待つ間に言われ、しじまくするとかを抱えて戻つて来た。

エルさんが持つてきたものは、さつきのシンプルな白いお皿とは違い、バラが描かれている何ともお高そうなもの。

いつも言つのを割つたら洒落になんないよね。とか何とか思いつつ、割つてみたらどうなるかを想像したくなつて、止めておいた。

こんなことを考へるなんて、私つてやつぱり天邪鬼つて言つたが、性格ねじ曲がつてるよね。

じつ、立ち入り禁止の場所に入つてみたくなつたり、触るなつて表示してあるものに触つてみたくなつたりしない?

考へに耽りながらも手は動かし、お皿に盛り付けるとエルさんは

嬉しそうに運んで行つた。

『いや、アロンの人に持つてこよう。』

私もクーンさんの所へ持つていきましたか、と思つてから、自分の仕出かした事を思い出した。

『ビビビ、ビビヨウヒー。結局なんて言つたらいいのか、考ふるの忘れてたー！

一人で頭を抱えていた、調度いい所にミコアがやって來た。

もちろん他の女中さんもいたけど、みんな変なものを見るような目で見るだけで、私に触れてこようとはしていない。

自分でも、それは最良の判断だと思つ。それくらい、今の私は余裕がなかつた。

「あら、やつぱり腫れてしまわれましたね。」

痛そうと叫わんばかりの心配する視線を向けてくれる。ミコアの優しさが垣間見えた気がした。

『そんなことはビーでもいいのー。』

女の子が顔に傷を作っちゃいけないとか、気にするべき事だけど、今はそれ以上に気にするべき事がある。

『クーンさんに分が悪いことしちゃつたから、謝らなきゃいけない

の一』

お茶のセッテの用意も、お茶菓子も用意ができる。でも、肝心の謝罪の言葉の用意はできていらない。

さつとまだクーンさんの耳には届いてない事だとは思つけど、バレるまで知らんぷりなんて、できないもん。

やう齒くじ、ニアの眩きに胸を抉られた。

「そのお顔で何かがあつたことなど、知られてしあうのでは……？」

一応氣を使って、小さく言つてくれたみたいだけど、それが逆に自分の失態を知る大きな原因にもなってしまった。

「女は度胸、ですよ。ネイもま、ijiは早めに暴露してしまった方が、気が楽になるのではないでしょうか？」

イタイ…ニアの言葉が痛い…

尤もな正論は、さつき正論といつも御託をおじさんたちに並べた私には、威力が半端ない。

つまり、自分の美意識的にも、逃げられないひとつだ。でも、さつと一人じゃ成し遂げられない。

『お願い…ニアも付いてきて…』

半分泣きそうなわたしの懇願に、やれやれと言つた様子で了承し

てくれた。

一人きりになる事は、何とか回避された。後はどうやって謝るかを考えるだけだ。

でも、考えても考えても、言葉は見つからなくて。さつきのまつりアの言葉を借りて、ぶつつけ本番でその時に出てきた言葉に任せようとした。

謝罪

度胸、度胸…

ワゴンを押しながら、ブシブシと駆く。ミコアが心配そうな視線を向けてくる事にさえ気づけなかつたのは無理もない。

執務室の前に着いてしまい、深呼吸を繰り返す。どうも間が悪く、クーンさんの部屋に書類を届けにやつてくる人はいない状態だった。こつまでも動けない私に、ミコアが声も出さず田線だけで促してくれる。

分かつてゐるけど、動けません！

田ではそう主張したつもりだったのに、お構い無しにミコアはその重々しく思える扉をノックしてしまつた。

そして言つことには。

「度胸、ですよ。」

とのことで。

私のタイミングなんてお構いなしに、返事も聞こえてこない扉を開けて、私を中心に押し込むような形で突っ込んだ。

書類に田に向けているクーンさんは真剣な顔、そのもので邪魔しちゃいけない気がする。

だから、逃げようとした訳じゃなければ、空氣を読んで回れ右をしようとしたのに。後に張り付いていたミコトは、そこをどこでくれようとはしない。

田で訴えても、何をしても笑顔を張つつかない。

「逃げてはダメです。」

もう一度言おう。断じて、逃げようとした訳でなーーー。

女一人がこしゃらしてくるのは、どうも田へりへりしこ。

「何をしてる?」

そう声をかけられた時には、終わつたと思った。そして、もう逃げられない、とも。

一切受け付けないのでよひしへ。

いつも後ろに立つコアと視線を合わせている状態の私は、クーンさんに背を向けている。きっと、顔はまだ見えていない。

振り返るの、怖い。

「ネイ?」

『「じめんなさいっー。』

振り返った瞬間に頭を下げ、そのまま議会の人たちに何を仕出かしてしまったのか、洗い浚い吐いていた。

『クーンさんの足かせになってしまったかもしません

…本当にじめんなさいー。』

最後にそう言つと、私の勢いは殺がれた。その後には沈黙が残り、誰もが動こうとはしない。

私はもちろん、まだ頭を下げたままだつた。

「…何があつたのかは、よく分かつた。」

静かな声。でも、低くて少し怖い。

私は許して貰えるかどうかが怖くて。必死に頭を下げたままでいた。

「ネイ、話がしたい。向き合つて話しあおう。顔を上げてくれ。」

そう言われてしまえば、そつするしかない。

私はゆっくりと顔を上げた。

「ネイ…その顔はどうした?」

さつきよりも低い声。もつと怖く感じたけど、それでもさつきなり優しく感じた。

勢いよく立ちあがつてこっちまでやつてくる。その手が私の頬に触れようとした瞬間に、扉が開かれた。

「ネイー！ とんでもない事を仕出かしてくれたな！」

すかすかと迷いなく入ってきたその人は、紛れもなく、この王宮でも力を持っている人物。私の知っている数少ない人の一人である、宰相さまだった。

てゆーか、今“とんでもないことじでかした”って言つたよね？！

…バレてる？

「ふりからは何をしたかを知ってる」様子。でも、目の前の人物によつて、私の視線は動かすことができない。

てゆーか、マーサさん、の人たちにも矜持があるつて言つてしませんでしたか？

皆無じゃん！ 早速ふれ回つてみたいたいなんんですけど。

「…宰相殿。少し席を外していただけますか？」リアもだ。

有無を言わせぬ雰囲気。

私としては、一人がいてくれた方が助かるんだけど、そうもいか

なこりしこ。

足音、ドアの開閉音。それがした後は、一つの仮説すらもいなくなつていて、静かなこの執務室の中には私とクーンさんしかいない事がありありと分かつた。

空氣を読んじやつたのね…

レークさんとかだつたらこの状況を引つ搔き回してくれやつ。

けど、せつときから皿を逸がすとも話わなこと言わんばかりの眼差しを向かへくるクーンさんなり、皿ごくるめこやつだとも思つた。

「やの傷は、誰によるもんだ？」

…誰つて、聞こひやこますか、やつ。

早速な質問に、私は答へる「」ことができない。むろん、その人を庇つている訳じやない。だから、素直に言つてしまえば。

『わかりません。』

覚えていないんですよ。

「…底つてこる、ところ訳じやなやつだな。」

当たり前ですよー正論言われてキレ…そんで女の顔を引つぱたくやつのことなんて、何で底わなくやついけないんだって話ですよ。

なんにせよ、クーンさんのさつきの言葉が、私のことを理解してくれているようで嬉しかった。

叱られムードだったのに、不謹慎？

ま、私みたいな人間のことを構つてくれてるってだけで、前に居た家族よりもずっと近い存在に思える。だからこそ喜びだ。

「ネイ？」

『あ、すみません。スパークしてました。』

“スパーク”の意味を問われ、答えに納得されてしまったのは無理もない。カタカナが伝わらないのは、少々厄介だ。

『私の顔つき、ここの人たちと少し違うでしょ？』

「ああ、すこし。」

肌の色なんかは、私は元から白いからそう変わらない。だけど、彫の深さや髪や目の色なんかは、はつきりと違った。

見事にヨーロッパ系の顔立ちだ。

『元の世界でも、私のいた国の付近はアジアと呼ばれています、黄色人種でクーンさんたちの肌や髪の色、顔の特徴なんかが違っているんですよ。』

ここには黒髪の人は確かに一人もいなかった。でも、可笑しな色

はたくさん見かけた。強いて言えばそこで見分けなんかは付くけど、一度会つただけじゃインパクトがないと覚えられないもん。

「では、ネイの国ではみんな肌が黄色く、髪と目が黒いと？」

みんな、じゃないんだよねえ。でも、上手く説明できるか分からぬから、なるべく理解してもらえるように丁寧に話した。

『黄色』、と言つてもそつ変わりませんよ。髪も染めてしまえば黒ではないし、目もカラー・コンタクトつていうレンズを入れちゃえば、外国人と同じになりますね、一応。

でも、決定的なのは顔の造りの違いでしょう？

同じ人種の人の顔の区別は付くけど、どうもほかの人種の方の顔は区別が付き難いんですよ。』

「それでは、分からぬといつよりも、覚えていないと云うことか。

』

腑に落ちたように納得されると、ちょっと傷つくよね。でも、一瞬だもん。頬を殴られたのは。

その後はあの場に居た人たちに、引かれるように努力するのでいっぱいだったし。

見渡せる限りの顔が引きつってた印象はあるけど、一人ひとりを詳しくなんて覚えていない。

『それよりも、怒つてないんですか？』

「それよりも、じゃない。一番重要な事だ。」

何が、と問うと、私が殴られた事だといつ答えが返ってくる。それに少しだけドキリとしてしまった。

「内容 자체は、然して問題じゃない。正論だろ？　この身に何が降りかかる？　と、ネイの身の安全は保障するさ。」

…私はその、あなたの身に降りかかる」とを心配しているんですが。

「怒っているのかと聞いたな。怒っている？　ネイに手を上げたついでに？」

纏つている空気がどす黒く見えたのは私だけだろうか？

「ネイに対しても怒っているんじゃない、心配してるんだよ。

赤く腫れてしまつているな…」

その大きくてしつかりとした手に、頬を撫でられる。私は恥ずかしくなつて、視線を下に降ろした。

ちぢみ、違う意味で顔が赤くなりそーですー！

優しい手つきで私の頬を撫でている。その手は暖かく、少しかさついていて…

男の人ってだつて、そう思つた。

だからこそ、余計に近くに居ることを自覚させられている。

どうも、クーンさんは距離の測り方が難しい。

私は昔から、両親に虐げられてきた。一時はおじいちゃんとおばあちゃんのお陰でなんとかなった私の性格だけど、お父さんに引き取られてからは昔の自分に戻ってしまっていた。

自覚はしていたけど、毎日両親にとられる態度のおかげか、他人に本心は見せられなかつた。…人を、信じられなかつた。

人とは上辺で付き合うだけで、話も上手く合わせてるだけ。本当の自分の気持ちなんて話さないし、話そうとも思わず心に仕舞つてしまふような、サイラーな人間だ。

ただし、口撃して撃沈させることに関してだけは、攻防は考えるけど本心を言つている。だからこそ、もっとサイラーだと言われても当たり前のことだと思つ。

人を観察して、その時の身の振り方を考える。無鉄砲なふりして、逃げることなんて得意中の得意。

いい人だ、と言われる度に、心のどこかが痛むのは、よくない事をしているからでしょ？

そう言われる毎に負い目を感じてるから、そう言われた時に笑顔が引きつらないように気をつけなきゃいけなかつた。

だけだ。

そんな私の壁を、ここの人たちは簡単に崩してしまつ。

ここに来てから、元気で空気が読めない明るい性格で振る舞つて
いる。でも、今はそれが自分自身の根底の中身なんじやないかって
思える。

中でも一番近づいてくるのは、クーンさんだ。

自分のことなんか喋っちゃって、泣き顔見せちゃって。髪を撫で
られている時なんか、その胸に抱え込まれるように自分を預けてる。
それを…心地よく思つてゐる。

人を信じられなかつたはずの私が、信用している。それが事実だ
つた。

「ネイ？」

呼びかけに、現実に引き戻される。上げた視線は、目の前の人によつて囚われてしまつた。

「痛かつたか？」

いつの間にか、考え方の所為で、表情が引きつったらしい。それを、クーンさんは自分が触れた所為だつて勘違いしたみたい。

『『いえ、大丈夫です。少し嫌な事を思い出してしまつただけなので。』』

そう言ひつと、今度はクーンさんが顔をしかめた。

「それを、俺が聞くことはできるか？」

クーンさんに聞かせる…？

私は戸惑つた。

今までもそつだけど、クーンさんはいろんなことを話しあげちやつてたから。私の祖父母のこと、両親のこと、新しい家族のこと。

普通なら引かれるか憐れまれるような話なのに、クーンさんはそ

れを聞いた今でも前と変わらない態度でいてくれる。

それを、今度こそ失つてしまつ氣がして、怖い。

だから、笑つてしまかした。

『今話してしまつと、長くなります。

宰相さまが外でお待ちでしそう？それに、クーンさんだって今日は神殿へ行くために仕事を早く終わらせなければいけません。また今度にしましょう。』

精一杯だった。

どうか、忘れて。お願ひだから、聞かないで。

そうしないと、今度こそ見限られちゃうから。

「… そうだったな。」

そう言つと、私の脇のすぐ傍にある扉を開いた。

「どうぞ。」

待つてました、言わんばかりにドカドカと入つて来たその人に心癒されながら、少し空気が軽くなつた気がした。

そんな風にあからさまにほつとした私を、クーンさんが見ていたことになんてこの時は気付かなかつた。

「今日一田でネイは有名人だ。…と、さればどうした？クーンにやられたのか？」

まさか！クーンさんは優しくしてくれじゃ、殴つたりなんてしないって。

多分それは辞相さまも分かつてゐること。

きっと、わざとだ。私とクーンさんの間にある壁が重苦しかったから、きっと変えようとしてくれたんだと思う。

「私はそんな事いたしませんよ。」

いつの間にか定位置に戻つて書類に田を向けている。それ今までの一連の出来事が嘘だったみたい。

「しかし、聞いた話にはネイが怪我をしていることは入つていなかつたが…」

どうやら、複雑そうだ。そして、話は歪曲しているに違いない。これは詳しく聞いて、私にとつて悪い物だったら、報復してやらねば。

一瞬ニヤッとしてから、私はいつものように笑顔を張りつけた。

『宰相さま、詳しく述べ聞かせて下さい。私も事実のみをお話しますか』

お茶の用意もありますから、と言つと、宰相さまは喜んで運び込まれたばかりの机の方へと進んでくれた。

「これは？」

お茶、そしてお菓子を並べる。

今までにないものだつたからか、宰相さまは不思議そうで楽しそうな表情を浮かべている。その顔はレークさんと重なつて見えた。

『スコーンといつね菓子です。アフタヌーンティーの習慣があるイギリス、という国が発祥のお菓子です。ジャムを付けてお呑じ上がりください。』

カップに紅茶を注いで、一つは宰相さまへ。もう一つは黙々と仕事をしてくるクーンさんの元へと置いた。

『クーンさんも、よかつたら呑じ上がってください。乗せるものとしてバターとチーズも用意しました。あまり甘くありませんよ。』

そう言つた私はいつものことながら顔を上げてもらえなこと思つたけど、今日は少し違つていた。

顔を私の方へ向け、じーっと見つめるような視線を送つてくる。

わつと、わつきのことがあつたからだ。私は笑顔が引き攣らないようになるので精一杯だった。

「ネイもこちらに座りなさい。詳しい話を聞かせてもらいたい。」

そう言われ、私は席に着く。そして、何があつたのか四度目になる話を語つた。

「…隨分と、やらかしたようだが、正論だな。無能な奴ほどよく吠える。おまけに、最後の乙女へ手を上げるなんて…」

そいつの首をどう切りやがりつか。」

ステイ、ステイっ！宰相さま、何か黒いものが出てます！

その重苦しい空氣の中、私は笑顔を張り付けながら紅茶に口を付けて何とか視線を逸らした。

血の繋がりなんか無くたって、間違いなくクーンさんと宰相さまが親子だってことが確認できたよ…

『宰相さま、私が、最後の乙女へと決まつた訳ではないですし、そいつであつても表に出る気はありません。』

その事を知らない議会の人たちにとっては、単なる小娘に違いありませんから。』

どうかそのまま黒い靄を引き取つてください…

そう言ひ気持ちを込めてさつと書つた。

そして、最も気になること。

『で、宰相さまがお聞きになつた噂つて、どんなものなんですか？』

「これを聞かなきや始まんない。内容によつては、どう報復するか
考えてやらなきやなんないからね！」

私はこそ黒いつてことは、重々承知してゐるし……やられたら二倍返
しが必須でしょ。

「いや、噂も聞いたが、実際はクーン付きの専属を辞めさせると直
接言われたな。」

なつ！

私は驚いて言葉も出ない。マーサさんが言つてた矜持の話が頭の
中を過ぎ去り、そんな事を考へるような人間でないことがよく分か
つた。

「今ネイから聞いた内容は、一切違つていたがな。そして、監督不行届きでクーンに対しての処罰も望まれた。」

…やつぱり。迷惑、かけちゃつたんだ。

「まあ、一蹴してやつたがな。」

頼りになります。

ほんと、権力つて大切だよね。

『あの、その…噂、つてどんなものなんでしょうか？』

おおおおと聞いたけど、これが私の一番聞きたかった事だ。

絶対最悪だと思つ。あの人たちのことだもん。無いことだらけで話したりしてゐるばず。

「言葉遣いが成つておらず、態度の悪い女がクーンに付いた」と。

「ほつほー。言つてくれますねえ。

「その女にクーンが絆されている、と。

今まで女に興味がない様に振る舞つていた愚息だからこそ、この噂はおそらく貴族のお嬢様たちにもふれ回るだらう。「

…更なる敵を作つたか…

ここは異界の地。人間の上下関係やら、制度やら、時代背景それも違つ。

現代の日本社会とは違い、女や庶民に対しても差別があるのが現実だ。

階級制度の所為でここにいる貴族は増長していくようしか思える、つてことは、つまりその娘さんたちも、そう言つ事だ。

たつた一回の出来事で有名になるつてのは、随分と大変なことをやらかしちゃつたみたい。

「…なんだ、その噂は。俺がいつネイに絆されたというのだ。

それに、ネイの態度や言葉遣いも、きちんととしている。根も葉もないことだらけだ。」

ホント、私もそう思つよ。尾ひれに胸鱗、おまけに背びれまで付
いちゃつてる。どれだけ話を大きくすれば気が済むのよ。

『私、悪女決定ですかね?』

「そのようだな。」

呑氣にお茶を啜りながら、肯定しないでぐださーーいつちは死活
問題ですよ。

殴られ解いて、お役御免とあつちやあ、生活していけないって。

城から追い出されても良いけど、とりあえずここに留まって鏡盆
に触れなきやいけない。それが終わつたら、どうしようかな…

どこのかお給金が出るところで働いて、生活していかなきや。私、城
から出たつて言つても、クーンさんの家まで馬車で移動してたから、
城下のことなんて知らないんだよね。

生活水準つて、どんなものなんだろう。

「おお、これは美味しい。ネイは料理屋が開けそうだ。」

!

『それだー。』

思いついたと言わんばかりに声を上げれば、急に出た大声に一人
は何事かと目を見開いていた。

「どれだ？」

「ひかりはびこてきて、椅子に掛けるクーンちゃん。その手には、わざわざ私が運んで渡した紅茶のカップがあった。

『どうやら休憩するひじこ。

調度いい頃合いだと思って、お代わりを注ぎ入れる。その時に、さつきのこと話をした。

『鏡盆に触れてしまえば、私が城に来ることはないですね。そうしたら、お給金が貰えるところで働いて、そのうち小料理屋でも開けつつと思って。

私が作る料理はどうも珍しいみたいだし、流行るかもしれないでしちゃ』

『この料理水準は高くないし、高級料理とまでは行かなくとも、あつとそれなりの値段で提供できる。

『そしたら、がっぽりだ。

「…それもいいかもな。だったら、軍資金が集まるまでは、うちに働けば良い。住み込みで働けば部屋代や食事代が浮くし、早く貯まるだひづ..」

『あ、食べててくれるー。

クーンさんの提案にびっくりして皿を向けると、スコーンを口へ

運んでくれている姿が田に入つて嬉しくなつた。

「おい、私には裏が読めるぞ。それではお前が嬉しいだけではないか。」

『?』

どうやら、親子で意思疎通しているらしい。私には一人の会話の意味がわつぱりだ。

「でも、それもいいだらう。ネイが表舞台に出たくないのであれば、仕方があるまい。譬えネイが『最後の乙女』であつと、私はお前自身が気に入つてゐる。

お前がしたいようにすればいいぞ。」

「こり笑つてくれる姿には、今度こそ黒い物は見えなかつた。心からの笑みはなんとも安心できますよね。」

「ただ、その白い肌に傷を付けるとは。」

「本当に許せんな。」

息、ぴつたりですよね。

でも、一番驚くべきことは、一人が私のために怒つてゐるという事。

おじいちゃんとおばあちゃん以外には、未だ嘗ていなかつたような存在。私は俯きながら紅茶を飲み、涙が出るのを堪えていた。

ひとなことしてたら、またクーンさんが心配してくれちゃうんだ
るつな。やう思つて少しだけ、また嬉しくなった。

『お疲れ様でした。』

おそれらへ夜7時^じ。こつもよりも早くクーンさんの仕事は終了した。

書類を届けて戻って来たところに、お茶を用意して待っていた。うん、女中としての働きはなかなか悪くないはずだ。

今日はもう何回か書類の配達をしてみてたんだけど、かなり多くの好奇心にせられて大変だった。

元々格好や黒髪黒目のおかげで目立つてたからそう苦にはならなかつたけど、私の悪女説は完全に浸透しているらしい。変な視線を感じるからね。

まだそれなりい。クーンさんに迷惑にならないもん。

哀れまれてる分だけ、私が悪目立ちするから。クーンさんはただ悪女に操作されてる男ってことでしょう？

「ああ、今日は助かった。」

私の横で、椅子に力無く体を預けている。本当に疲れている姿が見て取れた。

多分だけど、私のこととか聞かれたりして大変だったよね。

何か言葉を返さなくちゃ。そう思ってみても。

『…『めんなさい。』

謝ることしかできなかつた。他の言葉が思いつけなかつた。

また私の所為で負担をかけた。負担を減らそうとしたのに。

「謝るな。ネイは俺が言えない事を言つてくれたんだ。嬉しくよ。」

優しい微笑み。この人は、全てが優し過ぎる。

私は、そんなに良い人間じゃないから。その優しさに触れる度に、心が痛くなつた。

「ネイ?どうしたんだ?」

手を差し伸べてくる。纏っている空氣さえもが柔らかくて、今の私には刺のよう刺さつた。

「そんな顔するな。」

次の瞬間、私の視界は黒く埋まつていた。

温かい感触、頭をなでる手。仄かに香る優しい香り。私はクーンさんの全てに包まれていた。

「ネイのその表情を見るのは辛いんだ。」

腕を引かれ、いつの間にかその胸に顔を埋めていた。

座っていたクーンさんには、膝立ちしている状態になつていて、あらう私の全体重が掛かっている。

重いだろうからと身動きしてみても、がつちりと固定されていてできなかつた。

「泣きそりで悔しそうで、辛そうな、そんな顔見たくないんだ。」

上から声が降ってきて、その心音が聞こえてきて。少し心地よくなつてくる。…ずっと、ここに居たくなる。

でも、駄目だ。

私が関わつたら、駄目だ。私になんて関わつちゃつたら、ろくな事無い。

気持ちや表情を「まかすなんて簡単なこと。昔から慣れてる。

人と深く関わっちゃいけない。表面上は大丈夫でも、私は人を信じることが上手くできないから。裏切られた時に落胆する辛さは誰よりも知つている。

人に深く関わっちゃいけない。私と接点を持つことで後悔させる羽目になるから。自分の嘘に気付いたら、良心が痛む。

『大丈夫、私笑えます。』

胸の辺りを押して、私はクーンさんから離れて立ちあがつた。

明るくなつた視界には、クーンさんが入つてくる。やつぱり心配
そうな顔をして、私を見上げていた。

「悪いが、俺には大丈夫そうには見えないな。」

意志の強い瞳は、深い紫の奥がギラついて見えた。

『大丈夫。』

これはクーンさんに言つてるようで、自分に言い聞かせていた。

大丈夫、ひとりでも大丈夫。

一人になつたときの孤独さや、信頼していた人がいなくなることは、辛いことだ。だつたら、始めからそうならないようにすればいい。

『あ、私、夕飯も用意したんですよ。レークさんも来るみたいだから、用意してきますね！』

そう言つて、部屋を飛び出した。

とぼとぼと廊下を進む。

この時間は人もそつ多くはないから、視線も気にならない。厨房へ行くと、夕飯の時間帯で忙しそうに見んな働いているようだつた。

温かい料理を出す為に、急いで仕上げて盛り付ける。

私は用意していた夕食用のワ'パンをハサツと引いて、部屋に向かつた。

「ネイさんー。」

執務室へ着く少し前。ちゃんと顔が作れるか心配で、ビリも歩調はゆづくつになっていた。

そんな私に後ろから声をかけてきたのは、レークさんだった。

「今日は大変だつたよつですね。」

あらり。そこまで噂が広まつちやつてゐるんですか。

思わず脱力。そんな私の行動から思考が分かつたのか、面白そうに笑う声が隣から聞こえた。

笑い」とじゃないんですけどー。

すみません、つて言いながら、田元をねぐつてくる。そんなに笑わなくともいいと思うんだけど。

「きつと私が聞いた噂は増長したものなんでしょうな。」

分かってるんなら、私の顔を見ただけで笑わないで下さいよ。

そういう意味を込めて、半眼でじとーっと睨みつけた。

だつて、私やクーンさんに取つたら笑い」とじゃないもん。って、

そんだけのことじでかしちやつた私が言ひにじやないけど。

「夕食をとりながら、面白い武勇伝でも聞かせて下さー。」

楽しんでるよ、この人。

矜持なんか持ち合わせてない議会の人も厄介だし、話を聞かない騎士団の人も厄介だ。

でも。

誰が一番厄介かつて、このお方！ レークさんに違いない。

このは空気が読めないんじゃない。読めないふりをして引き回してるだけだ。

これは、性格ねじ曲がって、人一倍状況が読める私だから言えること。状況をこちやまぜにして楽しんでる氣がある。

最初は誰よりも優しい人だと思つたけど、笑顔だけだ。誰よりも心根が優しいのはクーンさんに違いない。

そう思つたことでもつきのことを思い出して、何となく戻り難い思いがぶり返してきた。

それでも、歩を進めていれば勝手に田的位に付いちやうわけで。一人揃つてクーンさんの執務室に入ると、あからさまに脱力していその部屋の主の姿が目に込んだ。

「なんですか、その態度。あからさまに失礼ですねえ。」

思つてもない事を。

なんて、一連の出来事の所為で思わざるを得ない。私はいつもながらの半眼で睨めつけるだけにとどけた。

『今すぐ用意をしてしまいますね。』

二人には積もる話もあるだろ？。今日は大切な事をしなくちゃいけないし。

用意が終わると、二人は挨拶をしてから食べ始めた。

「これは、美味しいですね。」

『すみません。いろいろとあつたもので簡単にできるものしか作れなかつたんです。』

今日の夕食はスープとサラダとパスタ。カルボナーラだ。

「これが、簡単なのか？」

少々驚きながら味わっている様は、さつきのことと思わせないほど自然な会話だった。

『簡単ですよー。いつものお料理の半分の時間もかかっていないですもん。』

自分も出来に満足しながら口に料理を運ぶ。簡単だけど美味しい一品つてここだねえ。

「ネイさんは本当に非の打ちどころがない女性ですね。引く手数多
でしょ、う？」

またまたこの人は。思つてもない事を。

『そんなことある訳ないじゃないですか。』

笑つてそう言い放つた。そんな私の笑顔に笑顔を返してきたレー
クさんは、やっぱり強者だと思つ。

だんだんレークさんつて人が分かつてきた気がする。

「これを食べ終わつたら神殿へ行くことになる。それによつて、今
後の状況が変わつてくるだらう。」

真剣な声に、思わず背筋が伸びる。「これからどうなるか、とか分
かんないけど、とりあえず流れに身を任せてみることにした。

食事が終つて、食器も片付けると、私はレークさんが用意してくれた神官服に着替える。白いワンピースみたい。

そんな感想を持つ服の上に、また白いマントを重ねる。

髪は下ろして耳の下で一つにまとめた。マントにつけてるフードを深くかぶつて、つて完全に危ない団体の人じやん！

でも、顔を見られない方がいいんだって。髪もわざわざアレンジのは、性別が女だつてばれなことつて言つ配慮りしこ。

私の変装りしきものが完成すると、とうとう執務室を出て、神殿へ向かうことになった。

なるべく俯き加減で歩くよつて言われてその通りにしてるから、今どいら辻を歩いてくるのかは分からぬ。

そうでなくとも、城の中をきちんと見て回つたことなんかない。逸れたら大変そうだな、と思いながら、前に居るクーンさんを追い、レークさんの横に並んで歩いた。

小さく呟くよつな声で会話を交わす「ひとひま、どうやら神殿はこの城の中心にあるらしい」。

「この城は真ん中を囲うよつて高い建物があり、その中心にはジア教の神殿があるのでござる」。

「神殿は神聖な場所ですから、この神官たちのこの衣装でいるのです。これは無垢という意味が込められているのです。

王は神の御子であり、私たちはその御子であります。そんな子供である私たちは純粋無垢でなければならぬのですよ。」

「どうやら戒律やら何やらと色々あるらしい。その話は長くなつたから、また今度と言つござまかした。

レークさんつて、自分の興味があることを話す時は長くなるから別に、面倒とか思つてないけどね。

『神様を祀つてるんですよね？ 鏡盆つて何のためにあるんですか？』

戒律はともかく、どういつ様式なのは知りたい。

日本では鏡が御神体だったりもするけど、鏡盆もそういうもののかな？

「鏡盆とは神と御子を繋ぐもの。神の心を映すものと言われています。

神が気に掛けているのはこの国のことであり、国内の情勢を隈なく見せてくれるのです。」

「え。そんな力があるんだ。

レークさんに見えるものがどんなものかは分からぬけど、そんな力があるんなら、私なんていらないんじゃないのって思う。

ちゃんと確立している訳だし、イチイチ最後の「女」とか引つ張り出さなくていいんじゃないの？

考えてこらへり、どんどんと近づいて行く。

たどり着いた時。

神聖、といふ言葉が、初めて理解できた気がした。

もうはい。むしか、それしかなかつた。

顔はまだ隠したまま。何人かとすれ違つたから、フードもまだとつていない。だけど、一歩踏み入れた時、空気の違いに呼吸を思わず止めていた。

「もう顔を上げても大丈夫ですよ。」

そう言われてフードを取ると、広い空間が広がつてゐる。今まで言つたことがある場所の中では一番無機質で、最も澄んでいた。

白い石造りで、浅く一段下がつた円く広いところには、透き通つた水が入つてゐる。その真ん中には同じような白い石の腰辺りまである台があり、上に銀色のものが乗つていた。

あれがきっと鏡盆だ。

「どうした？」

優しい声が掛かる。それに応えようとしたのかは分からぬけれど、無意識に言葉が口から零れていた。

『…綺麗。』

でも、怖い。

それさえも零れ落ちたらしい。わざとと同じように問われ、私は田の前に広がる景色に囚われたまま答えた。

『…で感じるのは神聖さ。それ故の恐怖。

でも、今まで一番心地良い場所。』

口走つたことに戦いて、私は視点を横に屈る一人に会わせた。

『…めんなさい、変な事言っちゃって。』

私の言葉に対し、特に何を思った訳でもなかつたのか平然としている。つぶたえているのは私だけだった。

「…え、変な事ではありません。むしろ、ネイさんが…最後の乙女へであると、再確認できた気がします。」

そう言われてしまえば、困つてしまつ。だって、そうなりたくないから。

困つて周りを見渡し、水辺が気になつて近づく。溜まつている水に手をつけてみた。

「あ…」

何か言いたげな呟きに、振り返る。一人は吃驚して固まっていた。
どうしたのかを訊ねると。

「その水は、人によつては毒にも清水にもなり得るものなんです。」

毒…？

思わず手を丸くして手を持ち上げる。どこも痛くないけど、ちょっと怖い。私、根っ子が真っ黒ですからね。

どれだけ人を言い負かしてきたか…

恨まれてたつて、当たり前だと思つ。

「ネイさんは、大丈夫ですよね。」

納得しているレークさんをじっと見つめてしまった。彼の中でそれはもう決定事項らしい。

「もちろん神官である私は平氣です。でも、面白いことに、クーン殿も平氣なのですよ。」

「ヤツと笑つたよつて一瞬見えたのは、私だけだろうか。てゆーか、私の中のレークさんは、もう腹黒い人に格上げされていた。

「クーン殿の身の上はご存知でしょうか？」

身の上って、あれだよね……？陛下が腹違いの兄にあたるってヤツ。

昔は王族で、継承権を放棄したって言つてた。元王様に認知してもらえたかったっていう話しが、私の中では一番印象に残っている。

私がゆっくりと頷くのを見ると、面白そうに語りだす。クーンさんが止めようとしたのは、無意味らしい。

「王に認知されなかつたのに、王族となり王位継承権が与えられたことを不思議に思いませんでしたか？」

そう言われてみれば。認知されないことは、王家には成れないはず。でも、継承権を持つてたつてことは、何かしら原因があるってことだよね。

「クーン殿が確か4歳のころ、ここにいらしたことがあります。やんちゃ盛りだったために、城中を駆け回り、ここに入り込んでしまつたのです。」

クーンさんにも、そんな時期があつたんだね。きっと可愛かったんだろうな。

思わず想像してクスッと笑う。目を向けたその人は、少し不機嫌そうな顔をしていた。

『その頃のクーンさんに会つてみたかったです。』

私の発言に、ちょっと不満そつだ。その表情を見られただけで満足。

「一人の顔を見合わせて、一番面白がつてしているのはもちろんのことレークさんだつた。

「私はもうじいじで修業をしていたんですが、あまりにも印象的だったのではつきり覚えてますよ。

入り込んで走り回つて、床に滑つてこの清水の中に落つこちたんです。」

ああっ、やっぱり見てみたかった！身もだえするほど可愛かろう…とか、勝手に想像してみちゃつたり。女の子ですから、妄想は大得意です。

「普通なら、この水は毒となります。清水になることはやつ滅多にありません。

王家は平氣ですが、興し入れしてくる方たちでさえも、毒となるのです。お年を召した貴族さまたちは彼を卑しい血として卑下していますが、この清水が認めました。

駆けまわっていたクーン殿はこの水に落ちましたが、何ともありませんでした。そのために、繼承権が認められることとなつたのです。」

なるほど。そういう経緯があつたつてわけか。いちいち此処の人つて面倒なことするんだね。簡単に認めちゃえばいいものを。

「別に、認められた訳ではないだろ？。」

不満げに言つてゐるクーンさんが、少しだけ可愛く見えて笑つてしまつたのは内緒だ。

「さて、長話はここまでとしまして、最速当初の目的を果たすことにしましょうか。」

さつきと表情は変わらないのに、緊張感が走つた。私は急に背筋が伸びた気がして、その場に佇む。

促され、一步、また一步と近づく。さりするにつれ、何かが変わつてしまつ心地がして、足が重くなつた。

振り返つてみると、レークさんは相変わらずの笑顔を張り付けて、先へと促している。もう一人の人物は、射抜くような強さの視線で私を捉え、それでもどこか見守つてくれているような温かな雰囲気を纏つっていた。

進まなきや。

思いのままに、歩を進めた。

手を伸ばす。鼓動が速くなつた。

触れる瞬間に戸惑い、それでも手を伸ばす。

ひんやりとした感触がした瞬間に、それは眩いほどに感色に発光した。

目を開けていられない。だけど、自分の視界にはしっかりと鏡盆

が見えていた。触れているものは冷たいのに、包まれる光は温かい。

…不思議な感覚だった。

“名を…我が名を呼べ…”

囁くような声がした。美しく、この世のものとは思えない。

何とも言い難い感覚に囚われた私は、いつの間にか気付かずに涙を流していた。

名前？貴方の名前なんて知らない。

“知っているはず。この世界に来た時に教えたものがあるはずだ。呼べ、ならば我は応えん。”

この世界に来た時…？アホ神には会つたけど…

…あ！

私は、思い出していた。

『“ジュノワール”』

次には光はさらば眩くなり、完全に目を開けていられなくなる。しかし光が瞼の裏まで伝わって来た。

徐々に弱まる光。余りの強い刺激にしばらくそのまままでいたけど、声を掛けられてゆっくりと開くことになった。

「やあ、元気にしていたかい？」

嫌な予感はしてたんだよ。期待…はしてなかつた。だけど、そう言つ類のものを裏切らないつてのが、このアホ神だ。

本当に神様だつたとは…世も末だよ。私、この神に殺されそうになつたつてのに。

「君つてば、全然呼び出さないんだもん。僕、焦っちゃつたよ。」

うわー。緊張感の欠片もない。どうにかしてよ、この人。いや、この神。

本当なら敬うべき存在なんだろうけど、そんな気がしないのは何故だろう。

それはきっと、今度は木馬に乗つている所為だからだ。

守人

『あんた、ホント余計な事に巻き込んでくれちゃって…これから的生活、どうしてくれんの?…』

緊張感の欠片もないこの御方は神様であるらしい。

…確かに見た日綺麗だし、そんな感じはしないでもないけど、認めたくないって思つちやうのも仕方ないと思つ。

さつき、なんで泣いちゃつたんだろう。私の涙を返せ！

「なんだい、あの時みたいに熱烈な視線を向けてくるなんて。

あーこの馬はあげないよー。」

『へりん…』

デジヤヴ…

また誰かからぱくつて来たんだるうなあ。

ホントに神様かよーと言つシッ ハリを、誰かに委ねます…

「ネイさん、そこに神様がおられるのですか…？」

こつにも無く真面目な表情。レークさんはそこそこ光があるよう

に見えるらしい。一方のクーンさんは何の変哲もない景色にしか見えないんだって。

つて、そんな事言つたら、私つて何もないじりに話しかける変な人じやない？

「」の神に付き合つて会話なんてしてたら、私の人間性疑われちゃうよ。

「あ、君今失礼な」と思つただろう。

何でわかるのよ。変なとこ敏いって言つたか、自分の悪口に敏感つて言つたか。

「一応神様だからね。分かるさ。」

うわー。自分で神様言つちやつたよー。

私には頭の変なお兄さんとしか思えないね。

「君、もつ少し包み隠すつてことを覚えた方がいいよ。」

私の考えていることだが「」とく分かるのか、少し嫌なものを見るような目を向けてくる。だけど、私は気にならない。

言いたいことははつきり言わないと、特に、」のテンポや空気が読めない人にはね。

『じゃあ神様は、もう少し人を思いやることを覚えた方がいいよ。』

失礼だらうけど、本当にそうだ。

だつて、私初対面なのに思いやりがないと罵られた上に、砂漠で脱水症状と熱射病起こして倒れたんだもん。

神様がもう少し考えてくれてたらそんな事にはならなかつたし、現代の日本社会では夏に熱射病で倒れる人が少くはない。そのま命を落とす人だつているんだから、本当に危ない。

「まあ、それに関しては考えない事もないが…」

「あ、ないんだ。いい傾向だね。」

「で、詳しい話を進める前に、<最後の乙女>の証明のため、守人一人を選び抜こう。」

『守人?』

つてゆーか、私が<最後の乙女>なのは決定事項な訳?

アホ神に背を向けてぐるぐると思考をめぐらせていると、何やら難しそうな顔をする一人が目に入った。

何て言つか…物申したいって顔してる。

『…何か?』

「ネイさん、いくら貴女が神信じておられなくても、そこに神が在るとわかつたのならば、敬う心を忘れてはいけません。」

はい、早速お説教をいただきましたー。

でも、この人の、いやこの神のどこを敬えと？！

まさかの子供の遊び道具、木馬に乗ってるんだよってゆーか、木馬なんて私も初めて見たし。

そんなナリの神をどう敬えつて言つんだ。

「とりあえず、事実を知りたい。ネイはく最後の乙女へで間違いないんだな？」

「あ、こいつあの時のガキ！水に落ちこちた時は面白かったなあ。」

「やっぱり最後の乙女へでしたか！神がそこにおられるのですね！」

・ · 大騒音。

私が答えるよりもます。

『全員黙れ！一度に喋るなー！』

私は聖徳太子じやない。10人どころか、3人の話だつて同時になんて聞けやしないから。

つて訳で、キレた。

「 「 「 」 」

静けさが広がり、私は満足して三人の顔を交互に見る。それぞれがなんとも表現し難い表情を浮かべていた。

『まずは確認します。存在はともかく、二人はジュノの声が聞こえますか?』

「なんで省りや . . . 『黙つてって言つたでしょう?』

笑顔を張り付けて言つと、押し黙る。

最初からそうしてよね。何度も注意するの、面倒だから。

ジュノから二人へと視線を移すと、横に首を振つている。つてことは、ジュノが言ったことを通訳する必要があるってことだな。

『ジュノ、さつきの守人の説明をお願い。』

「それが神様に対する態度かい?えーと…まあ、いいとするか。

ネイが「最後の乙女」であることを証明するための者が二名必要になるんだ。その人には、君を介して僕を見るようにしてあげるんだよ。』

私一人がアホ神が見えてるつて言つても、証明するものがないか

ら守人を作る必要があるってこと?

ややこしいなあ。

『それで、その人たちを決めるのはジュノなの?』

「ああ。調度良いだろ?、そこの一人が。頭数も揃つてるし。」

……

そんなテキトーでいいんかい!

ジュノの指した先には、クーンさんとレークさん。確かに一人が揃つてるけど……こさか安易すぎませんか?

私が急に視線を向けると、二人は私をずっと見ていたのか目があつた。

「さあ、説明は一度で終えた方がいい。そこの一人を君の横に呼んで。」

「いっ、ちょっとだけ私に似てるのかも。とか、思つててげんなりしちゃうけど、思いついたら即行動に移るところなんかがそつくり。

本当はもう少し詳しく話をしてもらつてから、状況を把握してから、行動に移したい。だけど、このアホな神様は早くと催促してくれる。

仕方なしに嘆息を溢し、二人を手招きした。

『二人とも、こちらに来ていただけますか？』

何事が、と言う顔で近づいてくる。てゆーか、さつきからずっと混乱したような表情を二人は浮かべていた。

でも、それは私も一緒に。

私だけ神様と話しているからとつて、きちんと状況が出来ているかと言つたらそういうじゃない。むしろ、状況は悪化している一方だ。

「君を挟んで左右に立つてもらつて。」

ジューの指示通りにする。でも、ここにでちょっと待つたをかけて、二人に問いかける。

『貴方たちを私の運命に巻き込むことになります。』

…正直に言つて、私はお一人にこれ以上迷惑をかけたくはありません。もし嫌なら、これから私も何が起こるのかはよく分からないし、理解も出来ていないけど、断つていただいて構いません。』

どうかを訊ねると、レークさんは一秒と間を置かずに了承をしてきた。

神官なのだから、神の関わることに自分の身を置くのは当たり前だし、当然の務めなんだって。

嬉々として言つて見せたから、本心なんだと思つ。

「ネイに関わることについては大丈夫だ。むしろ歓迎する。

しかし…俺のような卑しい血と呼ばれるものが、神に関わっていいのだろうか?」

自分のことを“卑しい血”と呼ぶなんて。思わず眉を顰めてしまつた。

クーンさん、いい人なのに、周りの評価はどうしてこう、伴つてないんだろう。誰よりも努力して、誰よりも高みを目指せるような人なのに。

つて、真剣に考えてしまつたのは私だけだったみたいだ。

「オッケー、おっけー、オールおっけー！

ほかのヤツらになんか任せてられないでしょ。この清水が認めた人間なんて、少ないからねえ。」

本当に、緊張感と言つものを持つて欲しいと願つてしまわずにはいられない。なんでこんなに間が抜けたような発言しかできないかなあ、と思いながら、表情が変わらないクーンさんを見て、ジユノの言葉が聞こえていない事を思い出した。

『大丈夫だつて言つてます。清水が認めた人間は数少ないから…つて、清水が認めた人間しか守人にはなれないの?』

途中から、話しかける人変わっちゃった。

視線をジユノに向けると、うんうんといつぱいでいる。てゅーか、木馬をギコギコ動かすの、やめなさいよ。

「守人？私も初めて聞きましたが、清水が認めた人間が選択される何らかのものなんですか？」

『うん、く最後の乙女』の証人らしいです。

一人にこんな事言っちゃあなんですが、このアホ神、残念過ぎるんで、会話を交わした時に、がっかりしないで下さいね。』

私の言葉にジユノは少々不貞腐れてるけど、事実だもん。先に言つとかないと、神様に期待してる分だけ、会つたときに残念な思いをするに違いない。

一通りの確認が終わって、私たちはいま、鏡盆の前に立たされている。右手をクーンさんの手に、左をレークさんの手に添えていた。

「じゃ、さつき教えた通りに。さあ、はじめようか。」

映画監督ばかりにしているジユノは放つておいて、さつわと事を進めることにした。

守人 その2

“ よーい、アクション！ ”とか、そんなの映画がないこの世界のどこで覚えて来たんですか。

一度手を離し、鏡盆の中の水に触れる。それは、下に広がる水よりも温かく、柔らかさを帶びていた。

清水で濡れた手を、二人に預ける。

『 レーク・ビギンズ、これより貴方に神の加護を授け、
女ゝの証人として守人の役を授けます。』

受け取つていただけますか？』

気恥ずかしい。上から目線で言つてる感じが、何とも氣分が悪い。

けど、ジユノ田くおじそかな空氣の下に行われなくちゃいけないからつて、お得意の猫かぶりでそんな空氣を醸し出すように言われた。

「はい、貴女に忠誠を。」

膝間づいて、手の甲にキスを落とされる。

あーっ、恥ずかしいったらないよ！

顔が赤くならないように、つてのはムリだけど、そつであつても表情は変えないように心がけた。

『クーン・リッキンデル・デューグ、これより貴方に神の加護を授け、く最後の乙女』の証人として守人の役を授けます。

受け取つていただけますか?』

「…貴女に忠誠を。」

そう言つて落とされるキスは、先のものよりも恥ずかしくてドキドキする。少しかさついた冷たい唇が触れたところが、少しだけ熱くなつた気がした。

と、クーンさんの唇が離れた瞬間、私が鏡盆に触れた時のよう光が放たれ、神殿を埋め尽くす。

建物の中にいるのに、風が吹いて神や衣服を揺らした。

“お前たちに、わが名を呼ぶことを許そつ”

あ、またこの感覚。涙が目の中から自然と湧いてきて、流れ落ちていく。

風と光が止んだ。目を開ける前に、私の頬に手の感触がする。

ゆつくつと目を開くと、クーンさんの手が私の頬を伝づ涙を拭つてくれていた。

「やつだー、僕の前で僕の乙女とイチャイチャしないでよーう。」

…やつちまつたよ、この神様。

最も敬われるべき存在のはずなのに、一発目に間抜けな姿を吐露していた。

「神、さま…このお方が…」

レークサーん。この人、そんなに熱い視線を送れるような人じやありませんよー。

聞いてますかー？

つて、無理だよね。この国の神官様なんだもん。ずっと、恋焦がれていた存在に違いない。

それよりもまず。

『私がいつあんたの乙女になつたつて言ひつの。』

僕の乙女、とかイチャイチャ、とか聞き捨てならないぞ。

「この方が、神…」

例によって、クーンさんも固まっています。

敬う存在なのは知っている。でもその前に。

何故この神の格好を突っ込まない。木馬を前後に揺らしている、この見るも見事に残念なイケメン神様ジユノワールにもっと言つべきことあるでしょ！

『ジユノ、とりあえず木馬で遊ぶの止めなよ。もっとほら、神様っぽい感じで光を背負つてみるとかした方が、見栄えがいいよ？』

何ともフランクに話しかけた私を、レークさんは驚愕の表情で見てきた。てゆーか、さっきから私この口調だったし、今さら驚くこともないと思う。

「やあやあ、守人に選ばれたお一人さん。僕は神様。名をジユノワールと言づ。」

「偉そーに。」

私は半分睨みつけるような顔で、ジユノの話を聞いていた。

「守人に選ばれた二人は、僕と乙女の証人で在り、乙女を守るべき存在だ。制約を交わした限り、裏切りは許されない。」

先に口づけた際の清水が、裏切ったときには毒となりその身体を侵す。

「いいね？」

「ちょっと、ちょっと、ちょっと。そんな物騒な話聞いてないんですけど？」

「そう言つたら、だつて言つてないもーん、とか抜かしやがつた。いつかにっぺんシメテやる！」

「一人は今、僕の声が聞こえ、姿が見えているはずだ。」

「そうだね、と訊ねられ頷いてる一人は、神の存在に戦いでるみたいだ。最初の言葉を最後に、さつきから口を開こうとしない。」

「何で言つんだらう。恐れ多い、って感じ？」の態度をしていた。

「彼女から手を離すと一人は僕の声を聞く事も存在を見る事も出来ない。もつとも、神官の方は僕の存在を光で感じ取ることができるだろうが。」

「やっぱり、レークさんってすごいんだ。神官も家系だつて言つたし、なんか特別な力があるのかな、なんて思った。」

「僕がネイを『最後の乙女』として送り込んだのは、地球の現代における知識を使って、この国の乱れた政治を正して貢おうとしているからだ。」

「その意味失礼だろうけど、よくわかる。」

「ここのお偉いお貴族さまは何と言つても働かないし、その地位を振りかざしてゐるだけだ。ミリアが税金ドロボウって呼んでたけど、全く持つてその通りの行動や生活をしてる。

『私、そんなに知識ないけど、大丈夫？てゆーか、なんで私がく最後の乙女へだなんて仰々しいものに選ばれたわけ？』

そこがよく分かんないんだよね。私じゃない方がいいじゃん。

「もともと二ホン人を選んだのは、髪色や目が神秘的だからだよ。それに…」

それに？ そう小首を傾げてみると。

「可愛いつ！」

な、何事？！ ジュノガ乱心じやーい！

『ちょ、ジュノー離れてよー。』

「つれないなあ。そんなとこも可愛いんだけどね。照れなくとも良いんだよ、乙女。」

話を聞け！ 私がいつ照れた？ キレたのには間違いないけど、なんでこのアホに対しても照れなくちゃいけないって言うの。

てゆーか、ほっぺたつんつんするのやめてー。

「一人も思つだらう？ 髪や目はさることながら、肌の色や華奢さ。

まあここ女と並んで感じだるいへ。」

そんなテキトーに私も決めたわけ？ 訳の分からん基準で人を許可なく異世界に飛ばすなよ。

「うちに来れたことは結果的に良かつたけど、ジユノに対しての評価はガタ落ちだ。

「やうですね。傳げなどいつも、乙女には会ってないと思ってます。クーンさんは未だに口を開いていない。マークさんはやつといわつて感じだ。

そんなにジユノに緊張すること無こと思つただけなあ。

「だらうへー。って言つのもあるんだけど、実は僕が異世界旅行をしたことがあつかけで、歪みが出てしまつてね。

君の運命を変えてしまつたんだよ。」

なんだそのカミングアウト！

「…思い出しちゃうん。」

次の瞬間、頭の中を映像が過つた。振り返ったときには戻り入ったのは…

『きやああああああああー!』

勝手に悲鳴が喉から飛び出していた。頭を抱え、立つていられなくなり、その場に崩れ落ちる。

「ネイー!」

急に温もりに包まれた。クーンさんの腕が、私を包み込んでいる。レークさんは私の肩に手を置いて、心配そうに覗き込んでいた。

一人の優しさが、私を正気に戻してくれたみたいだ。だけど。

『私…死のうとしたの?』

涙が溢れて止まらない。

私はビルの屋上に立っていた。表情なんて何もなくて。何の変哲もないままに足を放している姿が、脳裏をよぎった。

「…ああ。世界線が変わってしまったんだよ。ここに来た君は、Aとこう世界に居た。

だけど、僕が移動したことで歪みを作り、死ぬ予定でもなかつた君が自殺を図った。これはBと言う世界にいる君がした事だけど、

予定外の出来事。

だから、君の存在自体をこの世界に引っ張り込んだんだ。」

「そ…そんな…

「私、確かに引き取られたところで両親に蔑ろにされてた。だけど、死のうなんてするはずない。だって、おじいちゃんとおばあちゃんの思い出があるもの。」

「一人が先に逝くことは、当たり前のことだから仕方がない。だけど、それは事故のせいだった。父さんはそれが私の所為だと罵った。私が関わると口クなことがないと言った。私が関わったから、一人が死んだと言つた。」

「…私は、運命を憎んで飛び降りた。」

「…ちよつと待つて。今の私の思考はおかしい。」

「君が混乱するのも無理はない。乙女、今君の中には、一人の自分の記憶が混ざり合っているんだ。AとBの両方の記憶が混ざり合って混乱しているんだよ。」

「残りは明日話さう。今日は一度帰つて落ち着くとい。」

私は涙を溢し続けながら、一度だけ頷いた。

混乱と救い

ジユノは眩い光と共に消えた。

何か言つてたけど、全然頭に入つて来なくて覚えていない。

「ネイ、帰る。立てるか？」

時間をかけ、何とか思考をいつたん止める。私はずっと、クーン
さんに縋りついて泣いていたらしい。

迷惑をかけまいと自分の足で立ち上がるひとしたけど、上手く力
が入ってくれなかつた。

「レーク、明日の会議はお前が受け持つてくれないか？ちょうど鏡
神祭のことがあつたらう？」

「わかりました。その様子だと、ネイさんを一人にしておくことは
できないでしようし。出勤は午後からと言つて取り計らいまし
ょう。

「私一人の力では、もとないですから、宰相さまにもお伝えください。
い。」

レークさんがそのまま急いで神殿を後にする。私は、ちゃんと挨
拶すらできなかつた。

「…帰るわ。」

そう言つて、私を横抱きに抱えてくれた。

『じめん、なれい…私、重たい…』

「重くなどない。ただ、安定感をとるために、首に手を回しておいてくれ。」

いつもなら恥ずかしいと思つ事なのに、さつきから私、少しおかしい。

迷いなく言われた通りに腕を回し、クーンさんに顔を埋めながらまた泣いた。縋りつくようにして、その温もりに安心感を求めようとします。

結局そのまま馬車まで連れて行かれ、乗っている間もずっとクーンさんの膝の上に置た。

お屋敷に着くと、そのまま抱きかえられていぐ。中に入ると、女中たちがオロオロしているのが分かった。

だけど、いつもみたいにできないの。辛くとも、頭にきていても笑顔を浮かべることなんて簡単だったのに。

「湯あみは明日に回せ。何か温かい飲み物を用意した後、今日は誰もネイの部屋に近づくな。」

クーンさんはそう言つと、私を抱えたまま部屋へと連れて行って

くれた。

ベッドに降ろされる。だけど、なかなかクーンさんから腕を離すことが出来なかつた。温もりが離れて行つてしまつのが、怖かつた。

「悪い、着替えを済ませたら急いで戻る。」

頭を撫でられ、背中を撫でられ、宥められる。私は何とか腕を離した。

足音が去つて、ドアがしまる音がする。急に寂しくなつて、また涙が零れ落ちた。

ベッドの上で体育座りをして、自分の膝に顔を埋める。自分で自分の身体を守るように、足を抱える。混乱はまだ治まつてくれそうになかつた。

不意にノック音がして、顔を上げる。クーンさんが戻つて來たと思つたからそうしたけど、それはメイドさんだつた。

「温かいお飲物をお持ちいたしました。それと、お皿しを変えをいたしましよう。」

私はそれに応えようとしなかつた。メイドさんはそれでも優しく接してくれ、帰つて來た状況が状況だつたろうに、それを聞くことなく私を着替えさせる。

まるで子供のように成すがままにされ、メイドさんは着替えさせ

ルージュがドアの外へ出でて行った。

咄嗟に声をかけ、クーンちゃんのことを聞くと。

「ショーリキスをあと話しておられます。すべてお戻りにならざると思こますわ。」

そう教えてくれると、今度こそ部屋を後にした。だから、今一番会いたくなかった人かもしれない。

あのメイドちゃんは、おまめあひやんを彷彿とせせるから。

私はわざわざよつも少しく躊躇つた。

…早く、クーンちゃんに会いたい。

なんでもわざわざ分からぬいけど、ただ会いたかった。その温もりに縋りつきたかった。

わづ願えれば願うほど、時間が経つのが長くて。祈りを募らせるほど、静かな部屋が辛かつた。

「ネイ。」

ドアが開かれ、ベッドまでやつて来たその人に、自分から抱きついた。

『……ん……』

嗚咽が零れる。噛み殺しているはずなのに、理性が崩壊しつつある私は、もうそろそろそれが出来ないことが分かつていて。

優しい手が頭を撫でる。次の瞬間には、大声をあげて泣いてしまつた。

「…落ち着いたか？」

『…はい。』

鼻を啜りながら、涙を手で拭う。クーンさんの胸元は私の涙でびしょ濡れだった。

「ゆっくり整理しよう。」

ホットミルクを受け取り、小さく頷く。

クーンさんは、泣きやむままでずっと頭を撫でてくれて、胸を貸してくれていた。

途中からなんで泣いてるのかさえ分からなくなっていたの。頭の中を整理することが、今一番大切な事なのかも知れない。

「頭の中を整理しよう。何があったのか、聞きたい。」

真摯な態度に、向き合つた。泣きじやくつてゐる私をすつと温めてくれて、なおも優しく接してくれてる。本当に優しい人だと思つた。

『クーンさんに、話した私は、どんな私でしたか?』

言葉が詰まる。上手く話せなかつた。

困つたように微笑むと、話した通りに昔の私のことを話してくれる。

それを私は知つていた。だけど。

『そのことは覚えているのに、もう一人の私の記憶もあるんです。』

記憶は途中まで一緒に、ある時期を境に全くの別物だつた。

両親が離婚した時、私は父方に引き取られ、祖父母と共に暮らし始めた。父はたまにしか帰つて来なくて、外に恋人がいることは祖父母と共に私も分かつていていたことで。

それでも、もし父が再婚した時にはついて行こうと考えられるくらいには、仲の良さは戻つていた。

それなのに。

祖父母と私で旅行に出かけたあの日、事故に遭ってしまった。駆けつけた父は私に向かつて。

お前が関わった所為で と、冷たい視線を向けられた。
全部ぜんぶ、私が悪い。今までの不幸なでき」とは、全部私の所為。

父の言葉に胸を突かれた。

…その日から私は多くの感情を失つた。頭の中をただ私に関わる人と人が不幸になると、考えるようになつた。だから、他人と関わらなくなつた。

きつと私が死んでも誰も涙を流さないし、誰も心動かされたりしない。…生きる意味を失つた。

そして、早く祖父母に会いたいと最期に思つてビルの屋上から飛び降りた

「自ら、命を断ととしたのか…」

私は、小さく頷く。自分のことなのに、そうじゃないような感覚。だつて、これはもう一人の私の人生だったから。

『私は、今の私は、クーンさんに自ら話した私です。でも、もう一

人の、人生が狂ってしまった私も私なんです。』

だから、混乱している。どっちが本当の自分なのか分からぬ。

思考を持っているの。一人分の。

大学生になる前までの私の記憶と考え方、自殺をした高校2年生の私の記憶と考え方が、ごちゃまぜになつてゐる。

私が私一人じゃないみたいで、少し気持ち悪い。

「二人分の自分の記憶が、混同しているのだな。」

クーンさんの言葉が、私の今の状況をはつきりと表していた。

「…泣き疲れているんじゃないのか？」

空になつたコップを私から預かり、近くのテーブルに置いてくれる。

動作が少し不自然に見えた。ベッドに腰掛けているクーンさんの胸に私がしがみついていたから、上手く身動きが取れないようだ。

迷惑だと分かっている。それでも、私はそれを止めようとはしなかつた。

『少し、疲れました…』

声は鼻声だし、大声で泣いたから掠れている。目は腫れぼつたく

て重く、身体はだるい。

「今日は考え疲れただろうつ・もつ寝ろ。」

私を枕元へと運び、布団をかけてくれる。でも、一人じゃ寝られそうになかった。

『 独りに、しないで…』

いつもの私なら、強がって一人で寝てたどろう。でも、今日はもう一人分の私がいるから。考え方が、一つに定まらない。一人で大丈夫だと思つてゐるのに、一人になりたくないと思つ。

違う人間の記憶を引き継いだみたいだつたのに、脳裏に浮かぶ身に覚えのないような映像の主觀は私だつた。

「一人に、なりたくないのか？」

目も合わせないまま、頷く。

しばらく無言が続き、クーンさんがどうしたらいいのか迷つてることが手に取るように分かつた。なのに、自分の言葉を覆す気にはなれない。

「…わかつた。」

その返事に顔を上げると、少し難しそうな顔をしていろ。

やつぱり、迷惑だつたよね。

「常識を考えると、少し憚らるが。」

少しふてていたいと、隣へと滑り込んでくる。そして、私を抱きしめるよつとして、布団へと納まつた。

ドキドキする。でも…安心する。

私は少しだけ戸惑つて、それからクーンさんの胸に縋りついた。頭を撫でてくれる手は優しい。安寧を私に届けてくれる。

「…ネイ。少しだけ、お前の考えに意見したい。いいか?」

囁く声が、一人の近さを物語っていた。泣き疲れていた私は、眠たさのために頭が上手く働いていなかつたけど、小さく頷く。それが分かつたのか、なおも囁きながら言葉を続けた。

「もう一人のネイは、お前が死んでも誰も泣かない、誰も心を動かされることはないと言つたな。だけど、違う。」

驚いて、顔を上げる。私を見ているクーンさんのその目が、とても優しかつた。

「今は、俺やレーク、城に居る人だつて、ネイと関わつた人間はみんな明るくなつた。面白い考え方や行動は、みんなの心を動かしている。

みんな、お前のことを想つていいよ。」

…救われた気がした。

みんなの笑顔が浮かぶ。それはどれも優しくて、温かかった。

睡眠と言つまどりみの中に身を投じる前に見た最後の映像は、ク

ーンさんの笑顔。それから

「……よい夢を。」

温かい言葉だった。

闇話？（前書き）

クーンちゃんsideです。

『お疲れ様でした。』

書類を届けて戻つて来ると、ネイがお茶を用意して待つていた。

「ああ、今日は助かつた。」

今日はいろいろと視線が刺さる。廊下を歩くたびに好奇の視線が自分に降り注がれていることが分かった。

普段から、その存在故に見られる事も多かったが、いつもあからさまだと疲れる。

俺は椅子に身体を放り出した。

『…』めんなさい。』

小さく謝る声。その表情は、自分を責めているものだ。

「謝るな。ネイは俺が言えない事を言ってくれたんだ。嬉しいよ。』

それが俺の正直な気持ちだった。

この国の役人は働かない。しかし、力だけはある。だからこそ、俺も宰相殿も黙つて、従つてゐるフリをしていた。

面倒なことから田を背け、状況を悪化させたのは「の身から出た
錆。ネイが言つたことは当に正論だった。

正直なところを述べた俺だったが、ネイの表情は浮かない。かな
り自分のしたことを見みていくようだ。

「ネイ？…どうしたんだ？」

辛そうな表情を見ていることなど、出来なかつた。手をさしのば
し、少し腫れてしまつて、頬に触れる。触れた瞬間にピクッと動
いたが、後はされるがままになつていた。

「…」の白く、綺麗な肌に傷をつけたヤツが恨めしい。

そのまま何度も手を往復をせると、ネイの表情はますます爛つて
いた。

「そんな顔するな。ネイのその表情を見るのは辛いんだ。」

…一瞬、泣くかと思つた。

そう思つたら、自分を律していくことなどできない。細いその腕
を引き、自分の腕にすっぽりと収める。体温を感じて、漸くネイが
そこに在る事が確認でき、一安心した。

「泣きそりで悔しそりで、辛そうな、そんな顔見たくないんだ。」

何を言つてゐるんだ、とすぐ口に思ひ返す。俺らしくもない、と。
だが、俺に包まれてゐる少女は何も言わない。

しばりへして、口を開くと。

大丈夫、私笑えます。そう言った。

笑えます、といつゝとは、無理に笑つといつゝとだらうへ。

本当は笑いたくもないのだらう？

今、彼女がどんな思いでどんな表情をしているのがが氣になつて、再度抵抗を見せた時には、簡単に腕を解いてやる。でも、そこに居た少女は今にも消えてしまいそつたな笑顔を浮かべていた。

「悪いが、俺には大丈夫そつには見えないな。」

『大丈夫。』

そう言われた時には、突き放されたよつたな氣がした。食事を用意しに行くと言つて飛び出したネイが、一生手の届かない所へ行つてしまつ氣がして手を伸ばしてみたが、当然のことながら届きはしなかつた。

食事を済ませ、神官服を身に纏つたネイを神殿へと誘つ。その姿は非常に儂げで、神聖だと思った。

おそらくネイこそが「最後の乙女」だ。

でも、それを確信させたのは

『…綺麗。でも、怖い。』

その言葉だった。自然と零れ落ちた言葉は、本心を反映させていく。

『乙女で感じるのは神聖だ。それ故の恐怖。

でも、今まで一番心地良い場所。』

雷に打たれた様な思いがした。

ネイは「最後の乙女」に違いない。こんなにもこの場所が似合ひ、俺の目には少しばかり眩しく映る。

それは俺だけの思考に留まらず、レークが口にした言葉がまた同じだった。

もう長話もしていられない。行動に移させたのは、レークだった。

戸惑いつぶつと一步ずつ、鏡盆へと近づいて行く。振り返ったときのネイの不安そうな顔を、俺はただまっすぐに見つめる。それしかできなかつた。

ネイが触れた瞬間、鏡盆が光を放つ。後ろから見ていると、ネイがこの世界に突然湧いて現れたように、どこかへ行ってしまうのではないかと言う不安に駆られた。

しかし、これは神聖な儀式に他ならない。私情によつて邪魔立てをする」とは許されなかつた。

『“ジユノワール”』

小さく呴かれた言葉は、名を呼ぶことが許されていない、誰もが知つている神の名だつた。

光が一層強くなり、ああ、彼女が△最後の乙女△だつたかと、腑に落ちた。

しかし驚いたことには。

『あんた、ホント余計な事に巻き込んでくれちゃつて…これから的生活、どうしてくれんの?…』

黙つていたかと思えば、急に声を荒げる。誰かと、対話しているようだつた。

『いらん…』

怒氣を含んだ声は、誰かを糾弾している。俺が見える景色には、全く変化などなかつた。

「とりあえず、事実を知りたい。ネイは、最後の乙女へで間違いないんだな？」

「やつぱり、最後の乙女へでしたか！ 神がそこにおられるのですね！」

俺とレークの質問は、ほぼ同時だった。今まではネイが独り言を言っていたようなもの。だからこそ、口を挟んだのだが、どうやらイライラしていたらしい。

『全員黙れ！ 一度に喋るなー！』

怒りだしてしまった。俺には自分の言葉ともう一人の男の言葉しか聞こえなかつたが、ネイに見えているらしい人物も同じ時に口を開いたらしい。

「　　.　.　.　.　.　.」

静けさが広がり、ネイは満足して三人の顔を交互に見る。

『まずは確認します。存在はともかく、一人はジュノの声が聞こえますか？』

ジュノ…？ ジア教の神、ジュノワールのことだろ？ 確か、先程名を呼んでいたようだが。

『黙つてって言ったでしょう？』

笑顔で起こるその様は威圧的で、そこに在られる者に怒りを向けていることがよく分かった。しばらくそうやって話していると、嘆

息を溢してから我々に手招きをしてくる。

『二人とも、こちらに来ていただけますか?』

一通り守人の説明を受け、俺は自らの意志でそれを受けようと決めた。ネイの傍に居られる。だからこそその選択だ。

『レーク・ビギンズ、これより貴方に神の加護を授け、
「最後の乙女」の証人として守人の役を授けます。

受け取つていただけますか?』

鏡盆の前で行われるそれは、厳かな空気を纏っていた。しかし、ネイは自分の言動が恥ずかしいのか、顔を真っ赤にさせている。

「はい、貴女に忠誠を。」

レークが膝間づいて、ネイの手の甲にキスを落とす。それに少々いらっしゃったのは、氣のせいではないだろう。

『クーン・リッキンデル・デューカ、これより貴方に神の加護を授け、
「最後の乙女」の証人として守人の役を授けます。

受け取つていただけますか?』

「…貴女に忠誠を。」

自分よりも先に、レークが同じことをしたのかと思うと頭に来る。
だから、少し長く唇を落とした。

“お前たちに、わが名を呼ぶことを許そつ”

またもや光が視界を覆い、声が響いた。

その美しさ。聞き惚れてしまつほどだつた。だが、見上げると少女が涙を流している。すぐさま立ち上がり、その涙を拭っていた。

「やつだー、僕の前で僕の乙女といチャイチャイしないでよーう。」

間の抜けた喋り声。微かにさつきの声だと判断できたが、どうも気が抜けてしまつ。

「神、さま…」のお方が…」

レークは熱い視線を送つているが、俺はどうも気が抜けてしまつた。

『私がいつあなたの乙女になつたつて言つの。』

神に向かつての堂々とした物言い。流石ネイだ。

「！」の方が、神…」

見目麗しいその御人は、木で作られた馬のよつなものに乗つていた。

『ジユノ、とりあえず木馬で遊ぶの止めなよ。もつとほら、神様っぽい感じで光を背負つてみるとかした方が、見栄えがいいよ?』

相変わらずの口調。一人の会話と、レークの態度に温度差を感じ、自分はどういつ態度を取るべきか計算していた。

「やあやあ、守人に選ばれたお一人さん。僕は神様。名をジユノワールと言ひ。」

そこから俺たち二人が乙女の証人である守人であること、ネイはその知識を使ってこの世界を変えるために来たことが告げられた。

その際、神にはいつさいの緊張感の欠片さえもが見受けられなかつた。

経緯が語られる毎にネイの顔は難しくなつてゐる。しかし、神は変わらず呑気なものだつた。

…ある一言が語られるまでは。

「思ひ出しちじらん。」

神にそう言われた次の瞬間、ネイは切り裂いたような悲鳴を上げた。

頭を抱え、その場に崩れ落ちる。咄嗟に手を差し伸べ、抱きしめる。その小さな身体は小刻みに震え、涙がとめどなく溢れ出していた。

ネイにはもう一人の自分の記憶があるというのが神の話だ。しかし、それが俺にはよく理解できなかつた。

ネイはネイに変わりないだろう？

あまりの混乱に、話は明日に回すと言い、明日になれば落ち着くので早々に罷らせるよつて言われた。

ネイを抱えて家まで連れていく。その間ずっと、俺に縋りつくようになっていたネイは、俺が部屋を出でていこうとするのを止めるほど一人になるのを怖がっていた。

それでも、やらねばならないことがある。一人残して行くのは気が引けたが、自室へと戻る。早くに着替えると、伯父の部屋へと急いだ。

「珍しいな、お前が来るとば。」

少し面白そうに、田を弧の形に細めていた。どうも腹が立つ。

しかし、だからと言つて文句を言つつもりはない。早く、ネイの元へ行かなければならぬのだから。

いつも意志の強い瞳を持ち、真っ直ぐに俺を見つめる。その瞳が、涙を溢れさせるその様は俺の心を乱す。

早く、傍へ、と。

「明日のことを持みに来ました。」

「明日…？」

何事かと不思議そうな表情。 そつか、と思い、事情を説明した。

「ネイはやはり最後の乙女であったか。 それで、ネイの様子はどうなんだ?」

「これは内面を話すことになってしまつ。 それは、ネイが嫌がるはずだ。」

「何やら混乱しているので、今は傍に居てやることしか出来そうにありません。 ですから、明日の朝から晩までの半休をいただきたい。」

「一人にする」となれば出来かねますから、どうかお許し願えますか?」

「これが俺の我儘だといつ」とは分かつてゐる。仕事を投げてまでやることではないと、理解できていない。

それでも、俺が傍に居てやりたいと思つんだ。

「……こい顔をしてこいるな。お前にしみや、こい傾向だよ。」

「やめらー、ヤー、ヤーとした顔で見られてる。」
「空氣があまつ
好きではない。」

何がいい傾向なんだ…？

理解に苦しむが、一応了承を得た。俺は急いでネイの部屋へと向かう。普段なら何て事の無い距離だが、少し遠く感じた。

いつの間にか駆けだしていたが、廊下で女中のダルシアに呼び止
められる。

「ネイさまが、クーンさまをお持ちしております。何があったかは
分かりませんが、片時も離れずにお傍に居てあげて下さいませ。」

それを聞いて、分かったと一言だけ残し、また駆けだす。

扉を開いてすぐ傍まで行くと、夜着に着替えたネイが足を抱えて
小さくなつて泣いていた。

声をかけると。

『……うひ、そ……』

我慢するよつて理由を漏り、俺に縋つづくよつて抱きついてき
た。

それから、どれくらいの時間が経つただろつか。

大声を上げて泣きはじめたネイは、次第に声が掠れていき、今は鼻を啜るくらいになつて落ち着き始めていた。

「頭の中を整理しよう。何があつたのか、聞きたい。」

そう切り出すと、素直に話し出す。その内容は、俺よりも、そして以前ネイが話してくれたものよりも、遙かに悲惨だつた。

両親の離婚、育児放棄、祖父母の死、父の暴言、そして自らの死。ネイはそれを他人事のようではあつたが、真実味を帯びて話した。神が言つていたことが如実に表されている。

今度のネイは、前のネイにもう一人のネイが重なつてているようだつた。

「二人分の自分の記憶が、混同しているのだな。」

小さく頷いて、また一筋涙を流した。それを、不謹慎にも綺麗だと思った。

ネイはかなりの時間、泣いていた。夜ももう更けていて大分遅い時間だつた。

「…泣き疲れているんじゃないのか？」

そう言つて、俺の胸に体重を預けてしがみついている手を何とか解き、持ち上げてベッドの正しい位置までネイを運ぶ。

慣れたよつに持ちあげられてゐる間、ネイは俺の首へと腕を回した。

『独りに、しないで……』

小さな咳きは、ネイの本心なのだろうか。今までとまるで違うネイは、小さな子供のよつだつた。…俺から離れよつとしない。

これは、常識的に考えても、よくない事だ。夫婦でも、婚約をしている訳でもない。なのに一つのベッドに入つて共に寝るなど…

確かに、女を抱いた時も過去を振り返れば何度かありまするが…

自らどうであれ好意を持つてゐる女と共になど、今まであり得たことがなかつた。しかし、田を畠わせてくれない少女は、小さく震えている。

…」の状態で放つておけるわけがあるか。

一瞬戸惑いはしたが、ネイの隣へと滑り込み、それから震える小さな身体を抱きしめ、こつもと同じように頭を撫でた。

「…ネイ。少しだけ、お前の考へに意見したい。いいか?」

先の語りに、どうしても言いたいことがあつた。ネイは自己評価が低過ぎる。己の存在の大きさなど、きっと気付いていないのだろう。

「もう一人のネイは、お前が死んでも誰も泣かない、誰も心を動かされることはないと言つたな。だけど、違う。」

跳ねあげるかのように顔を上げ、漸く田を合わせてくれた。その目は大きく見開かれていたが、少し腫れており、赤くなっている。それが小動物を連想させた上に、己の腕の中に収まっているという事実を、その近さ故に気付かされた。

「今は、俺やレーク、城に居る人だつて、ネイと関わった人間はみんな明るくなつた。面白い考え方や行動は、みんなの心を動かしている。

みんな、お前のことを想つてゐるよ。」

思つた事を伝えた後のネイは、少し安堵したように微笑んだ。そして、泣き疲れたのか、瞼が重たくなつてゐるようだ。

田を完全に閉じ切る前。

「…よい夢を。」

田を合わせてやつゝとい、もつ一度微笑んで、眠りへと向かつた。

それから一刻ほど俺はこれからのお出方を考えながら、ネイの頭を撫でていた。

なぜなら。

「…」の状況で寝られる訳がないだらう。

「の時、己の気持ちと欲望に気が付いた。

俺は、ネイを…好き、ではなく、愛している。

そう自覚すると、ますますこの状況が厄介になる。しかし、どうか心地よさを感じていた。

己の腕の中で胸に縋りついているこの少女が、自分に気を許していると思えるからだ。

ああ、そうか。俺は随分と前からネイを想っていたのだな。

自覚してしまえば、後はもう募るばかりの情。今までにない感情を思い知った。

自分の生活に、昔から常に追われている。城に住んでいる時には、毎日大人から嫌がらせや暴言を今よりも遙かに多く受けている。誰が助けてくれる訳でもない。ひたすらに耐えた。

それから、身体の弱い兄よりも健康な俺が王に向いていると進言するものがいて、俺の意志など関係なく、派閥が真つ一つに割れた。そして、暗殺未遂に何度も遭った。

兄を慕い、力になることを元々望んでいた俺は、身の危険を感じて早々に王位継承権を放棄して、遠縁の叔父に当たる宰相殿に引き取られ、騎士団に入団。何とか今の地位に就いた。

毎日の攻防の中、異世界から来たという少女の笑顔に惹かれ、癒

されていた。他のもの、特に他の男に笑顔が向けられると、少し、いやかなり面白いという事もあった。

それが今ならすべて分かる。腑に落ちた。

俺が神から授かった守人と言つ役目は、もしかしたらじょうど良かつたのかもしれないな。

俺はネイを全ての柵から救い出し、助けたい。そして、ただ傍に居たいんだ。

小さく微笑み、自分の胸にくつづいて離れない少女を一度ギュッと強く抱きしめた。少し苦しそうな声を上げる。

それに今度は苦笑を溢して力を弱めると、寝ている事をいいことに額に唇を落とした。

「俺は何に換えても、ネイを守つて見せる。」

熱

朝起きたと、クーンさんが私の頭を撫でていた。

ぱーっとする頭で考える。私、寝坊しちゃった?

てゆーか、頭が変。熱が出た時みたいにぐらぐらして、思考が上手く働いてくれない。

「目が、覚めたか?」

囁くような声。なのに、はっきりと耳に届く。

あれ? 前にもこんなことがあった気がするんだけど……?

そう直覚した途端、顔に熱が集まってきた。

ななな、何で隣にクーンさんが寝てるの? ……てゆーか、添い寝、つて!

どうしていいか分からぬ私は、狼狽えることしかできない。クーンさんはなおも私の頭を撫でていた。

朝から刺激が強過ぎるほどいいお顔ですよね、まったく。女の子の私にその麗しさ、少し分けて下さいな。なんて、文句を言つてみても仕方ないだろうね。

「顔が赤いな。熱があるかもしね。」

おでこに触れ、そして勢いよく起き上がる。私は吃驚して見上げた。

「……熱がある。人を呼んで」よつ。

もう言つたのこ、クーンちゃんは動じつとしない。見つめっこすると。

「その……手を、離してもらえると有り難いんだが……」

珍しく口籠つてゐる。だが、理解ができない。

手を……？

不思議に思い、自分の右腕に視線を沿わせていくと、その手がクーンちゃんの衣服を掴んで、行く手を阻んでいた。

『「い、いめんなさいっー。』

慌てて手を離す。頭を一撫でして出でいつたクーンちゃんを見送り、ふと氣づいた。

昨日、一人にしないで、つて言つたような……？クーンさんが抱き締めてくれてただけじゃなくて、自分がくつついて離れなかつたんじや……

顔に熱が集まり、布団を頭まで被り、丸くなる。本当に熱があるのかどうかがよくわからなかつた。恥かしくなつて、顔に熱が集まつてたから。

しばらくしてバタバタと人が集まってきて、汗をかいた服を着替えさせられたり、ご飯を食べさせて薬を与えられたりと、甲斐甲斐しく世話をされた。

何故かすぐにお医者さんも來たし。

でも、一言。そんなに大病患つたみたいに扱わないで下さい。

単なる熱に違いない。それなのに、未だ心配して私の傍に立ち、おでこに乗せたタオルが少し温かくなるだけで取り替える。

あんまりにも過剰な反応だった。

『あの、もう大丈夫ですか?』

何度もそう言って、メイドさんたちによく出て行つてもういつができた。そして、嘆息を漏らす。一人の方が、落ち着くから。

昔から、熱を出した時は一人だった。病院へ行くのも、薬を用意したり、お粥を用意するのも自分だった。

人に心配されるのって、あんまり得意じゃないんだよなあ。

心配されるのに得意、不得意は関係ないかもしれないけど、やっぱり慣れていないものだからどうも意識的に気後れしてしまう。

一人で静かにして耐えている方が、断然迷惑もかけないし楽だ。

そもそも、病氣の時に心配されたのっていつも振りだらう。最近までは単に迷惑がられてた。

日常なら迷惑をかけたり掛けられたりと、お互い様だけど、病気の時は一方的に迷惑をかけるだけ。だから、心苦しいの。

「ネイ、大丈夫か？」

ノックをして、すぐに扉が開いた。やつて来たのはもちろんクーンさんだ。表情は心配、そのもの。

…やっぱり、慣れないな。

『大丈夫です。薬も飲みましたし、すぐに下がりますよ。』

それに、大した高さの熱でもない。別に少しふらふらするくらいだし、普通に生活しても何ら支障はないと思う。

「でも、かなり熱が高いと医者が言っていた。今日は神殿へ出向くなさそうだな。」

あ、そつか。詳しいことは明日、とかジユノが言つてたつけ。

『大丈夫。行きますよ。』

あのアホのことだ。行かなかつたら罵られるに違いない。病気とか、カンケー無かつたもんなあ、前に砂漠で倒れた時は。それに、早く多くを知りたいっていう気持ちが強い。

何で言語が伝わっているのか、とか。私が伝えるべき知識は何か、とか。

一いちへ来て一月半程経つてたくさんの人にお世話になったから、その人たちに何か新しい知識を教えることで役に立つのなら、喜んでそうしたかった。だから、私の出方を早く指示して欲しいの。

「その身体で……？」

少し苦い表情をしている。それでもイケメンはイケメンだ。

その表情も絵になるなあ。とか、思わず感心しちゃった。窓から差す光の当たり具合とかもちよづどいし、これをプロマイドにしたら、高額で売れそう。

って、そんなこと考えてる場合じゃないよ。

自分のアホな思考を早々に断ち切つた。金儲け万歳だけど、今はカンケーないからね！

『この熱、単なる知恵熱ですよ。』

クーンさんは不思議そうに首を傾げ、射抜くような目で私を見ていた。瞳の奥には心配が滲みでている。安心を与えるために小さく微笑んで、自分の中で分かつていてる事を話すこととした。

『もう一人の私の記憶が整理している最中なんです。それに、何となくだけど、今までの私と違うような気がします。』

自分の中に小さな光が見える。それが段々大きくなつていいくイメージがさつきから脳裏を過っていた。

「俺にはいつものネイに見えるのだが。」

うん、見た目的にはそうだよね。でも、精神的には違うの。なんかこう、自分にもう一人の自分が上書きされたみたい。

それでも自分は自分だから、根本的な事は変わりそうもない。だけど、ちょっと、前よりも暗い考え方が頭を過るようになつた。

それがきっと、もう一人の私が存在している証。

『昨日話したもう一人の私が、私の中に居るんです。』

もう一人の私が、自分の中に入つて来た。自分に重なつていても、別のもののようにも感じる。少し違和感があるけど、嫌悪するほどじやなかつた。

『昨日みたいに、私混乱してないでしょ？』

頷くクーンさんに、昨日は自分のことのように感じてたことが、今は別物に思える事を言つと、腑に落ちた様な顔をしていた。

「昨日はネイらしくないとは思つていたが、今朝は元通りだつたな。今は、精神的には落ち着いているのか？」

『はい。両方私だもの。』

これは言い切れる事。確かに高2の私は、人生が辛いと感じて自殺しようとした。だけど、やつぱりこの世界に来れたから。ここに居る人たちと交流して、優しさを知つて。人を信じても良いって思えるようになつて…

やつやつて、私たちは成長できるんだと想つ。

「それは分かった。しかし、やっぱつその体調で出向くのは難しいと想つのが。」

クーンさんつて過保護？これくらいの熱、大したことじやないのに。

『なるべく早く、ジユノと話しておきたいんです。』

この国のこじと、成り立ち。それを神様から聞けるなんて、すげーく ラッキーな事だと思うんだよね。貴重な体験だから、いくら相手があのアホ神でも利用してやらなくちゃ。

あれ、と疑問に思うことが一つ。なんで、クーンさんが今こじと 居るんだ？

だって、もうとっくにお仕事の時間でしょ。普段なりもつ城で書類と睨めっこしている時間だ。

それを聞くと。

「有休を取つた。」

と、まつとうな答えが返つてきた。でも、あれだけ時間を惜しんで仕事してる人が、なんでこんなタイミングで休むの？そう考えたら、答えは一つ。

私の、所為。

『……「めんなさい。』

昨日、泣きじやくつたり、一人にしないでとか言つから。それに、熱なんか出すから。迷惑、かけちゃつた。

「迷惑、とか考えてないよな?」

そう考えて当たり前じゃない。だつて、迷惑でしょ?

不安になつて、クーンさんを見上げる。表情はいつにもまして仏頂面に拍車がかかっていた。

な、なんか怖い…

見下ろされている所為か、醸し出している空氣の所為か。意識的にそうしてゐのかは定かじやないけど、今までにないくらいの無表情さだった。

『「じめんなさい…』

さつきから、謝つてばっかり。だけど、それしか言えないんだもん。それに加えて、クーンさんの表情が怖い所為でもある。

「ネイ。迷惑なんてかけて当たり前のものだ。」

一人では生きていけない、クーンさんはそう言つた。

確かにその通り。でも、私は一人で生きよつと今までずっと心がけてきていたから。その考えを急に正すことなんてできない。思いを素直に口にすると、少しずつでいいと言つてくれた。

「半休だから、午後からは城に行かなければならぬ。ネイは夕方まで寝ている。夜に迎えに来るか？」

それって、一度手間じやない？私が一緒に行けばいいものを、そんなことでも迷惑…って、また迷惑って思つちやつた。

それを読み取ったのか、クーンさんは苦笑している。そんなに顔に出でたかなあ。

「ネイはこの国の重要人物になるだろ？たとえそれが公にならなくとも、俺の中では乙女に変わりはない。神に怒られるなど、勘弁だからな。」

「そうだね。一応は神様と話すことができるのは私だけだし。あんなのでも、一応は神な訳だし、敵軍に扱うことなんてできないんだよね。」

面倒な立場だ。

「俺が戻るまで、いい子に寝ていろ？」

いいな、と念押しされてしまえば、頷くことしかできない。私の頭を撫でたその時のクーンさんは、極上の表情で私を見ていた。

やっぱりイケメンは田に入れ過ぎやいけない！

動悸が激しくなった私は、ギュッと田を瞑る。しばらくするとアの開閉音が聞こえ、部屋の中は妙に静けさが際立っていた。

言われた通り、私はクーンさんが戻るまで寝ることにする。畠を開けると、そのままいろいろな事を考えてるうちに、眠っていたみたい。何かに触れられる感覚で意識が浮上した。

畠を開けると、やっこむ。

『クーン、やん?』

ベッドに腰掛けて頭を撫でてくれている人がいた。その微笑みは優しい。

もう迎えに来ててくれたのかな。寝ると時間つて妙に早く経つたように感じるよね。

窓の外を眺めてみれば、日はもう傾いていて空は茜色に染まっていた。薬が随分と効いてたみたい。ぐっすりと眠れた。

「そろそろ神殿へ向かおつ。体調はどうだ?」

『少しだけ身体がだるくて、ぼーっとします。だけど、朝よりは全然マシ。』

身体の状態が少し良くなつたことで、朝の体調の悪さが分かつた。随分とキテたみたい。今思うと相当辛かつたんだなあ。

「ならないが、どうする? 今日は止めておくか?」

また心配してくれているみたいだつたけど早く自分がここに来た意味を知りたい私は、大丈夫の一言で何とか了解を得ることができた。ただ、あまりに文中さんが心配して、神官服の下にも上にもたくさん防寒をされたのには少し驚いた。

そんなに酷くないのになあ。

そう思つても、あんな顔して世話をされたら、されるがままになるのは仕方ない事だと思つ。

着替えの手伝いを断つとした時、泣きそうな顔、されましたよ。こっちの方が悪い事を言つてる気分になつてOKをしたけど、こんなに着せられるんなら断ればよかつた。

嘆息を一つ零し、クーンさんが待つ馬車へと向かつ。それに乗り込むと、すぐさま神殿へと向かつた。

アホ神の言つことには。

いつもと違う場所から入ったのか、降りた時の景色はいつもの所とは違うものだった。しかし、同じものも一つ。いや、一人。

「大丈夫ですか？」

いたさか心配そうにしているレークさんがそこに居た。どうやら待っていたらしい。その顔も心配そうだった。でも、そろそろその表情飽きてきたぞ！

『みんなさんが過保護過ぎるだけで、それほど大したことではありませんよ。』

ポロッと口にしていた。それを聞いたクーンさんは渋い顔をし、レークさんは笑う。ホント、二人つて対照的だよね。

話をしながら、神殿へと向かう。てゆーか、このお城広すぎ。こつちから入ると、道筋なんか全然分かんない。遅れないよう二人について行かないどんでもないことになりそうだ。

迷路のような廊下を進む二人は、きっと記憶力が半端ないに違いない。

すれ違う人に見られたりしたけど、極力戸惑つような表情は出さないようにして進んだ。拳動不審だと逆に怪しまれるからね。何事もない様に澄ました顔してるのがイチバン。

さつきの場所からの方が中央の神殿に出やすいのか、早くに着いたけど、やっぱり道筋は覚えられなかつた。

一歩神殿に足を踏み入れると、そこの中は澄んでいて、昨日と同じように神聖だと思つたのに。

「やあ、待つてたよー。」

気が抜けたのは仕方がない。このアホ神がまたふざけた格好抜かしてゐるから！

今日はどうして浮き輪をしてるんですか！この寒いのに時期外れだつて話ですよ。てゆーか、いちいち使い方分かつてないよね。

分かんないんだつたら着けなきゃいいのに。

脱力した私を見て、一人は私の肩に触れてきた。どうやら神の姿を見ようとしたらしい。

どうかこんなを見て、呆れないであげて。って、なんで私がフオローしなくちゃならないんだつて思つて、口に出すのは止めておいた。

「あれ？具合が悪いのかい？だつたら休んでいなきゃダメじゃないか。」

『来なかつたら文句言つくな、そんな心配そつな顔するの止めて。

至極眞面目に言つたのに、分かつてゐるぢやないか、と言つてジユノはへにやつとした笑顔を浮かべた。

そう言つといふが頭に来るんぢや！

文句を言つてやるうと思つたけど、頭に血が上つた所為かクラつとしてしまつた。そこを支えてくれたのは、毎度お世話になつてゐるクーンさんだ。

「やつだー。また僕の乙女とイチャイチャして！」

「…ところで、君、名前なんだっけ？」

死ぬほど失礼！大体人に名前を呼ぶことを許そつとか言つといて、人の名前覚えないなんて横暴過ぎる。そのうち信頼失くすね。…つて、信頼とか神様にカンケー無いのかな？

ま、そこは置いといて、早く話を進めよう。なんとなく、背筋に寒気が走つた気がした。今日は冷えるし、早く帰つた方がいいのかもしれない。

『ジユノ、話の続きを聞かせてよ。

で、その前に私の名前はネイ。こつちの神官服着てる人がレークさんで、私を支えてくれてる人がクーンさん。お世話になつてゐるだから、ちゃんと覚えてよ。』

文句タラタラですみませんね。でも、折角名前があるのに呼ばれないなんて悲し過ぎる。その空しさを、私は知つてゐるから注意した

の。

向こうに居る時はずっと、"お前"とか"おい"とか"ちょっと"って言われてた。

私に名前をくれた人ですらそう呼んでたの。それって、悲しい事でしょう?

…って、また暗い思考に……

もう一人の私に引っ張られてるなあ。

頭の中ではそう分かっていても、もう一人の私に思考が引っ張られるのは止められなかつた。

「分かつたよ、ネイ。それに、レークは元より知っているし、王族の血を引いているクーンを知らない訳ないだろ?」

あ、それもそうだね。

納得して頷いていると、満足そうにジユノも頷いていた。

てゆーか、分かつてるんだったら最初からそういう態度とつて欲しいもんだよ。

呆れながら見ていると、レークさんから注意を受ける。神さまなんだからもつと敬えつて。

「確かにねー。僕も曲がりなりにも神様だから、やっぱり敬つてもらわないと。信用問題つて、大切だよねえ。」

その口がそれを言うか。本当に、いつかシメてやるー！こんなジユノのどこを敬えと？！

何よりそのへにやつとした笑顔がむかつぐ。これほどまでにぴつたりな表現の仕方は思いつかない。

「まあ、そう怒らないでよ。それより、君の体調が悪くなるのはわかりきつてしたことなんだよ？」

…ちょっと待て！今聞こえたのは空耳？

確認してみたけど、空耳じゃなかつた。ここまでくると嘘偽を売つてるとしか思えない。

『聞いてないんだけど？』

「だつて言つてないもん。」

「ロス！なにが“言つてないもん”だ。大人の男が使つても可愛くも何ともないからね！」

怒りでいっぱいのまま飛びかかるとしたけど、一人に止められてしまつた。

女一人対男一人では力の差は歴然。糸も簡単に止められちゃつて少し残念だつた。

「ネイ、少し我慢しろ。体調はまだ優れないんだろう？」

優れてたら殴りかかってもいいから聞いたら、やっぱダメ、
だつて。残念。

「話が進まないなあ。もう口開いてもいいかい？」

だ・れ・の、せいだつづーの一

いや、ここで怒つたらまた進まない。一つ大人になつて、私はべ
つと我慢した。

「悪いけど、今日の話の後で君はまた体調不良に襲われることにな
る。心して聞いてくれ。」

前提にそれつて、ちょっと構えちゃうよね。それでも、嫌という
雰囲気を出せない私は、黙つたまま一度だけ縦に頷いた。

「君はこの世界に新しい技術を伝えるためにやつて來た。そして、
神（僕）との対話を人に伝えるという意味もまた持つてゐる。」

「こまではいいね、と言われ、また一度頷く。口を挟むとどうも
ケンカ腰になつちゃうからっていう理由を込めて私は頷くだけに留
まつていた。最善の策でしょ？」

「そして、君は不安に思つてゐるかもしだれないが、どれ程の技術を
伝えることができるか、という問題がある。それに関しては問題は
全くないという事を伝えておこう。」

ジユノの言つことはさつぱり分からない。だつて、単なる学生だ
つた私がそれほど多くの知識を持つてゐる訳ないでしょ。そう思つ

ていたら、ジユノはどんどん説明を続けていた。

「君には向ひの世界の知識をあまりなく授けた。そりだろ?」

昨日のように問い合わせの後、私はめまいを感じた。そして、また金切り声を上げて叫ぶ。昨日は記憶のせいだったけど、今日は頭が割れそうなほど頭痛に襲われたからだった。

昨日と同じくクーンさんに支えられはしていたが、床にへたり込む。頭を抱えたまま動けそうになかった。

「あー…やっぱり知識が暴走したか。」

頭痛がよつやく治まってきた頃、ジユノは咳くようになら零した。

「知識の、暴走?」

怪訝そうな声。表情は見えないけど、心配そうにしているクーンさんの声は固かつた。

「ああ。彼女はまだ若いだろ? 学生は基本的な事しか学んでいない。だからこそ、様々な専門知識を詰め込んだのだよ。それに、力も。」

「ううう、ネイ。具合は最悪だけど、状況ははつきりと分かるだるづ~」

まったく持つてその通りだった。私の脳内にはいろんな知識が溢れている。これならどんなことにも立ち向かっていけそうなほどの情報量だ。

だけど、弊害が最悪。

気持ち悪いし、頭痛いし、ふらふらするし。この分だと、熱が上がったに違いない。

「ね、体調が悪くなるって言つたの?」

「ね、じゃないから!」

昨日の比じやないほどどの体調の悪さは、もつ立ち上がりがないほどもので、意識を保つにも必死になるほどだった。

クーンさんに支えられていないと、倒れちゃう。座っているのに、身体は乐ぢやなかつた。

「今なら君にたくさんのことが聞けそうだけど、知識の多さで混乱しているはずだから」「せ譲りやつ。

僕に聞きたいことはあるかい?」

もうひん。止まりますよ。

『なんで、個々の言語が私には理解できるの?』

文字も、言葉も分かる。それこそが一番の謎だった。私が貰ったのは、地球でのあらゆる知識。人間の脳にはあるべきほどのもの。

だけど、言葉は違う。いつものものだもん。

「ああ、それは面倒だつたから、言語全般に知識を与えたんだ。」

「うう言われてみれば、英語とかフランス語とかも分かるような…？」
てゆーか、こんな知識いらないよね。脳内の容量はこの所為で大きいのかもしないし。

「今の君なら、どんな世界を旅しても言語のおかげでだまされるこ
とはないだろうね。」

それはどいつも。だけど、あなたの所為で私はここから出るのによ
りできてないんだけどね。

厭味つたらしくそつまつと、緩い笑顔でじついたしまして、と返
された。褒めてないし… ま、ここでいくら文句を言おうとも、もつ
無駄だつて分かつて。だからこそ、違つ話題に変えたことにした。

『魔法、なんで使えるの？私、よく分からんんだけど、今なら何
でもできる気がする。』

「そりゃあ、もう、これを読んだからだよ！」

ジユノがそう言って指差したのは、ケータイ。つてか、なんでケ
ータイ駆使してんのに、遊び道具全般の知識は疎いの？

それより、何で神様がケータイ持つてんの？ ッツコリビンゴが万
歳過ぎる。だけど、面倒だから教えてしないのは、面倒だと聞える
からだ。

「君たちの文明はすごい発達力だね。読んだケータイ小説に、異世

界トリップものがあつてね。それを参考にしたんだよ。」

何で適當な神様なんだ。それでいいのか、ジユノよ…

少し心配になつた。

「こういうものはトリップした者がチートつてのが定番なんだろう？大丈夫、死亡フラグは立たないようにサポートするから！」

それ、言いたかっただけですよね？！異世界の神様が、チートとかフラグとか。それでいいんですかね。

物を言つ氣も失せた。つてのは、ジユノのヘラツとした笑顔に脱

「どうあれ、言つたかった」とは伝えられたし、また鏡盆祭の時に会おう。

その時にネイにはレークのサポートをしてもらわなければならぬ。いいね?」「い。いいね?」

そう言って、勝手に消えやがった。やっぱり言いたかっただけか

私は意識を手放した。

神様曰く、私はチートになつたらしい……

何て厄介な事をしてくれたのさ。私は平凡がいいのに。

夜更け

目が覚めた時、そこはクーンさんのお屋敷の部屋だった。ジユノが消えた後、すぐに気を失った私は、どうやらここに運ばれたらしい。

心配そうにしているクーンさんがすぐに目に入った。

手が温かい…

そう思つて視線を向けると、クーンさんの大きな手が私の手を包んでくれていた。

「…ネイ、目が覚めたのか。」

掠れた声。辺りは暗いし、今は夜中らしい。

『おはよう、了起来こます…?』

夜だけど、おはよつて、合ひてるのかな?起きたらおはよつ、だから合つてるよね。

呑気にそんな事を考へていると、クーンさんは私の手を今度は両手で掴み、自分の額に当つていてる。

何事かと思つてみると、大きく息を吸い、同じように大きく吐き出した。

小さな声で名前を呼んでみると、また一つ嘆息する。吃驚しながらも、私はされるがままにしていた。

私の手を握る手は力を増して、少し痛い。その行動は私の存在をまるで確認しているようにも思えるものだった。

『クーン、さん…？』

もう一度呼びかけると、今度は目を開けて私を視界に映している。その瞳に映り込む私は、不思議そうな顔をしていた。

「よかつた、田を覚まして…」

小さな囁きにも聞こえたそれは、安堵を含んでいた。

私、熱を出しただけでしょ？後はジューにてえられた知識が大き過ぎて、頭痛を起こしていたくらいなのに。クーンさんが教えてくれたのかな。

そう呑気に考えていた私を驚かせたのは、クーンさんが教えてくれた真実だった。

なんと、私はあれから三日田を覚まさなかつたらしい。

そりや、心配するよねえ。

自分のことなのにどこかそう他人事のように思い、ぼーっとする。クーンさんはやっぱり心配そうに私の顔を覗き込んで、名前を呼ん

てくれた。

『もう大丈夫ですよ。』

安心してもらつたために言つた言葉だつたけど、やつぱりクーンさんは心配そうな顔をしていた。

それにしても三日も寝てたなんて。我ながらすごいな。

ダルイ身体、掠れた声。ずっと寝ていたことがよく反映されてる。水を貰つて喉を潤すと、私はまた横になつた。

「身体、辛いか？」

訊ねられたけど、答えかねる。

私より、絶対にクーンさんが体調悪そつたから。むしろ、そつちの方が心配だつて。

『クーンさん、食事ちゃんと摑つてましたか？それから睡眠も。』

明らかに寝不足。隈が酷過ぎる。それに、少しだけ頬がこけてるよう見える。それでもイケメンは変わってない。そんな不健康さも、どこか儂によつた色氣を醸し出して…

って、そんなこと考へてる場合じやないつてのー。

田覚めて早々残念な思考の私を叱咤して、今は田の前の人意識を向ける。そうじやないと、この人は自分のことになんて気を使わないから。

「……いや。」

何とも言ひ難そうにそー言。私に怒られたて、分かつてるね?

ふう、と息を吐き出しながら、じつにこり笑顔で言つてやつた。

『私に氣をかける前に、自分のことを氣にしてください。』

笑顔が怖いって、昔よく言われたつけ。怒る時つて、怒鳴られるのも怖いけど、笑顔でひたすら穏やかに怒られる方が怖いんだよね。いつそのこと怒鳴つてくれた方がマシだつて。だからこそ、笑顔でお説教だ。

『私のことを心配してくれたのは分かります。でも、田を覚ました時にクーンさんの体調が最悪だつたら、どう思つて思います?』

私の所為で、体調を崩したんだつて思つちやうんですよ?..

淡々と。抑揚なく。そしてポイントは笑顔。その笑顔はもちろん口許だけ。田は笑わないのが重要だ。

「すまない…」

小さくなつてゐるクーンさんは、怒られた子供みたいで少し可憐かつた。だからって、簡単に許してしまつ自分が憎い…きっとまたすぐに自分のことを蔑ろにするだらうからね。

「ネイが田を覚まさない間、気が気ではなかつた。仕事をずっとしていれば忘れられるかと思えばできないし、食事を取ればネイの作

つてくれたものの味が恋しくなつてまたネイを思い出して。

無理してみたが気になつて仕方がなかつたんだ。」

…キデキしきやうじやないですかつ！

射抜かれるような瞳には、熱が籠つてゐる。私は勘違いしないよう、田を逸らしたかった。それに、顔は赤くなつてゐるだらう。だけど、真つ直ぐすぎる瞳はそれを許してはくれなかつた。

「の世界に電氣がなくてよかつたよ。

ロウソクが4、5本灯されてゐる部屋はかなり薄暗い。顔が赤いのがばれなくて済む。

田を何とか逸らして2、3回小さく深呼吸した私は、心を何とか落ち着かせる。気が治まつた頃、漸くクーンさんを真正面から見ることができた。

『まだ夜明けは近くないですね。』

部屋や廊下のもの音はしない。人はもう寝静まつてゐる頃だ。だけど、朝が来るにまだ早い時間だった。

『私は無事田を覚ました。もう安心して眠れますよね。』

顔にそろそろ限界だって、書いてあるもん。もう寝てもいい頃だよ。

そういう意味を込めて言つた。それでもしないともう一晩起きて

いふとでも言いかねない。そんな事したら、体調にも仕事にも支障をきたしそうだ。

「でも……」

ホントに心配症なんだねえ。だけど、でも、は許さない。私の方が心配になるから。

布団をめぐり、隣をポンポンと叩く。

『いややんと寝て下すわー。』

途端にクーンさんの動きが固まる。なんか、変な事言つた？

「…それは、隣に、といつ意味か？」

間違いなくそらなんですけど…変だった？だって、もう一人の私と私が同化して混乱しちゃった時も、一緒に寝たから気にする」とないと思うんだけど。

そう思つて見てみると、クーンさんはぱぱり動かなかつた。

『早く入ってくれなこと、布団が冷たくなっちゃいますよ。』

それに、私も寒いし。

外気に身体が触れてぶるつとすると、クーンさんは戸惑いがちに布団に入ってくれた。私は肩までちゃんと掛けたことを確認すると、満足して隣に納まり、目を閉じる。流石に二日も寝ただけあってすぐには眠れなかつた。

どれくらいいたつただろ？か。一人でベッドに納まつてそれほど経たない頃に、急に引き寄せられる手に驚き目を開けた。

横から回された腕は、寝ているとは思えないほどの力で私をその腕の中に納め、寝息をたてている。

やつぱり無理してたんじやない。

小さく笑つて、寝顔を見つめる。いつもよりも幼く見えるクーンさんは、少し可愛かつた。

顔に掛かる髪をじけてやり布団をもつ一度きりんと引っ張り上げると、私も寝ることに決め、もう一度目をきつくる閉じた。

『ジユノー、暇だよ。』

私はうつ伏せに寝つころがり足をバタつかせ、目の前に居る神に珍しく愚痴つていた。怒ることはあっても、別のことでの愚痴るなんて初めて。

だけど、これもジユノが招いたことだつた。

今私は、神殿の一番上の部屋に居る。そこは草花でできた縁の絨毯が広がっていて、当たる日差しが綺麗だ。壁とドーム型の天井はステンドグラスのような造りと、透明なガラス造りの綺麗なものだし、最初は楽しんでいたんだけど…

「… もやることがないと、つまんないんだよ。

今日は鏡神祭。ジユノに言われた通り、私はレークさんのお手伝い、基ジユノの暇つぶし相手に任命されて神殿にきていた。

ジユノ曰く、鏡神祭の口は一日中神殿に居なくちゃいけないんだつて。それが暇だからって、私を引っ張り出さないで欲しいよね。

「… ネイ？」

ここには見えるところに階段がない。まるで屋根裏部屋に行くみたいにして、床に在る人が一人通れるほど小さな扉を開いて上がってきた。

今そこから顔を出して居るのはクーンさん。心配して様子を見に来てくれたようだ。

『クーンセーン!』

思わず飛びつぐ。やるいじがなむ過れて、トランシジョンがおかしい所為だと思つてぐだれこ。

「どうした?」

心配そひに微笑んでくれている。上まで上がりてきて、扉を閉じると、そこには元の緑の絨毯が広がっていた。

私がいるよりも、クーンさんは方が何倍もこの綺麗な場所に似合う。私はしばらくボーッとその姿を眺めて、田の保養をした。

ジューでもできるかと思つたんだけど、地球のおもぢやで遊んでる姿があんまりにも情けなかつたから、止めて置いたんだよね。

ミニーカー使つて遊んだるから、私と話してゐ暇はないんだつて。自分で呼び付けたくせにひ。暇で不貞腐れていゐのはその所為だ。

クーンさんは持つて來たバスケットの中身を広げてくれる。お皿ご飯を持ってきてくれたらしい。

草の上に白くて大きな布を引いて、その上にサンドイッチを出してくれた。エルさんが作つてくれたんだって。

流石料理人。腕上げてるねー。

私がこの間作ったものと見た目がそっくり。味も変わらなければ嬉しいけど。

『エルさんがわざわざ用意してくれたなんて、何て言つてお願いしたんですか?』

サンドイッチ、それから紅茶。籠が随分と大きいと思つたら、温かい紅茶を用意してくれたらしい。

「ネイが鏡神祭の間中レークの使いつパシリになつてゐると言つて、用意してもらつたんだ。随分と心配していたぞ。」

いや、エルさんの場合、新しい料理を知りたくてそわそわしているだけだと思うけど。

一応、心配してくれたつて方向で受け取つておきましょ。そして、いただきます。

食べること、これ至福なり。味もそのまま表現されているサンディッシュは私にとっては、極上の品だった。

「なにそれ、なにそれ。僕も食べるー。」

ミニカーを放置して、いつの間にかジユノが近くに来ていた。

『食べるつて言つたつて…

そもそも、神様つて実体なの?食べることは可能なの?』

大きな疑問だよねえ。だって、神様のイメージって、白い服着てバツクに光り背負つて、天使が近くに居て微笑んでる…ってだけだから、ご飯とか、そういうのって必要ないと思つてた。

「可能だよ。必要はないけど、娛樂の一種だね。」

そう言つて、許可を出す前にもう口に運んでいた。なんて勝手な。あ、と思い、視線が刺さつてくる方へと目を向ける。そこには驚いているクーンさんがいた。

もしかして、サンディッシュが勝手に浮いて、減つていくように見えてるんじゃない?

「これはなぜかと説明せねば、と思つていたのに。」

「ネイ…何でネイに触れていなのに、俺に神が見えるんだ?」

え、見えてたの? ゆーか、理由は私も知らないよ。大体、この神が私にきちんとしたこと話したことなんて無いんだから。

じとーっとした目で睨みつけていると、へにやつと笑つた。

呑気なもんだね。

子供みたいに美味しいと言つて食べてゐるジユノを横田で見やり、クーンさんにも促して自分もお皿を取ることにした。

食べてるジユノに聞いたところ、今日は鏡盆祭だから力が増幅してるんだって。

それに加えてここは神殿。神様が宿る場所。だから、余計に力が増して、普通の人とは違う、守人であるクーンさんにははつきり見えるそうだ。

最後の一個を迷うことなくジユノが食べ、それをクーンさんと私はお茶を飲みながら眺める。

…大きな子供だな。

「「うそつきました！」

手を合わせてそう言った。

だけど、ちょっと疑問。こっちでは食前後の挨拶は無いのに、どうしてジユノがそれを知ってるの？

悩んでいてもしようがないので、すぐに訊ねる。そうすると、また聞いていなかつたことを教えられた。

「君が前に話していただろう？」

確かに、こっちに来てから人に話はしたけど、直接ジユノと会つたのだけて一週間前だし、話した覚えがない。

首を傾げていると、このアホはまたもや爆弾を投下した。

「君のことなら姿を現さなくとも見えるんだ。もちろん『気』が向いた時しか干渉しないけど、君のことなら何でも知ってる。

僕の乙女のくせに、クーンと一緒にベッドで寝たこともね。」

何故はじめに言つておかない？！

だつて、他の人が知らない生活部分つてもんがあるじゃないですか。そんなとこ見てないよね？

『…お風呂、見た？』

「ああ、君の胸は二ホンでならそうともなこなだし、今ではやつぱり成長が足りないようだね。」

び太くんが、お前は…そして無性に腹が立つ評価をお前にされたくなかったの…

怒りは沸点に達し、今日もまた引爆してジユンに殴りかかろうとする。

ヒーヒーと思わずクーンさんを見てしまった。

普通なら神に対して不敬な事をしちゃいけないとか言つて止めるのに、今日はそれをしない。

思わず腑抜けて見てみると、久々にあまりにも深い眉間のしわを叩いた。

『…止めないんですか?』

「裸を見られるなど、女なら怒るべきであつた。それがたとえ神であつても、な。」

田を閉じたまま言い、難しそうな顔をしてい。

でも、私はしたり顔。許可、もうつちやつたー。田頃の鬱憤を晴らしてやるひじゃないか!

ジユノはクーン、僕を助ける、とか言ってたけど、クーンさんは動じていなかつた。

完璧に私の味方についてくれたみたい。じいじもとばかりに殴りつと思つた瞬間、違う嫌がらせ、思いついた。

『…ジユノ、そこにあるので遊ばない?ルール、教えてあげる。』

わざと企むような笑みを浮かべながら、カードを指差す。さつきまでの怯えるような表情は消え、ジユノはその話に飛びついた。

「のために君に来てもらつたからねー是非そつしてくれー!」

カツチーン。上から田線のもの言いにイラッときたけど、じいじも敢えて笑顔は崩さない。てゆーか、そのためには人をこんなとこに呼ぶなんて。余計に仕返ししてやりたくなつた。

私はトランプを取り出し、赤と黒に別ける。それからゲームの説明をしてやつた。

まずは簡単なものから、そして一人で勝負が付けられるものがいい。そう思つて説明したのはスピードのルールだ。

「ふむふむ。なかなか面白そうだね。」

そうやって余裕をかましてればいいさ。私、こう言つカードゲーム得意なんだから。

せーの、の掛け声で始めて、私はどんどんと手持ちのカードを減らしていく。ジユノはあたふたするだけだった。

あつという間に勝負がつく。横で興味深そうに見ていたクーンさんも、その速さに驚いていた。

それから何度も勝負を挑まれたけど、私は無敗。これこそが嫌がらせだ。

元々カードは強いし、負けないって分かってたからわざと誘った。我ながら人間がちっちゃいとは思うけど、ジューには勝てなくてムシャクシャしてもらつた。

途中からクーンさんも意図が分かつたみたいで、呆れた顔してたけど、そこは構わず続けさせていただきました。

私、器が小さい上に、性格悪いですからねー自負してるだけいいと思ってよ。

私に勝てないとようやく分かったのか、ジューはカードを放り出して宙に寝転ぶ。

いつも言つのを見ると、神様なんだな、つて納得するんだよね。普段は欠片もそんな感じがないから、たまにすご技を見ると拍手したくなる。

散らかつたカードをまとめて、私はトランプでピラミッドを作り始める。手を動かしたまま、まだそこに居るクーンさんに疑問を投げかけた。

『クーンさんは鏡神祭に参加しないんですか?』

「陛下は参加するよつて言われるが、他の者たちがそれを許してくれなくてな。」

…卑しい血だからと、本来なら神殿へ入ることすら拒否されるんだよ。」

ホントに、单なる疑問つてくらいで聞いたのに、返ってきた答えに固まってしまった。

…私、無神経だ。

『…「めんなさい。』

顔を含わせられずに、俯ぐ。こうやって失礼な事聞いて謝るの、最近増えてきてる。もづちゅうと考へてから喋るよつにしなこと。

人を言い負かすような時はきちんと練つてから口を開くのに、そうでないところなにも簡単に失言してしまつ自分が嫌になる。

肩を落としてしゅんとしている。

「気にするな。」

ぽん、と頭に手が乗せられた。

それは慰めてくれて、いるような温かみがあつて優しい。だから、私は一度だけ頷いた。

「そうだよー。てゆーか、そんなこと言つたら市民たちがどうなるんだよーう。

こここの国はジア教を主としている。商人や町人、農民だって崇拜してくれているんだ。高貴なもんだけに許されて、こじりじゃない。そもそも、そいつらが貴族だつて決めたのは僕じゃないんだ。クーンの血のことを言つ前に、己の身は卑しくないのかと聞きたいところだよ。」

急にまじめになつた喋るから、思わず聞き入つちゃつたよ。そんな顔できるなんなら、最初からすればいいのに。

あらためて考へると、ジユノつて神様っぽくないんだよね。地球のおもちゃとかゲームとか小説とか好きだし、考え方も偏つてる。でも、それを聞いたら、そういうものなんだつて返ってきた。

「僕にだつて一応は感情があるんだ。君といつやつて会話をしているんだから、わかるだろ？

それに、僕はこの地やこの地に住まつ者たちを見守ることしかできない。人間関係や病のいじりなどを全て改善してやることは元より無理な事だし、手を出すことで人生を狂わせてしまつ可能性がある。

だからこそ、神たちは手を出さないという掟に従つて、風や水を

操り、大地を見守るだけなんだよ。」

ああ、この人綺麗だな。そう思った。

普段はおちやらけているのに、芯はしつかりしている。多少、いやかなり頭にくることもあるけど、それでもやっぱ神様なんだって思った。

ぱーっとジユノを眺める。思いがけず見入ってしまったのは、普段とはかなり印象が違うからだと思つ。

声をかけようとして、はつと息をのんだ。

ジユノの身体が、黄金に光りはじめたから。

「出番のようだね。」

囁くようにその言葉を残し、急に消えた。だけど、そこには光の名残があつて、すこしく綺麗だつた。

『出番ついで、何のことだろ?』

取り残された私は独りごちる。一人きりだと思っていたから、後ろから声がして驚いた。最低だけど、見惚れててその存在を忘れてた。

クーンさんは一部始終を傍観してたらしい。口挟んでくれてよかつたのにね。

「本当の意味での鏡盆祭が始まった。今頃レークが鏡盆の前に立ち、下に広がる水の表面に町の様子が映し出されているはずだ。神はおそらくそれに引かれたのだろう。」

「そつか。いくら民の祭りだって言つても、本人が関わらない訳にはいかないんだろうね。ジユノも神様やつているんだ、と少しだけ吃驚してしまつた。

「そろそろ鏡盆祭も終わりに近づいている。今日は夜中まで宴が催されるから、帰りは夜中になつてしまつだらう。」

「そつなんだ。お祭りはどこかの世界でも変わらないんだね。そして、私は相変わらず暇な訳だ。ジユノも消えちやつたし、やることないなあ。

私はゴロソと仰向けに寝転がる。両手足を広げて大の字になつた。

ボーッと上を見上げる。硝子の部分からは青空が見えて、清々しい。ステンドグラスからは光がさしていろんな色がキラキラしている。

…だけど。こんな綺麗なものが見れているのに、自由がない気がした。

「ネイ？」

呆けている所為か、心配そうな声が斜め上から聞こえた。覗き込

んでくるクーンさんは、柔らかい表情を浮かべている。

一番最初の「ひよりも、雰囲気が優しくなったなあ。

会つたばかりの時は、無表情か難しい顔してたから、優しい人だと分かつてはいたけど、少しだけ怖かつたんだよね。

私が得意な事は表情や空気を読み取つて人に合わせること。それが出来ないクーンさんは、表情や態度とかじやなく、自分の嘘が通用しない人だと思つて怖かつたの。

今もその表面的な態度がクーンさんに對して出来る訳じやない。だけど、その表情から私のことを考えてくれてするのが分かるから。そういう意味で、この柔らかい表情が私は大好きだ。

「なんで、そんな顔をするんだ？」

どんな顔してたんだろ。クーンさんを困らせかけ「よつ」な顔かな。私はジユノを見面つけてにやつと笑つて聞いてみると、泣き笑いだと返つてきた。

『「どうしてかは分かりませんけど、今の表情がクーンさんにとつてそつ思えるのなら、そういう意味の表情なんだと思います。』

私を理解してくれて嬉しい。素直になれてる。…心から笑つことができる。だけど、私の心はプラスのものだけじゃない。

こいつか裏切られるんじゃないかつて怖くなる。私はそういうあるの

に、他の人に表面だけで合わせられていたらどうしようつて思つ。クーンさんに見限られたらどうしようつて思つ。嫌われたくないつて思うの。

自然な私を受け入れてくれる人たちに、新しいことを伝えて生活を楽にしてあげたい。もつと楽しいことを知つて欲しい。だけど、今はただジユノに流されているだけな気がして、自分の意志を見失つてゐる。

それでいいのか、分からぬ。

何も言わなくなつた私に、クーンさんは一言だけ、そうか、と言つて私の隣に同じように寝転がつた。

聞かないでくれる、クーンさんの優しさが嬉しい。思考が上手くまとまつていないうに、今は上手く答えられないし、上手く誤魔化すことも出来ないだろうから。

不意にふわりと温かい風が吹いた。温かい風が私たちを囲み、へにやつとした特有の笑顔が見えた。

でも、その風が納まるつとする時、私は意識を手放して、その笑顔の持ち主と対面することはなかつた。

対話（前書き）

クーンセラーサイドで、短いです

「ネイは寝てしまったのか。」

風がおさまった瞬間に身体を跳ね上げる。隣に寝ているネイの傍に、神が寄り添うように座っていた。

優しげな表情、そして手つき。髪を撫でるのは俺の特権だったのに、それを容易くしている様は少し…妬ける。

睨みつけるような視線にならないうちに気をつけ、神から田話をすことなく一度だけ頷いた。

鏡盆に引き寄せられた神が消えてから一刻ほど経ち、外はもう暗くなつてきている。神殿の明かりはおそらくないだろう。城下の方から騒がしいほどの声が聞こえていた。

鏡神祭の一番の目的である鏡盆による遠視は無事に終了したらしく、後は町で騒ぐだけのようだ。

貴族たちは城の大広間で舞踏会が行われるのが習わしだが、俺は毎年参加はしていない。

一応は王族の血を引いているが、疎まれている。それに加え、今は大貴族の長男ではあるが、立場が悪い。人に嫌われることなど、もつ空氣のようなものだ。

つい考え方をしてしまい、田の前に居る神に不敬にならないだろうかと見つめてみる。しかし、一向に気にした様子などはなかつた。

「今年も、特に目立つた問題はないよ。貴族たちがきな臭いが、町の様子は明るい。何があるとすれば、それはこの城内で起ころう。」

意外にも真面目な事を淡々と述べる神に、少し驚いてしまった。ネイが共にいる時は、ふざけているようにしか見えないのに、そうでいないと至極真面目で本当に恐れ多い方だと思つ。

「それは、断言できるものなのですか。」

つい聞いてしまつた。しかし、一番気になる事だといつのが事実だ。

ネイは自分が人目につくのをひどく嫌つてゐる。その魅力に見なしきつけられてしまつてゐるといつのに。

今年何か大きな変動があつたと言えば、ネイつまり最後の乙女の出現だつ。これが場内に激震を走らせるのではないかと言うことが、何よりも気がかりだ。

「いや、断言はできない。单なる予想に過ぎないよ。」

その顔に、笑顔など微塵にも見られなかつた。

…笑えるのはネイの前だけか。そう疑問に思つ。しかし、その表情の方が神らしいもの見えるのはどうしてだろつか。

ただ視線を向けしかできない俺は、その一言一句を漏らさないよう耳を澄ます。外の騒ぎが、とりわけくつきりと聞こえる気がした。

「君は、僕の存在をどんなものだと思つていい?」

急に疑問を投げかけられ、戸惑つてしまつ。だつて、この方は国王陛下よりももっと尊い御方なのだから。

それが見て取れたのか、少々呆れた様子で答えを促される。

緊張が一本の糸のように張りつめた中、俺は大きく息を吸つてから話しだした。

「我らが父であり、最も尊い御方です。」

昔からそう教えられてきた。この国の歴史を語るには、無くてはならない人である。その御方が実現しただけでなく、俺にその名を呼ばせることを許してくれたということ自体が、奇跡に等しい。

しかし。

「買いかぶりや。」

一蹴されてしまった。

「ネイの神に対する考え方を聞いただろ?」

以前のことと思い返す。それはネイがこの国にやって来たばかり

のところ、宰相殿と俺とレークが聞いた話だ。

「神はこの世を創造したかも知れないけれど、縋りつける存在ではない、と。」

確かにそんなようなことを言っていた気がする。

俺の答えは完全ではなかつたのか、少し難しい顔をなさつていた。だが、少し考へていてるのかと思つたら、すぐに口を開き始めて下さつた。

「大分簡略化されているけど、つまりはそつ言つ事だ。

僕は万能ではない。出来る事は限られていると言つただろう。人の世の中に手を出す」とは禁じられているとも。」

初めてお目に掛かつたときの言葉が思い返される。あの時は姿に見惚れてしまいあまり考える事が出来なかつたが、今考えてみると敬虔な信者が聞いたら失神してしまうようなことを言つていた。

「僕が出来る事はこの世界の風や大地を動かすことと、町の様子を見守ること。そして、それを皆に伝える事だけだ。」

「ここまで言われて気付いた。

神はおっしゃられた　　断言できない、と。出来る事が限られており、そこに未来を予想することはなかつた。

つまりは、予想しかできないという事だ。

考えを巡らせている俺を神が見ていたことなど気がつかなかつたが、お前が敏くて助かると言われた時、俺の思考が簡抜けだつたといつことに気がついた。

それを少し恥じて神へと視線を戻すと、またゆっくりとネイの艶やかな黒髪を撫でている。その表情は慈愛に満ちていた。

「今日は仕事もない事だ。しつかりとネイの傍に居るといこう。」

そう、今日は仕事がない。年に一度の大神祭のために、国民全員が浮足立っていた。それには貴族も含まれる。よつて、今日は仕事が回つて来ないのだった。

ふわりと温かい風が巻き起こり、神は光を背負つて半透明になりつつあつた。

「…もう行かれるのですか。」

「ああ。その方がお前にも好都合だらう。」

交互に視線を向けられる。…ネイと俺の顔を面白そうに見ておられた。

なぜ全てがばれているのかと思い、ネイのことはすべて分かること言つていた事を思い出す。近くに居る俺の様子さえうかがっているのか、と信用されていないことが手に取るように分かつた。

「僕は気まぐれにしか現れないから、次はいつ会えるか分からぬ。」

「ネイによろしく伝えてくれ。」

微笑むその姿は美しく、目を話すことができない。こんなに人を魅了してしまう方が我が國の神であることが、誇らしく思えた瞬間だった。

「これから忙しくなることだらうから、困つたら鏡盆に触れて僕の名を呼ぶように教えてくれ。」

付け足すように早口にそう言つと、今度こそ透明になつて周りの景色と同化するかのようにスッといなくなつてしまわれた。

ふー、と大きく嘆息。漸く緊張がとれた気がした。

ネイは氣易く話しているが、俺とレーカには一生無理だらうと思ひ、また嘆息を一つ漏らした。

対話（後書き）

この二人の絡みをネイ抜きで書きたかったため、予定にはありませんでしたが書いてしまいました。笑

目が覚めると、辺りはもう暗くなっていた。

いつの間に寝入ったんだわ。まだ完全に目覚めていない頭を動かせよ」と、しばらくそのままぼーとしていた。

この世界に電気は無い。夜もロウソクで明かりをともしている。だから、何もないここは、本当に暗い。

どれほどそうしていただろうか、横たえて居た身体を起こす。辺りを一度見回してみると、そこには誰もいなかつた。

どれだけ寝てたんだよ、私…

遠くから人の騒がしい声が聞こえて、祭りの様子も様変わりしているらしい。

この状況、どうするべきか。判断に悩む。

今日はジュノの遊び相手になるためにここに居たはずだ。なのに、当の本人は光って消えた。鏡盆祭はもう終わってるはずなのに、どこに行つたんだか。

少々呆ながらも、この先のことを考える。

さつきクーンさんに今日は深夜まで動けないと言われた。城下はお祭り騒ぎで、城では舞踏会だそ�だ。

舞踏会だなんて、物語の中だけだと思っていたから少しだけ興味がある。だけど、厭味な人間たちの心理戦や、自慢話が飛び交っていると聞いて、さもありなんと納得して興味はどこかへ行ってしまった。

やることがないし、まだお祭り騒ぎが耳に入っているということは、夜中じゃない。つまりはまだ暇な訳だ。

クーンさんもいなし、やる事もない。どうしちよつか迷った挙げ句、私はジユノの言葉を調度思い出した。

私はチートになつたらしい。とは言つものの、その力を使ってみた事はなかつた。

クーンさんが心配して、ぎりぎりまでベッドから出してくれなかつたもんだからね。今日は数日ぶりの外出だ。

莫大な量の知識が頭の中に納まつてるのは、感覚的に分かる。てゆーか、その情報処理のために三日も眠つたと言つても過言じやない。だけど、もう一つの方は、まだ試したことがなかつた。

私の世界に無くて、こゝちに在る力。

魔法。

これまたおとぎ話のよつたな世界観だけじ、使えるとなつちやそつしない訳がない。

少しウキウキしながら身構える。だけど、はて、と一人で首を傾げてしまった。

魔法と言えば、杖や呪文。でも、個々の人たちは単なる言葉で発していた。それは夢も希望もない様子で。状態を見れば確かに不可思議な事が怒つていいけれど、何故か壮大さに掛けていた。

ここには不思議な呪文でも作つてみようか…暇すぎる私の思考は残念過ぎた。そう簡単には思いつかない。

まあ、いいか、と諦めて、人差し指を伸ばし目を開じてイメージしてみる。

光…温かいもの…

何かをつかめた気がして目を開けると、オレンジ色の丸い光が宙に舞つていた。

『おお、綺麗だなあ…』

独りじりちてそれを見つめる。一つきつじやつまらない。そう思つた私は、両手の人差し指で空を指し、どんどんと光を作りました。

ふう、と満足して息を吐く。そこには無数の光が舞い散つていた。

私はさつきのように寝転がり、それを見つめる。螢のよつたな淡い光は宙をゆっくりと動きながら、見ている私の心を癒してくれた。

それからうじれくらいうに経つただろうか。『ト、といつ頃と共に下の階段へとつながる小さな戸が開く。そこから顔を見せたのは、クーンさんだった。

「…」れば、ネイがやつたのか?』

息を飲んで、驚いた顔をしている。その表情を照らしてくれたのも、私が出した光だった。

『はい、暇だったので、ジュノが言つていた事を試していました。本当に魔法が使えてびっくりです。』

吃驚しているのはクーンさんの方なのか、しばらく考え方をするように眉間にしわを寄せていたけど、光の動きが目に入ったのか、それからの表情は柔らかいものになった。

「火急の用事が出来て少し外していたが、俺のいない間に何もなかつたか?』

『はい。特に何事もなく…といつよりも、何事も無さ過ぎて暇でした。』

正直過ぎる私の答えに笑い、それから皿のように持つてきてくれたバスケットの中身を広げて遅めの夕食にした。

満腹になると騒ぎの声は小さくなり始めていて、クーンさんは光を消すよつこいつ。綺麗なのに勿体ないと思つて、理由を訊ねると。

「今日の神殿には、皆田がいく。その最上階に不思議な光が集まつていたら、何事かと騒がれてしまうだろ。」

尤もな意見だった。

人の田につくように使つちゃいけないね。特に神殿内でそういうことすると、やれ神がなんだ、とかそういうた騒ぎになっちゃうもん。

私は言われたと通りにするために、光が集まるように念じる。纏まつたそれを両手に納めるようにして掴み、消えるよつて念じた。

両手を開いた時には、また暗闇が広がる。田が慣れるまでは、少し怖かつたけど今日は月が明るいからすぐになれる事が出来た。

「さつきの光も綺麗だが、今日の夜空は格別だ。」

指を差された方向は、もちろん空。私はそれに従つて上を見上げた。

『うわあ……』

感嘆の声が漏れる。それほどまでに見事な夜空だった。

「月が全て出て、しかも満月。だからこそ今日は鏡神祭にふさわしい。」

確かに、お円さまの丸い形が、鏡盆に見えなくもない。そう言つて意味が込められているのだと勝手に確信して、しばらく夜空を見つめた。

『不思議ですね。』

どれほど見つめていたのかは分からぬけど、じぱりくの沈黙の後、私から口を開いていた。

首が痛くなつてきただけど、見ないのも勿体ないと思いながらそれを続ける。硝子越しに見ている所為か、余計にキラキラと光る者たちが綺麗に見えた。

『私のいた世界では、月が明るいと星はあまり見えません。でも、こつちは月も星もしつかり出して綺麗です。』

率直な感想だつた。プラネタリウムで見るものよりも、作り物のように綺麗なそれは私をひどく魅了する。見入つて目が離せないほどに光が眩しかつた。

「…元居た世界では、星が見えないのか。」

『街の明かりが明る過ぎて、あまり見えません。少し暗いよつなどころでも、月が明るいと星はひとつ、ふたつと声を出しきらめく感じで見えるんですね。』

都会は特にそう。高校生の時に行つた臨海学校なんかだと、自然の中から空が見えた。それはどちらかと言つてこの世界の星空に近い気がする。

話してゐるうちに首の痛みが限界になり、上を向くのを止める。それから横を向くと、いつからこつちを見てたのか、真剣な顔つきの

クーンちゃんと皿が合ひた。すぐに元氣恥ずかしくなり、俯く。

何か話しかけなくちゃ、と思つたところで、帰らうと声をかけられた。

ドキドキしている心臓を押さええる。訳も分からぬ状態の心臓に納まれと感じて、クーンちゃんの後に続いてそこを後にした。

『……え?』

私は耳を疑つた。今しがたレークさんから言われたことが信じられない。

「もう一度言います。国王陛下にく最後の乙女」の存在が知られてしましました。」

だから、え、って言つたんじゃない！

「こり笑うレークさんから、その隣の宰相をまに視線を向けた。目を合わせようとしているまま、ぱつの悪そうな顔している。その横に居る人も、全く同じ表情を浮かべていた。

その行動が真実だと証明している。私は何んことしかできなかつた。

「先に私が呼び出されて聞いたされました。その後クーン殿に説明に行つていただき、何とか不間に問われずに済みましたが、貴女を陛下の元へ連れて行かなければいけません。」

死刑宣告だと思った。もう逃げ場がどこもない言葉は、私を深く傷つける。

…腹を、括るしかないのかもしれない。

『…分かりました。オウサマに会います。』

半ば諦めだつた。それに、親切にしてもらつていた人たちの暗い表情。約1名を除いて、だけど。それが悲しかつた。

「…いいのか、ネイ?」

中でも一番暗い表情をした人は、聞きにくそうだ。一向に口を開かない。宰相さまは気まずそうだけど、そこは大人な対応で話を進めようとしてくれた。

それもまた優しさ。顔は怖いけど、私は宰相さまが大好きだ。

『はい。みなさんを困らせたくないですし、まだ公に出るとは決まつていません。オウサマに頼めば、他の人にばれないかもしないじゃないですか。』

笑顔で言い切つた。そうじゃないと余計に心配させそうだもん。

それに、クーンさんがあんな顔で話してたお兄さんだし、悪い人ではないと思う。お願ひすれば叶うかもしれない。

そんなこんなで、私はオウサマに会つことになった。

「 いつそんな機会が設けられるのかと思って聞いてみれば、今日だとこゝへ。こきなりや過ぎません？」

「 だけど、それほどにく最後のこの女へはこの国にひとつて重要なものだそうな。ホント、ややこしくなつたなあ。」

人目につかないよつと、言つことで、オウサマの一人息子である殿下の部屋で面会することになつた。それは必要最低限の人間にしかその稀は伝えられず、陛下、王妃、そして私の真実を知つている三人のみ。

オウサマが殿下に勉強を教えていたる時間があるらしく、そこへ私たちが訪れる事になつてゐる。

「 で、手ぶらで行く訳にもいかないよな、と思つた私は、クーンさんに頼んでキッチンへと行かせてもらつた。」

毎度のことこれをお楽しみにしてるエルさんに手伝つてもらい、オープンに生地を入れて焼き上げ、魔法で冷やしてもらつた。一応、魔法は稀な力だそうで、そんな力があつたら文中をしていることが疑われてしまつそつた。と言う訳で、これまたこないだのおじさんにお願いした。

私は生クリームを冷やしながらかき混ぜる。その横でエルさんは、さまざまな果物をカットしていた。

「 これがこのよつと泡立つなんてなあ。」

感心しながら、生クリームを見ている。てゆーか、刃物使ってるのによそ見しないでよ。

全ての用意が済み、生クリームとフルーツを入れて巻く。ロールケーキの完成だ。

我ながら満足していると、名前を呼ばれる。それに反応して横を向いてみれば、ここにこしているエルさんがいた。

この顔、私は何度も見ている。

『…ダメです。』

先に牽制させていただきました。だって、流石にこれは味見もわけてあげる事も出来ない。

エルさんが私を見つめてくる表情があまりにもがっかりしていて良心が痛んだけど、それでもそれは許可してあげられなかつた。

『これは流石に量が少ないですし、今日は私から差し上げたい人がいるんです。だから、また今度作ります。今度はエルさんのために。』

ケーキを入れたバスケットを提げてクーンさんの執務室へ行くと、そこには共にオウサマの元へ行く人が揃っていた。

「今日も何かを作つたのですか？」

にこにこしているレークさんには、緊張感が欠片もない。私はドキドキしてるので、これじゃなんか不公平だよ。とか、勝手にむくれたりして。

ま、これがレークさんだし、この空気が読めないでワザと読んでない感じは、もう無視するしかない。

私はにつこり笑つて。

『陛下に手土産を、と思いまして、ロールケーキを用意しました。』

よく分かっていないうだつたけど、説明は後だ。いくら私にはオウサマの凄さが分からなくても、この国の最高権力者に会いに行くのだから、待たせるわけにはいかない。

「彼らは最上階にある王子の部屋へと向かつた。」

そこは明らかに私が今まで立ち入ったことのある場所とは違う。
質も、警備も、何もかもだ。

私はオドオドしないように一番後ろから従つように着いて行き、重そうな扉が開かれ、中に通される。

そこには美麗集団がいた。

…思わず見惚れちゃったよ。

机に椅子についている男の子は、金髪に碧の瞳、傷一つない肌を持つていて、例えるなら…そう、天使だ。

女性は見事な肢体を持つていてプロポーションが見事過ぎる。それに加えて、金の髪と緑の目はまるで女神様だ。

そしてもう一人、この人が国王陛下でクーンさんのお兄さん。クーンさんよりも少し色素のうすい茶色の髪で、目は碧。その顔立ちはよくクーンさんに似ている。違うことと言えば目の中と、神が肩よりも長いということ。そして線の細さ。病気がちだということが一目見て取れた。だけど、その威厳は半端じゃない。

まさにオウサマと言つべき人だ。

事情を知らない使用人のたちは、何事かと慌てだす。それには訳があつた。

クーンさんの存在だ。一人は兄弟だといつにあまり謁見は認められていないらしい。そして宰相さまと神官が揃う事もあまりないのだという。今までにない組み合わせの人物が揃つたことにより、広い部屋の中は混乱に陥つていた。

「皆席を外せ。」

その声は酷く部屋に染みわたつた。みんなは一斉に視線をオウスマへと向ける。その中の騎士のひとりが、できません、と言つた。

「謁見手続きはされておらず、この訪問は不敬にあたります。何らかの処罰を与えるべきかと。」

「なんだあ、こいつ。

少しイラつとした私は、睨みつける形でその人に目をくれる。騎士だというのに大きな態度。そりゃあもう、嫌つてほど目につきますさ。あとでクーンさんにでも聞こう。

「余が下した命に従えぬと言つのか。」

その一言の威力は大きかつた。そこに居た使用人はみんないそいそと出ていく。それから人払いをし、役者がその場に揃う。その時には、三人の視線が私に向かっていた。

「…そなたが、<最後の乙女>か?」

いつまでも俯いてはいられずに、顔を上にあげる。その時、三人が息を飲んだのが分かった。

私は、クーンさんたちの前に出て、オウサマへと近づく。そして、礼をとつて行つた。

『お初にお目にかかります、サカキバラ・ネイと申します。現在はクーン魔道師さまの専属女中をしております。』

顔を上げてみると、顔を抓まれたような表情をしている。何事かと思つて後ろを振り向くと、三人は微妙な顔をしている。

『私、何か間違えました…？』

不安になつてクーンさんに訊ねてみたけど、答えは返つて来なかつた。

「いや、間違つてはおらぬが、それは余が問つたもの答へにはなつております。」

ああ、そつか。だけど、これからお願ひに入るわけで、話は長くなると思つんだよなー。つてわけで。

『オウサマ、私はあなたの国の人間ではない。そりですよね?』

「…ああ。」

『だったら、オウサマへの態度とか、間違つていっても不問には問われませんよね?』

「これにもまたああ、と言われて、私は満足して言つた。

『とつあえず、みんなでお茶にしませんか? 積もる話はその時い。』

そう言つた時、一番最初に笑いだしたのは宰相やまだつた。何事かと思った私は、振り返る。そこには無表情のクーンさんと肩を震わせているレークさんがいた。

『私、何か間違えました…?』

再びの問いかにもクーンさんからの返事は返つて来ない。どうしたものかと思っていると、オウサマから許可が出た。

ロールケーキをカットして、それぞれに渡して行く。王子様へと渡した時、にこりとされて、胸がキューンとなりました！

…可愛過ぎるわー！

それからお茶を淹れて全員へと配ると、皆で同じテーブルにつく。お茶を淹れる時に手伝ってくれたレークさんの話によると、普通なら王と同じ席に王族以外がつくのは珍しいんだって。それを押し切つた形で話を進めた私の強引さに、宰相さまは笑つたらしい。

王妃様へとお茶を渡すと、ありがとうと言つ言葉と微笑みが返ってきた。その綺麗さに思わず赤面し、それから私も席へとつく。はたから見たらあり得ない図が出来上がつてゐるやうでは、私に視線が集まつていた。

「父上、僕も一緒に緒したいのですが…」

一人勉強机にいる王子様が駄々をこね、渋るオウサマに王妃様からお願いが出て、王子様も一緒に席につくこととなつた。

その時の王子様の満足げな笑顔と言つたら。そりやあ、可愛過ぎました。

「余が聞きたいのは、そなたが『最後の乙女』なのかいつかと言つ事だ。」

率直に述べられた。誰もお茶と菓子には手をつけようとせず、静

けさが広がる。

「そこからは攻防戦。腹の探し合になら負けないぞ、と意氣込み笑顔を張り付けた。

『あなたの言つく最後の乙女』とは何ですか。』

異世界から来た、神の声を聞けるもので、神の声を民に届けるだけでなく様々な事を民に与える人物だと言われた。

強ち間違つちゃいないけど、並たつてるのは約半分つて感じだ。

『では、何故オウサマはこの国にく最後の乙女』が現れたことが分かったのですか?』

「…鏡神祭だ。」

はて、と齒ましげにしている私に、続けざまに答えをくれる。

「神殿の空気が異なり、他人には分からんだろうが、余には町の様子が例年よりもよく見えた。そして、何よりも余の魔力の増幅がとてもすげー。」

手をぐつと握りしめている。しかし、視線は私から外していい。私も、目を逸らしたら負けな気がして、真っ直ぐに目を見つめていた。

『それが、確証ではないでしょうか?』

あまりにも曖昧すぎる。だから率直に聞いた。

「そなたは敏いな。」

お褒めいただき光栄ですけど、そんなこと小学生でもわかるつて。「王家に代々伝わる書物がある。それは王を継ぐ者のみに伝承されている。そして、その書物はこの国も物とは異なり、王が王位継承者へと伝承することになつていて。」

なるほどね。そういうことか。差し詰めその書物とやら、最後の乙女へが現れた時に起つた変化が書いてあつたんだろ。その予想は見事に的中した。

無理を言つてそれを見せてもらい、中を読む。それには確かにこの国と違う文字が書かれていたけど、ジュノがくれた力で私には読むことが出来た。

そして、オウサマが私に質問した事は、すでに分かり切っていた事だという事も分かつた。

『そうですね。この書物を読めば、私がビツヤヒへ最後の乙女へのようです。』

「…そなた、それが読めるのか？」

田を丸くしているオウサマ。そして、周りの人たちは私と王を交互に見ている。だが、誰も口を挟もうとはしていない。

「ならば理解できただろう。そなたが最後の乙女だ。」

そう言つたかと思えば、王が私へと傳へ。
え、と思つてゐる。

「よくこりつしゃいました。△最後の△女△よ。」

田を丸くして、固まるしかできない。

何してんすか、この人。こんな小娘に！

だけど、そう思つているのは私だけらしい。そこにいたみんなが
王と同じようにする。

…私、そんな偉い人になつたつもりはないんですけど？！

『あ、頭を上げてくださいー。』

「わつはこきませんわ、こ女さま。」

王妃様までもが私に丁寧な言葉遣いをしている。明らかに高貴な
雰囲気を纏つたその人たち、そしていつも仲良くしてくれてたその
人たちがそうしていることがすぐ嫌だつた。

『どうしたら、やめてくれますか？』

そう問ひと、私が命を下せば、とこゝ答へが返つてきた。

呆然としてしまつ。だつて、王族、だよ？この国で一番偉い人た

ち、なんだよ？なんで私がそんなことしなくちゃいけないの。

だから。

『お願いです、頭を上げてください。』

懇願した。

だけど、と言ひ声を遮つてもう一度お願いする。すると、最初のようにみんなが席に着いてくれた。

ほ、と嘆息。それからしばらく、私は頭を抱えた。

「乙女さま？」

可愛い声が聞こえる。私の顔を覗き込む碧の瞳は、途方もなく純粋なもの。声をかけた事を諫められていたが、私が頭を撫でると嬉しそうに微笑んでくれた。

『よし、オウサマ、一回落ち着きましょう。私が最後の乙女だとして、何故あんな態度を取つたのか教えていただけますか。』

言葉遣いを注意されたけど、年上は敬うものだから、と断つた。てゆーか、意味分かんないんだもん。

「乙女さまは神の遣いであり、存在自体が尊い御方。我々王族よりも上なのです。」

そうキタか。ジユノのヤツ、迷惑極まりないルール作ってくれちゃって。おそらく、伝承の書物を作ったのもジユノだろうから、余

計に腹が立つた。

『それはわかりました。だけど、私は見た通りの小娘に過ぎません。だから、普通に接して欲しいのです。』

ね、とレークさんとクーンさんに目を向けると、まずはレークさんがにこりと笑ってくれる。クーンさんは相変わらず固い表情をしていた。

『私はレークさんの胡散臭そうな笑顔も、クーンさんが私をネイと呼んでくれるのも好きなんです。』

正直に言つたのに、お一人、酷い言い草だと零した人がいた。だけど、ホントの事だもん。

オウサマにはいつもの態度でいて欲しいし、他の人もそうだ。私は“ネイ”なんだから。

『とりあえず、ケーキ食べて下さい。お茶も冷めちゃったし、淹れ直しましょうね。』

そういうと、階は慌てるが、いつもの習慣だからみんなを止める。これは私の仕事だ。

お茶を淹れて席に着くと、まずレークさんが私のケーキに手をつけてくれた。それをオウサマが諫めたけど、笑顔を浮かべて言つことに。

「ネイさんは頑固ですから、一度言いだしたら聞きませんよ。」

酷い言い草だと思つたけど、向けられた笑顔にさつきの仕返しだと書いてあつたので納得した。

『わい、オウサマ……じゃなく、陛下。』

「いえ、ルードヴィヒをお呼びください。」

そうか、オウサマも頑固者なんだな。さつきから頑なな態度を改めてはくれない。少し拗ねそうになつたけど、ジア教の敬虔な信者なのだと想い、仕方なしに諦めた。

『じゃあ、ルードヴィヒをお呼びしても?』

それに答へ、様はいらないと言われて、ちゃんと落ち着いた。

『ルードヴィヒ、私ちゃんどわざままな技術は伝えます。それから、ジユノの言葉も。』

だからそれと引き換えに。

『私を公の場に引つ張り出したこと約束して下せよ。』

これが今日の目的。絶対に折れてはいけない」と。

懇願すれば聞いてくれると思ったのに、返事がないまま済つたような表情をしてくる。これは長期戦になるのか…と覚悟した時。

「それは、命令でしょうか。」

何とも頑なな人だ。

しょうがない、と一つ嘆息。そして、厭々ながらに言った。

『私を公の場に出さないと誓いなさい。』

「仰せのままに。」

ネイはやはり最後の「女」の立場からは逃げられないようだ。もちろんそんな予感はしていたが、この国の最高権力者である陛下の態度を見れば、さらなる納得をえられた。

そして向よりあの言葉。

“私を公の場に出さないと誓いなさい”

厭々ではあったが、あれは譲歩した命令。しかし、その光景はあまりにも高貴であった。

はじめから態度も雰囲気も口口口口変わる少女だと想っていたが、あの時は格別で誰もが見惚れていたのが分かる。かく言ひ俺も。

そして、言つなればあの雰囲気のあの少女にふさわしこと想つた。

少女を他人に知られたくないといつ思想で溢れていたが、それはもう到底叶わない。

そして、いうなる事は兄上がレークを呼び付けるといつ、数日前の出来事から予想していた事であった。

「先程、陛下に呼び出されました。」

低い声でそう始まった。

今は鏡盆祭の最大の遠視の行事が終わり、眠りについてしまったネイをそこに残して執務室に居る。

レークの言葉に何事かと思い視線を書類から上げると、いつもの胡散臭げな笑みを浮かべているレークではなかつた。

そこにいたのは、至極真面目な表情を浮かべる青年。レークではないと思つてしまつたのは、普段のレークからはかけ離れ過ぎているからだった。

「なぜ陛下がお前を呼びだす必要がある?」

祀り事は無事に終わつた。取り急ぎ上じてみると、今も今は無いはず。

市井のことは鏡盆祭で明らかになつた。つまり、城下や地方の様子は把握している。

…他に神官に訊ねる事があるのでどうか。

「△最後の乙女△の存在を疑われました。」

驚き、耳を疑つてしまつよつた言葉だつた。

鏡盆はネイが触れたことにより使用できた。他の神面にせえ氣づかれていない。だといつのに、何故陛下に分かり得るのか。

「驚かれるのも無理はありません。しかし、王の目を欺き続けるのは不敬に当たります。どうかクーン殿より陛下に説明していただけないでしょうか。」

俺は兄上を尊敬している。不敬に当たるなど、あつて欲しくないことだ。ならば全てを申し上げるべきだ。

しかし、そうすればネイはどうなる。あれほど嫌がつている表舞台に出る事になつてしまつのではないのか。それこそ忌み嫌つべきだ。

「ネイさんには申し訳なく思いますが、正直にすべて申し上げるべきです。それは仕方のない事でしょう。」

表情からすべてを読み取つたのか、言われた事は俺の胸を強く突いた。だが、理解はしていても、どうにも納得はできない。

「陛下は感づいておられるところより、確信を持つておいでです。他の貴族に知られてしまえば、どうやっても表舞台に引っ張り出されてしまうでしょう。」

尤もな言い分だ。避けられない、か。

「ネイさんは嫌がるでしょうが、まずはクーン殿が陛下にお話しく

ださい。」

嘆息し承を告げる。満足そうにして出て言ったレークから、翌日朝陛下からの呼び出しの手紙を渡された。

伝説の乙女のことだからか、随分と話が早い。俺はそれに従い、無い蜜に陛下へと会いに行つた。

「久しいな。元気にやつていたか。」

「こやかな笑顔。そこに居たのは、国王陛下ではなく俺の兄上だつた。表情はいつもよりも柔らかく、臣には親愛の情がある。

腹違いとは言えども、田の色と少し違う髪色以外はよく似ている。しかし、身体の弱い兄上は騎士団に努めている俺とは、体格の差が合つた。

「…お久しぶりでござります。」

謙つてそう言つと、やめてくれと言われて顔を上げる。

いつも言われるがこれだけは止められないことだ。兄上が陛下であり、俺がその臣下であるとの証明として。

「早速だが、单刀直入に訊く。」

身体を一瞬震わせ、王たる者の視線を一身に受けた。ああ、この人は自分の兄上ながら陛下であるのだと、いつもながらに実感した。

「最後の乙女 の存在を確認しているな？」

もつ、すべて存じ上げているのだ。あの田はそつと黙つている。

俺は嘘はつけないと想い、田を呑ませてしつかりと頷いた。

「……なぜ、黙つていた。」

「……申し訳ありません。」

理由を訊いていたと言われ、今度は謝罪の言葉も言えない。
どう説明するべきか。口をつぐんだまま考える。

説明をするにはネイの内面的なことを話さなければならぬ。しかし、それはすべきでない。

では、どうする。

よく考えてみれば、乙女は陛下と同等、または上の存在。ならば答えはひとつ。

「……自分は、公の場には出たくない、そう言われてしまつたのです。」

「乙女は、我々に協力しない、と？」

訝しげな表情を隠すことなく露にしている。普段ならば隠すだろうが、相手が俺だからなのか、自然なままの表情だった。

この時は威圧感はなく、兄上としての質問だ。使い分けがどんな基準かはわからないが少し嬉しい。

「いえ、そういう訳ではありません。レークや私に異なる思想を教えてくれ、新たな料理を作ってくれています。」

これを後に、兄上はネイについてさうに熱心に聞いてきた。

今は俺の専属女中として働いていて、シェパードの邸にいるという話には耳を丸くしていた。だが、次に議会を正論で言い負かしたことを教えると、愉快そうに笑っていた。

そして、俺が部屋を後にすると同時に、明日には会えるように手筈を整えると言つて、楽しげに送り出してくれた。

仕方のないことだらうが、自分の気持ちを自覚してしまつてはいるために、たとえ国王陛下と言えども、ネイに会わせることにあまりいい心地はない。

単なる独占欲にすぎないそれを理性で抑えながら、ひとつ疑問が浮かんだ。

…ネイは俺をどう思つてゐるのか。

たまに近づき過ぎると顔を赤くしたりする。なのに、同じベッド

で俺と眠るという大胆な行動に出るのは、ネイの方だ。しかも、気になった様子はなく、俺の方が戸惑ってしまった。

確かに近い存在なのだろうが、自分の位置付けが気になる。

本人に聞いたところで、戸惑って答えてはくれないだろう。もしくは、平然として単なる知り合いと答えるだろう。

どちらにしろ答えは俺を奈落の底辺にまで突き落とすだろうから、聞かないのが無難なのだろうとそこからの思考はやめた。

自分の執務室へ戻り、嘆息をひとつ。とりあえず、今は目の前の書類を片付けねば。

そう思つた瞬間に、ネイがお茶を淹れにやってきた。本来ならば、断つて仕事をするべきだ。しかし、可愛い笑顔を浮かべるネイの表情が曇ることを考えれば、それは絶対にできない。

「己」の変化に少々戸惑いながらも、それに嫌な心地はしない。だからこそ、早々に書類を放り出して、ネイの元へ向かった。

そして、いつものことではありながら、決まった時間はないのに、レーグがやつてきて一人の時間を邪魔するので、俺は肩を落とした。

それにあからさまに面白そうなニヤリ顔をしている姿には、わざと気づかないふりをする。ネイはもちろん何も気づいていなかつた。

いつか、この気持ちに決着がつくだろうか。果てしなく遠い未来を想像してまたひとつ嘆息した。

平穏な日常

オウサマに会つてから早一週間。何事もないまま無事に生活している。約束は守つてくれてるみたいだ。

安心して生活できることを嬉しく思ひ、私は今田も元気よく働いている。

「今日のお皿ご飯は、レークさんが気にしてたハンバーガーにしましたわね。楽しみにしていてください。」

今だつて、いつもの如く神殿を抜け出つて二ホンのことを聞きこえたレークさんにお茶を出して、ファーストフードについて語つていたところだ。

毎度のことながら田を輝かせている様子は、大きな子供のよつと思える。毎日変わらないその様に、自然と笑みがこぼれた。

しかし、変化したこと也有つた。

「ネイフー。」

『殿下ーー。』

お茶のワゴンを片付けるためにキッチンへ向かう。近道しちゃえ、と中庭を横切つとした時。可愛らしこ男の子が近寄ってきた。そ

の周りには誰もいない。

『また抜け出してきたのですか？』

満面の笑みで頷かれてしまえば、もつ何も言えない。私は諦めたよついに、殿下に視線を向わせた。

「ネイに会いに来たんだよ？」

ズツキューーン！

撃ち抜かれました！何この可愛セー！

身もだえしそうになりながら、笑顔がとろけないように心がける。それと一緒に、抱きしめたい衝動も抑えた。

何故か殿下に懐かれた私は、もう一週間毎日殿下と会っている。大抵は王妃様にお茶菓子を届けに行く時に会えていた。だけど、私を見かけて駆けつけてくれるようになつてからと言つもの、もう4日も殿下から私に会いに来てくれるようになつていた。

私、小さい子に好かれるようなことは昔からなかつたんだけど。

そう不思議に思いながらも、女の子みたいに可愛い殿下が合いに来てくれるのは嫌じやない。本当に、こんな弟がいたら甘やかし続けるだらつ、と嘗つほどだ。

「今日も母上の所へ行くの？」

『はい。後でお茶菓子を用意に参ります。』

「じゃあ、僕もその時一緒に行く。それまでネイと一緒にいてもいいでしょ?』

もちろん、うんと言いたいところだ。でも、そうはない。

彼は王位継承権第一位の王子様だ。そう簡単に姿を消していくはずもない。現に、遠くから殿下を探している声がする。

「…ダメ、なの?」

ウルウルとした純粋な目で私を見つめないで…心が揺れるから。
『殿下、黙つて出てきたのでしょうか…それではみなを心配させてしまこます。』

ここは心を鬼にしてお説教と行きましょう。嫌われたくないけど、仕方のない事だ。私が田に入れても痛くないと言わんばかりに可愛がっている殿下は、監にも同じ扱いを受けている。もちろん殿下が良い子だという事もあるが、怒られた事はあまりないんだってさ。

確かに可愛いナビ、世間だけ甘やかしてるんだよって話。

「じゃあ、許可を貰つたらいいんだね!』

急にお喜びになつてどうしたんですか、そう聞きたかったけど、掴みどころのない殿下は、声のする方へと私の手を引きながら走っていく。

私は前屈みになりながら、足をもつれさせて転ばなことうに気を付けた。

「殿下！」

騎士も女中も殿下が私みたいなの腕を引いてやつて来たことに驚いているのが一目瞭然だ。でも、ここ数日王妃様の元へお菓子を届けているので、私の面も割れている。

周りの人たちがあからさまにほつとしたのには、殿下がどれだけ可愛がられているのかが明らかだつた。

「僕ね、これからネイのお菓子作りをお手伝いしようと思つんだ！」

『殿下？！』

一番最初に私が声を上げたのは無理もない。だって、そんなことさつき言つてなかつたんだもん。許可を貰う、としか言つてなかつたはずだ。

「母上においしいものを食べさせてあげたいんだ。ダメ、かな？」

きつと、皆はウルウルとした目で見つめられてるんだろう。見事に狼狽してる。

「でも、護衛はどうなさるおつもりですか？」

「ネイは叔父上の専属だもん。何もないよ。」

「ここにいる人たちは陛下の腹心とも言える。クーンさんと陛下の

中を疑う人は一人もいない。だからと言って、王妃様に持つていくお茶菓子の毒実を止めてはくれないけど。

まああれば、自分が食べたいからって意味もあるんだろうねえ。
毒味係のお姉さんはいつも嬉しそうに食べている。十分過ぎるって
ほどに。

「しかし…」

渋る家臣たちに殿下は、もう一度ダメか聞き、小首を傾げるよう
にしている。ああ、もうダメだな。

そう思つた時、見事に陥落した。許可が下りた。

殿下、そこには純粋なものだけしかないと思わせて下さい。

将来腹黒くなりどうな事を心配しながら、昼食のワゴンはそこ
いる侍女に任せて、私はクーンさんに許可を貰うべく、執務室へ向
かつた。：仲良く殿下と手を繋いで。

周りからの視線が時折痛かつたけど、毎度のことながらあの田で
見つめられてしまふと断れなかつたんですよ。

言い訳がましいことを考えながらも、ノックをしてから執務室へ
と進む。中に私たちが入つてもクーンさんは書類から目を離さなか
つたけど、天使のお告げによつて例に無く驚いた顔をした。

「殿下…これから何を？」

声を大にして問わないところが、なんともクーンさんらしくて面白かった。だけど、この状況で笑つたら浮く。つてことで、我慢した。

「勉強が嫌で逃げて来たんだ。」

屈託のない笑顔。これはクーンさんも陥落だらう。と思つたのに。

「殿下、あなたは将来この国を担つのですから、勉学を厭つてはいけません。」

固い声。それは小さい子には厳しいものだらうけど、私にはその意図がよく分かつた。

殿下が大切だからこそ、自分が憎まれることを分かつていて説教役を買つてる。将来的には仕える事を考へていてるからこそ、立派になつてもらいたいんだって言つてたから。

「うん、わかつた！」

笑顔は疊ること無い。怒られていたはずなのに、少し嬉しそう。

「だけど、今日はこれからネイと一緒にお菓子を作るんだ。いいでしょ。」

クーンさんはしばらく難しくしていたが、渋々頷いた。それに殿下は満足そうだ。嬉しそうにありがとう、と言つて近づいて行き抱きつく。その姿は見ていて微笑ましかつた。

眼福、眼福。天使と美青年。何とも絵になりますな。

一やける顔を隠す事もせずに一人を見る。クーンさんは少し戸惑つてゐみたいだけど、ちゃんと抱きしめてあげた。

「叔父上の分もちゃんと用意するからねー。ネイ、行けー。」

クーンさんから離れて私の所までやつてくると、手を繋ぐ。私は苦笑しながらクーンさんに一礼をしてそこを後にした。

『殿下、今から行くところは殿下の思つているような綺麗な場所ではありません。それでも構いませんか?』

「もちろんだよ。母上と叔父上に美味しいお菓子を食べさせてあげるんだー!」

手を繋いで大きく振りながら歩く。すれ違つ女中さんがお辞儀しているけど、その表情は驚いていた。

それはもちろん、少し違う女中服を着たクーン魔道師専属が、仲良く王子殿下と歩いてるからだらう。ちょっとだけ、みんなが驚ろく顔をするのは、面白い。

それを楽しんで歩いていたんだけど、中でも一番驚いていたのは、エルさんだった。

調理室に入ってきた私に挨拶をしようとしたまま、固まってしまつてゐる。一方の殿下はにこやかだ。

『今日は殿下と一緒にお茶菓子を作ります。エルさんもお手伝いしてくれますよね?』

固まつちやつてゐるエルさんにそう言つた。でないと、動いてくれそうになかったから。何度も度持つたよつにして何とか返事をするし、必要な材料を聞いたエルさんは勢いよく飛び出して行つた。

…どう行つたんだか。

ま、普段は王族がこんなところに来るはずないもんね。王族の料理を担当していくて触れ合つ機会が多くたとしても、そりや緊張しちゃうよ。

エルさんが戻つてきてくれることを祈りながら、私は器具の用意をする。

その一部始終を笑顔で観察してくる熱い視線にやりづらくな、と思ひながらもテキパキと動いた。

『殿下、分かつてゐるでしょうが、くれぐれも私のあの事は内密に。』

分かつてゐるんだかいないんだか、大きく頷いてくれました。可愛いけど…もし喋つちやつたらいくら殿下でも許せないかも。

と、まあ考えはこいら辺にして。エルさんがやつといわ持つてくれた材料を確認してから殿下に向き合つた。

『さ、始めますよ。腕まくりをして、せつけんで丁寧に手を洗いましょう。』

そんなスタートで始まり、白いエプロンをつけた殿下は私の言葉に従つて料理を開始した。

簡単なものにするべきだね。そう思つて考えたレシピはクレム・ダンジュ。ふわふわとした食感のチーズケーキだ。

ケーキの説明もそこそこに、殿下が真剣に努力している姿を私は微笑ましく見、エルさんはハラハラして見ていた。

「ネイ、状況が全く理解できないんだが…」

いつもなら周りをうろついてるエルさんが、手招きして私を端まで呼んでの第一声がそれだった。

確かに、一国の王子様が使用人の台所にいたら吃驚だよねー。

どうやって説明するべきかを考えをめぐらせ、何とか言葉にした。いろいろちよろまかしちやつてごめんなさい。そう思いながらも、嘘を並べる形になってしまった。

「クーンさんに着いて王族の方に会つた時の話はしましたよね。あの時以来、殿下に懐かれまして。今日も殿下から会つに来てくださいましたんです。」

これは事実だし、嘘も含まれてない。だって、もしかしたら殿下は、私が「最後の乙女」だから気に掛けてるのかもしれない。

「それは分かったが、どうして今ここに殿下がいらっしゃるんだ?」

「妃殿下にお茶菓子を作つて差し上げるやうです。」

これは事実。今日の前にいて嬉々として調理をしている様を見れば、それは一目同然だ。

エルさんはそうか、と言い、そこを離れよつとする。私が声をかけると、自分が同じ場所にいるのは身分不相応と云つた。

だけど、そんなこと言つたら、私だってそうなるじゃないですか。つてことで引きとめる。エルさんは不安そうにしてたけど、でもやっぱりどこか嬉しそうだった。

平穏な日常 もの2（前書き）

お気に入り登録が300件を超えました！
たくさん的人に読んでいただけて、とても嬉しいです。

「ネイ、 じとん感じでいいのかなあ。」

「 もう少し頑張って泡立ててください。」

分かつた、と囁ひと腕が疲れた見たい出歯を食こしばりながらやつていてる。

あー、もうひーー可憐過ぎるよー。ついことで、甘やかします。

「 殿下、 それは料理長のエルさんに任せて、 次の工程に進みましょう。」

最後まで自分でやりたいと一度はござなたけど、あまり時間がかかるてしまつと良くないことを伝えるとしぶしぶエルさんに泡立て気を渡していた。

「 さて、 次はもつと力が要りますよ。 クリームチーズと砂糖を混ぜますからね。」

やつぱり次の工程も殿下がやるには大変そつだつたけど、何とか生地が出来た。

「 これは濡らした布で巻くんです。 そうしたら、 ふわふわだけどしつとしたケーキに仕上がりますからね。」

「ネイ、さつきから気になっていたんだが…ケーキ、とは何だ？」

…

はい、思わず固まっちゃいました！

ケーキを知らないって…どんな生活してたらそんなんですか。てゆーか、ケーキなくて生きていけるんですか！

甘いもの好きな女子にとつては別腹。そして無限に食べられそうなものなのに。

「スポンジ生地にクリームを塗ったものです。中に果物を入れると美味しいんですよ。」

そうは言つてみたものの。見たことがない人には想像もできない代物らしい。私に取つたら普通なのに、料理水準の低いここではお茶菓子にはティレ・タータという一度苦しんだ思い出のあるアレしかないんだって。信じられない。

料理と同様、誰か開発すればいいのに。

今度作りますよ、と言えば、エルさんは嬉しそうに頼んだ、と言つた。

「ネイ、その話は良いから、次はどうするの？」

殿下は今は目前のものに集中してるらしい。それ以外は目に入ら

ないのか、次の手順を促した。

「器に濡れた薄い布を入れて、生地を半分入れてください。そうしたら、切った苺を入れます。それからもう一度生地を重ねて布をきつちりかぶせて完成です。」

殿下はそれを丁寧にやつた。いつもの私だつたら見ていてイライラするはずの不器用さなのに、殿下がやると可愛いから許せちゃう。

「やあた！」

キラキラとした瞳。笑顔を浮かべるその姿は、本当に嬉しそうだ。

私はその容器を受け取り、昼食の後のお茶の時間に持つていくことを約束した。そして、一度殿下を送りに、行こうと思つたんだけど。…駄々を捏ねられまして。これはどうゆべきなんでしょう。

もつとネイと一緒にいる、とか可愛いことを言つてゐるから、叱りたくても叱れない。だけど、いつまでも殿下がこんなところにいるわけにはいかない。それに加えて私には仕事がある。午前中の分の配達がまだ残っていた。

「殿下、申し訳ありませんが、私にも仕事がござります。

もしもお部屋へ戻るのが嫌なのであれば、ここではなくクーン魔道師さまの執務室に行かれてはいかがでしょつか。その勤勉さを見る事も一つのお勉強になると思いますよ。」

本当はもつと遊びたいのだろう。俯いてしまっている。だけど、他のやるべきことを諒るにできるほど時間はない。クーンさんは忙しい。その時間を少しでも短縮させたいと願う私が、何もしない訳にはいかないから。

ネイは心を鬼にします。

何とか説得することが出来、断わり切れず一緒に手を繋いでクーンさんの執務室へと向かった。

ノック、それから部屋に入ると、書類から目を離すことなくひたすらに仕事をしている。その姿を見た殿下は真剣な眼差しをクーンさんに送っていた。

「…殿、どうしてここにいるのですか。」

視線に気づいたのか、目の前にいる人物に驚いている。

そんな表情を見るのは少し嬉しいから、私は一人の顔を見比べながら顔が二ヤけるのを必死にこらえた。

「ネイがね、叔父上の勤勉さを見るのも一つのお勉強になるって言ったからだよ。」

クーンさんの視線が痛い。言いたいことはよく分かつてゐる。つてことで、私逃げます。

「殿下、よろしければそちらの方へ掛けください。では、私は書類の配達に行つてきまーす。」

私は一人をそこに残して、書類を持って駆けだした。

「おー、ちゅうと待てー。」

げ！

一応走らなにように心がけていたのに、声を掛けられてしまった。で、思いつきり嫌な声が出そうになつたのは、胸に付いている赤い羽根が原因だ。

過激派のお偉ごさんには捕まつちゃつたみたい。どう切り抜けよう。

そう考へても、こっちから声をかけるのは失礼にあたる。私にとってこっちのルールなんてあつて無きが如しなんだけど、流石に一女中として働いている今はそつもいかないのだ。

「その書類はうちの省への届けか？」

「ええ、そうです」^{レギ}ります。」

書類の省名を見て言つてゐるのだからそうなんだろ？。でも、いちいち多い議員や貴族を私が覚えてると思つなよ！

「慢じやないけど、五分前に自分の顔を殴つた人を忘れるくらい私の顔覚えは悪いの。

つまりは、貴方がどこの省のお偉いさんで、どんなに偉いかなんて知らないってこと。話を合わせているのは、過激派の人だから波風を立たせないためだ。

「お前、クーン魔道師の専属だな。」

手で顔をくつと持ちあげられる。気分悪いけど、顔が引き攣らないうちに心がけた。

「お前が数日前より、王族の方に接触している事は分かつていて。ヤツは何を企んでいる。国王の座か？」

「頭悪いヤツ、私嫌いです。」

「そう言つてやりたくなつた。なんてつたつて考え方が早計過ぎる。」

クーンさんが王族に接触する=何か企んでいる、にじりして繋がるんだろ？。陛下もクーンさんもただ単に兄弟としての時間を楽しんでいるだけだ。それに王妃様と殿下は私のお菓子を美味しいと言って食べてくれていてるだけなのに。

短絡的でヤになつちやー。

私は早くそこを去るひつと、引き攣らなによつに笑顔を作つて一步下がる。それから一礼をして言った。

「申し訳ございませんが、私には身に覚えのないことでござります。

」

「嘘をつくな！みなが多くを叩撃しているのだ。逃れられる筈がないだろ？」

「うん、わかつてゐよ。王族に接触してたのはクーンさんもとい私だ。それを多くの人に見られてゐる事も。

クーンさん曰く、クーンさんが陛下に会つのつてどうも周りからしたら嫌な事なんだつて。

「確かに、何度かお会いになられておいでです。しかし、それは私が異国の方からやつてきたからです。」

「訝しげな視線。まるつきり疑つてくれちゃつてますよね。ま、そんな視線も慣れちゃつて、私にとつてはお手のもんだけね。

「お前が異国からやつて來たことがどうして関係している。」

「私の國ではお茶菓子の種類が豊富にありますし、それを王妃様に食していただいているのです。

「幸い氣に入つていただけたようですし、陛下からの命を受けてお菓子を作つてゐるのです。」

「ここまで言つたら何も言えないでしょう。私は心の中でほくそ笑む。

過激派は温厚派に対してはきつく中り、特に温厚派代表の息子であり元王族でもあるクーンさんを疎ましく思つてゐる。だけど、彼らは絶対に陛下には逆らえない。だからこそ、陛下の命だと黙つてしまつのが黙らせるのには一番だ。

大方の予想通り、おじさんは黙りこくる。私は一礼をしてそこを後にしてようとした。が、呼び止められる。それは書類を受け取るというものだったけど、一蹴した。

だつて、ちゃんと扱つてくれるか分かんないし、本当に省の役人かなんて信用ならないんだもん。

世の中信用第一ですよねー。

「申し訳ございませんが、これを省の係の者に届けるまでが私の仕事でござります。貴方様のお手を煩わせるほどのことではありますん。」

では、とお得意の笑顔と綺麗な礼を決め、ずつぽりと猫を被つたままそこを後にした。

後で陛下に謝らないと。勝手に名前使つちゃつたし。

書類を届けた帰りにのんびりとそんなことを考える。近道のために外に出でみると、青空が透き通っていた。

さて、次のお仕事に励むといったしますか。

そう思つて執務室へと戻ると、殿下はもういなかつた。どうしたのかを訊ねると、私が配達に行つてすぐに帰つたんだつて。その理由が可愛いくことに、私がいないとつまらないんだつて。

嬉しくなつて出でしまつたニヤけ顔を両手で押さえながらいると、クーンさんは走らせていたペンを止め、私の顔をじつと見つめていた。

何事か、と聞くと、何でもない、と返される。しかし、私を伺うのは一向に止めてくれそうになかつた。

『あのー…居辛いんですけど、出でつた方がいいですか?』

「いや、いい。」

そう言つと、今度はペンを持つて書類に視線を走らせる。ホッと一息ついて、私は書類の整理に取り掛かつた。

それでもやつぱり集中できないみたいで、時折こつちを伺つてるのが分かる。だから、私は書類から目を離すことなく、何か用ですか、と聞いてみたら、吃驚したよつてごどもつていた。

それを見て笑うと、お皿の用意してきまゆ、と皿つて出でこぐ。

「この生活にも慣れてきたなあ、と少し嬉しくなった。

閑話 気の毒に（前書き）

今回は珍しい人の視点からです。

鏡盆祭が終わり、今日は特別やる事もない。部下たちに遊び回される事もなく、のんびりと城内を歩いていた。

そして、ふと思ひ出す。

鏡盆祭の最大の行事、遠視。その際に鏡盆の上へと舞い降りてきた神はあまりに美しかった。

なぜ見えたのかは分からぬ。ネイさんに触れていなければ見る事が出来ないはず。なのに、鏡盆祭の時には見えた。

何か理由があるのだろう。

そういえば、最近ネイさんの所でお皿をいただいていませんね。

鏡盆祭までの準備期間、当日、事後処理。それがやつと終わって暇が出来た。今日あたりにでも、それを聞きに行こう。

そして、チキュウの料理をいただいて、二ホンの話を聞こう。まずはお皿をいただきたいことを申しておかなければ。

そう思つて、クーン殿の執務室へ行く途中。庭園に差し掛かった辺りで、いつもは聞かないような笑い声が聞こえた。

セレ、ジの城に「」ひやつて声を上げて笑う方がいたでしょうか。

不思議に思い、声を探して歩を進める。聞こえる声は、まだ幼さが残る男の子の声と、つら若き乙女の声。どちらも、自分には聞き覚えがあった。

しかし、ジのような所で話しているはずもない。半信半疑のまま、バラの道を進む。やまだかな花が咲き誇る庭園の中の、一際大きな木の下。その下に一人はいた。

…やはり、ジのお一人でしたか。

ネイさんと王子殿下。一人は仲良く手を繋いで木の下に座っている。それはまるで、仲の良い兄弟の様。ネイさんが若く見えるので、そう年が離れているように見えないのが、少し可愛らしい。思わずもれる笑みを隠すことなく、声をかけることにした。

「おー一人とも、こんなところで話していっては風邪をひいてしまいますよ。特にネイさんは病み上がりなのですから。」

心配して声をかけたはずなのに、一人は私の名を呼んで「」「」「」していた。

本当に兄弟のようですね。ネイさんはあまりそう思っていないでしそうが、綺麗な顔が並んでいると、本当に天使のようです。

感心して見てみると、一人は不思議そうに私の顔を見ていた。

「ああ、特に用はないのです。普段あまり人気のない庭園から明るい笑い声が聞こえたので。」

そう言ひと二人は納得したように目を合わせていた。

…「」に画家がいたら、この素晴らしい被写体に感動するのじよつね。

と、関係ないことを思つてしまつほど、花に囲まれた二人は綺麗だった。

「用事、と書つぽどではありませんが、今日からまたお會いはんを一緒に緒をせて頂いてもよろしいでしょうか。」

『はい、喜んで。』

殿下は事情を知らないからか、どうじつ意味かをネイさんに問つてゐる。彼女の答えを聞いた殿下は、自分も一緒に食事をしたいと言ひだしたが、私もネイさんもそれは許さなかつた。

それよりも、いつの間に殿下はネイさんに懐いたのでしょうか。仲、良過ぎませんかね。

これではクーン殿もやきもきしているだらうと思い、その様子を思い浮かべて思わず笑つてしまつた。

まだ幼い甥っ子にネイさんを取られたと思わなければいいのですが。

昔から何に対しても頓着のなかつた知人の豹変ぶり。陛下も宰相閣下も私も驚いていた。

「の三人が揃うと大抵はクーン殿の話になる。陛下は兄弟として、宰相殿は親として、私は友人として。さまざまな話は尽きないが、やはり語ることは共通のものが多くなる。それがクーン殿だ。

少し前まではどんなに朴念仁だとか、女たちのことに対する行動の鈍さなどの笑い話をしていた。しかし、今では違う。

ネイさんの存在が陛下に認知され、その後に一度だけお茶をしたが、その時の話題はクーン殿とネイさん。一人がどうなるか、とのことだった。

クーン殿のあからさまな態度。見ていて面白いくらいネイさんのことになると過保護になり、他の男などを近寄らせないために彼女に近づこうとする男を眼力で抑えている。彼女はそれに気づいていないが、もしかしたら鈍感な友人も自覚で無しでやっているのかもしない。一人とも疎いとは、救いようがない。

本来ならば、「最後の乙女」という尊い存在であるネイさんとの恋は叶わないだろう。しかし、初めて見せた執着を垣間見て、どうしてもくつづけてあげたい気持ちになる。幸いネイさんは公には出ていない。陛下にも私たちにも普通に接してくれと頼んだ。

それならば叶うかもしませんね。

貴族階級がない彼女が王弟であるクーン殿と婚姻を結ぶのは難しいだろう。ならば、私が後ろ盾になつてもいいですね。

そう思つて、思わず一瞬マコしてしまつた。

それを見ていた二人が私を見上げて首を傾げる様は、本当に愛しき身もだえしそう…

…「ホン。決して変な趣味ではありません。綺麗なものや愛らしきものを愛るのが好きなだけですから。

どうしたのかを訊ねてくる殿下に。

「いえ、先日陛下と宰相をまとクーン殿のことを話しました。その時のことをつい思い出しちまつた。」

そう言つた。

すると、一人はまた顔を見合させていた。その目は、丸く見開かれており、何かに驚いていた様子だつた。

「僕たちもね、神官様が来る前に叔父上のこと話をしていたんだ。」

「ほひ、それはどんな事でしょつか。」

非常見興味深い。もしかしたら、ネイさんの心が聞けるかもしない。そう思つて前に、私は聞き返してしまつていた。

無礼に取られたかと思い、態度を改めようとするが殿下は気にした様子もない。

「の方はこう言つ御方なのだ、と思ひだすと、緊張していた肩の力を抜いた。

王族の方々はとても氣さくだ。どちらかと言えば上級貴族の方が身分について口うるさい。

仕事もせずに威張り散らしている姿など、見苦しいだけです。それに気づかないのですから、少し哀れですね。

酷い物言いと思われるかもしぬないが、これが事実。陛下も宰相さまも頭を悩ませていることだった。

「ネイと僕にとって、叔父上は頼りがいのある、兄貴のよつな存在だ、つてね。」

ここで私が脱力した理由を、みなさんは「理解されている」と思います。

あれほどまでお互に近い場所にいて、何故片方は気付かないのだろうか。明後日の方を見て、少し考えてしまつ。

むかし、あれほどクーン殿の人に関する鈍感さを笑つたけれど、こっちもいろいろと問題がある。

二人を一番近くで見てゐる自分が、二人の心の近さを理解している。神があつしゃられたように、二人がイチャイチャしているようにも見えてきた。つまりは、彼らがお互に自覚が合つてそう言つ

た雰囲気を作り出していくと思つていた訳で。

…まさか、クーン殿よりも鈍い方がいらっしゃるとは思いませんでしたね。

ネイさんは敏感な人。人の機微を読み取つて、会話の主導権を握つて言葉巧みに人を誘導し、全てを意図的に動かせる子ということは、まだ付き合いも浅いが理解できていた。それなのに、色恋沙汰に疎いとは。

今、ネイさんは、クーン殿の前で地を出していくことが多い。だからこそ、一人が理解し合つて、傍にいることを認めた相手同士になりつつあると思ったのに。

「ネイさんも、そう思つのですか。」

『はい。あ、でも、納得してる訳じゃなくて…なんだか、もっと別の存在のようにも思いますけど…』

「…まだ、分からぬので、とりあえず“頼れる兄貴”なのですか？」

満面の笑みでそうだと言われた私は、また脱力してしまった。

問題があるのは男の方だと思っていたのに、それを上回る人がいるとは思つていなかつた。

これは、三人で話しあつてもどうにもならない問題ですね。

この後、私は彼の執務室へ赴き、訳も分かつていない彼に頑張れ

と言つてしまつた。

彼に紅茶を差し出す、ネイさんの微笑みは誰の前よりもクーン殿の前が一番輝いているように見える。そして、二人の雰囲気は、自分がこの場にいると言うのに酷く甘つたるかつた。

それなのに、ネイさんは何故無自覚なのでしょう。

二人の顔を交互に見て、今日三度目の脱力をしてしまつたのは無理もない

閑話 気の毒に（後書き）

レークさん視点でお送りしました。
この人、個人的にお気に入りです。笑

厄介事、急展開

今日は陛下に招かれて食事をしてゐる。いつも食べているものよりも豪華なそれは、実は私が作つたものだつた。

人払いをして食事をしている。コース内容はフランス料理だ。もちろん、正式なマナーに則つてゐる。

私は師匠兼給使なので、同じ席には着いていなかつた。

陛下とも一悶着あつたけど、元居た世界のものを伝達するためだと言つと、しぶしぶ席についてくれた。てゆーか、この夫婦頑固です。

嫌われてはいない。むしろ好いてくれてる。それは分かるけど、一線を引いて決して折れようとはしてくれない。

私の言葉が通るのは、命令を下さない限りないのだと言つ。そんなこと、したくないのに。

「乙女さま、とても美味しかったわこます。」

『王妃様、ネイとお呼びください。』

見目麗しい王妃様とは、会つてからと言つものにこの言い争いを続けていた。やはり、折れてくれないこの方は、頑固者だと言えるだろう。

「てゆーか、こんな小娘に謙らないで欲しいんだよねー。」

私なんて適當な性格してるし、腹黒いし、この国の名前を呼んではいけない神様のことを愛称付けて呼んでるバカ者なんだから。

って説明したのに、どうも上手くはいかなかつた。

普段は言い勝る私なのに、陛下たちにはそれが上手く作用しない。王族たる人たちの威厳の所為か、単にものの考え方が同レベルなんか。それはそのうち確かめて行こうと思つ。

これから付き合い長くなりそうだし、いつか言いくるめて見せたいし。気長に様子見します。

「ついしてこの日のディナーは滞りなく終了したのに。次の日になると、とんでもない事態に陥ってしまった。」

いつものようにクーンちゃんと一緒に馬車を下りる。ここまでは普通だった。

「ネネネネ、ネイさまつー。」

駆け寄つて来たミリアは酷く慌てていた。今まで優秀な女官としてのミリアは見てきたけど、こんなに慌てふためく彼女を観たのは初めて。面白くなつて笑いそうになつたけど、ミリアの言葉で全身の血が凍るような思いがした。

「噂が広まつています。」

何の、と聞えれば近づいてきて小声で答えをくれる。

「ネイさまが、最後の乙女である、と。」

クーンさんも私も慌てて、陛下の元へと行く。その時に聞いたミリアの話だと、いうだ。

昨日の食事の際、女中の一人が陛下夫妻が誰かを“乙女”と呼ぶのを聞いた。

：人払いがされてたはずなのに。気になつて聞き耳でも立てたのかもしれないけど、それ不敬じゃないですか。

ま、それはおいといて。

陛下よりも上の存在は神。もしくはその言葉を伝える、最後の乙女のみ。謙つているその様から、一人の少女が、最後の乙女などではないか、とのことだった。

それがどうして私に繋がるのか。

昨日の食事の際にはクーンさんがいた。それに宰相と神官も参加しており、給使にはクーン魔道師付きの侍女がひとり。その場にいた女は王妃様か私。必然的に王妃様はその対象から除外され、結果的に私が「最後の乙女」だと言われているらしい。

こんな事態、予想もしてなかつた。陛下は約束を守つてくれるはず。だけど、勝手に公になつてしまつたものはどうしようもない。

「…やはり、いらっしゃいましたか。」

人目を無視して走り抜けた。その先にいたのは陛下。というのも、飛び込んだのが陛下の執務室だつたから。

予想していた通りだつたのか、書類から目を上げてそこに脱力していた。

「乙女さま、申し訳ありません。侍女の躰が行届いていなかつたせいで。」

椅子から下りて私の前に傳ぐ。いつもなら止めて下さることで四つところ。だけど、そんな気にもなれない。

だつて、本当のことだから。

『その侍女が誰か分かりますか。』

「申し訳ありません。それが誰かは分かりかねますが、分かつたところで罰を下さるわけにはいかないので。」

侍女は貴族の娘。基本的に城は出会いの場でもあるから、お嬢様たちは働きに来ていると言つよりも結婚相手を探している。その娘や一家を潰すには周りの貴族たちの反感を買つて、ボイコットされ兼ねないってことか。

「ネイ、少し気を静めてくれ。」

一応は静かにしている。正確にいえば、静かに怒っている。クーンさんにはそれが分かるのか、私の背中を支えてくれていた。

だけど、怒らないはずがない。約束、したのに。確かに、全てを陛下一人で掌握するのは無理かもしれない。だけど、そんな風に臣が手をつけられなくなるまで放つておいたこの国の政治の在り方が問題だ。

陛下一人の問題じゃなくて、これまでのオウサマによってそれが成り立つてしまつたのかもしれないのに、頭の中がスーヶと冷たくなつて、思考のどこにもさわめきがない私は、自分がいかに頭に来ているかがよく分かつた。

『ミニア、そここにいるでしょう。』

「…はー。」

『普通の女中服を持つてきて。あと、さつき聞いた話は内密にお願い。』

「…かしこまりました。」

扉のすぐ傍に立っていたであろうニアニアに内側から話しかけ、お

願い事をする。その時の声が自分でもびっくりするくらい低かった。

「乙女さま、いかがなさるおつもりですか。」

『まず、私を乙女と呼ぶのは止めてください。』

問題はそれだ。それが原因でばれたんだから。頑固夫婦も大概にしてくれないと。いくら私が一人にとつて敬うべき存在であつても、人としてお願いしたことさえも聞いてくれない。そんな人間を、どうやつて信じろっていうの。…その前に、私が人を信じる事も珍しいんだけど。

「申し訳ございません。」

それさえもできないうて嘗つたの？マジでムカつく。

『いい加減にして下さいーー！』してバレてしまつたのか、まだ分からないんですか。

もしあの時誰かにのぞかれていたとしても、貴方達夫婦が私のことを名前で呼んでいればそんな可能性なかつたんです。』

陛下に説教垂れたくない。だけど、自分がこの国にとつて変な位置づけにいて、それを回避したい気持ちでいっぱいだから、つい声を荒げてしまつた。

『私にとって、ただ笑つて過ごせる時間が一番幸せで、一番貴重だったんですよ。』

結つた髪を解いて、睨みつける。陛下は一瞬目を合わせたけど、

ぱつが悪わつにすばりに田を逸らした。

手に力を込める。右手を開いて頭を撫で、意識して神の色を薄い茶色に変えた。そして、左手で田を多い、これまた意識して蒼に変える。それを見た二人はそれに驚いていた。

「ネイ、そんな力、いつ…」

『わかりません。いつもした言ひて思つたひつなりました。』

むすゞとして答える。クーンさんといんな態度取つたらいけないつて思つけど、ハツ当たり。だつて、クーンさんと陛下つて中身は全然違うけど、見た目がかなり似てるんだもん。

無血で髪を結わき、一つにまとめる。その時ひよついコアガやつてきて、女中服を渡してくれた。

「ネイわあ… その御髪と瞳は…」

『「めんね、ミコア。ありがとつ。』

今は何も聞かないで。みんなに中り散らしちゃいそうだから。また後で会つ約束をして、そこから出て行つてもうつた。

厄介事、急展開 その2

外はざわついている。人がたくさん聞き耳を立てているみたいだけど、お生憎さま。一度陛下が私のことを乙女と呼んだ時点で、この部屋の会話が漏れないように魔法を使わせてもらっていた。

指で操作してカーテンを閉める。その場で私は着ていたものを脱ぎだし、新しい女中服に袖を通した。

一人は田を逸らして居辛そうにしていたけど、丸無視を決め込んだ。だって、他に着替えるところ無いもん。

着替え終わつた私はカーテンを開け、陛下に向き直つた。

『これは一時しのぎです。いずれは皆に分かつてしまつでしょう。こつまでも私は、少しでも長くのんびりとした日常を過ごしたいのです。』

とじめを刺した。オウサマは落ち込んでいるようで、悪いけどいい気味だと思った。

『クーンさん、しばらくの間専属で働くのを止めてもいいですか。』

「…どうして。」

『いくら髪型と田の色を変えても、元の噂はクーンさんの専属女中がく最後の乙女だということですから。』

私の存在を知らなかつた人には、髪色が違えど、今傍に居る人が
そうだつてことになる。だから、保険としてそうしたい。

「今さら、ではないですか？おそらく外で聞き耳を立てている人間
が多数おります。」

『大丈夫。周りにはこの部屋の音が聞こえないようにマホウ掛けで
おきました。』

だから、思つた事は何でも出来るつて言つたじやん。一人して目
を丸くしないで欲しい。

ふう、とあからさまにため息をついて、いらっしゃるよう見
せつけてやつた。

「おと…ネイさま。」

『陛下、"ネイ"と呼び捨てにして下さい。クーンさんだつて、宰
相さまだつて、殿下だつてそういうつくれてます。』

確實に私のこと言つて言おつとしたね。

腑に落ちないのか、変な顔してゐる。それでも、さつきよりかは私
のお願いを聞いてくれているようで嬉しかつた。

「ね、ネイ。」

うん、うん。これで満足。私は満面の笑みで、何でしようと聞い

た。

その表情を見てあからさまに陛下がホッとしたのは、今は気付かないふりをしてあげましょう。

一応は怒ってるからね。だからと言って、嫌いになれる人じゃない。陛下とはここ数日で確実に仲良くなっていた。

王妃様にお茶菓子を届けに行くと、陛下もそこに居る時があった。そんな時はいつも人払いをして、国政について市井についてり話していた。もちろん、今までだつて思考が面白いと言われてきた私の意見は、陛下を驚かせるには十分だ。柔軟な考えによつて新たな政策を行うことにもなつたと聞いた時は、本当に嬉しかった。

それに、話すのはいつもこの国のことだった。たまにクーンさんの話もあつたけど。

本当にこの国のことを考えているんだな、つて分かつたから、過激派のおじさんたちとは違つて嫌いにはなれなかつた。

私の思考を知つてか知らずか、まだ難しい表情を浮かべる陛下は、私の様子を窺いながら訊ねてくる。

「我らに伝わる書物には、「最後の乙女」には守人が付き物です。誰が守人となつたのでしょうか。」

あー… そんな事もあつたねえ。てゆーか、決め方とかかなり適当

だつたしね。それでも、守人になつてくれた二人には感謝しなくちや。

『守人の条件は、神殿の清水が毒にならない人物。』

説明するのが嫌だと思いながらも、律義に話す私を褒めて欲しい。

「毒にならぬのは、代々の王と神官…」

そう呟いた後、はつと視線を彼に向ける。どうやらもう一人いる事に気付いたらしい。彼とは、つまりクーンさん。

急に視線を向けられたクーンさんは驚いていたけど、すぐに肯定の首肯をした。

『もう一人はレークさん。ジュノが適当に決めました。』

その場に居たからって言う安易な理由を話すと、陛下は不自然に動きを止めてしまった。これだけジュノを崇拜してる。ってことは、だ。あの姿を見たら感嘆こそすれ、性格や態度を知つたら脱力しちやうんだろうなあ。

うん、世の中知らない方が幸せな事もあるよ。と言つて、ジユノの性格については触れてあげないことにした。

『もう一つ触れておきたいことがあります。』

これはクーンさんも知らないこと。私とジュノの間で交わされた会話だから。

『守人の契約を交わした時、クーンさんの名前をクーン・リッキン・デル・デュークと呼びました。』

一人が息をのむ音が聞こえた。クーンさんも気づいてなかつたらしい。あの時は空氣に呑まれてたみたいだし。無理もないよね。

「それは、神がクーンを王家の人間として認めた、と……」

『さあ、詳しい事は分かりません。私はジユノに言われた通りにしただけですから。』

いくら私がおざなりに言ったからって、冷たい人間だなんて思わないで欲しい。無理だろうけど。でも、私にだつてあのつかみどころのないアホ神は分からぬことが多いすぎる。ジユノの本心を私が全て知り得ることなんてできないもん。

「それで？」

聞き返されても困る。

『私が伝えたかったのはそれだけです。ただ、クーン・リッキンデル・デュークが守人になつたとお伝えしただけですよ。』

では失礼します、と綺麗に手を前で組んだ形で礼を取つた。

クーンさんもそこに残す。だって、私は今日からクーンダンの専属ではいられないんだから。

私は足早にそこを離れ、ミリアがいるであろう女中部屋に急いだ。

…ダメだ、泣くな。

急に視線が滲んできた。我慢していたものが溢れるようにな。

恐れていたことが起った。私の存在が過大評価される。私自身を、誰も知らないのに。私は、私を知っていた上で仲良くしてくれた人たちと、のんびりと過ごしたかつただけなのに。

さつきは陛下の前で起って見せて、気丈に振る舞えた。だけど、その状況から抜け出した途端に、我慢が聞かなくなつた。

相変わらず、見栄張りだな。

苦笑しても、田の前のゆがみが消えてくれる事はなかつた。それは、やつと手に入れた平穏と、私をお前と呼ばずに名前で呼んでくれる人たちに会えたのに、それを手放さなければいけないかもしれない可能性に動搖してゐからだ。

どうすればいいんだろう。…どうしようもない。

その繰り返しばかりが思考を埋め尽くし、女中部屋に着いたころには瞳から涙が溢れてしまつた。

「どうなさいたのですか？！」

駆け込んだ瞬間に、駆け寄つててくれたその人にしがみついて、私は声だけ堪えて泣き崩れた。

「…ヒリあえず、レジに参りましょ。」

そう言われたけど、私は上手く歩けなくて。支えられたようにしてそこを後にして。だけど、分かる事も一つ。

ミコアはあえて私の名前を呼ばなかった。髪色と瞳の色、服装を変えていたから。その優しさに總じつて、私はミコアに従つた。

ミリアは私をどこかの部屋へと誘つた。それがどこかは分からなければ、小さなベッドが一つあるだけのその部屋の、唯一のものに私は座られる。

その背を撫でてくれるミリアは、心配と疑問がいっぱいな様子だつたけど、訊くことはしないでくれた。

「…申し訳ありません。業務時間となりましたので、私は行かなければならぬのですが、ネイさまはお一人で大丈夫でしょうか。」

すまなそうに言つてくれるけど、ミリアには元々関係ない事なのに私が泣いてるからつて理由で傍に居てもらつてるんだもん。

仕事をしないで私の傍に居てもいいことなんてできない。

『だい、じょづぶ。』

泣き過ぎてて上手く喋れない。視界に入つてくるミリアはずつと歪んでいた。

「…では、なむづですね。」

泣いてたらそう思われるのも同じ。だけど、仕事は仕事。無理をさせちゃいけない。だから、行くよう促した。

『ミコアはちらちらこちらを見て気にしてゐみたいだつたけど、時間にはあらがえないみたいで、扉に手をかける。だけど、やつぱり心配は死きないみたいで、出る前に、元の部屋から出て行かないことを約束させられた。

どうしよう…

涙があふれて止まらない。やつと手に入れた小さな幸せを奪われるかもしれない。私はそんな些細な恐怖に苛まれて、今までなかつたほど子供みたいに泣きじやくつた。

『私は…誰かが私を認めてくれたら、それで、よかつたのに…つ

…！

誰かの役に立てることが、幸せだったのに…

…それを、奪わないで……』

大きな独り言をいつ。頬は震えて、鼻はグズグズ。酷い声が部屋中に響いた。

「…ネイ? そこにいるのか。」

『クーン、さん?』

蹲つっていたベッドの上から顔を上げる。視界は滲んでいたけど、扉を開けているその人がクーンさんだということは、纏っている空氣で容易く分かった。

「泣いて、いるのか?」

それが分かったのか、クーンさんはすぐに駆け寄ってくれ、私を強く抱きしめてくれた。

優しい空氣、温かさ。クーンさんの香りに包まれた私は、そうしてくれているのと同じように背中に手を回してギュッと力を入れ、そして、その胸に絆りついて大声を上げて泣いた。

どのくらい泣いてたんだろう。それが納まる頃には、私はクーンさんが胡坐をかいているその上に横抱きにされ、身体全体を包んでもらっていた。

小さな子供をあやすみたいに、背中を一定のリズムでポンポンしてくれている。それを恥ずかしく思いながらも心地よくて、私はまだその胸に縋りついていた。

『私、の人たちに認めてもらつたこと、無かつたから…

名前を呼んでもらえる事も、笑顔を向けてもらえる事も、嬉しくて。私個人を見てもらえて、役に立てる事も見つかって…それが、どんなに小さくて些細な事でも、嬉しくて…

そんなこと、初めてだったから。』

私は時間をかけて、ゆっくりそつそつと泣いた。クーンさんはその間、ああ、と小さく言ってくれるだけだったけど、まだ頬を伝っている滴を拭ってくれていた。

『どんな人の役に立てても、一度私自身を見てもらえることを知っちゃったから…

『最後の乙女』として認知されて、私を見てもらえないことを知りが、怖い…』

それがどうした、と言われるかもしれない。だけど、私にとつたら大問題だった。

私を拒絶して名前も呼ばない家族。そんな環境だったからか表面上でしか接せなくなつた友達。ここに来て、一からの自分を見てもらつて、優しくしてもらえる。…こんなに幸せな事があつただろうか。

私はまた小さく嗚咽を漏らし始める。涙を拭ってくれていた手は、今度は私の頭を撫でてくれた。

「ネイ、俺は変わらない。ネイをネイとして見る。」

うん、嬉しいよ。クーンさんは私の嫌な所を知っていて、それでもなお普通にしてくれてるから、そうしてくれるのかもしれない。

…でも、他の人はどうかはわからない。

『クーンさん、レークさん、宰相さま、殿下だって、きっと変わらないでいてくれる。だけど、エルさんやマーサさんたちは全部は知らなかつたから、変わっちゃうかもしれない。

それに、これから出会う人は私のことを「最後の乙女」というフィルターを通して見るから。どうしても、私個人を放置する。その時、初めて会った陛下たちみたいな態度を取られたら、一線どころか何本も線が出来たように、遠くなる。

私には、今の生活が最善で、初めて手に入れた、幸せだったんですけど…』

全てを吐露した。クーンさんはさつきみたいに何かを言つことはなくて。ひたすら近くに居て、慰めてくれてる。

だけだ。

急に切羽詰まつたような声が聞こえた。

「…俺が、傍に居る。ずっと傍に居て、ネイをネイとして、見るか

『…』

クーンさん…?

さっきまで私の身体を支えてくれていたはずの手が、私を力強く抱きしめる。その強さは、必至で私を何かから繋ぎとめるかのようだった。

泣いていたことを忘れて動きを止めてしまつ。私は視点が合わない目でクーンさんを見つめていた。

『クーンセ...んつ...』

な...に...?

何が起きたのか分からない。だけど、歪んだ先にあるクーンさんの顔がものすごく近くにあることだけは分かった。

「...悪い。」

急に離れていく体温が淋しい。だけど、状況が理解できない私は引き留める事さえできなかつた。

「...こんな時に、言つてどうじやないかもしれない。だけど...

...俺はネイが好きだ。愛しいと思つ。だから...これから先、ネイの隣に在りたいと思つ。

...俺は、ずっとずっとネイをネイとして見れる自信がある。』

理解が、上手く出来なかつた。

クーンさんが...好き?...何を?

状況が全く理解できない私は、呆然とするしかない。ただ、暗い部屋に一端光が差し、る偽の瞬間にはまた暗くなる。そして、クーンさんの気配もなくなつた。

しばらくそのままそこに佇み、視点があつてくる。そして、話の内容も全て脳に伝達された。

…クーンさんが、私を好きだと言つた。

そして…

私はパツと両手で口を覆つた。心音が早くなつて、全身の血がものすごいスピードで駆け巡る。さつきまで泣いていたこととか、不安になつていることとか、全部がさつきの出来事に上書きされて、頭からはじけ飛んでいた。

キキキ、キス、された！…！

クーンさんは私にとつて、お兄ちゃんみたいな人で。でも、そう位置づけるにはしこりが残つて。正確に私にとつてどんな人かは明言できない人。

私は混乱と効用を胸に抱いて、ベッドに体育座りをした。それから顔を自分の膝に埋めて考える。その間も、クーンさんの香りは鼻に残り、腕の感覚が身体に残つてゐる。そして、冷たい唇の感覚も。

それを思い出して赤面し、忘れるよつて頭をぶんぶん振る。そして、自分の胸に浮かぶ疑問を考えた。

クーンさんは、私にとってどんな存在、なんだろう。

後悔と勘立ち（前書き）

今日は短めです。
クーンちゃん視点です。

「クソソシ…」

悪態をついて、握りこぶしで机を殴った。それは後悔の表れ。そして、自分に対する苛立ちだった。

兄上の所から逃げるよつとして去つたネイを追い、女中部屋へと顔を出す。そこに西田ミコアからは、俺の執務室の仮眠室へと誘つたと言われた。

俺の気持ちに感づいているからか、傍に居る事を配慮してもらつたことに感謝する。そして、足早にそこを後にした。

執務室へと入り、奥へと続く扉へと手をかける。その時。

『私はつ…誰かが私を認めてくれたら、それで、よかつたのに…つ…！誰かの役に立てることが、幸せだった、のに…！

…それを、奪わないで…』

震えるような声が聞こえた。それを聞いた途端、俺の行動は一つに決まっていた。勢いよく扉を開ける。そして、その傍まで駆け寄つた。

ネイが泣いている。それを抱きしめるのは、俺の特権だ。

珍しく自分のことを饒舌に話してくれ、その言葉は大きく俺の心を揺さぶった。

ネイは両親に蔑ろにされていた。それは以前に聞いたこと。名前を呼ばれる事はなく、扱いも赤の他人同様だった、と。

その気持ちが、こっちへ来てから変わっていたなど、俺は気付きもしなかった。ネイの家庭事情は聞いていたが内心を聞いたのは初めてのこと。だが、それを嬉しいと思いながら、吐露された本心に焦燥感を抱いた。

…なぜ、気付いてやれなかつたのだ、と。

自分は唯一ネイの過去を、ほんの少しだつたとしても、聞いていた。それなのに、当たり前の日常生活に、ネイがそれほどまでに幸福感を抱いていることなど気付かなかつた。彼女を想いながら、気付いてやれなかつた。

いや、普通なら、気付いていたはずなんだ。

なのに、俺もネイが傍に居てくれることで明るくなつた日常に幸福感を抱き、配慮を忘れてしまつていた。ネイが全ての感情を言葉にしないことなど、分かつてはいたはずなのに。

後から後から、次々に後悔が浮かんでくる。俺は頭を抱えるようにして、顔を机に伏せた。

何よりも後悔している事は、自分の本心をネイに告げてしまった事だ。好況をわきまえず、いい歳をした大人が残念な構想をしてしまった。

しかし、それには訳がある。

ネイはもう一人のネイとひとつになった。つまり、もう一人のネイの過去を持ち、思考も少し変わった。もう一人のネイがしたこと。それは　自殺。

全てが嫌になって死を選んだのだという。それを、今回もしてしまったらどうしよう、という不安に駆られ、思わず強くネイを抱きしめてしまった。その時、小さく震えていたからだが、余計に俺の不安を大きくしたのは無理もない。

しかし、だからと言つて唇を奪うなど…あつていいはずがない。

確かに、潤んだ瞳が俺を捉えていて煽られた…いや、不安そうにしているネイを繋ぎとめるためにしただけだ。

そう言い聞かせてみたものの、嘘は付けない。

愛おしいんだ。俺のものにしたいんだ。

苦しい思いが自分の心を埋め尽くす。こんな想いは初めてだった。本音を言つてしまえば、思いを通り合わせたい。そして、もう一度口付けをしたい。

いや、今は俺の気持ちは関係ない。ネイのことを一番に考えるべきだ。

ネイは周りの人々の態度が変わるのを恐れていた。自分を自分として見てもらえないかも知れない、という不安を抱いていた。だからこそ、己の心を暴露してしまったのだ。

誰が何と言おうと、俺の態度は変わらない。ネイをネイとして見て、愛し続ける、と。

そんなことを告げたら、関係性が変わってしまうだらうー。

今になつてそんなことに気付き、自分の馬鹿さ加減に嘲笑を浮かべた。

「クーン魔道師さま、少々よろしいでしようか。」

唐突に扉が開き、思考が中断されてしまつ。俺は思わず、その役人を睨みつけてしまった。

「ヒツー！」

なぜか、怯えられた。少し睨みつけただけだと思つただが。

それから俺は、来る人来る人に怯えられ、様子を身に着たミリアでさえ青い顔をされた。

「…なぜご機嫌が悪いのかは分かりませんが、人を次々に射殺すよ

うな目で睨みつけるのはやめ下れ。」

「クーンさまの機嫌が悪く、話を取りあわないと躊躇になつておられますよ。」

「それは、どいつもこいつも最後の乙女へのことを見聞きにわざわざやってくるからだ。ネイはそれを望んでいないし、今は俺が言った言葉で混乱しているだろう。空氣で察してくれ。」

「そうは思つてみたものの、ミコアの忠告も一理ある。だから、一度だけ首肯した。」

「今は城内全体がわかついていますし、ネイさまのことで持ちきりで苛立つのも分かりますが、人を傷つける事はしないで下さいまし。」

「

ミコアは変な忠告を残してネイの元へと行った。と、間もなく出てくる。そして俺に言つた事は。

「ネイさまに何をなせつたんですか。」

睨むよつな、そして呆れた様な顔で言われた。

「私はクーンさまを応援するつもりですが、それはネイさまが笑顔でいてこそです。」

さつきとは、明らかに問題点が変わつていて。それまではネイが最後の乙女へだということが発覚してしまつたことが問題だったはず。それが、いつの間にか俺がネイに何かをした、というものだ。

泣いているネイの頭から重大な問題が抜け落ちた事は良かつたと思うが、突発的な自分の行動は確実にあの時には不釣り合いだつた。そりやつて、また後悔がつのるばかりだ。

それがさらに募つたのは、その日の夜だつた。

俺は帰ることをネイに告げ、別行動をとつて馬車に乗ることを提案したのだが、その時に一切俺のことを視界に入れようとしない。さらに、同じ馬車に乗つて屋敷まで帰る時も、同じように視界に入れようとしなかつた。それに加えて、会話など一切ない。

…「こんなに辛いと思つ」ことが、未だかつてあつただろうか。

幼いころの記憶が薄れていますため、そんなことを思つてしまつ。今なら、前国王に認知されなかつたことや、貴族連中に嫌がらせを受け続けていたことなどなんとも思わない。そんなことよりも、今この状況の方が辛いのは確かだ。

結局その日は恒例の髪拭きもできず、ネイの艶やかな黒髪に触れられなかつた初めての日となつてしまつた。

俺の中には後悔と、苛立ち。それに少しだけ焦燥感があり、どうしようもないこの感覚を「まかす為に、一度の高い蒸留酒を珍しく呷つて、その夜を一人で過ごした

帰りの馬車は無言。夜の時間はいつもと違つて一人きり。「ううん、一人ぼっちだつた。

私はお風呂に入つてから、自分で髪を拭う。いつもならクーンさんがやつてくれてるのに……と、ここまで考えて急に赤面してしまつた。

クーンさんが、私のことをその……す、すすスキ、じゃなくて、好きつて……？！

考えた事もなかつた。自分が誰かから好かれることなんて。

ずっと疎まれて、漸く私を大切にしてくれる人たちが出来たと思ったら、すぐに居なくなつた。また、すぐに居なくなるかもしれない。

そうだよ。きっと、一時の氣の迷いだ。また、すぐに裏切られる。私の前からいなくなつちゃう。

だけど、クーンさんはそんな人？

……違う。まだ短いけど、一緒にいて、真摯で誠実で、嘘なんてつく人じゃないって分かつて。なのに、クーンさんの言葉が信じられない。

てゆーか、そんな素振り見せなかつたくせに、いきなりあんな状況で言わなくたつて。

…あ！

ひらめいた。もしかしたら、私があんな風になつてたから、氣を紛らわす為に言つてくれたのかも。って、キスの意味は？…よく考えたら、初めてだつた。

思いだして、恥ずかしくなつて。私はベットの端っこで、小さく蹲る。そして、膝に顔を押し付けた。

さす、しちやつた。唇を手で覆う。あれ、クーンさんが本気だつてことを示してゐるのかな？それとも、やつぱり氣を紛らわす為に…？
てゆーか、考えて答えが出ないんだから、今は別のことを考えるべきだ。この先を、どうするか。

こつそのこと、逃げる？それもいいかもしれない。

うん、それが最善。と、言つ訳で荷造りを…つて言つても、カバンも服もお金も持つてないし。

ぐるりと部屋を見渡しても、自分のものと呼べるものが存在しなかつた。この屋敷の中にもたくさんの使用者さんがいて、誰にも気づかれないうちに逃げだすつてのも無理そつだ。

はあ、と嘆息一つ。

「ネイ?..どうした?」

『宰相さまっ』

宰相さまが扉の近くに立っていた。いつの間に入ったんだろう。全然気付かなかつた。

私が吃驚している訳が分かるのか、苦笑して近づいてくる。その手には白いものが握られていた。

「陛下から手紙だ。ネイのことだから、今のうちに逃げだそうとするだろ?だから、そうはさせないという稀を伝えて欲しいの」とだ。」

丸分かりかい。思考が読まれてるのって嫌なんだよねー。てゆーか、展開的にはここで逃げ出すのが王道だから、そう考えちゃうのは仕方ないのかも。

「それより、せつきから百面相をしていたが、何があつたのか。」

何かって、今日はそりゃいろいろありましたよ。乙女だということが知れ渡り、クーンさんに告白とキスをされ、おまけに陛下からは逃亡するなど伝言され。私の意志で動いたことが一個もない。

『宰相さまっ』

声をかければ笑顔が返ってきた。顔自体は怖いけど、その人を知

つているからこの笑顔がとても優しいことが良く分かってる。なんだ、と聞いてくれるその姿に、おじいちゃんを重ねてしまった。

だから、甘えるよつて思ねる。

『信じるってどうしたことですか？』

「それは、難しい問題だな。」

近寄ってきて、ベッドに腰掛ける。それは、真剣に考えてくれようとしてるんだって、そんな風に思える行動だった。

しばりへ難しかつた顔で考える。

「まずは、自分を信じる事から始めるべきだ。誰かを信じるよりもまず、自分を信じること。ネイは、自分を好いていない。おそらく期待もしていなければ信じもしていない。」

違つか、と問われ、思わず考え込んでしまった。

自分は自分でしかない。それを、信じるところのはじつないことなのか。加えて、自分を好きじゃないことを言い闻かされた。本当に、そりだから。

私は小さな声で肯定を示した。

「それが分かつてゐなら、後は自分の良いことひもの悪い事も知ると。それが出来れば、自分の理解者になれるよ。」

…難しいことを仰る。

理解できない私は首を傾げたけど、宰相さまは今は分からなくて
もいいよ、と言つて頭を撫でてきた。

「それともう一つ、自分を信じる事が出来たら、人を信じる事をす
ればいい。

あと、ネイが聞きたかったことは、おそらく人を信じる方法と、
人に信じられる方法だろう。」

…うん、そーだね。

少し考えてしまったけど、結局はそう言つことだ。私は人を信じ
る事が出来ない。人に嫌われることが怖いのに、その人を信じる事
が出来ないなんて、自分勝手過ぎるよね。

「人に信じられたかつたら、まずは自分から。」

その言葉は、重くのしかかつた。だって、本当にその通りだから。
人を信じたいのに、出来ない。だけど、信じて欲しい。そんなの、
不公平だもん。

「例として、うちの愚息を出すわ。」

『クーンさん?』

そう、と返事が返つて來た。何てタイムリーな。その話題は今や
私の中では触れちゃいけないことですよ。

つて、宰相さまが私たちの間に起きたことなんて知るはずもない。私は小さく頷いて、話を聞くことにした。

「ネイはこちいらに来てから、ずっとクーンと居るだろ？ あれは、嘘をつくような人間だったか。」

『…いいえ。』

むしろ、吃驚するほど真っ直ぐだ。表情は出にくいけど、決して裏で画策するような人じゃない。私を、本氣で心配してくれる人。

「あいつの言葉は信用に足る。違うか？」

『…その通りです。』

今まで嘘なんて無かつたもん。私を心配してくれて、私を支えてくれて。クーンさんにとつたら利害何もない。それなのに、無条件の優しさをくれる人。

「その返事が出来るんだ。ネイはクーンを信じる事が出来る。私の言葉に嘘はない。これも、そのうち理解してくれる嬉しいよ。」

はい、と返事をすると、宰相さまはもう一度私の頭を撫でて、頬笑みを浮かべてから部屋を出て行つた。

…なんか、答えが出た気がする。

信じるといふこと、だけじゃない。今日の昼間の出来事、クーンさんに言われたこと。

たぶん、自分に都合の良によつて決めつけようとしてた。クーンさんが向けてくれた好意を、いつかは離れていくものだから、つて。

それに、私の気持ちも。自分の気持ちに鈍感になつてた気がする。ついで、分からぬふりしてた気がする。

だつて、そうでしょ？今まで信じられなかつた人たちが傍にいた。信じてもらおうと思つても何度も裏切られたから、信じてもらうことを諦めてた。でも、思い返してみると、自分から信じよつとはしていなかつた。

私、今までどのくらい殻に籠つてたんだろ？

考え直してみても、答えは見つからない。だつて、その殻から脱したところで、あの人たちは私と関わろうとしなかつたし、今私の前にいる訳でもない。だつたら、ここから始めよつ。

自分の心に答えを出した私は、クーンさんが今ここに居てくれないことがとてもなく淋しく思えてきた。

明日、素直になつてみよう

そう思つたら、心も身体も何だかすつきりと軽くなつた気がして、深い眠りにつくことが出来た。

つて、待て！

朝日が覚めて早々、何も解決していないことに気が付いた。

自分の気持ちには気が付いた。それに正直にならうとも思つ。そして、自分を信じて、クーンさんを信じる事から始めようつて思った。だけど、その前に「最後の乙女」のこと考えるの忘れてた。

間抜けすぎる。

私は一度起き上がつたベッドにもう一度倒れた。力が抜けたから。

のろのろとサイドテーブルに手を伸ばして、昨日渡された手紙を開ける。そこには、今日陛下の元を訪れて欲しいこと、逃げだしたらどんな手段を駆使してもどこまでも追い掛けていくとか言つ、脅しが書かれていた。

…拒否権ないじゃん。

はあ、ともう一度布団にへたり込む。白いそれは、フカフカのモコモコで、眠りを誘つことは充分だった。のに。

「ネイ、行くぞ！」

ノックも無しでこの女の部屋へ突入してきた宰相さまによつて妨げられた。

てゆーか、またこのパターンか！

つて、祖父くらいの年齢の宰相さまに行つても仕方ないよね。乙女の部屋を勝手に訪れるなどか言つても、小娘の私を気にすることはないだろうし。

私は何かを諦めた。

もう一度布団に脱力できるわけもなく、無理やり起しこされた私は入つて来た女中さんに着替えさせられた。

今日はいつもと違つて、メイド服じゃなく生成り色の簡素なドレスみたいなのを着せられる。髪も結われ、化粧も施された。

朝から疲れたよ。

馬車で揺られていく間、正装は侍女としてではなく客人として招かれたからだと言われた。

気が重いなあ。朝からクーンさんにも会つてないし。折角言つたことが出来たのに。…もしかして、避けられてる? 昨日、あんな態度取っちゃったし。

変な態度取つちゃつたけど、今思い返すと混乱してたって言うつか
… 今ならきっと言葉に出来るから、出来れば会いたいんだけど…

「また、百面相だな。」

いろいろ考え過ぎていて、宰相さまがいつも見てこることに気付かなかつた。私は今までの思考を全部見られていたような気がして、赤面する。誤魔化すように外を覗いた。

何を考えていたかは聞いてこないから安心。宰相さまは、さすが年の功。スマートに対応してくれて有り難かつた。

もつ少しで城に着くといつ頃。私は思つていたお願いをする。

『陛下のところへ行く前に、行きたい場所があります。』

じいかを問われ、私はまずクーンさんのところと言つた。だけど、宰相さまは渋い顔をしている。何か、問題でもあつたんだろうか。

「朝、あの愚息は機嫌が悪かつた、いや、何かを咎んで居るようだつた。今日会つことは勧めないが。」

最後の言葉を濁し、じつするかを訊ねてきた。だけど、そんなの訊かれなくても答えは決まつてる。

『…会いに行きます。で、その後に神殿に行きたいんです。ジユノと話したくて。』

「神、と？」

『はい。』

そもそも当たり前のように答えると、宰相をまほ固まっていた。

つて、そりやそーだ。神様が絶対的な存在の「」の国では、名前を呼ぶことも許されていないんだから。

それに、神様の存在を見る事が出来ないから、宰相をまから見たら私は物珍しいんだろう。

だからって、そんなに驚いたように固まらなくたっていいじゃん。でも、ちょっと面白こから、そのままにしておけ。

残りの短い時間で打ち合わせをして、到着すると同時に昨日のように髪と目の色を変えた。

やつぱり宰相さまは驚いている。私をエスコートしている間に、魔法について聞かれた。

『私が、いろいろ魔法が使えるみたいです。』

ひつひつと、もう何も言つまこと宰相をまほため息をついていた。

「おや、宰相殿。そちの御方はどなたかな。」

「げっ！」

思わず顔を引きつらせそうになりながらも、笑顔を絶やさないよう努力する。二人でクーンさんの執務室へ向かっているその途中の道すがらで、過激派の赤い羽根をつけた一人の男に捕まってしまった。

「ルイス殿。あなたに関係があるとは思えない質問ですな。」

宰相さまー。なんか笑顔が怖いよー。てゆーか、いまルイスって言つたよね。

その名前が意味するのは過激派の筆頭の人物。議会の大物。

今度はそつちに顔を引きつらせないようにしながら、私は傍観者にでもなつたつもりでそこに立つっていた。

「何か良からぬことでも考えておられるのかな。その麗しいお嬢様が誰なのかを訊ねる事が、別段悪いとは思えません。」

ニタツと笑う、その笑顔が気持ち悪い。画策を好んでいそうなキツネに似たその人は、自分の七三に分けられた前髪を撫でつけながら私を舐めるように見回した。

「ここので、笑顔を絶やさなかつた私を褒めてください。目が合つちやつたから、ちゃんとお辞儀もしましたよ！」

「この娘は、レーク殿の再従兄妹に当たる。今日は神官の才を確かめにやって来た。」

「せ、この娘が…しかし、解せませんな。そのような用事があれば、まずは神殿に向かうべきでしょ。それに、なぜ貴方と居るんだ？」

「ちいち気に障るような事無いよーそれに、せっかく不躰に見過ぎなんすけど。

そんなクレームをつけてやつたのは山々だつたけど、今こじで波風を立てるのは良くない。どうやって乗り切らうか。やつ考えを巡らせてみると

「お礼ですよ。」

『れ、お兄様。』

突然現れた人物を、レーコさん、と呼ぼうとして、せっせの馬車の中で取り決めた設定を思い出す。

私は神官の才があるかどうかを確かめに来ているが、王都に来たのは随分前のこと。神殿にやつて来たのが今さらになつたのは、賊に襲われて怪我をしたからだ。

と言つことは、お礼って言つのは賊から助けてくれたクーンさんへの感謝、と言つ意味。私は素早く頭を働かせ、ルイスつておじさんに向き直つた。

そりゃあもう、極上の笑みを浮かべるような気持ちで微笑んでやりましたよ。

『私を助けてくれた、クーンさまにお礼を述べたかったです。

漸く外出することが出来るようになつて、朝一番にシェパード様のお屋敷に行きました。けれど、クーンさまはお忙しいお人なのですね。もういらっしゃらなかつた。

落胆していたそんな私をここまで案内して下さつたのが、宰相さまですわ。』

必殺、猫かぶり。私、何匹も被りますよ。お淑やかなお嬢様だ、つて上辺だけを信じさせるには、十分なくらいに。

そんな私を見て、宰相さまもレークさんも笑いを堪えてる。

そりや、普段の自分とはあり得ないくらいかけ離れたキャラを被つてるのは認めるけど、こんな場面で笑つことないじやん。

でも、一人が笑うのも当然。わざとじらしく、しおらしく、お嬢様らしく。そんな風に目をキラキラさせ、両手を組んでみた。つてことで、どう考へても、普段の私とかけ離れててキモい訳ですよ。

二人は、時折咳払いをしてしまかしてゐみたいだったけど、田ざとい私はそれを見逃さなかつた。

後で何か仕返しを考えよう。

「そ、そつか、ならば早く行くがいい。」

およよ?なんか、騙されてくれた感じ。私はこり笑顔を浮かべて一礼をし、二人に続いてその場を後にした。

廊下を真っ直ぐ進む。隣で笑っている一人の横腹を肘で小突いた。

『笑い過ぎです。』

「すまない。」「すみません。」

同時に謝ってくれたはくれたけど、やっぱり笑いは納まつていなかつた。

もう。もう怒った。

私は手でピストルの形を作つて、一人に向ける。バン、と口で言うと、思った通りに、空気の塊がぶつかつた。

「おわッ！」

前のめりになる宰相さまを、自分もよろけながらレークさんが支えている。

少し離れたところにいる二人は、私を訝しげに見てきた。ふふふ、と不敵な笑みを浮かべ、ポーズをとつてみる。やっぱりピストルと言つものに馴染みがないのか、不思議そうな顔つきに変わつていた。

『ピストルです。』

そう言つても伝わらないのは分かつたけど、とりあえず言つてみた。案の定、二人は分からぬ様子で。私は拙いながらに、ピストルの説明をした。

「そんな兵器があるのですか。進化した文明は恐ろしいですね。」

『 そうですねえ。まあ、米国だと一般の人が持っているから怖いですけど、一ホンだと銃刀法違反で持つてたら逮捕されますから、そこまで怖がることはないですよ。まあ、それで平和ボケしてるとこうもありますけど。』

それに比べたら、こいつちは随分と危険が満載らしい。らしい、って言つのは、私は城と宰相さまのお屋敷を馬車で行き来しているだけだから、実情が分からぬのだ。

今日の朝読んだ手紙でここから逃げ出せない」とは分かつてゐるから、そのうち城下町に抜け出して行つてみよう。

今なら魔法も上手くコントロールできるし、安全面から言つたら大丈夫な気がする。

「さて、着きました。私たちはどうしたらよいでしょうか。」

考え方をしてくる間に、クーンさんの執務室につきてしまった。

「…、心の準備忘れてた！」

急に焦り出した私を、一人は何事か、という顔で見てる。だけど、そのうちの片方は何かを企んだような笑顔になり、目の前の扉をノックしてた。

「ちょっと、何してんすか！」

その叫びは、出てこなかつた。

緊張し過ぎて、魚みたいに口をパクパクさせるだけ。一人分からなさそうな宰相さまは、見守ることに決めたらしい。腑に落ちない表情で黙つて立つていた。

「失礼します。おや、すうい顔してますね。寝不足ですか。」

ひょうひょうとして中に突き進んでいくこの人は、本当にこの国の中核である神殿に仕てる人なんでしょうか。いさむか、この国の先行きが不安になるのは私だけなんでしょうか。

思考がショートしてる。だから、考えていることが可笑しいとか言つシッ「ミミは、受け付けません。

「…おや、何かありましたか。」

今度は田代とく私たちの顔を交互に見る。その顔が面白そうのがどうも許せない。いつか、復讐してやるのと心の中で決めた。

「……は、お一人で話すのがよさそうですね。私は表で待っています。」

意気揚々と出て行った。痛い沈黙が残る。お互に口を開かせないまま、何もない時間が過ぎた。

思つところはお互にあつたんだろうけど、口に出せないのが現状だ。

「……なにか、用があつたのか？」

『……はい。』

いつもより、声が低かった。それに、小さく零れた様なその声は震えていた。私の緊張をそのまま表している。

私は身体全部が震えた様な気がして、入ってすぐの扉の前から動くことが出来ない。それでも前に進もうとする、足までもが小刻みに震えているのが分かった。

……恥ずかしい。これがクーンさんにバレていて欲しくない。

俯いたままゆっくり、ゆっくりと前に進む。ようやく通りついた机の前で、私は深く呼吸をした。

田の前には、二つものようになくさんの書類が重なっている。その様子からみて、クーンさんはいつも通りに働けているんだと安心し、ちよっとだけ落胆した。

『クーン、さん。』

私は、いつまでもそうしていられないと決心して、ぐっと前を見据える。田の前にいたクーンさんと真っ直ぐ目を合わせて、昨日気付いた自分の心をゆっくりと言葉として自分の口から紡いだ。

『昨日、気付いたんです。』

クーンさんが傍にいてくれることが当たり前で、私を心配してくれるのが当たり前で。陛下に求めた日常に、クーンさんが欠かせなくなっていることに。そして。

『…私、クーンさんのことが…好き、です。』

と、こう」とこ

何かが自分の中で切れた。何か、糸みたいなものがブツンと。そうしたら、今まで思ってたこととか、これからどうしたい、とか。バカみたいに正直に口から出てて。それと一緒に、自分の田から熱いものがもふれ出ていた。

「ネ、ネイ。それは…本当か？」

焦ったような声。それは、私の知っているクーンさんで、皆の知

らないクーンさん。

『「こんなこと嘘なんて、吐きませんよ。』

我ながら情けないことになつてゐるとは思つ。だけど、ビ�しても涙は止まってくれなかつた。

『私、人も自分も信じられない…けど、それでも、初めて信じてみてたくて、信じてもらいたいと思つたんです。

私のこと…信じて、もらえますか?』

両手で覆つていて視界を捉えられない私を、温かな感触が包み込んだ。

『信じる。信じてる。これからもずっと。』

甘い囁き。それが自分の耳元で聞こえることが分かつたら、感触はクーンさんによつて作り出されたものだつて分かつた。大きくて温かい腕が私を包む。私も同じように、広い背中に腕を回した。

「ネイ、もう泣くな。」

何度も何度もそう囁いてくれたけど、その優しい囁きが余計に私の涙を誘発させてるだなんて、クーンさんは分かつてないんだろうなあ。

段々、涙も嗚咽も治まつて來た。

だけど、もう少しだけ。

涙が完全に止まつても、しばらくの間、甘えるようにその腕に身体を預けた。

部屋に入った時のように沈黙が続く。だけど、それは全然嫌なものじゃなかつた。むしろ、心地良い。誰か人が傍にいてくれる時、こんな風に思つたことは未だかつてない。クーンさんが初めてだ。

『…そろそろ、行かなくちゃ。』

ずっとここにこりつして居たい。だけど、そつはいかない。

私は自分からその腕の中を出た。離れた時に目に入るクーンさんの少しだけ寂しそうな顔。それが、少しだけ嬉しかつた。

「どこかへ行くのか。」

『はい、ジユノに会いに。その後は陛下のところへも。』

何事かと聞かれ、クーンさんに昨日陛下から届いた手紙を見せる。そして、今の私がどう立場でこの城内に足を踏み入れたのかも説明した。

「兄上にしては、力を誇示してきたな。何か考えがあるのか、それとも貴族たちが動き出したのか…」

“ひやひやな臭くなつてきたりし。

クーンさんの磁きで、私は予測に貴族のことを考えていなかつた
と思ひだした。

陛下は確かに上から目線。だけど私に謙つていて。そして、嘘は
つかない。信念は曲げない。私は陛下をそんな人だと思つてゐる。

今回の手紙は、陛下の意思じゃなく、貴族たちに言い寄られてる
のかも知れない。陛下にこそ威信はあるだろうし、それこそ国を担
う重鎮だもん。反逆者が出たら国政が伴わない。

「最後の乙女」をひた隠しにして、独占していると思われたら皆
従わなくなるかもしね。それが特に過激派だと厄介だな。

しばらぐ、考え方をしていたから、クーンさんが心配そうな表情
でじつちを見ていることに気付かなかつた。

頭の上に重みを感じ、その後に温かさが伝わる。はつと返づいて
顔を上げると、クーンさんが頭を撫でていた。

『どうかしましたか？』

「俺も共に行ひや。」

その言葉に、途端に嬉しくなる。それは、昨日一緒に居られなか
つたからこそその反動かもしね。少しでも一緒に居たいと思つて
いた。

だけど、そこで気付く。クーンさんの机の上に広がる書類の数々。これを放置して行けるほど、この国の政務は持っていない。

『…お仕事、有りますよね。』

そう言つたのだけど、いいんだって。紙にさらさらと何かを書いて、それを丸めて手に持つた。そして、私の隣までくると、背中を軽く押してエスコートしてくれる。外の人たちをあまり待たせてはいけないから、早く行った方がいいとのこと。それはそうだと納得して、促されるまま従つた。

『お、待たせしました…』

口調が変になっちゃつたのは、目の前にいる御人の所為です。

相も変わらず、いけ好かない笑顔を浮かべている。さつきと違う空氣感を読み取つたのか、よりいけ好かなくなつていた。一方で理解できていない宰相さまは始終不思議そうだ。

だけど、お願いだから分からないままでいてください。私は心の底からそう思つたし、そういうてくれるのことを祈つた。

「さて、神の元へと参りましょつか。」

素早く神殿へ移動する。それは、先のクーンさんの執務室訪問に時間を取られてしまつたからだ。早く陛下のところに行かないと。だけど、それには確かめたいことを確かめてからしか許せない。

わざわざのことは嬉しいけど、ここは氣を引き締めて行かないと。

ああ！

急にあることを思い出した。さつきの一部始終、もしかしたらジュノが見てたかもしれない…

あー、完璧忘れてた。これだからかわれたらどうしよう。でも、常にこっちにいるわけじゃないって言ってたし、大丈夫だと思おつ。うし、と拳に力を入れて小さく気合を入れていると、隣にいるクーンさんがどうかしたかと聞いてくる。

その時の、窓から差し込む光の当たり具合。抜群過ぎて鼻血もの。きっと真っ赤になってるであろう顔を背けて、何でもないと言って誤魔化した。

『今日は私一人でジュノと話をします。』

そう言つて神殿内に進む。中にいた人たちは何事かと訝しげな表情をしていたけど、レークさんが礼の胡散臭い笑顔でやんわり追い払ってくれた。

ひとつ息を吐いてから、神殿の入口方面に向かつて手をかざす。それは、聞こえないように壁を張るため。頭の中で想像すると、簡単にそうなつてくれた。

今度は鏡盆に向かつて歩いて行き、手をかざす。そして、呟いた。

この国の神の名を ジュノワール と。

「お呼び出しじ」苦労様。そろそろくると思つていたよ。」

いつもと違つておもちゃを持つていなし。そして、至極真面目な表情だつた。こんなの、ジユノらしくないと思つ。だけどその一方で、じつちが本質じやないかとも思つ。

まあ、ジユノに掴みだされるが見つからぬことには変わりはないけど。

『私は質問に来たの。正直に答えて。』

周りのことなどもつ気にしていられない。私はジユノと二人きりの世界に入った。

事実と決心

『ジューノは私をこちらの世界へと引き込んだ。それは、自分が異世界へ行つた時に生じたひずみの所為で私の人生が変わってしまったからだと言つた。』

「うよね、と聞けば、そうだね、と返つてくる。少しだけ笑つて、いるその表情は、これから何を聞かれるのか悟つているような感じだ。それでいて、訊いて欲しくないといつ空氣を醸し出している。

だけど、そんなの無視だ。なんか、この国の政治に思いつきり巻き込まれそうな気がするから。いや、現在進行形で思いつきり巻きこまれつつあるのか。

『ジューノは自分で一人一人に干渉することは許されていないと言つていたよね。それって、異世界なら余計にそつなんじゃないの？』

「ここまで訊けば、もう諦めたようだ。自嘲気味に笑つているその表情は、ジューノには似合わない。そんな顔をさせているのが私だと、いうことは悲しかったけど、それでも真実が知りたかった。

「僕は君に観智を『え過ぎたようだね。

時には気付かなくていい、残酷な運命つて言つものがあるのに。」

これがジユノの地だ。完璧に素に戻ってしまったその様子から、これから待ち受ける事になるその言葉が真実だと信じていい気がした。

『ねえ、話してよ。本当のこと。』

「今言った言葉の意味、分からない訳じゃないよね。君は確実に傷つく。それでも聞きたいのかい？」

これから何を話されるのかは分からない。だけど、他の世界の神様が干渉してくるほどのことがあったのだと理解は出来ている。私は覚悟を決めて、ゆっくりと深く首肯した。

「君は両親に捨てられた。これは運命。」

胸の奥がチリッと痛む。

それは前にも言われたことだった。それは最初から定められていたことなのだと。

でも私は、辛い事は乗り越えられる人に神様から与えられたものなんだって、クーンさんに言われたことがあるから信じてるの。

「彼に言わされたことで、今の君が在ることは分かっている。

けど、君が望むから、残酷な事を言おう。君は地球の神に捨てられたんだ。悪戯に見放された存在だったんだよ。」

ジユノの話は正直に言つて、相當苦しかった。顔が何度も歪んだ。でも、それが事実で、今私がここにいる事が現実。覆す気にはなれ

なかつた。

とある神様は暇を持て余し、何か面白いことはないのかと企んだ。そして、それは一人の人間の生活に干渉することだつた。
それが、私。

一人の私は自殺したけど、もう一人の私は強く生きた。それが面白くなかったのか、新居へと買い物帰りに向かっている私を、交通事故に見せかけて殺そうとしたらしい。

そんな理由で人間をやすやすと殺そつとするなんて。それが癖になつたらどうするんだろう。

神様が快樂殺人者とかになつたら嫌だな。つてか、そんなことしたらいつか人がいなくなっちゃうんじゃ……？

自分の恐い考えに身震いする。それを追い払うために、2、3回首をフルフルと回した。気を取り直さないと。

つまり、神様は干渉材料が詰まらなくなつたから、消して次の対象者を見つける。そう行動をしようとした。

それを見過ごせなかつたのがジユノだという。事故に遭う前に干渉して、私を異世界へと取り込んだ。

それに加えてこつちの世界の過去を干渉し、
「最後の乙女」という存在を信じさせ、王家に伝承させたらしい。

『ジユノが私をこつちに引っ張った理由は納得したけど、どうして

「最後の乙女」なんていう、面倒な存在を作ったの？」

「これが今日一番訊きたかったこと。これさえなければ私は穏やかな日々を送れたはず。なのに、これの所為で私は平穀を取り逃しつつあるから。

「それはね、色々とあるんだよ。」

急に緊張感がなくなり、ジユノは胡坐を搔いたまま床で逆さまになつた。

「これは…ツッコんだ方が良いのかな。…いや、止めとこ!。とりあえず今は時間がない。陛下のところへも行かなくちゃならないんだもん。話を進めなくちゃ。」

『色々つて?』

「うーん、神様の世界も、捷とか上下関係とかあるんだよ。君の運命を歪めた神と僕は同等で、かなり上位に位置づけられている。僕らのもう一つ上の位が、僕ら神を統括する最強神さ。それが今回の乙女の件で大分お怒りになつてね。特別措置を命じたんだ。」

それで作られたのが「最後の乙女」?なんて厄介な特別措置を取つてくれたのさ。

確かに地球では酷い生活になつてたかもしれないけど、こちとちらが普通だつた。不幸慣れしてて、それが当たり前だつたんだから、今さら特別なものなんて望んでなかつたのに。

『今からその措置を取りやめる事は…「無理」

で、ですよねー。

最強神と言う神の上の神が私のことを取り決める、とか訳わからんないけど、どうやら神様も上下社会らしい。つまり、ジユノは上司に命じられてそれを実行した、と。

あまりの事実に私は頭を抱えた。ジユノはおどけたように、喋るのを止めた私にどうしたのかをしきりに聞いてきたけど、いつもながらに間延びした声はより脱力させるだけだった。

あからさまに嘆息を溢す。そして、真っ直ぐにジユノを見据えた。

『正直に答えて。私はく最後の乙女くをまつとうするしかないのね？』

「そうだね。」

やつと、事実が理解できた。

よし、と私は決心した。

『ジユノ、また来るよ。人の私生活の覗き見は勘弁してよね。』

それだけを言い残すと、私は神殿を後にした。後は陛下に私の意志を聞かせるだけだ。

「話はもう済んだのか。」

『はい、一応は納得しましたから。』

後を追つてきてくれた心配げなクーンさんに笑顔を返す。ならいいんだ、と安堵したように私の頭を撫でてきた。今までよりクーンさんが近くに居るようを感じられる。思わず照れ笑いを溢してしまった。

一人で交わすやり取りが、前よりも甘く感じられるのは私だけだらうかと、ほんの少し照れくさく思いながらも考えてしまった。

それをレークさんがほくそ笑んで見ていることには気付かなかつた。そして、一人理解が出来ていない宰相さまの表情に気付く事もなかつた。

「さて、予定も大詰め。陛下のところへ行くのでしょうか。私と宰相さまが前に出ましょ。ネイさんはクーン殿と後ろを付いて来て下さい。

陛下の周りの使用人には、神官の件の報告と、クーン殿に助けられた稀の報告、とのことにいたしましょう。」

にこやかに笑みを浮かべてそう言つて、さつと歩きだしてしまつた。

良くそう容易く嘘が思い付くな、とクーンさんが厭味を言つてはたけど、それも軽くスルーしたレークさんは大物だと思う。

私も話を合わせたりほらを吹くのは得意だから、人の事言えないけどね。

私が城の中で見知らぬ人物だといつても、他の三人はかなりの有名人。廊下を歩く時には道を譲られ、スイスイと進むことが出来た。

だけど、厄介なのはこれからだと思う。

「ここはお通しできません。」

ほら、キタ。

前回は調度誰もいなかつたから良かつた（それはそれで警備が成つていないとという問題だ）けど、前々回もそつだつたように命じられた仕事を全うしようとする騎士さんたちやお貴族役人様は中々頑固だ。陛下とクーンさんが接触しようとする時に過剰反応を示す。

「申し訳ありませんが、私たちは陛下に呼ばれたのです。」

レークさんが一步前に出てそう述べる。比較的宰相さまとレークさんは好戦的ではないのか態度は柔らかかつたけど、見知らぬ女と騎士団長様には手厳しかつた。

てゆーか、同じ騎士団でしょ、つてツッコミたかったけど、小声で聞いたら騎士団内の統括は温厚派と過激派に分かれていって、陛下の護衛は後者になるらしい。

どこまで城内の政治が歪んでるんだか。

「そちらのお二人もそうです。」

「しかし、見知らぬ女など……」

ほー。その言い方頭にキター。ネイさん、ご立腹の巻。黙つてようと思つたけど、笑顔で怒りをぶつけさせていただきますとも。

事実と決心 その2

「私は陛下から呼ばれたのです。証拠として手紙もいります。

ところで貴方様は陛下の側近とお見受けいたしますけれど、そんな御方が陛下のご予定を知らないはずがありませんよね。」

横を向いてクスッと笑って、イラッとした感を引きだせせる。わざと演技がけてやつたから、イラつきは倍増だろ？

「なつ、失礼だぞっ！」

あー、はいはい。わざと失礼なことやつてますからねー。

私はあまりにも想像した通りの反応を詰まらないと思いながら、手紙の署名をちらつかせて見せた。そうすると、急に黙り込んでドアの前から退く。

初めからそうしてくれてたらいいんだよ。ま、表面上はそんな態度億尾にも出さないけど。

私は笑顔を浮かべたまま丁寧に礼をした。騎士さんは急に慌てふためいて、素知らぬ方向へと目を逸らす。一部始終を見て半笑いになっているレークさんの足を、先に進むふりをしながら踏むことは忘れない。

「うちが真剣に」まかしにかかつたって言つのに、バレたりビリ

する。

宰相さまもクーンさんもそんな様子には慣れたのか、二人とも気にすることなく陛下の執務室へと進んだ。

部屋に入り、陛下が人払いをして5人が残る。音漏れしないように結界を意識化で張ると、キッとレークさんを睨みつけた。

『レークさん！こちちは無い知恵絞つて誤魔化してゐんですから、バレるような態度を取らないで下せー!』

いくら慣れてるって言つても、その場で考えた事を口から零してるだけ。いつ尻尾を掴まるかも分からぬ状態。なのに、レークさんの態度と言つたら、どうぞ嘘だとばれてください、とでも言つてるようなもんだ。

「しかし、それにしても人格が違ひ過ぎて面白いんですよ。」

そう言つと、今度は我慢もせずに笑いだす。私は例の如く、手で作った銃でレークさんのおでこ辺りを弾いて黙らせた。

「つ、ねいさん、痛いです…」

おでこを押さえてしゃがみこんでいる。それを見て、私は大満足だ。

「ネイさんはおつとりしてこると見せかけて、まずは手が出るのですね。」

暴力女とも、何とでもお言い！否定はしないけど、今日のはレ

ークさんが悪いもん。攻撃したつて当然のじじだつたからね。

そんな私たち一人のやり取りを見ていた陛下が声を掛けてくるまで、私たちのやり取りは続いていた。

漸くひと騒動治まって、陛下に髪と田を元に戻すよつて言われて、素直に従う。それからさらに奥の応接室に通され、全員が小さな机を囲んでソファに腰掛けた。

『さて、詳しいことを教えてください。』

私はそつ言ひや頗や、席を立つてお茶の用意をする。陛下が手伝おうとしてくれたけど、中身を注ぐ前のカップを運ぶだけでガチャガチャと怖い音を鳴らせていたから、無理矢理止めさせた。

お高そうなティーカップを割られたら、面倒だし勿体ない。

用意が終わって席に着き、一口お茶を啜つてから陛下を真つ直ぐ睨みつけた。

『あの齧しまがいの手紙の訳を教えてください。』

自分の決心を告げる前に、陛下の事情と真意を聞いておきたい。あの手紙は今まで接してきた陛下からかけ離れていたし、残念に思つた。クーンさんの言葉を聞くまで見事に疑つちやつたし。

「それについてはまず謝罪をせて頂きたい。」

『陛下。貴方はこの国の頂点なのですから、私のような小娘』*（ごわらわ）*と
に頭を下げる事は許されません。私はただ、貴方の真意をお聞きし
ているのです。』

陛下の一存でそうなつたとは思えない。何か訳がある。だつて、
私のことを公にしないと約束したんだから。

「噂を聞きつけた家臣たちが、こぞつて私のところへ来た。火の無
いところで噂は立たない。早急に調査するよつに、と。

それを済つたら、私がこの国のことを考えていなかと問われ
てな。」

陛下もいろいろ大変だな。つて、元をたどれば私の所為なんだけ
ど…つて、違う。ジユノの所為だ。

それに対して、理解しかねるなあ。元々信仰だのなんだのが関係
ない生活を送っていたから、そこまで固執する訳が分からぬんだ
よね。

そもそも人頼みだなんて。そんな風に国のこと考えちゃつてい
のかな。てゆーか、神の使いだからって、良い人とは限らないでし
ょ。私が悪女で、この国を乗っ取るうとしている、とか考えないの
かねえ。

ああ、それは過激派の人たちのことか。その人たちに引き入れら
れて、過激派の象徴として使われたりしてねー。いや、それは冗
談にならないか。

お茶を口に運びながら、そんなひとつでもいよいよ的な思考をしてし

まつ。それを知つてか知らずか、陛下は不安そうにしていた。

『さて、訳も聞いたところですし、今度は私の話を聞いていただけますか。』

喋り出しは順調かと思つたけど、いざ本題に入ろうといつといつで尻込みしてしまう。所詮は人間。自分が一番可愛い生き物だ。

だけど、逃げるわけにはいかない。私はここで生きてかなくちゃいけないんだから。

『まずは、私がここに来た理由から話しましょ。』

ジユノから聞いたことを素直に話す。だけど、私の身に降りかかった不幸は、不幸という単語で通した。内容を細かく話したいとは思えなかつたから。

「…神が、そんなことをなさるのですか。」

珍しくお茶うけた感じも、胡散臭い笑顔も浮かべていらないレークさんは貴重だつたけど、そうやって笑い話に出来る雰囲気じゃなかつた。陛下も宰相さまも私の顔を見よつとはしていない。

ただ、クーンさんだけが私の顔を真つ直ぐに見据えていた。

『最終的には面白い反応を取らなかつた私を、車と言う移動道具、つまりは鉄の塊なんんですけど、それで轢き殺そうとしたそうです。そこを見かねたジユノが助けてくれたらしいです。』

みなさんは良い神を持つっていますね。』

ま、性格残念だけどね。でも、感謝してる。

私は家族と離れて生活しようとしてたけど、その状況が辛くて死のうなんて考えた事もなかった。生にも死にも執着も頓着もしてなかつたけど、あの人たちに裏切られる度に涙を流すことも忘れないつた私の心は、一応強かつたんだと思う。そう思いたい。

この話を聞いた反応を知りたかった。私がどんな境遇に居て、どんなことを思ってきたか。悲劇のヒロインを語りたかったわけじゃないけど、ここに居る人たちには知っていて欲しかった。

『私は、神の使いを名乗れるほどの人生を送ってきていません。それでも、私をく最後の乙女くにしたいと思いますか?』

内心複雑なんだろう。元居た世界の神に悪戯に見捨てられた私が、この世界でく最後の乙女くとして神に近しい存在になつてている。

いきなりこんな話を聞かされて、反応に困るのもよく分かる。だけど、ここに居る人たちのことを私は信頼したいと思つてる。だから、話した。

氣まずい沈黙が続く。その間も、クーンさんは私のことをじつと見つめてくれていた。

「…貴女の境遇は分かりました。そして、貴方が平穏な日常を望んだ訳も。神に干渉されてしまったあなたは、普通の生活が送りたかったのですね。」

愁いを帯びた陛下は、綺麗だった。

ようやく理解してもらえたことに満足して、話してもないのに理解されようとしていた自分に嫌気がさす。それでも、一步前進できよかつた。

『分かってくれて、ありがとうございます。そして、これから直しくお願いします。』

前をぐっと見る。弱気にならないうに、声が小さくならないようだ。これは、一大決心だから。

『私も、最後の乙女への役目を果たさせて頂きます。』

その言葉にすぐ顔を上げたのは陛下だつた。意外だつたのか、予想だにしていなかつたことなのか、目を丸くしている。そして、言葉に困つているようだつた。

「…私が、困つてゐるから、と言つ理由で引き受けられてゐるのあれば、どうかお気になさらず。」

陛下は、私を聖人君子だとでも思つてるのかな。私、そんなできた人間じやない。自分勝手で身勝手で。この決心だつて、避けられないからだもん。

『そんな理由じやないんです。私はこの国の神に救われて、その神が取り計らつたことであく最後の乙女へになつた。その親切を、いくら嫌だからと書いて、逃げる」となんかできないと思ひます。』

死んじゅう所を助けてもらつたんだもん。務めは果たさないと。

ただ、そんな短絡的な考えが頭の中に浮かんで離れないだけ。陛下が貴族に追い詰められて可哀相だな、って理由じゃない。まあ、それもちよつとだけはあるけどね。

『ただ、約束して下さい。私の生活に干渉しないことを。』

『最後の乙女』として公の場に発表して下さつて構いません。それでも、今の生活を止めるつもりはないんです。それだけ約束して下されば、神からの言葉も私の元の世界にあつた技術もお伝えします。』

「私の田の行き届かないところもあるかと思いますが、今度こそ努力いたします。」

その言葉に私はにっこりと笑顔を溢す。今までの中で、今日が一番良い日。私の顔には、自然に満面のものが浮かんでいた。

『だあー、もう無理ひー。』

出だし早々「めんなさい。だけど、私は辟易しております。

侍女の台所で私は木で作られた丸椅子に腰掛けて、両手足を伸ばす。頭は壁に預けて天井を見上げていた。

私が無理と言つてはいるのは、ここ数日の生活のこと。周りの変化に気分が悪くなりそうだ。

「そんなことをおっしゃられても仕方ありません。ネイサマーは乙女さまなのでですから。」

やうなのです。陛下は私から許可を出した次の日、「最後の乙女」のことを公表したのです。早すぎ……

その日から三日が経つ。それからと「うものの、会う人会う人の態度が仰々しいし、くねくねとすり寄つてくる汚い大人たちが後を絶たない。

「掃除を乙女さまがやるなビー。」

「乙女さまはそんなことを……出来かねますー。」

「おお、乙女さまが書類を届けて下された！」

「の態度の変貌は何、つてほどの言葉の数々。下手したら感涙されることがある。この前までは大分敬遠してたじゃないですか。つてことで、はい、うんざりです。

嫌になつた私は人が多く訪ねてくるクーンさんの執務室から逃げ出しつて、女中の台所に避難した訳だ。

逃げてきた私のところに何故ミリアが居るのかと言つと、これまで不思議な事に私のお世話係に陛下直々に任命されたそつな。

過保護だよねー。てゆーか、侍女にお世話係付けないでしょ？

そう文句を垂れてみても、騎士を付けないだけ讓歩したと言われてしまつて閉口。城内に居る時だけだと言つて、業務以外の日常生活については干渉していないと言われてしまった。

屁理屈だつて言い返して、ついでに言い負かせてやるつと思つたけど、陛下の顔色が優れなかつたから止めておくことにした。ちらつと耳にしたことがあるような無いよつた話だけど、陛下つてば身体が弱いんだつて。

無理しちゃダメだつて言いたいところだけど、一国を背負つていの人だからそう易々とは言えない。私は様子を見て、陛下の食事を作らせてもらおうと思つてゐる。身体に良いもの作つてあげたいしね。

「おお。乙女わが、今日もいらしたのか？」

『エルさん。その口調、止めてくださいよ。それと！私はネイです。乙女なんて名前じゃあつません。』

だれてるといふに颯爽と入って来たのは、こここの料理長であるエルさんだ。

向こうの大きい調理室に居るよりも、こっちに居る方が多い気がする。それでいいのか、料理長さん。そう言つてからかってやりたい。だけど、先制攻撃を受けた私は撃沈していく、それどころじやなかつた。

エルさんの態度は…変わらなかつた。すくなく、嬉しい。

そりや、もちろん最初は敬語とか乙女つて呼ばれたりとか、急な変化はあつた。だけど、それを止めて欲しいつて、今までと同じで居て欲しいつてお願いしたら、渋々だけど承してくれた。それはマーサさんたちも一緒に、嬉しい限りだ。

だけど、私が嫌がるのを面白がつて、わざとそういう言ひ態度をふざけてとつてくることもある。それにいちこち反応するのもやうやく面倒になつてきていた。

『執務室にね、いろんな人が訪ねてくるんですよ。クーンさんに書類を届けに来る人以外もたくさん集まっちゃつて。邪魔になると思つたので逃げてきました。』

「そりや、災難だつたな。」

『ホントですよー。』『ま撻つてくる人とかも面倒臭くて嫌になっちゃいます。てゆーか、そんな時間があるんなら仕事しきつて話です！』

本気で『冗談じゃないからね。訪ねてくる多くのおじさんたちは、油ギッシュで加齢臭がきつい。』『ちが嫌な顔をしていないからって、仕事中に迷惑掛かってないとか思うなよ。』

一応敵は作らないように、よく話しかけられるようになつてからと詮つの外見だけはよくしてきた。だけど、たった三日、されど三日。短いよつで短長いこの期間に、嫌な思いはたくさんしてゐる。

「あら、ネイさまが逃げてきたのは、それだけじゃないでしょう。」
…なんで、バレてるの？

私は半信半疑でミリアを見てみたけど、その笑顔には自信があるようだつた。

確実に何か知つてゐる。そう思つた瞬間に、背筋を嫌な汗が伝つたような気がした。

「照れていらっしゃるのは可憐らしくて、ネイさまりしいです。しかし、いつまでもお逃げにはなれませんよ。それに、クーンさままだつて少しでも長い時間を一緒に過ごしになりたいと思つてゐるに決まつております。』

『こつ、どうして、なんでバレたの…』

「三日ほど前、遠田に見たお一人の雰囲気が変わっていましたから。一人が纏つていらつしやる空気感が違います。明らかに関係性が変化しております。」

ミリア、恐るべし。レークさんといい勝負だと思つよ。

私が執務室を逃げ出してきたのには、ある特定の人物から遠ざかるためだった。いや、別に嫌いになつたとか、そう言つんじやない。確かに、ミリアに言われたように照れくさいつていうのもあるけど、クーンさんの纏つ空気が明らかに変わつて私は戸惑つていた。

その…何と言つが、甘い。

私を見つめてくる視線も、時々交わされる会話も。それが仕事中であるうと家であるうと、甘い空氣に包まれてゐる。

今まで恋愛経験なんてない。そりや、私だけ告白とかされたことくらいはあるけど、家庭環境が複雑で誰かと付き合つ気分にはなれなかつた。それに、好きになる人もいなかつたし。

小さいころから家庭内が冷え切つていた所為か、男女の仲を疑う気持ちがあつたのは仕方ない。恋愛とか、結婚とか、上手くいくものだなんて思つてもいなかつた。幽霊が存在するかしないか、つて言つくらい曖昧で不確かなものだつて思つてた。

なのに、今のクーンさんはどうなんだ？。私をべたべたに甘やかして、生活力を奪われちゃいそう。それくらい甘々なのだ。

それに、どんな反応していいのか分からぬ。そんなスキル持ち合わせてないですからね。

また一段下に落ち込む私を余所に、今の会話で何かを読み取れたのか、エルさんが吃驚していた。狼狽するだけで、言葉は出てこないらしい。てゆーか、驚き過ぎ。

「まだまだ田が浅くて纖細な頃です。触れてあげないで下さいな。」

まず話しだしたの、君だよね。うん、もうなんかいこよ。

遊ばれてる気がした私は、もつ闇^{ヒミツ}することを止めた。ていの良いおもちゃになるなんて真っ平御免。私はいじられるよりもいじりたいタイプの人間だ。

頭を抱える私を余所に、ミリアが他言無用だとエルさんにぐるぐる打つていた。

有り難いけど、それ、私の台詞です。

そんなこんなで今田も一田悲惨だつたけど、無事に仕事も終わらせて帰宅することになった。

『あの、クーンさん?』

ガタガタと揺れる馬車の中。私は明らかに動搖していた。

「何だ?」

何だも何もないですよー。

進行方向を真正面に隣り合って座っているはずなのに、クーンさんはずっとこっちを見ている。それも満面の笑みで。

少し前まで無表情に拍車がかかっていたはずなのに、今ではその面影すらない。仕事中にちらりと覗いた時には真面目な顔してたけど、顔を合わせている時は常に笑顔だ。

この人、どうしちゃったんだろう。頭でも打ったのか？

そんな失礼極まりないことを考えちゃうくらいの変貌だ。

『何でもナイデスヨ……』

ハハハ…後半がカタコトになつたのは、イケメンスマイルを直視しちゃつたからですよ。

やつぱりキラキラし過ぎて心臓に悪い。どうしても慣れない私は、ここ数日クーンさんの顔をまともに直視できていなかった。それを、今までに見ちゃって、動搖してる訳だ。

「ネイ？」

『…ハ、ハイ。』

「どうしてこいつらを見ない。」

それはさつき考えてたことだけ、何か？

しどりやどりになつた私は、馬車が一度停まつたのをいいことに、着きましたよ、と言つて馬車を飛び出した。

逃げだけど、これは仕方ないといつゝとで許して欲しい。それ以外に今はどうしていいか分からなかつたんだから。

私は足早にそこを立ち去つて、部屋へと逃げ込んだ。

変化 その2

「あらあら、まあまあ。急いでいたなったのですか。」

私のすぐ後に部屋に入つて来たのは、例のおばあちゃんメイドさんだつた。少し、ほつとしたのは内緒だ。

「湯あみの用意が済んでおります。お話を聞きがてらにお手伝いしましようねえ。」

あの、と反論しようとしたけど、柔らかい笑顔に相殺された。いつもは勝ち取つていたはずの一人風呂を今日初めて諦める事になつた私は、ぐいぐい押されて浴室へと進む。結局身ぐるみ？それで、あわあわの湯船に身を浸からせた。

おそるべき、メイドさん。何だか、これからも逆らえる気がしない。

力を抜いてはー、と両足を伸ばして首を縁に預けていると、頭をマッサージしながら洗ってくれた。

これ、気持ちいい。寝付けいやい…

そんなフワフワした気分の時、声をかけられた。状況判断力が鈍つてゐる時に、するいなあ。

「急に走つて家に飛び込んできたりして、どうかなさつたのですか。」

「

私は目を閉じたまま、ぼーっとした頭でぼそぼそと答える。

『なんかね、クーンさんが、満面の笑みだつたんですね。』

「まあ、珍しい。しかし、それに何か問題でも？」

泡を掏つて、腕を洗う。いい匂いがして、幸せな気分だ。もちろんあつちの世界でも出来た事だらうけど、言え自体がリラックスできる場所じゃなかつたし、わざわざ面倒だし。つてことで、堪能してるふりをしながら質問に答えた。恥かしいのを誤魔化す為の行動だ。

『クーンさんって、格好良いですから……その……キラキラした笑顔つて、心臓に悪いって言うか、直視できないって言うか……』

『モジモジ』とそう言つた。そうすると、クスクス笑う声が聞こえてくる。調度神を流されているところで目が開けられない。振り返ることが出来たのは、笑い声が納まつたその後だった。

声は納まつたとはいえ、メイドさんは笑顔のままだ。そして、かなり面白がっている。

最近、よくこんな笑顔見るなー、と脱力し、話したことを後悔した。

後悔後先を立たず、とはよく言つたもんだよね。適切過ぎるとえに私はがっくりと肩を落とすしかできなかつた。

「随分と可愛らしい悩みですね。しかし、急に逃げられたクーンもまだ懲りでしょ。理由も分からず、どうしていいのかも分からず、悩んでるのではないでしょ。」

「やつ、なのかな。いや、そつなかもしれない。理由も言わずに逃げてあちやつたし、今更どうじよ。」

私は百面相していたのか、ぐるぐる変わる表情を見てメイドさんはまあまあ、と言つてまた笑つてこた。

「笑い」とじやないですよーーーーーの後、顔を合図させた時、どうしたらいこの。やつ質問すると。

「思つてこひつしゃることせ、まつきつとお伝えしないこと。言葉は伝えるためにあるのですし、自分の気持ち言葉こしないと相手には伝わりません。」

見事なまでの正論が返つてきた。

まつたく持つてその通りですね。

「ああ、長く漫かり過ぎては、逆上せてしまつます。もう上がりましゃつ。」

「の後が大変だった。

妙にフリフリした白い夜着を着せられてしまった。今までにないくらい抵抗したのに、ここにまつれしかありません、とか言われて、取りに行くからと抵抗してみても外にはクーンさんが居るから出て

いけなこと」が判明して、むづびづぶれじもできなかつた。

「ハーハー、こんな人形みたいなフリフリー、恥ずかしいよー。

半泣きの私を見ていたメイドさんは、またゆつくりと笑いを溢すと、クーンさんに頑張るようひと言つて出てこつてしまつた。

残された私は浴室から出る事が出来ない。こんな格好でクーンさんの前に行くことが恥ずかしいからだ。

てゆーか、全然似合つてないからー。キモいよ、私。でもでもつ。自分の意思で着たわけじゃないし。

何度も呼ばれて出ていかないこともできず、私は観念して渋々出ていった。

「…おいで。」

恥かしくて、きっと今顔赤い。

私は俯いて、クーンさんのところまで行つた。

ベッドに腰掛け、その後ろからクーンさんが髪を拭ってくれる。いつもと同じようにされてるのに、着ている服の所為で恥ずかしさが倍増だ。

露出度が低いのに、それよりも遙かに恥ずかしくなるくらいのシリフリ度。この世界の服だけは好きになれそうにない。

髪を梳かれ、髪が整えられる。ここからが、もう一度覚悟しなくち

やいけない時間だ。急に後ろへと引かれて、クーンさんの腕の中にすっぽりと収められる。

さつさまで赤かった顔は、真っ赤になつたんだね。

「ネイ、さつき、なんで逃げた？」

耳元で声がある。掠れた、囁くような声。

みみつ、耳に息掛かってるからあー！

たじたじの私を余所に、クーンさんの声はさらに艶やかに私を攻め立てる。敢え無く陥落して、正直に告げるのはそのすぐ後だった。

『クーンさん、自覚ありますか？クーンさんって、その…すいへ、格好、良いんですよ？』

あーっ、もうー何言つてんの、何言つかけってんのー自分自身に突つ込んで、恥ずかしさのあまり死ねるかと思つた。

『そんな人の笑顔、ドキドキしちゃって、直視できませんよ…』

言い終わると同時に、クーンさんの腕にさらに力が入つた。

ぐ、苦しい…！

『そんな可愛ごとく、壇上てくれるな。』

私は振り向いて、力強いクーンさんの腕を自分の手ではがそうとする。だけど、できなかつた。

しばらく無言が続く。クーンさんは私の方に顔を埋めてるようで、首に掛かる息がくすぐったい。それから逃れようと、やつぱり力が強くて上手く対抗できなかつた。

「逃げよつとするな。しばらくこのままで。」

そう言われてしまえば、抵抗することすらできなくなる。私は大人しく動きを止めて、じつとしていた。

はー、と大きくため息が聞こえる。それは一人しかいない部屋の中に響いた。

「ネイ。」

名前を呼ばれて、少しだけ振り向く。すると、一瞬で私の唇は奪われ、チュッと音つき小さなリップ音がして私の顔から影が逃げ去つた。

何してんすか、いきなり！

私の身体はビクッと震え、そのまま硬直した。

後ろからはクスクスと声が聞こえ、揺れる体で笑っていることが分かる。私の心とは全く正反対だらうクーンさんは、何だか上機嫌らしかつた。

「うん、ネイらしい反応だな。」

なんだ、それ！

理解できないものは、いつもなら訊ねる。でも、それが出来ない
くらい、私は硬直し続けていた。

「俺の理性の固さに感謝しinるよ。」

全く訳が分かりません！

だけど、後ろのクーンさんは、嬉しそうにしてこる。よつやく動
けるようになつてから、そるー、と横田で覗き見をしてみると、そ
こには満面の笑みでいるクーンさんが居た。

てゆーか、また直視しちゃつた！

また慌てふためく私を、クーンさんはもう一度、ギュウッと抱きしめ
てきた。

てゆーか、お兄さん、キャラ違くないか？！そう言いたくなるく
らい、普段からかけ離れてるクーンさんは心臓に悪かつた。

「ネイ。ネイだけじゃない。俺だつて、ドキドキしてる。」

もう言つて、私の頭を自分の胸に誘つて、耳を押し付けさせる。
そこから聞こえてきた鼓動は、私の速度と重なつた。

『心音、早いですね。』

『同じだ。』

うん、そうみたい。クーンさんも私と一緒に。それが嬉しくて、今

度は自分からその背中に腕を回していくついた。

「だから、あんまり可愛いくして貰おるな。」

その眩きの意味はよく分からなかつたけど、私は同じ気持ちだつたことが嬉しくて、もう一度きつく抱きついた。

筋肉質な腕にもう一度包まれる。温かくて心地良いクーンさんの腕の中は、ドキドキして恥ずかしきけど、すく安心できた。

その温かさに、心地よさに、まどろみの中に意識が落ちてこく。

「もつと、甘えていいんだ。」

小さな囁きが聞こえて、私は微笑んだ。

『うん…』

囁きが確かに分かなかつたけど、私も小さく囁く返事をした。

拉致監禁は犯罪です

『ちょっとー何するんですか!』

クーンさんの執務室を出てしばらくした時。人があまりいないつもの近道を歩いてたところで急に後ろから声をかけられた私は、連行されるように連れ出された。

引きずられるよつにして連れて行かれる。辿りついたそこは、神殿の最上部にあるガラスの塔だった。

「やあ、乙女さま。お久しぶりです。手荒な真似をして申し訳ありませんね。」

そんなこと、微塵も思つてないつて顔してるけど?!

私は目の前にいる人物をキツと睨みつけた。そこにいたのは、以前に出会つたその人。周りの人よりも一回り大きな赤い羽根の飾りを付けている、キツネ顔の男。つまり、過激派筆頭のルイスだった。

ねちつこなうな笑顔。見ているだけで鳥肌が経つ。

てゆーか、ルイス派つて、王に絶対従うんじゃなかつたの?それよか、宗教に心酔しきつてるからく最後の乙女>に手を出すことはしないつて言つてなかつたけ?

混乱したまま、表向きは冷静になつてゐよつに振る舞う。後ろで掴まれた手は、ガラス張りの部屋に入れられてすぐに解かれたけど、

少し赤くなつて痛かった。やつ思ひて腕をさする。

『なに、これ？』

金に赤い石がはめ込まれた腕環がいつの間にやら付いている。じついその造りは、お金をかけた、と言わんばかりにキラキラしてた。

「それは魔法封じですよ。貴方は魔法が使えるとのことでしたので、逃げだせないよう失礼ながらつけさせて頂きました。それは、腕環を造つたその本人の魔力でしか解除できないといつ代物ですから、無理に取ろうとしても無駄ですよ。」

ひょうひょうと言つてくれちゃつて。てゆーか、陛下！約束はどうしたんですか。

もう文句を言つてやりたい。だけど、それは無理だ。

陛下は今病に伏せつている。その体調の悪さは今までにないくらいで、意識がはつきりしていないらしい。らしい、って言つのは、様子を見に行けないから。謁見を申し込んだけど、あまりの体調の悪さに、王妃様でさえ見舞いに行けていよいようだった。

『…説明、していただけませんか。』

唸のよひに低い声が出る。威嚇するよひに、私は睨みつけた。

「おやおや、仔犬が牙をむいているようですね。」

「ふるさこつ！睨みに威力がない」とぐらりと自負してる。だけど、これが精一杯の虚勢だ。だって、このつすら笑いを浮かべてゐるおじ

さんが、何も企んでいないはずがない。だから、牙を剥ぐのも当たり前だ。

「…我々は先王が退いた後、共にその座を奪われた。いくら王へと忠誠を誓おうとも、我々も欲深い人間。己の欲望に忠実だ。我々も神の恩恵が欲しいのだよ。」

現王が貴女独り占めにしておられる。それは、許せない。だが、今は自由にできる。あのお方が病床にては貴女との逢瀬も叶わないだろう。だから、そのうちに事を進めるのだ。」

逢瀬つて…あんたアホか！私は…クーンさんが好きで、オウサマとは何の関係もないっつうの。

邪推もここまでくると意味不明だな。私は睨みつけた。

だけど、すぐにそれを止めて、むらつと横を向く。それから気がになっていたことがあった。

『あんたさあ、助ける気とかないわけ？』

「無いねーえ。」

どこから湧いて出てきたのか、ジユノのヤツが隣で積み木をしている。何を作ってるのかは分からぬ。言えることは、完全に使い方間違えてるってこと。

「か、神がそこに…」

ええ、いますよ。明らかにやる気のないヤツが。私は今ピンチつてやつなんすけど。

「どに、どに…私を、守人に…」

…へえ、そう。それが目的な訳ね。守人になつて、乙女の恩恵を受けよう、と。そりやまた、図々しいこと考えたね。

睨みつけるのも嫌になつて、プラス、隣のヤツにうんざりして、私は積まれた積み木をぶち壊した。

「あーー…もう少しで完成だつたのに…」

知るか！てゆーか、完成つていつたい何作つてたんですか。

ここにいる人物たちにほとほと呆れ、私はこれからのことを考える。まずは、ここからどうやって出してもらいつか、か。

つまり、守人になることを諦めてもうつしかない。てゆーか、もう守人はいるしねえ。

『守人なんすけど…』

ここまで言い掛けて、服をツンツンと引っ張られた。大事な話をしようとしてたのに、ジユノには邪魔ばかりされる。何よ、と睨みつければ。

「言わない方が良い。」

さつきとは打つて変わつて至極真面目な表情でそう言われてしました。

意味を計りかねる。だつて、ここから出してもらつたためには必要な事でしょ。なのに、それをしない方が良いと言われた。それつて、ここから出るなつて意味なのかな。うーんと唸り、考え込む。その横にいる神は、また積み木を重ねながら言つた。

「守人がもう居ると分かれば、その人物は殺され兼ねない。」

衝撃が私の中を駆け抜けた。

殺、される…？クーンさんとレークさんが？でも、だつて、それじゃ神の意志に従わないのでことなんぢゃないの？

そう考えていたことが伝わつたのか、ジュノは続けざまに言つ。

「今まで従つてたはずなんだけどねえ。先王の一件以来、自分たちに権力を集中させるように算段を立てていたみたいだ。そうでなければ、僕の乙女に魔法封じの腕環を付けた上で、軟禁することなんてしないだろう。」

そこまでして、自分に権力が欲しいの？人間の欲は、本当に強欲だ。特に、お金や愛なんかに対しては。

それが神にも逆らう事態となつては、この人はもう止まらないだろ。どこまでも自分の欲求に従つて、突き進むしかない。

「神よ…どうか、私を、守人に…」

祈るよつに言い続けるルイスは、トチ狂つたよつで少しつい。本当に、誰かを殺してしまつかもしれない。私の知り合いである、誰かを。

「これは日本じゃない。誰かが何かを殺すことなんて、身近にある世界だと聞いた。それを思い出して、私は震えた自分の身体を抱きしめるよつに両手で自分の身体を抱える。

いつもなら、クーンさんの腕の中でやうするよつことが出来るのに。私の一言にクーンさんの命が掛かつてゐと思つと、どうしても震えが止まらなく、自分の腕でやうするよつことができなかつた。

「僕の言つ通りにして。」

ゆづくづ、頷いた。

「いつも貶してばっかで『ごめん。ジュー』に、こんなに頼り甲斐があるとは思わなかつた。

私は真つ直ぐに前を見据える。両手もつやんと前で組み、怯えを見せないよつに構えた。

『……これより、一月の間に守人としてふさわしい者を決める。我こそは、と思つ者は神殿の前に出でて、祈りを捧げよ。』

「神の、お言葉…確かに賜りました。」

恍惚としていた表情は固まり、難しい表情になつてゐる。きっとこの場で自分が認められなかつたことに腹を立ててゐるに違ひない。

ホント、自分勝手だよな。

「乙女さま、貴女の部屋をガラスの塔のこの最上部の階下に用意した。貴女の侍女を連れて来よう。しかし、ここから出られるとお思いにならない方が良い。」

それは一般的に、脅しつて言われるんですよ。

私は成す術もなく、違う方向に顔を背けることしかできなかつた。小さ過ぎる反抗だ。だけど、今はこれくらいのことしかできない。だって、自分を守るための魔法が使えないんだから。

全員がガラスの塔から出ていく。そこに残つたのは私と、皆にはその存在が分からぬジユノだけだった。

『これからどうじよひ。』

外の誰かに伝える事は出来ない。こいつ言った行為を取り締まることがある壁下は、病に伏せつている。

「どうしたものかねえ。」

考へてるんだか、いないんだかの曖昧な返事。それは私の心を余計に乱した。

『一緒に考えてよーもし、クーンさんが死んだりしたら……私……』

もう、絶対にも思えない心になる。

「考へるよ。とつあえず、クーンに伝えよう。』

そう言つて、何かを考えている。私は恐怖で涙が止まらず、縁の上に寝そべつて左腕で自分の田元を隠した。

涙があふれる。どうしていいのか分からぬ。

こんな時、一番頼りにしていいはずのクーンちゃんに会えないことが、今は一番辛いことだった。

私がここに連れて来られて10分もしない頃。ここに繋がる私の横にあつた戸が、ゆっくりと開かれた。

そこから顔を出したのは…

『ミコア…』

真っ青な顔をしている。何を言われたのだろうか。怯えている事が明らかだった。

ミコアが完全にここへあがると、同じよう顔が見えた。そこには、私をここに軟禁し始めた大元だ。

「いいか、お前も他言無用だからな。

乙女さま。これにてあなたの生活は保証されました。しかしながら、ここを出ようととしても貴女の部屋の階へつながる階段の下に騎士があります故、そんな変な気は起こさないようにお願ひします。貴女はただ大人しくしていればいいのだ。」

最後に本音が零れたのだらう。ねちっこい笑みを浮かべていたル

イスの顔が、おおこに歪んでいた。

扉が閉じられる。足音が遠のき、次第に聞こえなくなつた。

『「じめんね、ミコア。巻き込んでしゃつて……』

わう言つながら抱きついた。

「構いません。ネイサマのためですから。」

そう言つてたけど、やっぱ体は小刻みに震えていて。怖いのを我慢して虚勢を張つてゐることせ、一目瞭然だつた。

『ミコアは、何で脅されたじこに来たの?』

「ネイサマがガラスの塔で生活するこになつたから、私がそこでの生活を支えるよつて、と。」

『やうじやない。脅されたでしょ?』

泣きはしなかつたけど、表情は全くでいい。綺麗に整つた眉の先に、皺が寄つた。

「私の家も、弱小ですが貴族の部類です。慎ましやかに生活し、父母共に民を守つて生きています。」

確か、ミコアの家は辺境にある領地の領主だ。農作が主に盛んであり、丘陵地で作られる果実酒で主に生計を成り立たせているらしい。何もないけど、空気も景色も水も澄んでいるところなんだつて、ミコアが楽しそうに話してくれたことを覚えてこる。

「その領地を、潰すと斬られました。これを他言じてしまえば、民の命も家族の命も無いと。」

あのオヤジ、サイテー。

私はブチ切れる寸前だ。私だけならともかく、いろんな人巻き込みやがって。

「私は必要最低限しかここを出る事を許されておりません。食事の用意や洗濯、掃除など。それ以外の生活は、ネイさまの部屋にある備え付けの小さな部屋でするよつに」と言われました。

この国の象徴である乙女をまと生活を共にさせんなび、何て事を考えているのでしょうか。」

さつままで泣きそうだったのに、今度はプリプリ怒つてる。これでこそミリアだ。その様子を見た私は自分の怒りがどこかへ引いて行くのを感じた。

拉致監禁は犯罪です その2

「ねえ、僕の存在忘れてない?」

丁度話の折。隣にいたジユノに不意に声をかけられた。

『あ…』めん。』

完全に忘れてた。

自分の隣に積み重ねてある積み木をちょんちょんしながら拗ねてる。そんなことしても可愛くないぞー。どうせかと言えば綺麗だからね、ジユノは。

とは思いつつも面白いから、膨らませた方をシンシンしていくと。

「ちゅう、まっ、む…（ちゅうと、待って、もしかして…）」

言葉にならない声がミコアの口から零れてきた。

混乱している。それもそのはず。さつきルイスだって、驚いてたもんね。それほどまでに、この国にとつて神は大き過ぎる存在なんだ。

『ミコア、ちゅうと落ち着こつか。』

ハイ、吸つてー、吐いてー、と声をかけるとその通りにしてくれ

る。やつやへ落ち着いたミリアは、自分の両手を胸に抱いていた。

『確かにジユノはミリヤである。けど、そんなに想まらなくていいよ。ジユノは気にしないし、ミリアには見えないから』

ちよつと安心したよつな、残念そうな複雑な表情をして、ミリアはやつですか、と言だけ言つた。

「ミリヤの娘には、クーンに手紙を届けてもらひおつ。それが最善だ。

ミリヤは神殿内だから、恐らくレークには伝わつてゐるだらつ。それをクーンに伝える事はまず間違いない。ミリヤの詳細を知らせ、ヤツラには守人として乙女をミリヤから救い出すことを命じよつ。

『ミコアには聞こえてないからつて、勝手に決めないでよ。命だつて、家族だつて一度失つたら帰つてこないんだから!』

『ちよつと、ちよつと、そんなのつて…』

「やつするしかないだらつ。」

…つん、そうだね。他に何も言つて考へなんて浮かばないもん。

ミコアにはまた怖い思いをさせやつかもしれないけど、どうとかその稀を説明した。

「もちろん、引き受けさせていただきます。だつて、神様からのお言葉ですし、ネイさまのお願いです。私に出来ることであれば、これからもなんなりとお申し付けくださいね。」

領地のことがならお気にならないで下さい。だって、私の父さまと母さまですもの。何かあっても絶対に守り貫いてくれると思います。」

ミコアの優しさが、本当に嬉しくて。私は胸の奥がほつこつと温かくなるのを感じた。

よし、と気合を入れて、気分を変える。

とうあえず、届ける手紙を何とかしなくちゃ。

下の階へと梯子を伝つて下りる。そこには下へと続く階段と、一つのドアしか存在しなかった。つまり、そこが私の部屋、と言ひ訳だ。

騎士さんが音につられて見に来たけど、それを無視して私はミコアを引き連れ部屋へと足を踏み入れた。

「酷い…」

中はベッドが真ん中に置いてあり、端っこに勉強机と椅子。小さいテーブルとソファが置いてある、向こうで一人暮らしするには広すぎる、辽々として狭い部屋があった。

生活するには十分なスペース。だけど、埃まるけで。部屋を用意したつて言つか、誰かの部屋だった物を私に宛がつたつて感じ。

部屋の中には三つ扉があつて、一つずつ開けていくと、浴室、ト

イレ、そしてベッドが一つ置いてあるだけの部屋だった。

なんじゃ「シリヤー！私ならともかく、ミリアは元々お嬢様。あり得ないでしょ、こんな部屋！きっと自分は綺麗で温かくて、キラキラしてゐる部屋で生活してゐに決まつてゐのに。

すぐ理不尽な人だと思つた。あのルイスつて人、いつか絶対目に物言わせてやるんだから。

私の心の中で、めらめらと火が燃えだした。

「わーおーなに、ヒヒ。」

『ジユノ、いらっしゃい。今日からここが私の部屋らしいよ。』

ふかふかと浮かんでいるジユノに一瞥くれ、勉強机へと歩を進める。人差指でスーツとこすると、大量のちりと埃が指に付いてきた。

「これ、手紙書くじるじゃない。まずは掃除しないと。

『ミリア、手紙の前に掃除しちゃあつか。まだ午後になりたてだし、今からなら洗濯物も間に合つでしょ？』

「いえ、私一人でやりますのでっ。」

焦りながらそう言つてコアは、さすが侍女の鏡だ。だけど、時間を喰つてる暇はない。早くしないと、手紙を書くじるか、今日の夜の就寝場所を確保できないかも知れないから。

『今日はミリアには重大な任務があるでしょ？。そのために、まず

はお掃除が必要なの。

私はここから出られないから、洗濯物を届けた後にお掃除道具を持つってきてね。』

そう言いつと、渋々分かつたと言つて出ていった。

本当にいい子だよね、ミリアって。つて、私よりもお姉さんだから、良い子って言うのも変だけど。

何の関係も無い私のことを、最初から尊重してくれたのはミリアだった。そして、ずっとその態度は変わらない。今回だって面倒な事に巻き込んだりしたのに、にっこりと笑顔を浮かべてくれた。

今だつて、信じる事が出来る人かもしれない。だけど、これからもつともっとミリアに信頼を寄せていくような予感がして、私の胸はすくへ高鳴った。

「二ヤけてないで、早く始めなよ。」

余計なひと間に自分の中のテンションはガタ落ちする。宙にぶかぶかしているその人は、何やら座禅を組みながら考えているようだつた。

それを横目で見て、まあいかと何かを納得する。そして、丁度女中服だったことから、汚してもかまわないな、と嬉々として部屋の中を引っ掻き回した。

掃除道具がないと、何も進まない。だけど、出来る事もあるはずだ。でも、物を動かすには人手がいる。それ調達することを、あの

キツネおじさんか許してくれるはずもないだろう。ヒーリングでパンとくる。

色々と有効活用しないとね。

『あのー、すみません!』

私は表に立っていた、声を掛けられて驚いている騎士さん一人を巻き込んだ。

そんなこんなで掃除は終了!見事にピカピカになっていた。漸く人が住めるような部屋に見えるな、と納得していると、横にいる騎士さん一人組は、腰をおろしてへばっていた。

私、腹黒いですからね。中らせてもらいました。

演技っぽく散々どうしようもない稀を伝え、マットレスを外に運んで叩いてもらい、ベッドや机の移動もさせた。

この騎士さんたちは魔力が無いみたいで、魔法では出来ない。だから、きつちり自分の身体で動いてもらいましたよ。つまり、こき使い倒した。

つてわけで、見事にへばってる騎士さんたち。それを私は満足げに見つめた。そんな私をジユノが不審そうな眼で見てる。だけど、私はそれを完全に無視した。

『お手伝いいただき、ありがとうございました。漸く住める部屋になりました、嬉しい限りです。』

その言葉を聞いた騎士さん一人は急に立ち上がり、私からのお礼の言葉に感謝の言葉を連ねて、交代時間だからと去つて行った。

「ネイさま、確信犯ですね。」

何の事だか分かりません、と誤魔化してみたけど、やっぱり私の性格を知っている人だから、嘘を吐くなとすぐに言われちゃった。

私は意味深な笑いを溢してから、小さな紙に急いで走り書きをする。そこには、今の状況と主犯格、そして、守人についての事を書きこんだ。

紙とペンはミリアにお願いして、日記をつけたいからとう理由で持ち込んでもらつた。その時に誤魔化しで本を数冊持つてきもらつたから、疑いの目は向いてないと思つ。

その手紙を、ミリアにお願いして、胸元、つまり下着の中に隠してもらつ。ミリアは元々胸が大きいから目立たないだろうし、流石にここまで調べる事はないだろうと想つたからだ。

準備は言い、と緊張気味の表情のミリアに訊ねると、ゆっくりと首肯してくれる。私も覚悟したように頷くと、ミリアを伴つて部屋を出た。

『申し訳ありませんが、一つお願いがござります。』

さつきとは違つ騎士が立つてゐる。さつきの人たちならもつと氣易くできただろう。それも叶わないのは、少し状況が厳しかつた。

「何でしょ、うか。」

一応返事をしてくれてほつとする。それを氣に私は打ち合わせ通りに話を進めた。

『私は今までシェパード様のお邸でお世話になつておりました。それを何のお礼も申さずに、急に届なくなることなどできません。どうか、このお手紙を私の侍女に届けさせてくださいませ。』

下手に出てみた。この人たちもキツネおじさんと同じ考え方で、神から権力だけを得ようとしているのかどうかを計るために。それはどうかはやっぱり読めなかつたけど、すぐに了承しかねるという答えが返つてきた。

どうしてかを咄嗟に訊ねる。騎士さんは難しそうな顔をして、答えてくれた。だけど、その間も私と田を合わせよつとはしない。きっと、キツネおじさんに指示されてるんだろう。

「わちらからシェパード派に連絡を取ることとは固く禁じられております。」

頭でつかち。てゆーか、バカなのかな。私が行方不明になつたことを露呈せらるよつなものなのに、それに気付いてないんだらうか。

「貴女が今日から城に住まつことは、すでに魔道師をまこと間にされてしまふでしょ。」

『しかし、私から今までのお礼を申し上げたいのです。会いに行けないのなら、せめて自分の言葉を伝えたいと思うのはいけないことがありますか。』

困った顔で見つめる。上目遣いが重要だとミリアに教わったから、それを実践してみた。だけど、効果は良く分からぬ。一瞬目があつたと思ったらすぐに逸られちゃつたんだもん。

「手紙の内容を拝見しても？」

『ええ、どうぞ。』

一人が内容を見る。そして、これならばいいだろうと許可が出た。しかし、もう一人が渋る。その人にもその手紙の内容を見せ、この方が私の意思でここに住まうことを決めた様な感じで信じ易いだろう、と二人はそう判断したようだつた。

ミリアが許可を得て進んで行く。私はそれを祈るような気持ちで見つめていた。ミリアの後ろに騎士が一人くつついて行くのを見て、どうしても祈らずにはいられない。

どうか、届いて。誰にも見つからないように、私の一番甘えられるその人に助けを求める言葉を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585x/>

異なる世界で

2011年11月24日14時46分発行